

---

# 彼女

パキ夫

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

彼女

### 【Nコード】

N8948A

### 【作者名】

パキ夫

### 【あらすじ】

なんだか青臭い小説。おくてな大学生な「僕」が彼女を作ったとどうこうというお話。一応恋愛小説。一々心情を解説しているのが女々しい。1話1話は短いけど、全体はクソ長くなりそう。

\*この話はフィクションであり、実在の人物や団体とは一切関係ありません。

## プロローグ

### 00 . プロローグ

昔、「小説家を見つけたら」という映画があった。実際にその映画を見たわけではないので、詳しい映画の筋や出ている俳優などは知らないが、その映画のCMでショーン・コネリー扮する老小説家がこんなセリフを言っていた。

「人のために小説を書くな。ただ自分のためだけに小説を書け」

この言葉の真意は別のところにあるのかもしれないが、自分はその額面通りに受け取り、そして強い印象を受けたのを覚えている。

これから書こうとしている小説は、誰かのために書くつもりはない。あえて言うなら自分だけのためだ。

もともと誰かのために小説を書くなんて事は間違っているのかもしれない。誰かのために書いたとして、その「誰か」が喜ぶか不快に思つかなくて、誰にも分かりはしない。小説というのは、所詮独り善がりなエゴイズムの塊なのだ。

自らの若き日の思い出は、年をとるごとに薄れ、頼りないものになっていく。もしこのまま放っておけば、やがては全てが消え去り、あの体験はなかった事になってしまう、もしくは、自分の中で自分の都合のよいように作り変えられ、事実と違った思い出を抱いて生きていくことになるだろう。

そうなるのは、嫌だ。

あの時感じた事、あの時考えた事、あの時のいわば自分の人生を、

向き合うのが怖いからといってただ放置して、あたかも朝露のように消え失せたり、夕霜に取って代わられたりしたくはない。

自分の思いを偽りにはしたくはない。ただそれだけだ。

ただ自分のためだけに、あの時の純粹な思いを忘れないために、この話を書く。

## 第001話：旧友【第1章】

### 01・帰郷

久しぶりに帰った田舎は、まだ3月だというのにまるで初夏のように暖かく、そこを吹く風は、しかしながら春の匂いを存分に含んで、全てのものを祝福するかのように思えた。

それは僕にとって、大学に入って初めての春休みだった。

むこうで行っていた塾講師のバイトも、全てのテストもつつがなく終わって、20歳の僕は、久しぶりにのんびりした帰省を味わっていた。

地方から東京という日本随一の都会に出て行った僕は、生活習慣の違いや人々の考え方、流れる時間の違いなどに戸惑いつつも、次第に新しい環境に慣れていった。

帰省につきものの旧友との出会いも一通り終わり、同じく地方から京都の大学に行ってすっかり変わってしまった友を見て、驚きと嫉妬を感じていた。

それと同時に、焦ってもいた。なぜならその友達が「彼女」という存在をつくっていたからだ。

僕は高校生の頃、いわゆるシャイで目立たない生徒だった。成績は中の上くらい。運動はまるでダメ。人を押しのけて前に出るという事はできなかった。

しかし男であるから、自然と女性に興味はあったが、生来の恥ずかしがり屋な性格から女の子に声をかけると言う事などでできず、恋をしても全て片思いに終わった。

それでも、僕の通った高校は曲がりなりにも進学校で、僕はその中でも頭のいい生徒ばかりを集めたクラスに入っていたので、彼女などいないのが普通だった。女の子と仲良く話をする光景すら、め

つたに見られなかった。それよりも単語帳を見ている生徒のほうが目に付いた。そういうものだったのだ。

唯一の例外は、野球部のKだとかバスケット部のIだとかといったいわゆる「カッコイイ人」で、彼らは女の子と自然に話したし、また女生徒も彼らと話す事を好んだ。

ある旧友は、僕と同じタイプの生徒だった。僕よりも頭が良くて運動ができたが、女性関係においては僕と同じかそれ以上におくてだつたはずだ。

しかし久しぶりに会う彼は以前とは全く違った印象を僕に与えた。理由はすぐに推察できた。彼には彼女が出来たのだ。異性とすんなりと会話する事に慣れ、異性と2人きりで出かける事も日常的に経験し、おそらく初めての性体験も済ませている事だろう。そんな彼は、僕にとっては以前よりはるかにカッコよく、自信に満ち溢れているように見えた。

「彼女できたん？」

「ん。まあ」

そうさりげなく言えるのが羨ましかった。

## 第002話：現状

僕のほうも、東京に行つて、女の子との出会いがなかったわけではない。実際、好きでもないテニスのサークルに入つたのは、はっきり言つて女の子と知り合いになりたかつたからだし、そのためにテニスラケットやらテニスウェアといったかなり高額の出費もあった。しかしその出費に見合うものを得られたかといえれば疑問である。

他の手段の1つである合コンにも誘われればできるだけ行つたし、その場では明るい人（本質的には暗い人間だが）と思われるように必死で話題を探した。

僕は元来酒が強い事に加え、あまり羽目を外してまで飲まなかつたので、酒の席で醜態を晒す場面もそんなになく、それが自慢でもあつた。しかしどれもこれも、さしたる結果をもたらす事はなかつた。

しかしある日、どういうわけか同じサークルのある女の子と仲良くなる事ができた。

異性と仲良くなり、そして付き合うようになる第一歩である電話番号も交換したし、その成果を存分に利用して夜に2人で話をする事もあつた。その子が特に好きという訳でもなかつたが、サークルで飲み会などある時には努めて近くに座るようにした。今思えば、大人しそうな笑顔がチャーミングな子で、またそれが唯一のとりえのような子だつた。

ある飲み会での事だ。彼女は柄にもなくいつもより飲みすぎてしまい、一人で帰るのが困難になつていた。

僕は、チャンスとばかりに彼女を家まで送る大事な役を買つて出た。もつとも、そんな2人の関係を察知した先輩や、サークルの他

の面々から、是非送っていくようにと囁かれたからでもある。そしてその計略は思惑通りうまくいった。彼女にとってはおそらく帰り道が同じ方向だったという理由もあるのだろうが、まわりの態度から、薄々僕の思いに気付いていたのだろう。

そして2人は、サークルメンバーとは別方向の電車に乗った。

## 第003話：反射

記憶が正しければ、それは金曜の夜の事だったと思う。週末の夜だからして、電車は満員とまではいかないが、とても座れる気配ではなかった。

彼女は、自分の力で立つ事ができないくらい酔っていた。自然と僕が彼女の肩を抱いて支える形になった。

僕が女の子の肩を抱いたのはそれが初めてだった。その肩はあまりにもか細く、か弱く、誰かが守ってあげるのが当然のように思えた。

恥ずかしい話、その時僕の下半身は自分の意とそぐわない行動を起こしていた。俗な言い方で言えば、立ってしまっていたのだ。

と、同時に、頭の中では飲み会である女の先輩が言っていた言葉が蘇っていた。

「そういえばこの前、後輩の男と飲んでてさー。んで、アタシ結構酔っ払っちゃったんだよねー。」

それでアタシがちょっと冗談で抱きついたらさー、そいつ立つちやってんの。女に抱きつかれたぐらいで立つなよなー」

(ダメだ。なんで立つちやってんだよ。別にそんな気分じゃないだろ)

そう自分に言い聞かせるも、頭とは裏腹に、下半身は自然な欲望によって膨らんでいく。頭で思えば思うほど逆効果だった。さらに悪い事には、電車が次第に混みあってきて、彼女とさらに体を密着する必要性に駆られた。

あの時彼女が気付いてなかったとは考えにくい。果たして彼女はそんな僕の事をどう思っていたのだろうか？

しかしそうして混乱しているうちに、電車は彼女の家の最寄り駅に着いた。

その駅がどこだったか、今となっては全く覚えていない。川崎よりは向こうで、横浜よりは手前の、京浜東北線のある駅だ。

当時僕の住んでいた所は、そこよりはるかに手前の、さらには別の路線の駅だったから、かなり遠回りして送っていった事になる。

ともかく、そこで僕と彼女は電車を降りた。ふらつく彼女をしつかりと抱きながら。

## 第004話：構内

彼女は電車から降りた後、しばらく動かなかった。座り込みたいのを必死にこらえているようにも見えた。

（これは家まで送らなきゃな）

そう僕が思ったのは、主に純粹に彼女が心配であったからだ。しかしそれと同時に、少し不純な事も考えていた事は否めない。

（彼女は実家から通ってるから、彼女の家にかかる、なんて事はできないな。でも、送っていった先でキスくらいはできるかもしれない）

その当時僕はまだキスというものをした事がなかった。それは、自分がかかりおくてである事をも意味する。しかしその行為は、その年頃の少年ならば誰しもが憧れ、また誰しもが自らの初めての場面を想像する極めて甘美なものであった。

しかしそんな淡い期待は彼女の次の言葉で打ち砕かれた。

「ん。もう大丈夫。一人で帰れるから」

幸せな妄想に浸っていた僕はその言葉で現実に引き戻され、狼狽ろうたいした。

「で、でもまだフラフラしてるじゃん。送っていくつて」

「大丈夫。途中で休みながら行くから。もう遅いしね」

そういつて健気な笑顔を作られては、反駁はんぱくの余地はなかった。

「分かった。気をつけてね」

「ん。送ってくれてありがとう。おやすみ」

「おやすみ」

そう言って彼女は、出口へと続く階段をゆっくりと上っていった。

僕はその後ろ姿をぼんやりと見送った。そして、逆方向の電車、本来帰るべき方向である電車を待った。

しかし、電車はなかなか来なかった。

待つ間に自販機でコーヒーを買って飲んだ。なんだか言い様のない疲労感が体にあふれていた。

それ以来、その駅には行っていない。もっとも、今となってはこの駅だか覚えていないのだから、行きたくても行きようがない。

思えば、彼女の家は駅のどちら側の出口にあるのか、その出口にはどんな光景が広がっているのか、それさえも知らずに僕はあの駅を後にした。

覚えているのは、他の駅と変わらぬ、何の特徴もない京浜東北線のホームと、彼女が登って行った出口に続く階段のみだ。

## 第005話：心境

そういう事があってから、僕は女の子に対して再びおくてになった。もちろん、その女の子とはそれ以上の進展はないままに終わった。

僕は田舎出身であるから、都会に対するコンプレックスがあった。がんばって覚えた標準語で話しても、雑誌で見た流行の服装をしても、しょせん元は泥臭い田舎侍という気持ちがあった。本質は何も変わる事がなく、全ては付け焼刃のカッコ良さだと見抜かれているような気がした。

そんなコンプレックスを抱いたまま、都会の女の子と対等に話ができるわけもなく、結局、大学1年の間に彼女という存在を作る事はできなかった。

しかし同時に、それでもいいやという気持ちもあった。初めて東京という都会で暮らしてみ、初めて大学生になって、初めて一人暮らしをしたその頃は、見る事なす事が目新しく、女の子の事を考えなくても他に考えるべき事はいろいろあった。

しかしその年の春休みに田舎に帰ってみて、その昔と変わらぬ生活リズムは、都会のスピードに慣れた僕にはいささかも足りず、すっかり変わってしまった例の旧友の事もあって、また彼女が欲しくなっていたのだ。

シャイで恥ずかしがり屋なため、女の子に話しかけるのが苦手な僕だが、高校の時に同じ部活だったTさんとは、普通に話しかける事ができた。彼女は、特に可愛いわけでもなく、どちらかと言うと男性的な考え方をする人だったので、異性という事をあまり意識せずに話せたのかもしれない。

## 第006話：紹介

そのTさんと会う約束を取り付ける事が出来た。映画を見る約束だ。

実を言うと、これが初めて異性と映画を見た体験だった。それどころか、異性と2人きりで出かけた、つまり、デートというものを体験したのも初めてだったはずだ。もともと、その時は特に意識はしなかったが。

映画は、くだらないコメディ映画だった。別段面白いわけでもなく、退屈と言つていくくらい凡庸ほんような内容だった。

しかし彼女は満足そうで、よい雰囲気のまま僕にとって初めてのデートは終わった。情けない事に喫茶店で話をするとか、カラオケにいくとかそういう事を言い出す機転を僕は有していなかった。

彼女の車で送ってもらった帰り際（田舎では車がないと非常に不便のだが、あるう事が僕は車の免許を持っていなかった）、僕は彼女にあるお願いをした。

そのお願いとはつまり、彼女に女友達を紹介してもらおうというものだ。

彼女は、とある中堅国立大学を落ちて（彼女曰く、「本当はどうでも良かった」らしい）、地元の看護学校に通っていた。その友達を紹介して欲しいと頼んだ。看護学校だから女の子が沢山いる、と考えたのではない。彼女が農業学校に通つていようが空手道場に通つていようがどうでも良かった。純粹に女の子と知り合いになる1つの手段としてお願いをしたまでだ。

彼女は二つ返事でOKして、日時と人数を適当に設定した。

僕は、この前の成人式で久しぶりに会った中学時代の友人に電話して、なんとか頭数をそろえた。

高校の友人を誘わなかったのには理由がある。僕は、持ち前の変なプライドから、高校時代の友人達に女に飢えていると思われたいなかつたのだ。

またなぜか、これは僕が東京という大都会で暮らしているからかもしれないが、高校時代の友人たちから見ると、自分は女に不自由しているようには見えなかつた。

## 第007話：邂逅

そうして、心待ちにしていたその日は来た。

僕と友人2人は待ち合わせ場所まで女の子たちの到着を待っていた。恥ずかしい話、僕と友人の1人は免許を持っておらず、結局遊びに行くといっても女の子の車に乗せてもらうという形をとるしかなかったのだ。なにせ、その友人は待ち合わせ場所に自転車で来たほどだったのだから。

程なくして、Tさんとその友人がやって来た。そして、不甲斐ない僕らは2台の車に分かれて乗り込んだ。

僕は、Tさんの車に乗った。女の子の数が足りないのどうしたのかと聞くと、U町で待ち合わせる事になっているそうだ。よって僕らは移動した。

道すがら、何を話したかは覚えていない。見知らぬ女の子と出会う、そして自分が主催した合コンをする、そんなこれからの予定に少し舞い上がっていた僕は、おそらく聞くに値しない他愛ない話でTさんの運転をずいぶん邪魔した事だろう。

しばらく後にU町に着いた。そこで、僕は初めてノゾミに会った。

ノゾミの第一印象は、はっきり言ってパツとしなかった。東京には可愛い子はた沢山いたし、地元にもノゾミより可愛い子は沢山いた。

しかし、なにかしら僕の心を惹きつけた。それが何だったのかはその時は分からなかった。

ノゾミは、その時のメンバーの中では一番優しそうな顔をしていた。その後皆で食事をした時にその優しさが表面だけでなく本質的なものだと確信した。

食事をしたのは、Z市のイタリアンレストランだ。僕はその店に、

まだ小さかった頃家族と一緒に言った事がある。そこで一通り自己紹介をし、地元では評判の料理に舌鼓したしつみを打った。ここでも僕は一人舞い上がって、今思えばみっともないギャクを言って場をしらけさせたりもした。

はつきり言つて、Tさんには異性としての感情は持っていないかつたし、もう1人についてはタイプじゃなかつた。その人についてはほとんど覚えていないし、今となっては名前さえも思い出せない。

そう、僕はノゾミの事が好きになつてしまつていたのだ。

かといつて、そのメンバーの中でノゾミがまだまじだから、という妥協は絶対になかつたと断言できる。その当時の、数少ない知り合いの女の子のどれと比較してみても、ノゾミのはにかんだ笑顔は素敵だつた。

それに、東京でなく地元でいるときの僕は、なんだか自分そのものを出せている気がして心地よかつた。自分の感情は飾り物で作られたものじゃなくて、自分本来の心から出たものだという確信があつた。

## 第008話：交遊【第1章・完】

楽しいとも楽しくないとも言い難い<sup>がた</sup>食事が終わって、僕らは2人ずつ3台の車に分かれて、僕達の地元唯一の遊園地に行った。僕がそこに行くのは実に中学時代以来だった。

僕は、今度はノゾミの車に乗り込んで（実はジャンケンできめたのだけでも、この時ばかりは神に感謝した）、道中、また他愛もない話を続けた。しかし、得るものは多かった。ノゾミは、やっぱり外見から予想される通りの性格を持っていた。

僕のくだらない話をちゃんと聞いてくれたし、一緒にいる人をなんだかホツとさせるような雰囲気を持っていた。だからそれは、僕にとつてかなり心地よい移動時間であり、ますますノゾミに心惹<sup>ひ</sup>かれていった。

名残惜しい<sup>なごり</sup>移動時間はすぐに過ぎ（本当は小1時間ぐらいは経っていたはずだが）、僕達は遊園地に着いた。そこは僕らが中学生だった頃と全く変わっておらず、改めて田舎の変化のなさに失望を感じた。

遊園地での思い出は、悲しいほどに希薄<sup>きはく</sup>だ。覚えているのは、みんなで適当に一通り乗り物に乗り、僕の友人の1人がマスコットキヤラの着ぐるみを殴るふりをして、みんなの笑いを誘った事ぐらいだ。

僕以外のメンバー、特に女の子らが本当に楽しんでいたのかは分からない。今となつては知る由<sup>よし</sup>もないし、知ったところでどうにもできない。

その日遊園地で撮った写真は、ノゾミの写った数少ない写真の1つとして、今でもアルバムの中に眠っている。全てが始まった日の雰囲気を、今もその中に漂わせながら。

こうして、特に目立った事件もなく、いつもと違う春の日は終わった。

あれほど長く感じられた春休みもいつのまにか終わろうとしていた。みんなそれぞれの生活に戻り、僕は再び上京した。

## 第009話：進級【第2章】

02・東京

久々に帰った東京には、春の、あの生命を感じさせるような瑞々しい匂いはどこにもなかった。ただ陽の光だけが、その眩しさをもってして、人々に春の訪れを告げていた。

しかしそれでも僕の心は晴れやかだった。大学も2年目が始まり、所属する学科が決まった。

入学当初の思いとは異なる学科に所属した（実は成績があまり良くなく、第一志望の学科には所属できなかった）僕は、これから始まる専門的な勉強や、新しい人々との出会いを考え、少々不安ではあったもののそれ以上に期待していた。

ここに、当時の写真がある。今より若くて今より色白の僕は、今は着ていないジャケットを羽織って、今は使っていないかばんを持っている。表情は晴れやかで、当時の僕の気持ちが窺い知れる。それは主に期待と、不安だ。

期待していた2年目の大学生活は、想像以上に忙しかった。

実技系の学科に入ったため、1年の頃より実験の比重が大きく、自然それに時間を割かれた。授業の内容もより専門的になり、1年の頃サボれるだけサボっていた僕は、授業が始まったばかりだというのに内容が分からない事もままあった。

もっとも、2年になったからといって、それまでのサボり癖がすぐに治るわけがなく、ある日などは全4コマある授業の3コマ目の後半に学校に着いたほどだ。

サークルでは、新しく「先輩」と呼ばれる身分になり、サークル内での恋愛事情が芳しくなかった僕としては、新たに入ってくる1

年生に期待していた。

そして、この時期恒例の新歓コンパというヤツがあった。

あいかわらず練習には顔を出さない僕だが、この時ばかりは喜び勇んで渋谷の町に向かった。言うまでもなく、ある魂胆があった。女の子とお近づきになる、という下心が。

しかしながら、その内容は全くお話にならないものだった。新入生に女の子は一人もいなく、サークルにめったに顔を出さない僕には話題がなく、全く話のかみ合わない男と、顔見知りの（多くは彼氏もちの）女の子と一緒に、たいして美味くもない酒と料理を味わう羽目になった。

だが、いい事もあった。

あまりのつまらなさに、先輩が駅前で女の子をナンパしたのだ。

そして、グズグズしていて正規の2次会に行きそびれた僕は、幸運にも先輩とその女の子と一緒にカラオケに行く事になった。

## 第010話：歌唱

実を言うと、僕はカラオケというヤツがあまり得意ではない。歌えば人並みに歌える自信もあるし、歌っている時は楽しい。

しかし僕はいわゆる「流行りの」邦楽をほとんど知らず、と言うよりも嫌悪していた。何故こんな風になったかと言えば、当時聞いていた洋楽の影響であろう。

別に今では好みこそ狭けれど普通に邦楽も聞くなり、流行を追いかける人々を見ても何も感じないが、当時はそれらを完全に見下していた。

それなので、世間一般の人と一緒にカラオケに行つて、くだらない曲を聴いて、誰も知らない自分の持ち歌を歌うのは、苦痛以外の何物でもなかった。

だが、その日はそんな思いより下心のほうに勝った。先輩がナンパした女の子は、一人は普通だが一人はかなりの美人だった。

当然、先輩のねらいは美人な方で、僕は、あまり綺麗な人は自身のコンプレックスにより苦手なため、もう片方を虎視眈々と狙っていた。

しかし僕はナンパというものをした事がなかったため、ここでどういふ会話をして、どういう過程を踏んで親密になつていけばいいのか分からなかった。

少ない異性との体験から考えうるに、とにかく電話番号を聞いて、これからも連絡を取り合えるようにするのが最善の策だと思われた。しかし今思えばたったその程度の事（しかし実は今でも苦手ではある）が、シャイな僕にはなかなか難しかった。

その時先輩が何気ない調子で女の子に声をかけた。

「ねえ、電話番号教えてよ」

「うん、いいよ」

何と言う幸運だろうか！ 僕は勞せずして彼女の電話番号を手に入れる事ができた。と同時に、女の子から電話番号を聞くタイムミン  
グも勉強した。

偶然にも彼女は（もちろん、僕が狙っていたほうだ）僕と同じ電  
話会社だった。その最大の利点は手軽にメールができるという事だ。  
僕は僕と彼女との距離が近くなったような気がした。

そうこうしているうちにカラオケが終わり、僕達は解散した。

（しかし、僕と彼女とはいつでも連絡が取れる）

この事実は、僕にとってはとても重要なフアクターであった。実  
際、すぐにでも電話をかけて話してみたかった。その夜自宅で、  
この思わぬ収穫に僕は一人ほくそ笑み、幸せな眠りについた。

## 第011話：送信

それまでに、あまりメールというものを活用してはいなかった。せいぜい、田舎の友達と帰省予定などを連絡しあうのに使っていたぐらいだ。昨今のメール事情から考えると雲泥の差だ。

そんな筆不精な僕だったが、僕は彼女に不慣れなメールを何通も送った。学校の事やバイトの事、相変わらず他愛もない事を書き連ねた。彼女もいくらか返事をくれたが、忙しいのか迷惑だったのか（多分後者の理由だろう）、くれない時のほうが多かった。

そしてたまには電話をした。若い僕は相手の迷惑を考えず、話す話題がなくなっても電話をなかなか切れなかった。電話を切ったらそこで一仕事終了たようなため息をつかれそうで、それならもっと早く切ればいいのだが、しかし名残惜しくてすぐに切る事なぞできなかった。

その甲斐あつてか、二人の間に少し進展があった。「今度の日曜日遊びに行こうよ」何度目かの電話の後で勇気を振り絞って放った僕の提案に、彼女はすんなりOKしてくれた。

待ち合わせ場所は新宿、時間は午後1時とトントン拍子に決まった。実を言えばどこに遊びに行くかなんてその時は全然考えてなくて、ほとんど彼女が決めてくれたようなものだ。

そしてそれは、僕にとつて、2回目のデートになった。

新宿は、日曜だと言う事もあつて、人並みでこつた返していた。人ごみは特に好きなほうではなかったが、しかし東京生活2年目を迎えた僕は、別段気にならなかった。実際、東京というところは、どこでも人でいっぱいなのだ。

待ち合わせに遅れるのが得意な僕は、予想通りこの日も遅れた。しかし彼女が待ちくたびれて帰ってしまう前には、どうにか新宿に

たどり着いた。

どこに行くか、何をするかはつきり決めてなかった僕達は、とりあえず新宿の街をさまよい歩いた。

今でこそ、新宿の街を一人ブラブラする事も、誰かを連れて行って美味しいご飯を食べる事もできるが、その時は全くもってそういう知識に欠けていた。東京にはそういった店を紹介する雑誌も数多くあるが、「そんなものを見るのはもてない男のする事だ」という変なプライドと誤った認識の為、そういった知識を得る最善の方法をみすみす逃していた。

そんな道すがら、彼女が様々な店を見、その説明をするのを聞いて、自分の知識のなさが恥ずかしくなった。(やはり東京の女の子は違う)と、また少しコンプレックスの芽が頭をもたげた。

## 第012話：御苑【第2章・完】

そして昼御飯はどこかのデパートの最上階にある中華料理屋で食べた。いつも学食の安い定食になれている僕は、そんな高級そうな店なんて入った事もなかったし、その値段にも驚いた。それは僕の一日の生活費に相当したからだ。

同時に、ある違和感があった。僕と彼女は違う世界に住んでいるんじゃないかという感じた。なぜなら彼女は「そんなに高くないよ」と言いながら、僕より数百円高い品を平気で頼んでいたからだ。

昼食後は結局、歩きつかれたのと街の人の多さに飽きて、僕は新宿御苑ぎよえんに行った。しかしこれも彼女が勧めすすてくれたのだ。

新宿御苑ぎよえんは、とても気持ち良かった。東京のど真ん中に、こんな緑の多いスペースがあるなんて知らなかったし、その芝生で寝転んでいるのはとても心地よかった。

しかし早々に寝転んでしまった僕に対して、彼女は明らかに手持ち無沙汰ぶさただった。僕は、あわよくば膝枕なんかをしてもらいたかったのだが、それを言い出す事も出来ず、ただ、寝転んでいた。彼女はその横で静かに、そしてヒマそうに座っていた。

結果から言えば、このデートは失敗だったと言えるだろう。あの時の僕はただ自分の事ばかり考えて、人の事を思いやる余裕がなかった。呆れられるほどではなかったにせよ、彼女の僕に対する評価はポイント・ダウンしていた事は間違いない。

しかし僕はこの事によって変な自信をつけた。それは女の子と対等に話す事が出来るという自信、女の子とデートする事が出来るという自信である。しかし例のコンプレックスを払拭くわくする事は、まだ到底出来そうになかった。

そこで僕は1つの結論に達した。そう、地元の女の子とつきあう  
という結論だ。

その場合、考えられる女の子は一人しかいなかった。

ノゾミである。

### 第013話：聴取【第3章】

#### 03・告白

僕の心は決まった。ノゾミに告白するのだ。

しかし僕は彼女の電話番号すら知らなかった。だが、手段はあった。Tさんに電話して聞けばいいのである。電話番号の聞き方は、先日の先輩の行動から学んだつもりだった。

そして僕は電話した。もちろんTさんにだ。

「あ、もしもし？ オレやけど」

「なに？ どうしたん急に？」

「まあええやん。そうそう、この前はありがとう」

今思えばこころ辺の会話もなつちゃあいない。相手が今何をしているのか、電話で悠長な会話<sup>ウチウチ</sup>を出来る状態なのか、そんな事を考える事、相手を思いやる事すら、当時の僕には出来ていなかった。自分の用件を伝える事、自分の目的を達成する事しか考えられていなかった。だからと言って、今の僕がそれが出来ているのかは疑問だが。

そして、しばらくは当り障りのない世間話が続いた。お互いの近況報告だとか、共通の友人の話題だとかだ。この時Tさんは一体何を考えていたのだろうか？そもそも、長々と電話できる状態だったのだろうか？そう思うと、現在の僕は、実際やりきれない思いに囚われる。

その後もとりとめのない世間話は続いたが、しかしついに辛抱できなくなつて、僕は用件を、この電話をかけた本当の理由を切り出した。

「それでな、あの時の女の子の電話番号教えて欲しいんや」

なんと面白い言草<sup>ウチウチ</sup>だった。第一、そんなに簡単に人の電話

番号を覚えてくれるものだろうか？ そんな疑問が僕の頭の中をよぎった。

「い、いや、別に教えたくない言うんやったらええんやで」

明らかに少し狼狽ろうばいして、僕はそう続けた。

「うん……別にええと思うけど」

びっくりするほどあっけない返事を聞いて僕は安堵した。そして、結果として僕は2人分の女の子の電話番号を手に入れた。もっとも、本当に必要なのはそのうちの1つ、ノゾミの電話番号だ。それでも2人分の番号を聞いたのは、単純にTさんに自分の計略を悟られたくなかったからだ。

電話番号を聞き終わると、僕はそそくさと電話を切った。向こうにしてみれば、僕の下衆げすな目的など、とうに気付いていただろう。そしておそらくは、どちらの女の子に電話をかけるかという事も。

仲の良い異性の友達というのは、時として相手の心を速やかに読み取るものだ。しかしその事も、当時の僕には想像の埒外らちがいの事だった。

## 第014話：自問

Tさんとの電話を切った後、すぐにノゾミに電話をかけるような事はしなかった。それはなぜかと言うと、なんだかTさんに見透かされているような気がしたからだ。僕の変な意地なのか、Tさんに「やっぱりね」と思われるのが嫌だったのだ。

それに、ノゾミに告白する前に、もう一度自分の気持ちを確認めたかった。

(僕は本当にノゾミが好きなのか？ 本当に告白したいのか？)

そう自問自答する時間が必要だった。即座に答えを出すつもりはなかった。

だから僕は、それからしばらくは、電話したい気持ちをぐっと堪えた。

Tさんから電話番号を聞きだして1週間が経過した。そして、僕の心も固まっていた。

(ノゾミさんに電話しよう。電話して、この思いを伝えよう)

そう決心した。ノゾミの笑顔は、僕が今まで見た誰の笑顔よりも心を和やかにさせた。ノゾミといえる時間は、僕が今まで過ごした誰との時間よりも楽しい時間だった。

だから、ノゾミに電話をかけた。僕の小さな心は、たったそれだけの事さえ、酒の力を借りなければ出来なかった。

ノゾミは、8回目のコールで出た。もしこの時ノゾミが電話に出てくれなかったら、その後告白できたかどうか分からない。それくらいギリギリのラインで、僕の心は揺れ動いていた。

「もしもし？ ノゾミさん？」

「もしもし？」

「誰か分かる？」

「あ、Tさんから話は聞いてるから」

「どうやらTさんは僕に電話番号を教えた事をノゾミにバラしていたらしい。(余計な事を……)と少し残念な気がしながらも、そのおかげで怪しまれる事なく話が出来たのもまた事実だった。

例によって、しばらく世間話が続いた。僕にとって(ノゾミにとつてはさらに)どうでもいい話が、僕の口から溢あふれた。

### 第015話：告白【第3章・完】

そしてその後、本題に入った。もうその時点で、僕の心臓は破裂しそうな勢いだった。

「あのな、言いたい事があるんや」

そこで僕は一旦言葉を切った。心を努めて冷静に保ち、言葉を続けた。

「あれからよく考えたんやけど……」

「うん」

「オレ、お前の事が好きや」

ついに言葉が放たれた。口火を切ってしまえば、後は胸いっぱい  
の思いが、僕を雄弁にした。

「あれから東京帰ってよく考えたんや。考えてる途中で、なんかお前の事好きやなあ……って思った」

「……うん」

「一回会っただけでこんな事言うのも変やけど、笑い声とか会話とか、すごく楽しかったし、やからやっぱり好きやなあって思う。オレが今まで出会った誰よりも素敵やと思う」

「……うん」

「それでな……」

「……うん」

「できたら、付き合っ  
て欲しいんや……」

しばらく沈黙が続いた。この告白はおそらく恋愛経験の少ないノゾミにとって初めて聞いた台詞せりふだったろう。そしてせっかちな僕は、無知な僕はすぐにその返事を求めた。

「付き合っ  
てくれる？」

明らかに、ノゾミは混乱していた。それはそうだろう。一回しか

出会った事のない異性にいきなり告白されれば、誰だって混乱すると思う。

しかもすぐに返事を出せと詰め寄られている。こんな状況下では混乱しないほうがおかしいだろう。

しかしノゾミは返事を出してくれた。

「ん。……ええよ」

この時の僕の心は、まさに天にも昇るような心地だった。嬉しくて嬉しくて仕方がなかった。しかし今思えば、ノゾミの彼氏になれた事が嬉しかったのか、ただ単に彼女という存在が出来た事で嬉しかったのか分からない。

ただ一つはつきりしているのは、この時ノゾミの事がとても好きだったという事だ。それだけは間違いない。今まで出会ったどんな人よりも、ノゾミの事が好きだった。

電話を切った後も、僕の心は興奮しっぱなしだった。

(僕に、生まれて初めて彼女が出来た)

その事実が、たったそれだけの事実が、青っ白い僕の心を震わせた。まさに有頂天だった。

電話を切った直後にもかかわらず、また電話がしたいくらいだった。電話をして、今までのような友人としてのノゾミではなくて、僕の彼女としてのノゾミの声を聞きたかった。

そして、ゴールデンウィークには実家に帰ろうと思った。帰って初めての彼女とのデートをしようと思った。

その夜は、興奮して寝付けなかった。心の中で、何度もガッツポーズを繰り返した。

彼女は、それほどまでに大事な存在だったのだ。

## 第016話：寝台【第4章】

### 04・再帰郷

ゴールデンウィーク前という事で、寝台特急の車内はごった返していた。

空いている席（ベッド？）はほとんどなく、みんなこの連休中に何らかの目的を持ってどこかへ行こうとしていた。

僕自身、寝台特急を利用するのはこれが2回目だった。初めて寝台特急に乗ったのは、遡<sup>さかのぼ</sup>る事1年数ヶ月、大学に通うために上京した時だった。

寝台特急の固いベッドの上で、今から起こる東京での新生活に、多少の不安はあったものの、それを上回る期待感を感じていた。初めての一人暮らし、初めての大学。僕は期待に満ち溢<sup>あふ</sup>れて多摩川を渡った。

多摩川を渡ると、そこは既に東京都内だった。僕は東京に来れた事、たったそれだけの事で感激し、飽く事なく窓の外を見つめていた。

そして2年後、僕は再び寝台特急で今度は逆方向に多摩川を渡り、東京を後にした。胸の内にあっただのは、ノゾミに会えるという期待と、初めてのノゾミとのデートに対する不安だった。

実を言うと、寝台特急に乗った時点では、まだデートの予定が決まっていなかった。いつ会うのかも、どこに行くのかも決まっていなかった。

だから、寝台特急に乗ってすぐ、ノゾミに電話をした。僕のやぐざなPHSは圏外で、僕は仕方なく列車についていた公衆電話から電話をかけた。

そして、なんとかノゾミに会う約束を取り付けて、自分の席に戻

った。

「お兄さん、お菓子食べるかい？」

そう言つて声をかけてきたのは、向かいのベッドにいる老夫婦だった。

寝台列車の客室は、2段のベッドが2列ずつ並んでおり、4人が顔を突き合わせる事になる。

「あ、頂きます」

そう言つて寝台の間に行き、老夫婦と共にお菓子を食べた。別段美味いとは感じなかったが、普段人付き合いを嫌つていた僕が、そうやって他の人とコミュニケーションをとつていたという事から、どれだけ気分が高揚していたかを窺い知る事が出来る。

老夫婦の話も、お菓子と同様に大した話ではなかった。高校野球だとか、天気だとか。僕は正直あまり興味をそそられなかったが、大人しく老夫婦の話聞いていた。しかし心の中では他の事を考えていた。

(ノゾミに会える。もうすぐノゾミに会えるんだ)

そう思うだけで、そういう予定があるだけで、僕は幸せに包まれていた。この気持ちを会う人会う人に伝えたい気分だった。

そうした気分のままで、僕はベッドに横たわった。昂たかぶつた気分が寝付けないまま何度も寝返りを打った。ノゾミの夢を見れたらいいな、と思つたが、生憎あいにくと何の夢も見なかった。

翌朝、僕は郷里に降り立った。僕の両親が住み、僕の友人が住み、そしてなにより、僕の彼女が住む郷里に。

寝台特急の固いベッドでの睡眠は満足なものではなく、目はしょぼしょぼしていたが、心ははちきれんばかりに騒いでいた。

そう、今日はノゾミとの初デートの日なのだ。

## 第017話：喫茶

ノゾミと待ち合わせたのは、初めて会った場所と同じ、U町のあるシヨップイングモールの駐車場だった。なぜ待ち合わせ場所をそこにしたのかというと、何の事はない、田舎では、極端に遊ぶ場所が少なく、僕とノゾミが住んでいた場所から一番近いのがそこだったのだ。

しかし、一応、映画館はあるし、ゲームセンターもある。僕の田舎ではその場所は、唯一と言っていいくらいの遊び場所だったのだ。免許のない僕は電車で最寄り駅まで移動し、免許のあるノゾミは車でその場所まで行った。

そして僕らは再び出会った。

前回会ってから、1ヶ月の月日が流れていた。しかしお互い、特に変わってはいなかった。1ヶ月やそこらでそう簡単に外見が変わるはずはない。

しかし僕にとって、ノゾミは、前回より可愛く見えた。（この人が、僕の彼女なんだ）そう思うと、とてもとてもノゾミが愛しくて、なんだか幸せだった。

2人の今日の予定は、映画を見る事だった。その映画のタイトルは「恋愛小説家」だ。僕はこの映画のチケットの半券を、未だに持っている。だってそれは、僕が初めて「彼女と」一緒に見た映画なのだから。

僕とノゾミは飲み物を買って、映画の席に着いた。本当はポップコーンなんかも食べたかったのだが、残念な事にノゾミはポップコーンが嫌いだった。

でも、むしろ僕は楽しかった。ノゾミについて、まだまだ知らない

い事がたくさんある。でも、こつやつてちよつとずつ、本当にちよつとずつだけど、知る事が出来る。それが、楽しいし、嬉しかった。

そして、映画が始まった。

僕は、嬉しかった。僕に彼女がいて、僕と一緒に恋愛映画を見ている。その事実が、嬉しかった。僕は映画よりも、むしろ隣に座っているノゾミの顔が見たかった。彼氏の隣に座っている顔が見たかった。そこには一種の不安があったのかもしれない。「彼女は本当に楽しんでいるのか？」という不安が。

僕は人の感情に対してひどく臆病で、できる事なら誰にも嫌われたくないと思っていた。同時に、自分がいくら楽しくても、自分の好きな人が退屈しているのはとても嫌だった。だから僕はノゾミの事が気になった。映画を差し置いてまでも。

僕は、ノゾミと手を繋ぎたかった。何らかのスキンシップを得たかった。しかし僕には出来なかった。臆病な僕には出来なかった。

気もそぞろな映画の時間は終わり、僕とノゾミは近くのコーヒーショップに入った。そこで、映画の感想とか、自分の近況とかを語り合った。

僕は覚えたてのタバコを吹かし、ノゾミは静かにコーヒーを啜った。

## 第018話：鼓動【第4章・完】

ノゾミは、U町にあるお店について、よく知っていた。聞けば、ノゾミはこのコーヒーショップで最近までバイトしていたらしい。

その時、ノゾミの顔見知りの店員がやって来た。ノゾミと親しげに話すその様は、僕を少し嫉妬させた。

しかし、嬉しい事もあった。その店員が、僕のほうをチラッと見て、ノゾミに「彼氏？」と尋ねたのだ。ノゾミははにかんだように、「うん」と答えた。僕にはそれで十分だった。（僕の独り相撲じゃなかった）そう思うと、胸の辺りがドクドクと鼓動し始めた。ノゾミが愛しくて、僕の彼女が愛しくて、たまらなかった。

そして僕達はご飯を食べた。ノゾミが勧めてくれた店（僕はU町の店をほとんど知らなかった）はとても感じが良くて、そこでオムレツを食べるノゾミは、なんだかこういふ所で食事をする事に慣れているように見えて、僕はそこで少し悔しかった。（東京だったら、おいしいオムレツのお店の1つや2つ、知っているのに…）そういう思いが頭をよぎり、悔しさを覚えた。

でも、ここは東京ではなかったし、僕は東京の女の子と付き合えるほどには自分に自信がなかった。だから、田舎で彼女と食事をするのが、当時の僕にとっての「恋愛」だったのだ。

東京で彼女を作れないから田舎で作ったのに、その田舎でまたコンプレックスを感じて、（ここが東京だったら…）と思うなんてなんて矛盾した考えだろうか？ 当時の僕の青臭さに、僕はただ辟易する。

しかし若かりし僕はそんな矛盾に気づかず、ひたすら覚えてたてのタバコ、煙を肺に入れる事さえ知らないタバコを吹かした。それは、僕に出来る精一杯の抵抗だったのかもしれない。もっとも、ノゾミはそんな僕の心には気づいていなかっただろうが。

こうして、僕の彼女との初デートは幕を閉じた。それは柔らかな陽光に包まれているような、心が安らかになるような、そんなデートだった。

ノゾミとは、ゴールデンウィーク中にもう一度だけ会って、デートした。しかし、その思い出は、この1回目のデートよりはるかに希薄だ。どこかの博覧会に行った事は覚えているが、そこで何を話したか、おそらくは僕が滲蓄うんちくをひけらかしたぐらいの事しか覚えていない。それほど、1回目のデートの思い出が強いのだ。

そして、僕は再び東京に戻った。ノゾミとの思い出を胸に。

## 第019話：進歩【第5章】

### 05・新宿

ゴールデンウィークのあの幸せな体験を胸に、僕は東京に戻った。そして、また雑踏ざつとつの中での生活を続けた。

ノゾミとは、週に一度は電話をして、近況を語り合った。もっとも、話すのはほとんど僕で、ノゾミはもっぱら聞き役だった。それでも良かった。ノゾミと自分とが会話を通じて時間を共有する。それだけでも、僕の心は高鳴った。

細かい電話線が、僕とノゾミとを繋ぐ唯一の線であった。それは随ずい分ぶん頼りない線ではあったけど、確かに2人を繋いでいた。

しかし僕は東京で何もしなかったわけではなかった。かつて電話番号を聞いた女の子とは、今でもメールなり電話なりしていたし、誘われれば合コンにいった。彼女ができた事で心にも余裕が出来、女の子と話す事はもはや苦痛ではなかった。

彼女がいるくせに合コンに行く事に罪悪感はなかった。それよりも、徐々にではあるが、女の子と話す事が楽しくなっていた。

ある日僕は合コンを主催した。相手は、いつかの新入生歓迎コンパで出会った2人組の女の子である。

待ち合わせは新宿だった。僕は、大学の友人Nとともに、はやる思いを押さえて女の子の到着を待った。

Nは、僕の友人の中で、最も「遊んでいる」男だった。体格が良く長身で、話もうまい。ファッションセンスもいい。彼女はいいようだったが、恋愛関係では僕は全く勝てる見込みがなかった。あるとすれば、「僕には彼女がいる」というただ一点のみだったが、Nは「彼女を作れない」のではなく、「彼女を作らない」のだった。

そうだった自由さがNの魅力だった。

女の子を待つ間、僕とNとは世間話をした。僕に彼女ができた事は、まだNには言っていないかった。だが、今日その事を口に出す気はなかった。彼女がいるのに合コンをする事に、少しは罪悪感があったのかもしれない。

その時話したのは専ら、今から到着するであろう女の子の事だった。Nが可愛いほうを選ぶ事は明白であったし、僕のほうでも異論はなかった。僕はもう1人のほう、余り可愛くはないが、電話で何度も話したほうを狙うつもりだった。二股をするとかそういう邪まな気持ちはなく、ただ単に、もう少し仲良くなりたかっただけだ。

## 第020話：雑談

しかし待ち合わせ予定時刻を過ぎても女の子は現われなかった。僕は不安になつて電話をかけた。電話は、意外にもすぐ繋がった。

そこである事実を告げられ、僕は落胆した。女の子の1人（美人なほう）が風邪かせをひいて寝込んでいるため、今日は中止にして欲しい、という事だった。

僕とNは拍子抜けした気分だった。意気込んでいた自分が、なんだかバカらしく思えた。

そこでもう解散して家に帰る、という手もあったが、せっかくだし、どこかそこから飲もう、という話になり、僕達2人は適当な居酒屋に移動した。

僕達は、飲んだ。ひたすら飲んだ。

女の子が来なかったから、という理由もあったし、その店で飲み放題コースを選んだ、という事も関係していた。しかもっと大きな理由は、僕もNもお互いになにか、告白したい事を内に秘めていた、という点である。

「オレ、実は彼女が出来た」

適度に酔っ払って来た頃、僕は唐突にそう言った。Nは驚き、そして少し羨ましがりうらやま、しかしながら僕を祝ってくれた。僕はNに対してある種の優越感ゆうえつのようなものを持った。それは随分と脆い優越感ではあったが。

そして次にNが告白した。

「オレ、この前初めてセックスした」

今度は僕が驚く番だった。僕はもちろん初体験というものはまだだったし、（なにせ、キスさえした事がなかったのだから）まさか遊んでいるかに見えるNが、まだ初体験を済ませていなかった事実にも驚いた。さっきまでの僕の優越感はなりを潜めた。Nが、ただ

羨ま<sup>うらや</sup>ましかった。

Nからその時の状況を詳しく聞くにつれて、僕は、おぼろげながら自分の初体験を想像しようとした。もちろん、相手はノゾミだった。しかし、それがいつの事になるのかは全く想像できなかった。ノゾミとセックスをする、という事を想像するのも難しかった。と言つより、想像できなかった。なにせ僕とノゾミはまだ手を繋いだ事さえないのでから。

居酒屋を出る頃には、2人とも相当酔っ払っていた。歌舞伎町では客引きの男達が通行人に盛んに声をかけていた。もちろん僕らにも声をかけてきた。

僕は、当時そういつたいかがわしい店に行ったこともないし、特に行きたいとも思わなかった。何より僕にはノゾミがいたし、そういう所に行くには明らかに金が不足していた。

しかしNはしきりにそういった店に行きたがった。そしてその時僕は誘惑に勝てなかった。それは、酔いのせいだったのかもしれないし、人肌が恋しかったのかもしれない。女の子が来なかったことも一因だし、僕とNとが居酒屋で女性の事を語っていたからかもしれない。

そして僕は、誘われるままに一軒の店に入った。

## 第021話：風俗

店は、雑居ビルの4階にあった。店内に入るだけで七千円もの金を取られた。たしか客引きは五千円と言っていたはずだが、店ではそれに二千円を足した額を請求された。僕は多少多めにお金を持ってきていたので良かったが、Nは既にお金がなく、仕方なく僕が肩代わりする事になった。

店内は薄暗く、ソファーのようなものに男と女が座っていた。最後の客が何をしているかは見えないように出来ていた。

あたりの様子から推測するに、どうやら女の子が男の横に座り、値段次第で様々なサービスをするようだった。僕はNと別れてある席に座った。

女の子は、薄暗くてよく見えなかった。可愛いのが可愛くないのか、年が何歳ぐらいなのか、全ては闇に包まれていた。うす暗い中で、料金体系を説明してくれた。どうやらさっきの料金とは別にいくらかの金を支払う事で、さらに様々なサービスが受けられるようだった。

しかし僕にはお金がなかった。僕が受けられるサービスは、手でして貰うのが関の山だった。

「その、見たり触ったりは出来ないんですか？」

僕はおずおずとそう尋ねた。僕はまだ、女の人の体を生で見た事がなかったし、勿論触った事もなかった。胸さえ触った事がなかったのだ。その女の子の胸は大きくて、つつい触りたい衝動に駆られた。

「カードか名刺か持ってる？」

女は逆にそう尋ねてきた。持っていない、と答えると、それでは出来ないとされた。僕は少し落胆した。もしこの時僕がお金を持っていたら、迷わず差し出して他のサービスも受けた事だろう。それくらい興奮していたし、酔っていた。

その時、ある客が声を荒げて立ち上がり、やおら店の人と口論をはじめた。かなり強い語調だった。僕はびっくりして、女の子に何があったのかを尋ねた。しかし女の子はただ、「大丈夫よ」と繰り返すだけだった。間もなく声を荒げた男は店の外に連れて行かれた。何があったのかは知らないし、知りたいとも思わなかった。ただ、怖かった。

そんな事があったためか、僕は手のサービスによって達する事が出来なかった。「お酒飲みすぎたのかなー？」そう女の子が言ったが、おそらくそれとは別の原因だろう。僕の頭の中ではさっきの男の事が気にかかっていた。(実はもつとお金を取られるんじゃないか?)そう思うと、行為に集中する事が出来なかった。

そして、あえなく規定の時間が来て、僕とNは店を出た。気になつていた追加料金はなかった。僕は少し安心した。

## 第022話：便所

新宿駅に向かう途中でNと少し会話した。Nは達する事が出来たようで、至極満足じごくげだった。僕は無駄にお金を使ってしまった事を後悔した。それは仕送りのお金だった。両親が僕の事を考えて、稼いで、送ってくれたお金だった。

僕は自分に嫌悪した。と同時に、吐き気が襲ってきた。明らかに飲みすぎだった。僕は酒が強いのでこういう風になったのはその時が初めてだった。

新宿駅のトイレで吐こうとしたが、うまく吐けなかった。胃の辺りが苦しくて何度もかみこんだが、胃からは何も出てこなかった。しかしそのまま僕はしばらくトイレにいた。寂しかった。孤独だった。

しばらくトイレで苦しんだ後、少し具合が良くなったので、僕はNの待つ駅前に戻った。

駅前では、ストリートミュージシャンがちらほらいて、僕達はその横に座り込んだ。

僕は寂しかった。なんだかとても寂しかった。普段はストリートミュージシャンなど無視しているのだが、この時ばかりは声をかけた。誰でもいいから話し相手が欲しかった。

彼らとしばらく音楽の話をした。彼らはオアシスというイギリスのバンドが好きだったが、僕はオアシスを聴いた事がなかった。それで、少し場がしらけた。

少しして、彼らはそこを去ろうとした。話をしてくれたお礼に、ギターケースに小銭でも入れてあげようと思ったが、生憎あいにくと僕の財布はほとんど空だった。代わりにタバコをあげた。これで、僕の持ち物はほとんどなくなった。なんだか、全てがすっからかんになったような気がした。

僕はNと一緒に座っていた。酔いのせいか、あまり寒くなかった。

すると、無性<sup>むじょう</sup>にノゾミの声が聞きたくなってきた。そういう店に行っておいて、ノゾミに電話するなんて、と思っただが、ノゾミの声が聞きたかった。僕の事を好きな人の声が聞きたかった。

もしくは、誰でも良かったのかもしれない。ただ女の子の声が聞きたかったのかもしれない。

でも、一番電話したかったのはノゾミだった。そして僕は電話した。

しかしノゾミは、電話に出なかった。どうやら寝ているようだった。

僕は、伝えたかった。ノゾミに「大好きだ」と伝えたかった。そして、ノゾミにも「大好き」と言って欲しかった。

でも、出来なかった。ノゾミは電話に出なかった。

## 第023話：線路【第5章・完】

僕の人恋しさが消える事はなかった。僕は電話帳を繰って、ある人に電話をかけた。それは、Kさんだった。

Kさんは、僕の高校時代のクラスメートだった。ご多分に漏れず、可愛いとは言いがたいが、それを補って余りある頭の良さがあった。そして僕は、Kさんの事が少し好きだった。友達として話をするうちに、いつの間にか好きになっていたので。

Kさんは高校卒業後、関東のある大学に通っていた。僕がその電話番号をどこで入手したのかは記憶にない。Tさんから聞いたか、Kさんの実家に電話して教えてもらったのか……。とにかく、僕はKさんの電話番号を知っていた。そして、初めてKさんに電話をかけた。

Kさんは、驚いた様子だった。しかし、程なく馴染んでいつものKさんに戻った。僕の好きだったKさんに。

酔っ払っていた僕は、ここである事を打ち明けた。高校時代には決して口に出せなかった事だ。

「あのな、高校の時、オレ、Kさんの事好きやったんやで」

Kさんは驚いた様子だった。ある意味、この行為は自暴自棄のなせる技と言えるかもしれない。

(これを伝えた結果嫌われても、それはそれで構わない)

そんな思いが僕の中にあっただ。Kさんに思いを伝える事は、僕が高校時代に勇気がなくて出来なかった事の一つだった。

「え、そうなん？」

そうKさんは答えた。突然の事で戸惑っているようだったが、しかし、僕が好きだった事を、単純に嬉しい事として受け入れてくれているようだった。僕は、そんなKさんの態度を感じて、素直に嬉しかった。孤独感が和らいだ。おそらくKさんは、僕に対して恋愛感情を抱いた事はなかっただろうが、それでも、友達として大事に

してくれている。それが、嬉しかった。

「また電話するよ」

僕はそう言っただけで電話を切った。しかし本当は電話するより実際に会ってみたかった。大学生になったKさんに会いたい気もあったし、Kさんがどんな学生生活を送っているかも興味があった。

でも、僕は満足だった。これで僕とKさんとの間にも一つの線が結ばれた。そしてその線を伝っていつでも連絡が取れる。それで満足だった。

そして僕は新宿を後にした。夜も遅かったので、電車は途中の駅までしか行かなかった。そこで終点だった。

仕方がないので僕は歩いた。道が分からないので線路を歩いた。なんだか、映画みたいで少し楽しかった。Nがとてつもない親友のように思えた。月は明るく線路を照らし、僕達の後ろには影が出来ていた。

## 第024話：地方【第6章】

### 06・再会

5月の空は青く晴れわたり、風は柔らかく、その日はとても気持ちの良い日曜日だった。僕はバスに乗っていた。バスに乗って、Kさんの住む街に向かっていった。日差しは暖かく、バスの中では暑いくらいだった。

Kさんと久しぶりに電話で話をしてから、僕のKさんに会いたいという気持ちは日増しに強まっていった。それはその後何回か電話で会話する事によって強くなっていったのかもしれない。

そしてその日、僕はついにKさんに会いに行ったのだ。

確かに僕には彼女がいた。しかし、ただ懐かしさを持って昔の友人に会う事のどこが悪いのだろうか？それが偶然異性だったというだけで、どうして僕を責められよう？

そう、僕は一人の友達として、Kさんに会いたかったのだ。

バスにはあまり客は乗っていないかった。Kさんの住む、とある学園都市行きのバスは、ゆっくりと、しかし確実に僕を古き友人のもとに運んでいった。僕はCDを聞きながら、少しワクワクしながら、狭い座席に座っていた。

バス停を降りた僕は、Kさんに電話した。「着いたよ」と。Kさんの家はバス停から近いらしく、「すぐに迎えに行く」という返事を受けた。

Kさんを待つ間、僕は街並みを観察した。しかし、観察と言っても、それはすぐに終わった。バス停の側にデパートが2軒ほど。それで、終わりだった。その他には、広い道路と、その脇に広がる緑

しかなかった。

学園都市という目的で人工的に作られた都市なのだから、仕方ないのかもしれないが、東京という雑多な都会に慣れた僕の中には、それは、単なるつまらない地方都市にしか見えなかった。

僕はタバコを吸った。僕はひたすらタバコを吹かした。それは僕が大人になった自己主張のようだった。

## 第025話：提案

程なくしてKさんは来た。「久しぶり」そう言って、2人は挨拶を交わした。

Kさんの外見は、以前とはがらりと変わっていた。やはり都会に  
来た事によって、何か感じるものがあつたのだらう。髪形も変わっ  
ていたし、眼鏡はコンタクトになっていた。とは言っても、僕は制  
服姿のKさんしか見た事がなかつたので、私服のセンスが以前と変  
わつたかどうかは分からない。

でも、初めて見るKさんの私服姿は眩まぶしかった。なんだか、新鮮な感じがした。

久しぶりに会つたきこちなさは、時が経つにつれて薄らいでい  
た。僕はただひたすら歩き廻つた。Kさんの大学は広く、見るこ  
ろはいくらでもあつた。

僕はKさんの大学を歩き、Kさんのよく通う店でご飯を食べた。  
それは一種のデートだつたと言えるかもしれない。僕はKさんの住  
む街を見て、Kさんの生活を知つた。

たまにKさんの友達に出くわした。Kさんは、友達と標準語で喋  
つていた。それを聞いて僕は（ここは田舎じゃないんだ）、と再認  
識した。だつて僕ははずつと方言で喋つていたのだから。しかしそ  
れが、何か特別な親密さを表すようで、僕は少し嬉しかった。

そうやっていろいろな所を見て廻つてはいたものの、程なくして  
僕は歩き廻るのに飽きた。確かに見ようと思えば見る所は多かつ  
たが、歩いて回るにはKさんの大学はあまりにも広すぎた。なにせ、  
大学内にバス停が何個もあるのだ。僕は歩き廻るのに疲れた。ど  
こかで休もうかと思つたが、生憎あじにくと喫茶店の一つもなかつた。ある  
のはただ、緑の多いキャンパスだけだつた。

僕は疲れていた。正直、足が痛かつた。そこで僕はある提案を

した。

「Kさんの家に行こうよ」

それは、自然に口をついて出た言葉だった。僕に下心はなかったし、ただ疲れて休みたいだけだった。しかし僕は言った後で後悔した。女の子がそう簡単に他人を自分の家に入れてくれるとは思えなかったし、気まずい雰囲気になるんじゃないかと思った。

てつきり断られるかと思ったが、Kさんは、「散らかってて汚いよ」と言いつつも、OKしてくれた。そして僕は意外な展開に少々驚きながらも、Kさんの家に向かった。

## 第026話：空間

Kさんの家は、大学から程近い位置にあった。マンションではなかったが、思えばそこから辺一带にマンションのようなものは見当たらなかった。Kさんの家は少し古いアパートの2階にあった。

「洗濯物干してるから、ちょっと待ってて」

そう言われて僕は玄関の前でしばらく待った。（当たり前だよな）と思った。僕がKさんの家に行くなんて、考えもしなかった事だろう。洗濯物が干しっぱなしになっていても、部屋が散らかっていても、それは仕方のない事だった。

待っている間タバコを吸った。Kさんの外見ががらりと変わったのに対して、僕のほうはさほど変わっていなかった。高校時代と同じジーンズを履いていたし、髪型も特に変わっていなかった。僕が東京で覚えた事と言えば、標準語とタバコくらいだった。

そして5分ほどして、Kさんの家のドアが開いた。

Kさんの家は、標準的な造りだった。ワンルームの部屋の片隅にキッチンがついている、普通の部屋だった。

でも、僕はドキドキした。思えば、この時生まれて初めて女の子の部屋に入ったのだ。ドキドキしないほうがおかしい。

Kさんの部屋は、ござっぱりと落ち着いていた。（これが女の子の部屋なのか……）僕は好奇心に駆られてジロジロ見回した。僕の部屋とは随分ずいぶん違った。（もし、Kさんが僕の部屋に遊びに来たとして、Kさんはどんな反応を示すだろう？）そう思った。しかしその思いはすぐにノゾミへと移った。（もしノゾミが僕の部屋に来たら……）それは、限りなく可能性が低いように思われたが、僕はその事を想像するだけで楽しかった。

## 第027話：部屋【第6章・完】

Kさんの部屋で座って、Kさんが淹<sup>い</sup>れてくれた紅茶を飲みながら、僕達はいろいろな話をした。学校の事、好きな音楽の事、雑誌の事。部屋にはKさんの好きなカーディガンの音楽が流れ、その後は僕の持ってきたボニー・ピンクの歌声が優しく部屋を包んだ。その中で僕達は、地図を見たり、恋の悩みを話したり、将来の事を語りした。僕に彼女が出来た事は話さなかった。話すべきではないように思えた。

それは明らかに「友達として」の空間だったと思う。少なくとも僕はそう思いたい。僕は確かにかつてKさんの事が好きだったが、あの時はいい友達としてKさんと接していた。Kさんは、もしかしたら僕の事が少し好きだったのかもしれない。

仮に今の僕が同じ状況に置かれたとすれば、僕はほぼ間違いなく何らかの行動を起こしていただろう。手を握るとか、抱きしめるとか、キスをするとか。

でも、当時の僕には出来なかった。Kさんを、友達としてのKさんを失いたくなかったし、そんな事をする勇氣もなかった。それにはノゾミがいた。

もしかしたら、異性の部屋にいる時点で、僕はノゾミを裏切っているのかもしれないが、それ以上の何らかの行動を起こす事で、確実にノゾミを裏切る事になるのは嫌だった。

そうして、くつろいではいるけれど、なんだかきこちない雰囲気の中で、僕達は座っていた。外では夕日が沈もうとしていた。僕は思いのほか時間が経ってしまった事に気づき、慌<sup>あわ</sup>てて帰る用意をした。

Kさんは、バス停まで送ってくれた。僕達は日が落ちてすっかり

寒くなった中でバスを待ち、そして僕は、ようやくやって来たバスに乗った。

「じゃ、またね」

お互いにそう言って別れたが、また会えると言う保証はどこにもなかった。実際、僕はこの時からKさんに会っていない。

僕はバスの中からKさんに向かって手を振り、Kさんも手を振り返した。そうして、バスは静かに動き始めた。

何故だか知らないが、バスの中では、しきりにノゾミの事が思い出された。それは、一種の懺悔ざんげの気持ちかもしれない。

いや、違う。

おそらく他の女の子と会う事によって、なお一層ノゾミに会いたいという気持ちが強くなったのだろう。ノゾミは、僕の彼女だった。僕の大切な彼女だった。

バスの中で、僕はただCDを聴いて、窓の外を眺めていた。人家の明かりは少なく、窓の外には暗闇が広がっていた。

そしてバスは東京に着いた。夜でも明るいこの街に、僕は、戻って来た。

その夜、僕はノゾミに電話した。ノゾミの事が愛しかった。しかし、僕のそんな思いとは関係なく、ノゾミは、いつものノゾミだった。それが嬉しくもあり、寂しくもあった。

こうして、5月のある日曜日が終わった。昼間とは違って変わって寒い夜が、静かに更ふけていった。

## 第028話：会話【第7章】

### 07・電話

5月が、終わろうとしていた。僕は学校に行ったり、バイトに行ったりして東京での2年目の生活のリズムをなんとか取っていた。実際、そんな事でもしていないと、僕の日常は日常性を失っていただろうと思う。毎日は退屈だったが、それを放棄する事は不可能だった。

1年目と同じような中途半端ちゆうはんぱんぱに乱れた生活の中で、決定的に違うのは、僕には彼女がいる、という事だった。

それがどれだけ僕の心の支えになっただけかにはわからない。もしかしたら、彼女というものが存在していなくても、それはそれで普通に生活を送っていたのかもしれない。

だが、その重要性に当時は気づかなかっただけでも、一週間に一度彼女と電話で話す、という行為は、いつの間にか僕の中で何物にも変えがたい、大事な習慣となっていた。

時には眠そうな声で、時には楽しそうに、時には気も漫ろそそに、時には優しく、彼女は僕の電話に答えた。それは、とても満足した一時だった。その時だけ僕の心は活性化かつせいかしていた。僕達は遠く離れていて会えなかったけど、でも、繋がっていた。それが唯一の救いだった。

ノゾミの他にも電話する相手はいた。この前合コンしようとしてすっぱかされた女の子や、Kさんだ。それは、向こうからかってくる事もあったが、大体は僕からだった。

僕は退屈な夕べに、それらの女の子に電話をした。それはノゾミが電話に出なかった日であったり、なんとなく寂しかった夜であっ

たりした。

その電話があつたのは5月の終わりだった。向こうから電話がかかってきたのか、それとも僕からかけたのかは覚えていない。

それは、Kさんとの電話だった。

いつからそんな話になつたのかは分からない。確か、最初はなんでもない世間話から始まつたはずだ。そして、いつの間にか恋の話になつた。僕は彼女の事を話し、Kさんは、自分の好きな人の事を話した。そして、その好きな人に告白した事を。

## 第029話：助言

以前、電話で聞いたことがあったが、Kさんには心に決めた人がいた。それは大学のサークルの先輩だった。おそらく、僕が遊びに行った時すでに、その先輩の事が好きだったのだろう。

その話を聞いた時、そういう好きな人がいながら、僕を部屋に上げたという事実には、僕は少し驚いた。その行動が、よく理解できなかった。おそらくは、僕と同じ考え方だ。僕がKさんにとって友達として大事な存在だったから、家にかけてくれたのだろうと思う。

その時僕はその事に気づき、少し落胆した。不遜な僕は、彼女が出来て調子に乗っていた僕は、（もしかして、Kさんは僕の事が好きかも…）という考えを頭のどこかで抱いていた。だから、Kさんに好きな人がいると言う事実は、僕の思い上がった考えに対する完全なる否定であり、僕の不遜な考えを破壊する槌であった。

そうして少し落胆しながらも、僕はKさんの恋の成就を願った。それは友達として、一人の仲の良い友達としての想いだった。

Kさんは告白するかどうか迷っていた。告白した結果、それが失敗して、先輩との今の関係が失われてしまうのが怖い、と言った。僕は、異性の友達として、意見を求められていた。

「告白しちやいなよ」

僕はそうアドヴァイスした。僕自身、高校時代3人の人を好きになつて（Kさんはそのうちの1人だ）、その内の2人に高校在学中に告白しなかった事を後悔していた。Kさんに告白したのは、その燃えかすのような思いをいつまでもひきずっていたくないという気持ちがあったし、昔の思いを綺麗に昇華させたいという気持ちもあった。それは、昔の僕に送る鎮魂歌のようなものだった。

だから、告白するようアドヴァイスした。

「人間が後悔するのは2種類あって、やってから後悔するのと、やらなくて後悔するのがあるんだ。だけど、やってから後悔するほう

が、その後で絶対自分に納得がいくし、だから、告白したほうが  
いいと思う」

僕は言葉を選んでそう答えた。そして、Kさんは頷いた。  
うなず

## 第030話：失意

Kさんは、僕のあまり有益とは思えないアドヴァイスを真に受け、告白した。そして、結果として、ふられた。

言葉にするとあまりにあっけない物語だ。そこにはある種のドラマがあつたのだろうが、僕はそこまで詳しい話は聞いていない。失恋した女の子にその経緯を根掘り葉掘り聞くほど、僕は悪趣味ではない。けれども、Kさんがそのあっけない言葉の奥で、深く落ち込んでいるのは分かった。Kさんの力ない語り口は、その辛さを如実に物語っているようだった。

ふられた事でKさんは、明らかに落ち込み、明らかに困惑していた。僕はそんなKさんに、月並みな励ましの台詞しか言えない自分の貧弱な能力が悲しかった。何とかしてあげたかったが、何をすればいいのかよく分からなかった。だって僕は、晩生な僕は、「ふられた友達をなくさめる」というシチュエーションに陥った事は今までになかったのだから。

僕はKさんのそのいじらしい態度を感じているうちに、ふいにKさんを抱き締めなくなった。抱き締めて、「何も心配しなくていいよ」と囁いてあげたくなった。それがいい事なのか悪い事なのか、それによってKさんの胸の痛みが癒えるのか、そんな事は全く分からなかったけれども、とにかくKさんを抱きしめなくなったのだ。

それは、一種の愛情だったのかもしれない。それとも、もしかしたら遙か昔の恋の残滓だったのかもしれない。しかし、それが愛情だったとするのならば、僕は明らかに「現在の」Kさんに惹かれていた。その弱さに、そのいじらしさに惹かれていた。Kさんはその弱さを克服しようとし、その辛さをくぐりぬけようとしていた。それは、とても美しい姿だった。一人の人間として、とても綺麗な姿だった。純粹にその姿を「愛しい」と感じた。

でも、僕にはノゾミがいた。Kさんを愛しいと思うその数倍、ノ

ゾミの事を愛しく思っていた。それにKさんには好きな人がいた。その思いが通じない今でも、その人のことを思っていた。Kさんの心には、僕が入り込む隙間なんぞなかっただろう。

だから僕は、Kさんの話し相手、相談相手になっているだけで良かった。それだけで、良かった。

## 第031話：断絶

しかし僕は知らなかった。これがKさんとの最後の電話になるのは。

Kさんは、その後、僕からの電話に出なかった。僕がしばらく電話しなかったという事もあったし、前々から引越したいと言っていたから、電話番号が変わってしまったのかもしれない。もしかしたら、僕の事が鬱陶しくなったのかもしれない。

確実なのは、それからKさんと連絡を取れなくなったということだ。今でも連絡は取れていない。僕はKさんに会いたいと願っているが、僕にはもう打つ手はない。

この別れは、僕にさしたるダメージを与えなかった。少なくともその当時は。僕はこれっきりKさんと連絡が取れなくなるなんて思いもしなかったし、ある意味楽観的な気分だった。

しかし、6月になって経験したもう一つの別れは、僕の心を深くえぐった。

6月のある日、僕にあるメールが届いた。それは、5月に合コンをすっぽかした女の子からだった。

合コンが中止になったからといって、僕達の関係が終わったわけではなかった。僕はまめにメールを送ったし、たまには電話で話をした。だから、そんなメールが来るなんて露ほども思わなかった。

そのメールにはこう書いてあった。

「もう会わないほうがいいと思います。さようなら」

それだけだった。理由も途中経過も何もなく、ただ結論のみが書かれていた。まったく、流れが分からない文章だったが、その言わんとすることはよく分かった。簡潔だが、断定的だった。

僕はそのメールを読んで、ひどく驚いた。何が悪いのか分からない

かった。僕はすぐにも電話をかけて、別れの理由を知りたかったが、ようやくの事で思いとどまった。そんな事、できるわけがなかった。

（彼女はある種の覚悟を持って、このメールを送ったのだ）

そう思うと、今さら電話をかけて顛末を聞くのは、随分無粋ぶすいな事のように思えた。第一、僕達は単なる友達であって、それ以上の何者でもないのだ。

しかし僕は、少なからずショックを受けた。

（僕の態度が悪かったのか？）

そう思って自分を責めた。自分としては、普通に彼女と接していたつもりだったのに、特に悪い点はなかったはずなのに、こんな内容のメールが来るなんて、全く不可解だった。

僕の中で、自身の恋愛コンプレックスがまた頭をもたげてくるのが分かった。

そしていつしかそれは、ノゾミに対しての疑念に変わった。

（ノゾミは、本当に僕の彼女になって幸せなのだろうか？）

僕は、ノゾミもこんな風に失うんじゃないか、と思った。知らぬ間に、取り返しのつかない事をしてしまうんじゃないか、と思った。それは考えたくない事だった。考えれば考えるほど不安になる、厄やっ介かいな問題だった。

梅雨の雨の降る夜に、一人部屋でそんな事を考え出すと、無性むしょうに悲しくなってくるのが分かった。

## 第032話：悪夢

その夜僕は夢を見た。

僕は、ある女の子と付き合っていた。それは、他の人には秘密だった。特に、彼女の家庭にだけは、ばれてはいけなかった。彼女の家庭は厳しい上流階級の家で、僕のような下賤な労働階級の男と、箱入り娘が付き合うことを拒んだ。

それは、隠された恋だった。雪の下で咲く花のように、日の当たる所に出てはいけない恋だった。

でも、僕達は幸せだった。花は、他の人の目には触れないけれども、僕達には見えていた。僕達はその花を大事に、大事に育てていこうと思っていた。

僕達は人目を避けて会い。そして、愛しあった。他の人のことなんか関係ない。僕達が幸せならそれでいい。それだけで、どんな困難でも乗り越えていける。そう思っていた。

だが、悲劇は突然訪れた。ふとしたことから、僕達の関係が、彼女の家庭にばれたのだ。雪の下の花は見つけられ、無碍に摘み取られようとしていた。

僕達は困惑した。彼女の家族の介入は、僕達の間にある愛の前では無力だと僕は思っていたが、彼女はそうではなかったようだった。僕は彼女に駆け落ちするよう誘ったが、彼女はやんわりと断った。

「自分の家族を裏切れない」と彼女は言った。

僕は激怒した。僕達の恋が、そんな事で失われてしまうのが嫌だった。そんな脆いものだったとは信じたくなかった。

僕は彼女を責めた。僕を選ぶか、家族を選ぶか、そのどちらかにしろと言いつつ放った。

「明日の朝一番の電車で町を出る。君はどちらかを選ぶ」

そう言つて、彼女に決断を迫った。僕にしては珍しく、高圧的に、冷酷に命令した。僕達の関係はもはや抜き差しならぬ所まで来てい

た。

次の日の朝、僕は停留所で電車を待つていた。彼女を待つていた。僕には自信があつた。彼女は僕を選ぶと思つていた。

しかし、彼女は来なかつた。来たのは彼女の兄だつた。兄は、かなり動転どうてんしていた。「妹が昨夜のうちどこかに消えてしまった」そう言つて、彼女を探すのに協力してくれるよう、僕に頼んだ。

彼女は家族を選んだわけではなかつた。彼女はどちらも選ぶ事が出来なかつた。そして彼女は昨夜、人気のない森の中で首を吊つていた。それは、僕と彼女が密会によく使つた場所だつた。僕たちがその隠された愛を素直に確かめることが出来た唯一の場所だつた。

そして僕は知らなかつた。彼女の死に隠された一つの真実を。彼女は、僕の子供を身ごもつていた。僕に宛てた彼女の遺書には、最後に一言「ごめんなさい」と書かれていた。その一言だけが、かすれた文字で書かれていた。

僕はその事実を知つて、目の前が真っ暗になつた。僕は激しく後悔した。彼女を追い詰めた事、強行に僕が家族かどちらかを選ばせようとしていた事を呪つた。

彼女の家族も後悔していた。強引に彼女を家に縛ろうとしていた事を。彼女の家族は反省していた。僕と和解しようとした。でも、僕にとつてはそんな事、どうでもよかつた。彼女は、もう二度と戻つてこない。その冷酷なる現実が、僕を締め付け、押し潰し、壊した。

僕には何も出来なかつた。今となつては、何も出来なかつた。彼女は傍らかたわにいなかった。二度と一緒にいることは出来なかつた。僕は死にたいほどの絶望に包まれて、一人静かにその町を去つた。

### 第033話：暗示【第7章・完】

嫌な夢だった。目が覚めた時、体が震えているのが分かった。

（あの夢は、一体何を暗示しているんだろう？）

そう、自問自答した。答えはすぐに分かった。先日の電話だ。

あれにより、僕が今まで良かれと思ってしてきた事が、全く無価値なものに思えてきていた。そしてそれは、すぐに僕とメグミとの関係が連想された。

僕は、孤独だった。誰からも愛されていないような気がした。僕は寂しかった。とてつもなく寂しかった。僕の愛する人の声を聞きたかった。ありったけの愛で、僕を包んで欲しかった。

その夜、僕はノゾミに電話をかけた。寂しかった。早く声が聞きたかった。ノゾミは、そんな僕の気も知らず、いつもと同じような態度で接した。僕はこの時初めて、ノゾミに違和感を持った。

（ノゾミは、本当に僕の事が好きなんだろうか？）

そんな思いが心を満たした。

確かに、ノゾミにはあまり自分の感情を表に出さないところがあった。それが彼女の美德であり、欠点でもあった。

僕はノゾミの本心が聞きたかった。しかしその思いは、「まだつきあいが浅いから」と考える事で、無理に打ち消された。確かにノゾミには何かしらの遠慮があるように思えた。確かに僕の事が好きなのかどうか疑わしい点もあった。

しかし、ノゾミは僕の彼女なのだ。僕とノゾミは付き合っているのだ。その事だけが頼りだった。

（付き合っているんだから…）

そう思う事で、僕は無理矢理に疑念を打ち消した。

（きつと、ノゾミは僕の事を嫌ってはいない。そうに決まっている）  
むりやりでもそういう自らの頭をそういう考えに持っていった。

ある種の自己催眠のように。

（それに今は無理かも知れないけど、いつかきっと、隔たりなく接する事が出来る。いつか…）

それだけが頼りだった。そう思う事だけが、僕の心の支えだった。

そして、6月が終わった。

## 第034話：休暇【第8章】

### 08・休暇

季節はまばゆいばかりの夏になり、学校は夏休みに入った。それは、僕にとって待ち焦がれていた休みだった。帰省してノゾミに会える。物理的距離が縮まる。その事実が、純粹に嬉しかった。

確かに6月に感じた違和感は、まだ、しこりのように僕の胸に残っているけれど、ノゾミの側に居さえすれば、もつともつとノゾミと会えば、そんなしこりは自然に消えてなくなってしまうように思えた。

僕は帰省して、田舎で自動車学校に行くつもりだった。交通の便や、バイトや学校の事を考えると、東京で教習所に通うほうが遥かに効率的なのだが、僕はあえて郷里の教習所に行く事を選んだ。

教習所に行くなら、少なく見積もっても20日は実家にいなければならぬ。そうすれば、その長い期間をもって、ノゾミに何度も出会う事が出来る、そう考えた。実際僕は20日どころか1ヶ月以上田舎に滞在するつもりでいた。

そんな淡い期待を持って帰省したのだが、僕の思いとは裏腹に、教習所通いは忙しかった。僕は朝から晩まで教習所に縛り付けられた。

もちろん毎日毎日そんなに忙しい日が続いたわけではない。たまには休日だってあった。しかしそのたまの休日は、ノゾミのスケジュールと会わない事が多々あった。

僕は田舎に帰っても、やっぱり孤独だった。地元の友達、僕と同じように帰省している彼らにはそれぞれ予定があり、独りでどこかに遊びに行こうにも、僕には移動手段がなかった。

僕はうだるような暑い毎日を、教習所と家との往復で過ごした。

ヒマな時は自分の部屋で、高校時代に買った本を読み漁<sup>あさ</sup>った。

## 第035話：劣等

田舎に帰ったからといって、ノゾミに電話する回数が増えたわけではない。僕は、ありていに言えば恐れていた。

ノゾミだって忙しいし、あんまり僕が電話をかけると、鬱陶うつとうしがられると思った。僕はノゾミにそう思っただけで欲しくなかった。嫌われなくなかった。嫌われる事を、ノゾミを失う事を恐れていた。僕が6月に体験した2つの別れは、やはり僕の中で尾を引いていた。

でも、たまには電話をした。ノゾミは、電話に出る時もあったが、出ない時も同じくらいあった。勝率は五割くらいだったと思う。出ない時はしばらく本を読んで、また電話した。それで繋がらなかったら、その日はもう電話しなかった。それは僕が決めた自分自身のルールだった。

でも、そのルールは僕自身を苦しめた。切なさが何度も何度も僕の胸を襲った。「ノゾミは僕の事なんかどうでもよくなって、他の人と遊んでいる」そんなバカみたいな事を空想することもあった。

実際、ノゾミの女友達に嫉妬しつとする事もあった。珍しく電話が繋がって、遊びに行こうよと誘っても、ノゾミは友達との予定が入っている事が多かった。僕は彼氏より友達を取るノゾミの考え方に腹が立ったが、心の奥底にしまっていた。

それは、僕が「理解ある彼氏」として見られたいがための我慢だった。でも、その我慢も、僕の心を圧迫した。僕とノゾミの関係が、どんどん脆もろくなっていく気がした。

もちろん、偶然予定が合って、遊びに行く事もあった。デートは大抵、デートする場所の最寄り駅まで僕は電車で、ノゾミは車で行って、その場所でデートし、帰りは僕がノゾミの車で送ってもらっていた。

僕は女の子に家まで送ってもらう事に罪悪感を持っていた。劣等

感を持っていた。普通の彼氏がすべき事を、僕は出来ていなかった。  
僕は、ダメな彼氏だった。

## 第036話：世界

それはある日の事だった。僕は遅々として進まない教習行程に飽き飽きしていた。くだらない、金儲けのためのシステム。だが、あまり気が乗らないながらも、教習所に行った。だって、僕からそれを取ると、田舎にいる正当性なんかなくなってしまふのだから。

いくら文句を言ったとして、僕の目的は運転免許を取ることであり、そのために少しばかり不快な思いをしようがない。それはどこにでもある1つのシステムだったのだから。

教習所でも、僕はやっぱり孤独だった。地元の友達に会うかと思っただが、時間が違うのか、それともそもそも初めからその教習所に通っていないのか、全くと言っていいほど旧友に会う事はなかった。

その日も、僕は一人で教習時限を待っていた。独り待合室に座り、持って来た文庫本を読んでいた。周りでは旧友に会ったらしい女の子達が、嬌声きょせいをあげて騒いでいた。まるで小さな同窓会が始まったようで、近況報告に花を咲かせていた。

僕は、違和感を持った。その光景は僕には全く馴染なじみのない光景だったから。

僕の周りは全く別の世界が広がっていて、全く別の人々が居るような感じがした。僕は透明人間になったか、違う次元にいるかのよう  
に、誰からも無視され、誰からも声をかけられなかった。

僕は前かがみになって文庫本を読んだ。ヘッドホンをして音楽を聴きながら、ただひたすら活字を追った。それが僕に出来る唯一の事だった。それが待合室での、僕の小じんまりとした世界だった。

その時、突然名前を呼ばれた。突然の事に驚いて目を上げると、ある女の子がいた。会つのは二年ぶりだったが、僕はすぐに誰だか分かった。それは、僕が高校時代に好きだった二人目の女の子であ

り、高校時代に告白した唯一の相手だった。

## 第037話：電話

僕は高校2年の時、当時よく話をしていた同じクラスのその子が好きだった。

その子は、当時僕と結構親密に接していた。選択授業が同じだった事もあったし、クラスの席も近かった。テストが終わったら一緒にカラオケにも行ったし（実はその時に僕は初めてカラオケというものに行った）、夏には一緒にテニスに行く事もあった。もっとも、どちらの場合も二人きりというわけではなく、他の女の子や他の男の子がついてはいたが。

それは、夏休みのある日の午後、夕方あたりの事だった。僕は勉強にも本を読むのにも飽き、一人で友人から借りたゲームをしていた。親は仕事か何かで留守だった。

その時、唐突に電話のベルが鳴った。もちろん、携帯電話なんてない時代だから、家の電話だ。

「もしもし？」

「あ、君？」

そう言ってかけてきたのは、僕が好きだった子だった。

僕はひどく狼狽した。胸の鼓動が速くなった。こんな風に女の子から電話をかけられた事なんてなかったし、それが好きな相手だったのだからなおさらだ。

「どこからかけてるの？」

「ん？ 公衆電話」

その当時は携帯電話などなかったから、公衆電話からかけるといふ行為は理解できた。しかし、そんな所からわざわざかけてくる理由が分からなかった。

（まさか、告白？）

そんな事を考えたりもした。今思えば随分青臭い考え方だ。

しかし僕の思いとは裏腹に、話してきた内容はくだらないものだった。いわく、「勉強はしているか？」だとか、「今何をしていたのか？」だとかいう、いわゆる世間話だった。

そんな話を、わざわざ公衆電話を使ってまでする理由が、僕には全く分からなかった。いくら夏休みで僕に会っていないとはいえ、もうすぐ登校日があつてそこで会えるのだ。僕は胸の鼓動がゆっくりになつていくのを感じながら、心の中では混乱していた。

だが、話はある核心に触れた。

「今、好きな人おるん？」

そう無邪気に問い掛けられて、僕はまた自分の鼓動が速くなつていくのを感じた。

僕は曖昧な言葉でお茶を濁して話題を変えようとしたが、相手は執拗に僕の答えを聞きたがつた。

「さんやる？」

女の勘というのは恐ろしいものだ。彼女が名前を挙げた女の子は、僕が高1の時に好きだった女の子だった。その子とも仲良く話をしていたものの、高1の終わりごろに他の男とデートしているのを見て以来、僕はその人の事を諦めていた。

だから、高2のその当時、その人の事は好意を持つてはいたものの、好きという感情は持つていなかった。むしろ自分でその感情を殺し、それがいつの間にか真実になつたような感じだ。

「違うよ」

僕はそう答えた。そして、話が別の話題に移つてくれるよう願つた。しかし彼女は話題を変えようとはしなかった。

「なあ、誰なん？ 教えてよ。同じクラスの人？」

「うん、まあ」

彼女は全く気づいていなかった。僕が彼女を好きだという事に。僕はここで告白したものかどうか迷つた。

「同じクラスの人なんや。誰？」

甘えたようにそう問い掛けられて、僕は困った。心臓は激しく脈打ち、脇の下からは嫌な汗が流れた。

正直、こんな形でその子に告白するのは嫌だった。しかし、最早<sup>もはや</sup>告白しなければ電話は切られないような感じだった。

僕は心を決めた。

ありったけの勇気を振り絞って、僕は、彼女の名前を口にした。

そして、すぐに電話を切った。その後の彼女の対応を知る勇氣は、当時の僕にはなかった。告白して相手の態度を窺<sup>うかが</sup>う事が出来るほど、僕は経験豊富ではなかった。

そして僕はまたゲームに戻った。しかし僕の心はそこにはなかった。ずっと、電話の事を考えていた。告白した達成感もあるにはあったが、それよりも後悔の念のほうが強かった。

## 第038話：失恋

数日後、登校日になった。僕は、その子と会うのを恐れていた。僕の告白に対してどんな反応を示すのか、それを知るのが怖かった。登校日の一日は、特に何もなく終わった。しかし、お互いの態度はぎこちなく、お互いに相手を避けているような雰囲気だった。

そして放課後、偶然にも僕とその子は二人で教室に残っていた。

「この前電話で話したことな……」

しばらくの気まずい雰囲気の後で、遠慮がちに彼女が口を開いた。「ビックリした？」

機先を制する形で、僕はそう言った。うん。そう言って彼女はうつむき、また少しの間、沈黙が流れた。

「あれ、冗談やる？」

彼女は顔をあげて、そう言った。

「いや、本気」

僕は言葉少なにそう答えた。また心臓がドキドキして、脇の下に汗が流れるのが分かった。

「冗談やって。絶対冗談やって！」

そう言い残して彼女は教室を去った。まるで無理矢理にでも僕の告白を冗談にしたいような、そんな雰囲気だった。僕は呆然と彼女が帰っていったドアを眺めた。もしかしたら戻ってくるかもと思つて暫く待ってはいいたが、その気配はなかった。

さらにしばらくして胸の鼓動が収まるのを待ってから、僕は一つ小さなため息をついて帰り支度を始めた。そこにはある種の諦めのようなものがあった。

その後、その子とは何かよそよそしくなり、お互いあまり知らないクラスメートのように接し始めた。もはや、かつてのように仲良

く話をする事はなかった。

僕はがっかりした。勢いに乗って告白した事を後悔した。

(こんな気まずい雰囲気になるんだったら、告白しなければよかった)

そう思って、自分の夏休みの軽率な行動を悔いた。

僕はその後もしばらくその子のことが好きだったが、しばらくしてその子と他の男との恋の噂が流れた。それが潮時だった。

こうして、僕の高校時代の、2つ目の恋は終わった。

## 第039話：過去

「何してるん？」

彼女は、昔の事などすっかり忘れてしまったかのように、無邪気に僕に問い掛けた。

思えばその無邪気さが、高校生の頃の僕の心を惹きつけていたのだ。僕はあの時代に戻ったような錯覚を覚えた。

「ん、本読んでる」

僕は手に持った文庫本をちよつと掲げて見せてから、昔と同じように、高校生の時と同じように言葉少なに答えた。

「ふーん。相変わらず本好きなんや？」

「いや、だってヒマやしね」

彼女は僕の本を手にとつて少し眺めた。僕はそんな彼女の様子をチラチラと見ていた。

彼女は、確か近県の大学に進んでいたはずだ。すこしふつくらした感はあるが、それでも十分健康的で、一人暮らしを始めたことで高校時代よりもお洒落しゃれになって印象を受けた。

一方僕は昔とあまり変わらない服装をしていた。夏の服装なんてジーンズにTシャツ（しかもセンスのない）ぐらいしか思っていなかった。そんな僕の姿をかって好きだった人に見せているというのは、少し恥かしい事だった。

「何か、痩やせた？　ちゃんと食べてる？」

「まあ、あんま食べてない……かな。君は……ちよつと太った？」

むかつくー、と言って笑いながらその子は去っていった。昔と同じような歩き方で。あの時教室から去っていったのと同じ歩き方で。僕の心の中では、不思議と何の感情も湧わかなかつた。だが、また本を読み始めたときになぜか胸がドキドキしていた。告白したあの時のように、ドキドキしていた。

（しかしもう終わったことだ）

そう自分に言い聞かせた。  
そうして僕は、また孤独になった。また、透明人間に戻った。

## 第040話：進展【第8章・完】

夏休みにノゾミと会って、2人の関係が進展しなかったわけではない。僕はノゾミと手を繋ぐ事が出来たし、(もつとも、ノゾミはしきりに恥ずかしがったので、あまり長い時間ではなかった)ノゾミから「好き」という言葉も聞いた。

しかし、僕は孤独だった。その2つの事柄でさえ、僕がノゾミに頼んで了承してもらった事であり、ノゾミが自発的にした事ではなかった。

2人の間の隔<sup>へた</sup>たりは、東京にいた時よりも広がっている気がした。確かに物理的距離は縮まったが、僕はノゾミの心がよく分からなかった。

では、僕は幸せではなかったのか？ と問われると、僕は幸せだったと答えるだろう。

ある日僕達はある市の夏祭りに出かけた。この日ばかりはノゾミは車ではなく電車で来た。僕はこれでやっと立場が対等になったかのような、そんな安堵<sup>あんど</sup>を感じていた。

デートは普段とあまり変わり映えしなかった。僕が教習所の事や友達の事を語り、ノゾミは静かに聞き役に徹する。そんな形だった。しかしその日は祭りだった。田舎には滅多<sup>めった</sup>にない、一大イベントの日だった。僕達は露店でタコ焼きを買い、2人で分けあって食べた。それは、僕とノゾミが仲睦まじくなれた瞬間だった。

そして僕達は花火を見た。それは大きな大きな花火だった。人ごみの中で、僕達は手を繋いで花火を見た。2人で、一緒に同じ花火を見た。

僕は、嬉しかった。心底嬉しかった。彼女と一緒に花火を見る行為、それ自体が僕の心を浮かれさせた。ノゾミが見ているものを、同時に自分も見ている。そんな些細な事が、嬉しかった。手を繋い

で一緒に同じものを見る、そんな普通のカップルなら当然するよう  
な些細な事が、嬉しかった。

そして2人の関係は、2人の間の隔たりは、また幾分いくぶん近づいたよ  
うに感じた。しかし両者の間にはまだ何らかの溝があった。それが  
何であるか僕には分からなかった。今をもつてしても、それが何な  
のかは分からない。

しかし、程なくして、僕達の心を一つにする出来事が起きた。そ  
れはただ一度きりの出来事だった。ただ一度きりの、美しい出来事  
だった。

## 第041話：不快【第9章】

### 09・夏の星

その日、僕は朝から不快だった。いつまでも続くこの暑さにも辟<sup>へき</sup>易<sup>えき</sup>していたし、僕が田舎にいる意義の一つでもある教習は、運転技<sup>いんぐわ</sup>術の未熟さから何度か補習を受けなければならず、その事にも苛立<sup>いらだ</sup>っていた。

教習所では毎日のように教官に怒られたし、相変わらず待合室は孤独で寂しい空間だった。僕には友人、いや、知り合いさえ誰一人としていなかった。

実はその日、僕には予定があつた。夕方から、ノゾミに会う予定だったのだ。しかし、そんな胸躍<sup>おど</sup>る予定があつたのにも関わらず、僕の心は不快だった。

ノゾミと僕との間には、再び深い溝が出来ていた。一時は縮まったかに思えた僕とノゾミの間の距離も、数日経つうちにまた本来の大きさにまで広がっていた。ノゾミは感じていなかったのかもしれない。それは僕だけが感じていたのかもしれない。でも、その溝は確かにそこにあつた。僕はその溝を、好むと好まざるとに関わらず、毎日目の当<sup>ま</sup>たりにしていた。

僕はそれにうんざりしていた。暗く深いその溝を、毎日感じるのが嫌だった。

そう、僕は不快だった。連日の疲れ、それはノゾミの態度に対してもあり、自分の心に対してでもあつた。

そしてそんな不快な状況下で、僕はノゾミに会った。夕方だといふのに熱波は人を焼き、さらなる不快感を与えようとしていた。

その日の僕はいつもと異なっていた。いつもと同じデートスポット、いつもと同じ予定だったにもかかわらず、僕の不快感は僕自身の心を変えてしまっていた。

僕は、ノゾミに会ってすぐ、今日1日、暴君になることを高らかに宣言した。もう、人に気を使いたくなくなった。人に気を使う余裕がなくなかった。ただ、僕のがままを聞いて欲しかった。

ある意味自暴自棄だった。

(これでノゾミに嫌われたら…)

そんな考えが一瞬間に浮かんだ。

だが、次の瞬間には自暴自棄な感情がその考えを消し去っていた。

(嫌われたら嫌われたでそれでいい)

なぜかある種の覚悟があった。その覚悟を持って、僕は自分のわがままを通した。

ノゾミと強引に手を繋ぎ(いつもはおそろおそろ手を繋いでいたのだ)、映画を観た。「ジョー・ブラックによるしく」だった。僕はノゾミと観た映画の事を、今でも一つ残らず覚えていてる。ラストシーンで主人公はヒロインを抱き締め、キスしていた。

## 第042話：恣意

その後は僕の食べたい物を食べに行つた。ノゾミの意見を聞く気はなかつた。今日は、とことんわがままになろうと思つた。だから、酒も飲んだ。

ノゾミは、怒つてもよかつた。僕のわがままを拒絶<sup>きよせつ</sup>しても、誰も彼女を責められなかつた。僕は実際ノゾミに拒否されるんじゃないかと思つていた。それくらい、普段の僕からは考えられないくらい、僕はわがままだつた。

しかしノゾミは僕のわがままに応え、出来る限りを尽くした。僕はそんなノゾミの優しさに甘えた。2人で飲み、遊び、語らつた。それは僕にとつて幸せな時間だつた。心が伸びやかになるような、そんな時間だつた。

そして僕達はカラオケに行つた。それは普段ならもう別れているような時間だつた。でも、僕はわがままだつた。ノゾミの予定なぞ意に介<sup>かひ</sup>さなかつた。僕は強引に、ノゾミをカラオケに誘つた。

ノゾミは、思つていたよりカラオケを楽しんでいるかに思えた。彼女は彼女の好きなB'zを歌い、僕は僕の好きな布袋を歌つた。てつきりノゾミは布袋なんて知らないと思つていたが、僕の歌つた曲が入っているアルバムだけは偶然にも持つていた。僕はその偶然が嬉しかった。二人の間に、また新たに一つ糸が結ばれたような気がした。

カラオケボックスで僕達は写真を撮つた。ノゾミは日頃、写真を撮られることを好まなかつた。しかしその日の僕はわがままだつた。無理矢理に二人の写真を撮つた。

その写真は、カメラにフラッシュがついてなかつたせいで、随分<sup>ずいぶん</sup>暗い写真になつてしまつたが、恥ずかしがり屋のノゾミが写つてい

る、数少ない写真の一つになった。

思えば僕はノゾミの写真を4枚しかもっていない。ノゾミ単体だとわずか2枚だ。

## 第043話・星空【第9章・完】

そして僕達は帰路についた。ノゾミに車で送ってもらっている時、僕は夜空を眺めた。どこまでも広がるかに思える夜空には星が瞬いていた。

僕は車中でも元気だった。ステレオから流れる曲と一緒に歌ったり、車中でノゾミの写真を撮ったりした。それは酔いのせいだったのかもしれないが、なんだか気分が高揚していた。ノゾミと一緒に時間が、いつもの数倍も楽しかった。

車は、いつもの場所に着いた。僕の家近くにある土手沿いの道だ。僕はいつもそこまで送ってもらっていた。そして、「おやすみ」の挨拶をして、ノゾミと別れる、それが通例だった。

しかし僕は車を降りようとはしなかった。この親密な空気を閉じ込めるもの、なにか記念になるものが欲しかった。車を降りる代わりに僕は最後のわがまをノゾミに伝えた。

「最後にもう1つだけ、わがま聞いてくれる？」

「……なに？」

僕はしばらくためらった後、その言葉を口にした。ノゾミの目をまっすぐに見つめ、ノゾミも僕を見つめ返した。

そして僕は、今日最後のお願いをした。

「キスしたい」

ノゾミは僕から視線を外した。僕はずっとノゾミを見つめていた。沈黙が二人の間に流れた。それはいつまでも続くように思われた。その中で、僕の鼓動は高鳴っていた。

（やっぱり言うべきじゃなかったんだろうか？）

そんな弱い思いが少し湧きあがってきた。それほど、沈黙は長く、

重かった。

「……………うん」

永遠に続くかと思われた沈黙は、彼女の承諾の言葉で破られた。ノゾミは、さつきとは異なる恥ずかし気な表情をしながらも、僕を見つめていた。

僕は意を決してノゾミの顔に近づき、目を閉じてなおも近づいた。

そして僕達は唇を合わせた。

それはほんの一瞬だった。キスというより、口づけ、文字通り口をつけただけという表現が最もふさわしいような行為だった。僕達は抱き締めあう事もしなかった。ただ、唇だけを重ねた。すぐに僕達は唇を離れた。そして、また沈黙が流れた。

「初めて？」

「……………うん」

「オレも……………」

僕は満足だった。それは僕にとって、そしてノゾミにとって初めての口づけだったのだ。そして僕は一番好きな人と、僕の愛する人と初めてのキスをする事が出来た。

「……………じゃ、また。今日はありがとう」

「……………うん。またね」

彼女におやすみのあいさつをした後、僕は、家に続く暗い道のりで、小さく拳を振り上げた。僕にとって初めてのキスは、僕の愛する彼女とであった。その事実だけで、僕は幸せだった。僕とノゾミとの隔たり<sup>へだ</sup>なんて、どこかに行ってしまった。僕とノゾミとの間の溝なんて、消え去ってしまった。

そう、その時僕達の心は一つだった。何者にも、僕達の間を邪

魔できなかった。

人の気持ちなんて、次々と変わっていくものだ。しかしこの時、僕は胸を張って言えた。「僕はノゾミの事が世界で一番好きである」と。

この瞬間、この気持ちは確実にあり絶対であった。

夜空には依然として星が瞬またたいていた。それは僕を包み込むような優しさを持って、瞬またたいていた。

## 第044話：後輩【第10章】

### 10・罪

東京に帰っても、僕の心は幸せで満たされていた。教習課程は結局、夏期休暇中に終わらせる事は出来ず、ノゾミともあまり会えなかったけれども、ノゾミとの甘美な一時が、あの日の出来事が僕の心の中にはあった。それは宝物のように大切にしまわれ、壊れ物のように大事に扱われた。

しかしいつまでもその余韻に浸<sup>ひた</sup>っているわけにはいかなかった。東京に帰ってきたのはもちろん夏期休暇が終わったためであるし、さらには大学の前期試験の日程が迫っていた。あまり勉強を真面目にしていなかった僕にとって、それは引き伸ばされた恐怖であった。

その日も僕は学校に行っていた。試験前なので授業はなかったのだが、あまり出席しなかった授業（もつとも、真面目に出席していた授業などほとんどなかったが）のノートを、勤勉な友達にコピーさせてもらうために出かけたのだ。

友達に会い、ノートを借りて、僕は学校の近くのコンビニに行った。もちろん、学校にもコピー機はあるのだが、試験前のこの時期は、僕のような不真面目な学生達によって、コピー機には長蛇の列ができる。無論、学校のすぐ近くのコンビニも例外ではないのだが、僕は少し離れた穴場のコンビニを知っており、そこでコピーしていたのだ。

そして長い時間をかけてコピーが終わった。かなり長い時間コピー機を占領していたと思う。僕の後ろでコピーを待つ人が、諦<sup>あきら</sup>めて舌打ちとともに去っていくのを僕は何度も感じた。そんな長時間の占<sup>せんきょ</sup>拠の成果は、膨大な量のコピーだった。それをどうにか両手に紙束を抱えてコンビニを出ようとしている時、偶然顔見知りの女の

子に出会った。  
クミコだった。

## 第045話：勧誘

クミコと初めて出会ったのは、今年の4月、まだ桜の花が咲いていた頃であった。そう、僕とノゾミがまだ付き合っていなかった頃だ。

長つたらしい入学式が終わって、あくびまじりに出て来る新入生に、新2年生の僕はせっせとサークルのビラを配っていた。サークルのビラ配りなど、僕はたいして興味をそそられなかったのだが、一応2年生になり、サークルに籍を置いている手前、参加せざるを得なかったのだ。

ビラ配りに疲れて、僕はジュースを飲みながら大学構内をぶらぶらと散歩していた。その時、友人がある女の子を勧誘している場面にいくわした。

その女の子が、クミコだった。

クミコは、美人だった。可愛いと言うよりも、美しかった。物怖じしない態度、取り繕ったような媚を売ったり、変に甘えた声を出したりしないところも、その美しさを増す結果になっていた。僕より1つ年下であり、まだ若い面も持つてはいるが、多くの点で僕より大人びていた。

僕の大学は理系だったので、女の子の数は絶対的に不足していた。だから見る女の子見る女の子全てが、標準より可愛く見える事もあった。しかし、クミコは、どんな集団に属していようが、普通に美しい子だった。もちろん、モデルとか芸能人の集団に混じるとどうだか分からないけれど、一般人の中では綺麗な部類に入るだろう。今思えば、それは化粧のせいもあったかもしれない。

僕はクミコに声をかけた。一応、サークルに勧誘するという大義名分があったが、本当の事を言えば、そんな綺麗な女の子と話したかっただけだ。友達と一緒に、クミコに話し掛けた。

クミコは（それは表面的な優しさだったのかも लेकिनが）、僕の話に熱心に聞いてくれた。勧誘の話のみならず、大学生活についての世間的な話もした。

女の子と仲良く話すことがほとんどない当時の僕にとって、それは楽しい時間だった。立ち話だったけど、立ち話とは思えないくらい長い間、僕たちは様々な話をした。

## 第046話：昼食

結局クミコは友達のスークルに入る事が決まった。僕はがっかりしたが、同時にそれは都合のいい事だと思つた。なぜならそのスークルには僕の友達がいくらか居て、僕はそのスークルに頻繁ひんぱんに出入りする事が、一応ではあるが可能だったからだ。

僕はそのスークルに入り浸びたつた。去年まではたとえ友達がいると言つてもほとんど興味がなく、片手で数える程しか行つた事がなかったのに、クミコと知り合つてからは毎日のように入り浸びたつた。一つには、クミコが誘つてくれた事もあり、一つにはヒマをもてあましていた事もある。

そして、クミコと僕は徐々に仲良くなつていった。程なくして、僕達はスークルを離れても仲良く話をしたり、一緒にご飯を食べにいったりする仲になつた。

クミコは、実はかなり遊んでいる女だった。おそらく初対面の時に感じた大人っぽさは、それに起因しているのだろう。高級そうなバッグを持ち、大抵ミニスカートを履いていた。男友達もたくさん居るようで、そのことに対して僕はなぜだか少し嫉妬し、少し落胆した。

「今まで何人の人としたの？」

話がそういう話題になつた時に、そう聞いた事があつた。

「んー、20数人ぐらい」

クミコはあつげらかんとそう答えた。そういう女だった。クミコにはちゃんとした彼氏がいるのに、彼女の体験した人数は日毎に増加していた。

コンビニの前で偶然出会つたクミコは、相変わらず綺麗だった。おそらく人に見られる事に慣れているのだろう。男の目を熟知し、

その期待にふさわしいファッションをする、クミコはそういう女だった。

「あ、お昼食べた？」

そう聞いてくるクミコに僕は、食べてない、と答えた。昼食の間はとつくに過ぎていたが、友達にノートを借りる手前その友人の予定に時間を合わせるしがなく、食べるヒマがなかったのだ。

「じゃあ一緒に食べようよ」

僕はいいよと返事をし、苦心してコピーの束を自分のバッグにしまった。

## 第047話：相談

クミコには彼氏がいた。しかし、そのくせに、僕の友達（クミコにとってはサークルの先輩にあたる、僕の同級生）の事を好きだと言っていた。その狭間はざまでいろいろ悩んでいるようだった。僕はその事で何度か相談され、何度か拙つたないながらもアドヴァイスをした。深夜に電話がかかってくる事もあったし、ご飯を食べながら話をする事もあった。

その日の話も、そんな悩み事相談だった。彼氏の事、僕の友達の事。僕は学生向けの定食屋で蕎麦を食べながら、およそその場には似つかわしくない恋愛相談を始めた。しかし、それはいつもの会話の流れと少し違っていた。

「あたし、もう諦める」

クミコは僕の友達を好きである事を諦めようとしていた。僕は理由を聞き、そして、できる限り優しい言葉で彼女を励ました。

「でも、もう諦める。決めたんだ」

そう言っただけでクミコはじつと僕の目を見た。見つめられて僕は、少しドキドキした。

そこで別れておけば、普通に家に帰っておけば、あんな事は起こらなかっただろう。そして僕は家に帰ってコピーを整理し、テストに向けて勉強でもしていた事だろう。

しかしクミコは僕をカラオケに誘った。クミコと2人きりでカラオケに行くのは初めてだった。そして僕は誘いに乗った。このまま放っておけない気がしたからだ。

カラオケで、クミコはその当時流行っていたglobeや安室の曲を歌った。それは、何かを忘れようとしているような、何か他の事に夢中になろうとしているようなそんな感じの歌い方だった。

僕は知っている古い曲を歌った。1年間の大学生活における経験で、洋楽はあんまり歌わないほうがいい事を知っていた。ユニコーンやら、ブルーハーツやら、そんな当たり障りさわのない曲だ。

しばらく経たって、クミコが突然、「ああ、眠い」と言っソファにゴロリと寝転んだ。その姿はあまりにも無防備で、ずりあがったミニスカートからは下着が見えそうだった。僕は困惑し、ドギマギした。

(ああ、もう少しで下着が見える…)

そんな不埒ふちな思いが僕の心の中に芽生え、良心と戦っていた。僕はクミコを襲おそいたい欲望に駆られたが、とっさの事でそれを我慢がまんした。そんな事、出来るわけなかった。目の前にいる女は好きな彼氏かみんがいて、僕には愛する彼女がいる。そんな事、出来るわけがないのだ。だいいち、僕は女の抱き方一つ知らなかったのだから。

## 第048話：来訪

結局カラオケ屋では何も起こらなかった。僕は必死に本能から耐え、理性が欲望を押し留めた。

その帰り道で、クミコは不意に言った。

「ねえ、今日遊びに行つていい？」

それを聞いて僕は面食らった。（何を考えてるんだこの女は？）そう思った。でも、別にそれを止める正当な理由はないように感じた。確かに僕には彼女がいたが、友達の女を家に上げる事は何も悪くないような気がした。実際、Kさんは好きな人がいても僕を家に上げてくれたではないか。

それに、クミコは悩んでいた。独りで悩んで、それに耐え切れず、話し相手を求めている。僕は、友達として素直に力になりたいと思つた。

確かに、そこに隠微な匂い（いんび）がなかったとは言いがたい。しかし、もしそういう雰囲気になったとして、僕は自分を制する自信があった。僕には彼女がいて、その彼女の事を愛していたから。

クミコは夕方にやって来た。クミコは、初めて見る僕の家を、興味深そうに眺め、子供のようににはしゃいだ。僕は、初めて女の子を家に上げる事に緊張しながら、そんなにはしゃぐクミコを可愛いと思つた。

しかし僕の家に来て、別段、する事はなかった。僕の部屋にはマンガがいくつかと、ゲームと、本と、洋楽のCDしかなかった。女の子が喜ぶようなものは何もなく、仮に女の子が来たとして、特に興味をそそられるような部屋ではなかった。

初めのうちこそ、テレビでビデオを見たり、いろんな話を話したりしていたが、そのうちにする事がなくなってきた。戸外はどんどん暗くなり、次第に言葉少なになった二人の間に、ある種の雰囲気

が流れた。

「ねえ……」

「ん？」

「しゅじゅ……」

そう誘ってきたのはクミンコだった。

## 第049話：誘惑

「何言つてんだよ？お前、彼氏がいるだろ？」

僕はひたすらそれを冗談にしようとした。冗談にしてみました、その雰囲気から逃れられるような気がした。かつて高校時代に僕がされたように。

しかし、相手は百戦錬磨だった。僕はそうやすやすとは逃れられなかった。

「いいから、しようよ」

「ダメだって」

「私の事、嫌い？」

僕は、言葉に詰まった。確かにクミコの事は嫌いではなかった。

その美しい外見、セクシーな肢体したい、大人びているようで、子供っぽい一面も持っている。そんなクミコの事が、嫌いではなかった。むしろ好きだったと言ってもいい。

でも、僕には彼女がいた。彼女を裏切る事は出来なかった。数日前にキスを交わした彼女を、裏切る事は出来なかった。

そしてクミコは遂に行動に出た。あぐらをかいて座っている僕に後ろから抱きつき、僕の首筋に息を吹きかけた。全くそうだった経験のない僕は、それだけで下半身が疼うずいていくのを感じた。僕は必死にそれを払いのけようとした。クミコの本能に、僕の理性で抗こうしようとした。

しかし、出来なかった。全身から、力が抜けていくような気がした。

「立ってるよ」

そうクミコに囁ささかれても、抱きつかれても、僕はひたすらに耐えた。否定もせず肯定もせず、僕は一言も発さず、ただひたすらに我慢まんした。僕を支えていたのはノゾミへの愛だった。あの夏の日のノゾミとの思い出だった。

僕は両腕で自分の足を抱え込んでうずくまり、顔を伏せて耐えた。まるで石仏か何かになったように、目を閉じ、身じろぎもせず、ずっと耐えた。

クミコはそんな僕の体に指を這わせ、耳元に息を吹きかけた。でも僕はじつと我慢した。ノゾミの事を思い出す事で、ひたすらに本能と戦った。

そうして2時間が過ぎた。僕は2時間、クミコの誘惑から耐えつづけた。僕は早くクミコが諦めてくれるよう祈った。もう自分自身の力では抗する事が出来ないくらい、僕の欲望は高まっていた。生物としての本能が、人間としての理性を凌駕しようとしていた。

しかしクミコは、諦めなかった。僕は、遂に自分の欲望が弾けるのを感じた。

そして僕はクミコを抱いた。

## 第050話：不貞【第10章・完】

極限まで我慢したその辛抱が一旦切れると、もう、どうなってもいいという感情が、自棄を起こしたような感情が僕を支配した。堰をきったように欲望が溢れ出し、自分では止める事が出来なかった。止めようという考えさえ浮かばなかった。僕はその夜、飽く事なく何度も何度もクミコの肉体を貪った。

それはそういった体験のない僕にとって、非常に甘美なものだった。女の子の肌があんなにも柔らかい事を初めて知ったし、それまで本やビデオでしか見た事がなかったあの部分を実際に見るのも初めてだった。

どこをどうすれば気持ちがいいのかも初めて実際に経験したし、どこをどうされれば気持ちがいいのかもよく分かった。そして、二つの肉体が一つになる方法も。

ノゾミのことが頭の端をよぎらなかつたわけではない。ノゾミに対して罪悪感を覚えなかつたわけではない。しかし僕は無理やりにノゾミの事を頭から追い出した。脳の一部を麻痺させて、ノゾミの事、僕には愛する彼女がいる事を、考えないようにした。

それが可能なほどクミコの肉体は魅力的で、僕の若い欲望は狂おしいほどその肉体を求めていた。むしろ、狂っていたと言ってもいいくらいだ。それは、親密な時間だった。ノゾミと一緒にいる時間の何倍も、親密な時間だった。僕達は抱き合い、愛撫し、そして、交わった。一夜しか会う事を許されない恋人達のように、ひたすらにお互いの体を求めた。

クミコと僕のどっちが悪いとかは言いたくないし、言い訳をしようとも思わない。僕は、クミコを抱いた。それは歴然たる事実であり、他の何ものでもない。

そして、夜が明けた。それは昨日と同じような夜明けだったが、

僕は昨日と同じ僕ではなかった。一晩の間に僕は、罪深い男になっていた。彼女の思いを裏切った、罪深い男に。

## 第051話：卑怯【第11章】

11・秋の月

次の日も、僕達は交わった。朝、目が覚めた時から交わった。口づけから始まり、行き着くところまで行った。

それは、恍惚こうごうとするような体験だった。初めて女というものを知った僕は、新しいおもちゃを与えられた子供のように、夢中でクミコを抱いた。ただひたすらに、クミコの体を求めた。

しかし、その日の夕方になってやっとクミコが帰った後、僕は激しい罪悪感にさいなまれた。

（なぜあんな事になったんだろう？僕にはノゾミがいるのに…）

そう思うと、やりきれない気分になった。自分が許せなかった。同時に僕は確信していた。もう二度とこういう事は起こらないだろうと。僕とクミコは、ただ2日だけ恋人になったのだ。もう二度とあの親密な関係を味わう事はないだろう。そう思った。

それは自分に対する言い訳だったのかもしれない。罪悪感を和らなだげるために、そう自分に言い聞かせていたのかもしれない。もしクミコがまた僕を誘ったら、その時僕は耐え切れる自信がなかった。

ノゾミにこの事を打ち明けるべきか迷った。正直に、ありのままに話して、許しを請こうべきか迷った。

本当はありのままをノゾミに話すべきだったのだろう。話した上でなんらかの罰を受けるべきだったのだろう。しかし僕は卑怯ひきょうだった。僕はノゾミに話さなかった。とても話せなかった。

ノゾミに嘘はつきたくないが、嘘をつく事と話さない事は違うことだと思った。知らないほうがいい事もあると自分に言い聞かせた。僕は、ノゾミを傷つけたくなかった。だがそれ以上に、自分が傷つきたくなかった。

そう自分に言い訳して、僕はクミコとの体験を秘密にする事を決意した。それは、一度限りの過ちあやまちだと思っていた。

だが、僕の心の中ではある変化が起こっていた。

## 第052話：密度

クミコが去ったその夜、僕は寂しかった。人肌が恋しかった。ノゾミと初めてのキスをしてから、まだ2週間しか経っていなかった。ノゾミを愛していると胸を張って言えた時から、まだたったの2週間しか経っていなかった。

それなのに、それなのに僕はクミコに会いたかった。ノゾミよりクミコに会いたかった。僕は自分自身の心がよく分からなかった。なぜそんなにもクミコに惹かれているのか、分からなかった。

それは、体が目的だったのだろうか？クミコとの肉体的な接触が目的だったのだろうか？ただ快楽を享受したかっただけなのだろうか？

いや、違う。

僕はただ、クミコと親密な時間が味わいたかっただけだ。ノゾミとの関係では未だ得られていない親密な時間が。

ともすれば、それはクミコでなくても良かったのかもしれない。他の女性でも良かったのかもしれない。しかし僕はクミコに会いたかった。クミコが与えてくれる親密な時間が欲しかった。

クミコからは、それから頻繁ひんぱんに電話がかかってきた。僕は心のあの部分で良心の呵責かしゃくを覚えながらも、それでもそれ以上にその電話が嬉しかった。クミコと仲良く話せることが、クミコとまるで恋人のように話せることが嬉しかった。

そこにはノゾミとの電話では得られない何かがあった。それは体を許した事による気安さかもしれない。クミコに頼られていると感じる安堵感あんどかもしれない。

そして数日後、僕とクミコはまた出会った。僕は再びクミコを抱

いた。

## 第053話：弁明

「毒を食らわば皿まで」という気持ちもあつた。一回するのも二回するのも同じだと自分に言い聞かせた。そう、僕は既に過ちを犯したのだ。今さら新たに罪を犯したとして、何の違いがあるのか？それにクミコは僕に抱かれたがっている。この希望を無碍に断る事は、クミコを傷つける事になるのではないのか？弱っているクミコが僕を最後の拠り所としていた場合、僕はその責任を放棄できるのか？

卑怯な弁明だとは思つが当時の僕は本当にそう考えていたのだ。そう考える事で、自らの行為を正当化、とまではいかないまでも、そこそこ許せる範囲に持つて行きたかつたのだ。

さらに悪い事には、僕はクミコの事を愛し始めていた。ノゾミと同じぐらい、ともすればそれ以上に、クミコに惹かれていった。そして、そんな困惑した状態の下で、クミコとの関係は続いていった。

その日も、何度目かの情事を重ね、クミコは帰っていった。僕はぼんやりと空を眺めた。夜空には月が出ていた。

月は、郷里から遠く離れたこの地では、橙色の光を放ち、妖しく輝いていた。あたかも溢れんばかりの生命に満ちているように、積極的に、どこか俗っぽく艶かしく輝いていた。

僕はその月を見ながら、懐かしき故郷の月を思い出していた。青白く輝く郷里の月を。それは、あたかも弱きもののように、静かに、同時に高潔に貞淑に輝いていた。

僕には選べなかつた。どちらの月も、それぞれの魅力をもつてして僕の心を捉えていた。出来る事なら、両方の月を手中に収めたかつた。しかしそれは出来ない相談だつた。僕の良心が、それを許さなかつた。

気もそぞろなままテスト期間が始まった。混乱の中で、僕はそれでもやるべき事はやろうと、必死にテスト勉強をした。それは、何かから逃げたかったのかもしれない。確かに試験勉強をしている時は、特に単位を落としそうな教科の勉強を死ぬ気でしている時は、そういう悩み事は頭をかすめなかった。むしろ、そういう考えに陥る事を拒否した。その部分を眠らせ、麻痺させ、鎮めておきたかった。

そしてテスト期間が終わり、秋休みが始まった。僕は教習所に通うため、一旦郷里に帰ることにした。その日は午前中に郷里に帰り、午後からはノゾミに会う予定だった。

しかしその前の日に、クミコはまた泊まりに来た。そして、また僕と交わった。僕は、薄れゆく罪悪感の中で、また罪を犯した。

## 第054話：変化

帰省する日の朝、僕はクミコと一緒に駅まで向かった。クミコは僕の腕に自分の腕を絡めた。それは、どう見ても恋人同士にしか見えぬ、僕は不謹慎ながら少し嬉しかった。悔しい事に、そこにある種の愛情らしきものを感じてしまったのだ。僕は駅でノゾミに渡すお土産を買い、クミコとキスをしてから郷里に向かう座席に座った。そして、その日の午後、僕はノゾミに会った。ほんの数時間前までは僕の傍らにはクミコがいた。ほんの数時間前、僕とクミコは車でキスを交わした。珍しくノゾミにお土産を買って帰ったのは、その罪悪感をいくらか緩和するためだったのかもしれない。

朝までクミコを抱いていた、そんな汚れた体で、僕はノゾミに会った。クミコの事など、おくびにも出さなかった。そんな事が出来る自分が信じられなかった。ある種の驚きをもって、僕の中の僕が僕を見ていた。

ノゾミの事を愛する気持ちが減ったのではない。ノゾミの事は以前と変わりなく好きだった。しかし、僕は同時にクミコの事が好きだった。僕は自分の心が分からなかった。どちらがより好きなのか、分からなかった。

しかし、秘密を隠しとおすという苦行は、いつの間にも楽しいものになっていった。ノゾミと付き合い始めた頃は、女の子の事なんか全然分からなかったが、半年を経てクミコを抱いた事により、僕はそのスリルを楽しむようになっていった。いっばしのプレイボーイ気取りだった。

（バレなきやいいんだ。バレなきや）

そんな思いが芽生えてきていた。

## 第055話：奈落【第11章・完】

しかし一度、バレそうになったことがある。

僕は、クミコを抱いてからも以前と変わりなくノゾミと電話していた。しかし同様に、クミコともよく電話していた。自分からクミコにかける事はあまりなかったが、クミコからはよくかかっていた。

そしてそれは週に1回のノゾミとの電話の時だった。

その時僕は、ひどく眠かった。ノゾミが自分の事を自分から話す事はあまりなく、その時も僕が最近の面白かった話をしていった。しかしその時は、状況を判断する能力が落ちていた。

そして僕は名前を間違った。そう、ノゾミの事をクミコと呼んでしまったのだ。

さもありなん。最近ではノゾミよりクミコと話すほうが回数も、時間も、遥かに多かったのだから、間違えても無理はない。

僕はその瞬間途端に覚醒し、どうやって状況を收拾しようかと焦ったが、幸い、決定的にその言葉を口にしたわけではなく、モゴモゴと口走っただけであったから、似たような単語によってごまかす事が出来た。実際、ノゾミもそう鋭いほうではないのだ。

しかしその体験は僕を冷やりとさせた。この異常な関係がいつかは終わってしまうであろう事を、僕に予感させた。

だが、僕は同時にそのスリルを楽しんでいた。その体験があつてから、クミコとの関係を整理しようと思う事もあったが、同時に、こんな板ばさみの状況を半ば楽しんでいた。ノゾミへの罪悪感に、二人の女の子から同時に好かれるという優越感と、二人の女の子を同時に相手にする好奇心が打ち勝った。

そして僕とクミコとの関係は続いた。いつか終わりが来るだろう

という確信はあった。しかし、それを今終らせる事はしたくなかった。

僕は、どんどん奈落ならくの底に落ちていった。

## 第056話：行動【第12章】

### 12．出会い

僕の中で確実に何かが変わっていた。クミコを抱いた事によって、彼女を裏切った事によって、そして、それを隠し通そうと決めた事によって、僕の中で何か負の感情のようなものが芽生えた。

（バレなければいいのさ。そうさ、バレなければいい。話さなければ、ノゾミは何も知りはしない。ノゾミを傷つける事にはならな  
いんだ）

そういう感情が僕を支配した。僕はもはや躊躇ちゅうちゆしなかった。新たに女の子と知り合いになることを。そしてその女の子と深い仲になることを。

10月のある秋の日、僕はNに他の大学の学園祭に行こうと誘われた。僕は二つ返事でOKした。

以前、僕は他の友達と、他大学の学園祭に行った事があった。しかしそれは純粹な好奇心からの行動だった。東京の、他の大学の学園祭に行った事がなかったから、どんなものか見てみたくて行っただけだ。

その時と今回では明らかに目的が違った。純粹な好奇心よりも不純な欲望のほうが強かった。浮気する楽しみを知った僕と根っからの女好きのN。学園祭での目的は一つ、女の子をナンパする事だった。あえて意思を確認するまでもなく、考えている事は同じだった。

僕は、その頃手に入れたお気に入りの茶色いロングコートを着て、精一杯のおめかしをした。いつも学校に行く時は眼鏡なのだが、ちゃんとコンタクトに変えた。髪形も、珍しく綺麗にできた。

Nは僕の下宿近くの駅から2駅ほど離れた所に住んでいた。学園

祭の行われる大学に行くには、僕の最寄り駅を通過しなければいけないため、待ち合わせ場所は駅の駅にした。

準備に手間取ったため、僕は約束の時間から5分ほど遅れて駅に着いた。この程度の遅刻は、僕にとってはよくある事だ。駅には着いたものの、Nはまだ来ていない様子だったので、大人しくNを待った。

しかし、それから15分経ってもNは現れなかった。(もしかして約束の時間を間違えたかな?) と思いNに電話したら、Nは今電車に乗ったところだと言う。遅刻はNにとってもよくある事だった。僕はロングコートの裾すそが汚れないように気をつけて椅子に座り、ゆっくりとタバコを吸った。別にNに対して腹を立てることもなかった。その頃、僕達の時間は至極しごくゆったりと流れていた。それが大学生というものだ。

## 第057話：車内

タバコを1本吸い終えたぐらいで、Nが乗っている電車が到着した。僕は電車に乗り込み、Nを探した。車両が3両しかないため、案外すぐにNは見つかった。背が高いNは、人ごみの中にも頭一つ出ているのですぐに分かった。

Nはたかが学園祭に行くのに、大きな荷物を持っていた。訊けば、大量のおにぎりが入っているという。昨夜、バイト先の居酒屋で余り物のご飯を使って作ったそう。一体、なぜそんな物を持ってきたのか？と尋ねると、学園祭で売るつもりだ、と臆面もなく答えた。僕は、許可もなくそういう物を売るのはヤバイんじゃないかと思っただが、Nはそんな事おかまいなしだった。

後の事をあまりよく考えず、面白そうな事を率先してやる、それがNの性格だった。さすがにもういい歳だから、あからさまに法に触れるような事はやらなかった。仮にやったとしても軽犯罪程度だ。僕はNのそういうところはあまり好きではなかったが、特に注意する事もなく容認していた。Nには人懐っこい所があつて、それにより何故かあまり強い事は言にくかった。

もしかしたらそういう多少強引ともとれる部分と、意外にも人懐っこい部分が、僕とNとの違いだったのかもしれない。その違いが、女の子に好意を持たれるか、全く印象に残らないかの違いになつていたのかもしれない。

程なくして、電車は学園祭が行われる大学の最寄り駅に着いた。駅から出て行く人々は、結構な割合で大学の方向へ向かっていた。

精一杯おめかしした男達が、かっこつけて歩いているのを見て、なんだか同じようにめかしこんだ自分が少し恥ずかしかった。

## 第058話：作戦

その大学は都心にあるだけあって、敷地は思ったよりずっと狭かった。敷地も狭い上に、その敷地を最大限有効に使うとビルが軒を並べて建っており、学園祭のメインとなるべき広場のようものはなかった。ただ、駐車場のようなものがあった、そこに出店などは固まって出ていた。

そこで僕とNは少々困った事に気づいた。敷地が狭いために、どこかで腰を据えておにぎりを売るとしたら、それはとてもしスキーなのだ。狭い敷地の中ではもちろん学園祭実行委員が見回っているし、フリーマーケットじゃあるまいし、そんな所で見かけぬ輩が二人きりでおにぎりを売っていたら目立ってしまう。目立つのは、女の子と仲良くなる上で重要な事だが、それによつてとつ捕まつて説教を受けたのでは、何のためにわざわざこんな所まで来たのか分からない。

僕達は適当な空き教室に入って対策を練った。空き教室には時々学内の誰かがやってきて、僕はその度にドキドキした。なにせ、僕達はそこにいるはずのない部外者なのだから。

そんな中で話し合つて出た結論は、駅弁のように箱を吊り下げて歩きながら売る、という方法だった。これならじつと店を出しているより何かあつた時に逃げやすいし、何より多くの人に話しかける事ができる。

おにぎりの値段は一律50円にした。もともと利益をあげる事が目的じゃないんだし、それに味見をしてみたが、冷え切つたおにぎりは大して美味いもんじゃなかった。僕が客だったら50円でも買わなかつただろう。ダンボールを適当に探してきて、Nが持つてきたマジックで値段票を作り、箱に貼り付けた。

## 第059話：実行

そして僕達は行動に移った。

しかしながら、この作戦はあまりうまく行かなかった。なにせ、非公認な手前大っぴらに声を出して売るわけにも行かないし（それにもともと僕達はそんなに声を張り上げる事に慣れていない）、そうすると非常に売りづらい。

せいぜい、そこら辺で座っている女の子なり、男に声をかけて買ってもらうのが関の山だが、もちろんすぐに断られた。

まだNは頑張<sup>がんば</sup>って売ろうとしていたが、僕は早々に恥ずかしさと空しさを感じて、Nの後ろからとぼとぼと付いて行く、という格好<sup>かっこう</sup>になった。声だつてあんまり出していない。せいぜい「おにぎり」と小声で言うくらいだ。

そしてその大学は理系の大学だったので、実は女の子が元々あんまりいなかった。それはそれで、他大学から来る子もいるのでまだチャンスはあるかと思っていたが、他大学からは男子学生も同様に来るので、結果としてその比率はあまり変わっていないかった。いやむしろ、女性比率は低くなっているように感じた。

しかしそれでもNはさすがだった。他大学から来た女の子を捕まえて、その軽快な話術で電話番号を聞き出した。他の女子大から来た2人組の女の子達だった。

はつきり言うと、その子達はあんまり可愛くなかった。僕の好みの問題ではなく、一般的に見てもあんまり可愛くなかった。正確に言うと、一人はまあ普通だったのだが、その子は話し方がすごくおかしかった。「さしすせそ」の発音がことごとく「しゃしいしゆしえしよ」になった。

後にこの子とNは付き合う事になるのだが、1ヶ月も経たない内

に別れたと思う。(N自身も「失敗だった」と別れた後で言っていた)

## 第060話：店員

そして無為むゐに時間だけが過ぎ、やがて日が暮れた。僕もNももう結構疲れていた。女の子に声をかけても冷たくあしらわれることが多く、そもそも暇そうにブラついている女の子もあまりいなかった。僕達は普通にその大学の男子学生と仲良くなり、そこでしばらく世間話をしたりしていた。最早もはや、女の子をどうしようという気はあまりなかった。むしろそうやって男子学生と世間話をしているほうがずっと楽しいように感じた。

そこで僕達はもうそろそろお開きにしよう、という事で、残ったおにぎりをまとめてNのかばんに放り込んだ。そして、まだやっている出店で何か食べてビールでも飲もうと思ひ、移動した。

その出店は少林寺拳法部のやっている店だった。そこに僕達は座った。程なくして店員である学生が来た。僕達は驚いた。

その女性店員は、コスプレだかんだか知らないが、猿かぶの被り物かぶをしていた。普段は「くだらない」と一いっ笑しょうに付すところだったが、疲れていたためか僕達は大いに受けた。その女の子があまり女性的な雰囲気を出すタイプじゃなかったからかもしれない。そして僕達と猿の女の子はしばし仲良く話をした。時間が遅い事もあって、客はあまりいなかった。だから話をする時間があつたのだろう。

そうしていると、何をやっているのか気になつたのか、他の女の子が2人やって来た。そこで僕はまた少し驚いた。後から来た2人の女の子の内の1人が、ノゾミに似ていたからだ。

正確に言つと、外見上の類似点は少なかつたと思う。しかしながら、内部からかもし出されている雰囲気、その滲じみ出る優しさでも言つべき点が、ノゾミによく似ていた。

そしてもう1人のほうの女の子はとても可愛い子だった。名前はユキ。年は2コ下だった。僕の性格からして、可愛い女の子と話す

のは苦手だったが、ユキは可愛い子や美人な子が持っている、ある種の近寄りがたい雰囲気というものはあまりなく、僕達のリクエストに応じて猿の被り物を被ったりしていた。被り物をした姿も、また可愛かった。

僕はユキに少し好感を持ったが、あまりに可愛い子だったので、僕とは関係ない世界に住んでいるのだろうと思っていた。しかしその場ではただ話をするのが楽しく、僕達は結局閉店時間まで居座つた。もともと、行った時刻が時刻だったから、閉店になるまでそんなに長くはかからなかった。

そして僕達は連絡先を交換した。

## 第061話：終宴【第12章・完】

もうすっかり夜だった。僕は宴が終焉に向かい物寂しくなってきた大学を出て駅に向かった。Nは用事があるだとかでどこかへ行ってしまった。昼にこんなに遊んだ後なのに、また夜に飲み会か何かがあると聞いていた。そこで僕は1人で帰る羽目になったのだ。

駅に着いてホームで電車を待っていると、見覚えのある女の子に出会った。さつき学園祭で会った、ノゾミ似の女の子だった。話しかけると、向こうも僕の事を覚えていた。当然だ。さつきまで話していたのだから。何やら家が遠いため、先に帰らせてもらうことになったのだそうだ。ちょうど電車が同じ方向だったため、僕とその子は同じ電車に乗り込んだ。

東京にはこんな素朴な女の子はいないと思っていたのに、その子は実に素朴だった。もっと早くこういう女の子に出会っていれば、僕は都会の女の子に臆する事はなかった、とまでは言わないが、何かしらの救いになっていたに違いない。

電車の中で、僕達は当たり前障りのない話をした。その女の子の家は、僕が思っていたよりずっと遠かった。確か神奈川のどこかだったと思う。そして少しガツカリした事は、その子にはもう何年も付き合っている彼氏がいるという事だった。

程なくして乗換駅に着いたので、さよならを言って僕達は別れた。

結局、この学園祭で得られたのは、女の子5人分の連絡先だった。僕は誰かと仲良くなりたいたいと願ったが、はっきりと誰と仲良くなるかを考えると、それはあまりに分が悪い賭けのような気がしていた。女の子の内、初めに会った2人はなんだか嫌だったし、後に出会った3人の内、ノゾミに似た子は彼氏がいるのでまず無理だろうと思った。

残るは2人だが、猿の被り物をした子はあまりにも女を捨ててい

て、恋愛だとかそういう感情が湧きそうになかった。ユキは、面白いし可愛いし、とても魅力的ではあったが、あまりに可愛すぎて僕なんかの相手をしてくれないように感じた。

僕は相変わらず劣等感を持っていたし、自分に対して前よりはましではあったものの自信を持てていなかった。

とりあえず、猿の被り物かぶをした子とユキに電話なりメールなりしてみようと思ったが、出会って別れたその夜にすぐメールや電話をするのはなんだか気恥ずかしくて、その日は寝る事に決めた。

あの子達と違って、僕やNは明日は学校があるのだ。飲みに行つたNのことが少し気になつたが、どうせ徹夜で飲んでそのまま学校に行くのだろう。よくある事だ。僕は考えるのをやめ、慣れないナンプアで疲れた体を布団に横たえた。

季節はもう晩秋で、夜はかなり冷え込む事が多くなっていた。僕は暖かい布団に包まり、すぐに眠りについた。

## 第062話：大学【第13章】

### 13・異性

学園祭に行つて女の子をナンパしたという経験が、僕の生活なり、性格なりを劇的に変える、という事はなかった。今までとあまり変わりのない、怠惰たいだで暇な毎日が過ぎていった。

大学のほうは、相変わらずだった。出席を取る必修の授業と実験だけは出るようにしていたものの、せつかく授業に出て、それまでの不勉強がたたつてか内容が理解できなかった。

そんな授業を聞いていても時間の無駄にしか思えなかったので、途中から授業を抜け出して、大学の近くに下宿している友達の家ゲームをしに行つたりしていた。

今思うと、ろくな学生じゃなかったと思う。時間なぞあり余つているのだから、学生の本分である勉強ぐらいしっかりするべきだと思うのだが、当時は何かに縛られるのが嫌だったのだ。

実験は、なぜかNと実験パートナーになつてしまった。Nとの腐れ縁が、まさかこの後大学を卒業し、大学院に行つても続く事になるとは、当時は全く思いもよらなかった。

Nは相変わらず不真面目だった。クラスの中で、僕よりも不真面目なのはNぐらいだった。実験の授業は午後1時からあるのだが、Nが遅れてくるのは最早常識もはやだった。ある時僕は寝坊して（午後1時の授業に寝坊すること自体、僕の怠惰たいだを象徴している）午後2時に実験室に行つたのだが、Nはいなかった。電話をするとまだ家で「すぐ出る」と言ったものの、Nが到着したのは午後3時だった。そんな2人だった。よく先生に怒られないと思うかもしれないが、怒るような先生の授業はそもそも取らなかつたし、取らざるを得ない時には、少なくとも僕はその授業だけはちゃんと行くように

した。Nは来ない時のほうが多かったが、その人懐っこい性格から、先生方からも大目に見られる事が多かったようだ。

## 第063話：級友

学校生活において、女の子がいなわけではなかった。理系の大学だから、女の子は男子学生に比べて圧倒的に少なかったのは事実だが、それでもクラスに少しはいた。確か40人のクラスで5人、1割強が女子学生だったと思う。

もちろんあまり可愛くない子も多かったけど、可愛い子だった。それは一般的な比率からは少し低かったかもしれないが、確かに可愛い子は存在した。僕のクラスも例外ではなかった。むしろ特殊だったと言ってもいい。クラスにいる女の子は、普通か、それより少し可愛い子ばかりだった。

しかしながら、そういう女の子が異様に少ない環境では、男は、特にでもない男達は、互いに牽制しあうものなのだ。そして僕のクラスはそういうもてない男が大半を占めていた。

女の子は、その貴重な異性は、クラスみんなのものであり、誰かが独り占めしてはいけない、そういうような雰囲気ただよが漂っていた。理系にはよくある事だ。高校生の時もそういう雰囲気を味わった事がある。

そういう雰囲気の中では、女の子と仲良くするのは少し勇気の要る事だった。僕はクラスメートの女の子の電話番号すらほとんど知らなかったし、聞きたいと思ってもなんだか聞きづらかった。唯一知っている1人の子は、なにかしら用事があって聞いたただけだし、電話した回数も2、3回で、それも事務的な用件だった。

そして女の子のほうも、なんだかお高くとまっている節ふしがあった。そういう環境の中で、そういう扱いをされる事に慣れているのだろう。別に全ての女の子がそうだったのではないけど、そういう態度の女の子が目についたのも事実だ。

実際、友人が僕のクラスのある女の子と同じサークルに属していたのだが、その女の子についてあまりいい噂は聞かなかった。もちろん、こんな環境下の男子生徒の中には、他の男子に女の子を取られたくないがために、ある事ない事を言いふらす輩やからも存在している事は確固とした事実なのだが、その友人はそんな事とは無縁な性格なので、この言葉は十分信ずるに足りた。

それに、その女の子の日頃の言動からも、そういった事実があっても無理はないと思わせた。

## 第064話：敬遠

もちろん性格のよさそうな子だったのだが、よしんばその女の子と仲良くなり、電話で世間話なり何なりをして徐々にその関係を深めていって、最終的に付き合ったとして、付き合っている事はクラスの間には絶対秘密だっただろう。

実際そういうカップルは存在した。僕のクラスのある男子生徒は、同じクラスのある女の子と付き合っていた。僕はそのカップルと偶然ビリヤード場で会ってその事実を知った（推測した）のだが、その時僕達は挨拶さえしなかった。全くの他人のように接し、お互いにただひたすら玉を撞いていた。

僕はそういう環境が嫌だったし、そういう恋愛もしたくなかった。人目を気にしながら付き合うなんて、何が楽しいんだろう？と思っていた。実はクラスメートの中にも少し「いいな」と思う子がいたのだが、そういう事もあって自分から何らかのアプローチをする気にはならなかった。向こうからアプローチをかけてくれば別だったろうが。

幸か不幸か、女の子からそういったアプローチをされる事はなかった。でも僕は別に気にしていなかった。僕にはノゾミがいるし、クミコだって僕と深い仲なのだ。そんな面倒くさい恋愛をわざわざする必要がどこにあるだろう？

だから、僕は学内での恋愛には無頓着だった。あのNでさえそんな学内の女の子には手を出さないのだ。僕なんか手が出したって火傷するに決まっている。

その代わり、学外での女の子と知り合うのにはいささかの躊躇もなかった。僕は先日学園祭で出会った女の子に電話する事にした。学園祭から5日が経っていた。いい潮時だ。あまりに早いとがつつ

いてると思われろだろうし、あまりに遅いと忘れ去られるだろう。

丁度その日はバイトもなく、僕はゆったりとした気分電話をかけた。相手は、猿の被<sup>かぶ</sup>り物をしてた女の子とユキの2人が考えられたが、まずは様子見の意味も込めて、前者に電話することにした。たしか名前はヒロミとかいったと思う。

## 第065話：意外

「もしもし?」

ヒロミは電話に比較的早く出た。

「あ、オレオレ。って覚えてないか。学園祭で会った…」

名前を出すと、ヒロミはすぐに分かったようだった。

「ああ、あの時の。アハハハ…」

「なんで笑うの?」

「いや、電話番号とか聞いたのに、なかなかかけてこないなって思ってたから」

「うーん。なんか、急いで電話するのイヤだった」

「そっかー。そうそう、ユキには電話した?」

「いや、まだ。つーか、これからかけようかと思ってた」

「電話したほうがいいよ。『電話こないね』とかって話してたんだ」  
「ふーん。変なの」

口では平静を装<sup>よそお</sup>っていたけれども、この言葉は僕にとって意外だった。まあ、女同士の話の端に上ることぐらいはあるかもしれないけど、また、相手はそれぐらいの意味で言ったのかもしれないが、別に電話番号を聞かれたからといって、その相手が電話してくるとは限らないではないか。

それに僕達は別に印象深い人物だったわけではないだろう。Nはともかく、僕は平凡だ。そんな僕の事を覚えているのも意外だった。「それ、Nと間違っていないかなあ。オレ、背が低いほうのヤツだよ」  
「うん、間違っていないよ。背が高いほうの人はなんか遊んでそうだったよね」

やはり女の子から見てもNはそう見えるのか。まあ妥当<sup>たたく</sup>と言えば妥当<sup>だとう</sup>だ。しかしなんでオレなんだろう? Nと比べればマシという意味なのだろうか?

僕は、電話を切つて今すぐユキにかけて、その意図を確かめたかったが、それは相手に失礼だと考え、とりとめのない話でも続けようとした。だが、そんな心を見透かすように相手は言った。

「ユキにかけてあげなよ。多分待つてるよ」

「待つてるつて、なんでだよ。それに、今はお前と話してるんじゃない」

「あ、私の事はいいからさ。あの子、今日はバイトないから多分ヒマだよ」

そこまで言われては、かけざるを得ない。僕はそこに女同士の思惑わくの匂いを少し嗅ぎつけたが、それには気づかないフリをして小さくさと電話を切った。

## 第066話：類推

さて、と僕は思った。

「ユキが僕の事を覚えていて、電話がかかってくるのを待っている」この事実のはつきり言つて、想像外だった。僕は激しく混乱した。ユキは可愛い。内面も悪くないだろう。そうすると、多数の男から言い寄られても無理はないし、そんな体験に慣れていれば、僕の事もその多数の男の一人として見なされるんじゃないだろうか？

そうなると、僕の事なんか憶えてなくても当たり前だし、ましてや電話を待っているなんてあり得ないんじゃないか？

様々な可能性を考えた結果、僕は一つの結論に辿り着いた。

ユキの通っている大学は、僕の通っている大学と同じような理系の大学だ。当然、男子の比率が女子のそれよりも断然に高い。と言う事は、おそらく僕が日常的に体験している、「同じクラスの女の子に手を出しにくい雰囲気」があるんじゃないだろうか。

つまり、ユキは可愛くて多くの男子学生が狙っているが、牽制しあつて誰も手を出せない、という事だ。

それならなんとか納得がいく。だから、声をかけた僕なんかの事を憶えていてくれたのだろう。ただそれだけの事で、別に僕に好意を持っているとか、そういう事じゃないんだ。

そこまで考えて僕はやっと一息ついた。そう考えて自分なりにどこかに帰着させないと、とてもじゃないがユキに電話なんてできなかった。

その後も僕はユキに電話するかどうかしばらく迷った。しかしヒロミにかけるよう言われた手前、一応かけておくほうがいいように思われた。

## 第067話：確認

僕は電話帳からユキの電話番号を選び、発信ボタンを押した。携帯端末というのはすごく便利な反面、一つ一つダイヤルしていくドキドキ感が失われている気がする。だって僕はノゾミに電話する時、いつも家の電話機からダイヤルしていたから。

「もしもし？」

そんな事をぼんやり考えているとユキが電話に出た。ヒロミと同様にこちらにも出るのが早かった。

「あ、オレです。〜です」

「うん。知ってるよ」

「え？何で？」

「だって、電話番号交換したじゃん。アドレス帳に入ってるから、電話が来たら分かるでしょ？」

「あ、そっか」

「それに、ヒロミちゃんに電話したでしょ？」

「え？それ、ついさっきの話だよ？何で知ってるの？」

「ヒロミちゃんからメール来た。『多分そっちに電話行くよー』だって」

「何？もしかして待ってたの？」

「うん。ちよっとね」

時として、女の子というのは人間関係（ほとんどが恋愛についてだが）をスムーズに連絡しあうものだ。だから男はうかつな事ができないのだ。

「それで、電話の用件だけど、別にない」

「何それー」

「ないけどなんか、『電話しとくか』みたいな感じ」

僕は、口が悪い。それはある種の親しみと照れ隠しなのだが、それが理解されないことも多く、誤解されることも多い。諸刃の剣だ。

上手くいけばとても親しくなれるのだが、上手くいかない相手はとたんに不快になる。

「まあ、世間話でもしようかなって思った」

「うん。いいよ」

「話すのイヤ？」

「イヤじゃないよ」

「そう…」

それから僕達は世間話をした。まあ、大学がどうかサークルがどうかかそういう話だ。僕はユキがどんな人物なのかあまり知らなかったし、知りたかった。ユキも僕の事を知りたがっているように思えた。僕の思い違いかもしれないけど。

話しているうちに、僕はユキが思ったより「普通の」女の子だという事に気づいた。いや、むしろ普通よりおくてなのかもしれないかった。学内の女の子のように高飛車になる事もなく、根拠のない自信を持つ事もない。それは、ある意味僕に似ていた。僕はなんだか同じ境遇にいるような気がして、少し嬉しかった。

そうやってしばらく話した後、電話を切った。またかけてもいい？と訊くと、いいよ。と言われた。

## 第068話：異性【第13章・完】

それから僕とユキはたまに電話をした。大体二週間に1回くらいだろうか。もちろんノゾミとは週一で電話していたし、クミコから電話がかかってくる事もあった。今思えば僕は何をそんなに会話に飢えていたのだろうか。学校に行けば友人とは話ができるし、家に泊まりに来る事もよくあった。

しかしよく考えると、絶対的な会話量が不足していたのというワケではない、という事に気づいた。大方の会話は、実は僕にとつては結構どうでもいい事だった。そんな無駄な話をしているくらいだったら、部屋で本でも読んでいるほうがマシだった。

実際僕はクラスの友人（さして仲がいいワケではない）と昼食を取った時、特に用事も無いのにつまらない話を延々と繰り返して、誰も席を立たないのにつんざりしてもう二度と一緒に飯は食いたくないと思っていた。

では、なぜそんなに電話していたかというと、一つにはそれが1対1の対話であった事、もう一つには相手が異性だった事が挙げられるだろう。

僕は1対1の対話が好きだ。他者に邪魔されることなく語り合えるのが好きだ。それが前者の意味だ。

そして後者の意味には、おそらく根底には恋愛感情やらがあったのだろうが、詳しい事は分からない。ただ、学校で異性と話す機会がなく、バイト先でも同僚の女性と話す事もない、そんな生活に潤いのような、心が動くようなそんな瞬間が欲しかったのだと思う。

そういう電話を続けるうち、僕とユキは少しずつ仲良くなっていった。ヒロミとはたまに思い出したように電話したが、向こうも僕とユキの事を気遣っていて、そんなヒマがあればユキに電話すると

いうニュアンスの事をよく言っていた。

今や僕の周りには3人の女性がいた。ノゾミ、クミコ、そしてユキだった。ノゾミは彼女であり、ユキは女友達、そしてクミコはその中間ぐらいの位置にいた。

## 第069話：一人【第14章】

### 14 . 権利

僕とクミコが初めて交わってから、既に数ヶ月が経っていた。クミコは相変わらずふらりと僕の家に泊まりにきていた。

別段、帰る所がなかったわけではない。確かにクミコの家よりは僕の下宿のほうが断然近いが、クミコの広い交友関係を考えれば、他にも家の近い友達はそれが男性だろうが女性だろうが幾人かはいただろうし、いざとなればサークルの部室にだって泊まる事は可能だった。

実際、そう何度も何度も来ていたのではない。それは全くのクミコの自由意志に任されており、1週間のうちに何日も来る事もあつたし、半月ほど何の音沙汰おしごともない事もあつた。

そして、クミコが泊まりに来れば、僕と性交をする事もあつた。これも全くクミコの自由であつた。僕がたとえそういう欲望を口に出そうとも、クミコが拒めばそれまでだつた。

クミコは多情な女だつた。僕以外のボーイフレンドとも情交を交わしているようだつた。詳しくは知らないし、知りたくもなかったが、なんとなく想像はついた。

そして僕はその事にひどく落胆した。僕はその強い独占欲でもって、クミコを独り占めにしたかつた。

しかしクミコにとって、僕は数ある男友達の一人に過ぎなかつた。その事で僕はクミコに文句を言った事がある。するとクミコは、「あなた、彼女がいるじゃない」と言った。確かにその通りだつた。僕とクミコは付き合ってもいないのだから、僕には何も言う権利はないのだ。

つまりは、僕は「どこにでもいるクミノコの相手」の一人だったのだ。

## 第070話：依頼

実を言うと、この出来事があったのはいつの事だかあまり憶えていない。秋のある日だとは思いが、何月かと言われると答えられない。

それに、正確な内容も覚えていない。根っこの部分は、起きた事の要点は憶えているのだが、細かな点はほとんど憶えていない。

それは、もしかすると僕が、僕の心の中で、無意識の内に忘却しようとしているのかもしれない。

とにかくその日、クミコは僕の家に来た、いや、来ようとした。

「ねえ、今日泊まりに行ってもいい？」

その電話がかかってきたのは日が落ちた頃だった。クミコが前回僕の家泊まりに来てから少し間が空いていた。前回僕と性交してからはかなり間が空いていた。そういう事情があるから、普段の僕なら欲望にはやる心を隠してそっけなく、「いいよ」と言っていた事だろう。

けれども、その日は普段とは少し事情が違った。その日は僕の大学の友人（もちろん男だ）が2人、泊まりに来る事になっていたのだ。

「今日はいんまり良くない」

「なんで？ 何かあるの？」

「友達が泊まりに来る」

「え、何人？」

「2人」

「男？」

「男」

「いいよ。アタシ気にしない」

「お前気にしなくてもオレらが気にするんだよ」

「大丈夫大丈夫。4Pとかしないから」

「当たり前だろ！ てっか、今日何かあんの？」

「飲み会。学校の近くで。それで、もし帰れなくなったら泊まるうかなーって」

「じゃあ早めに切り上げて帰れって」

「なるべくそうするけど、帰れなくなったら泊めてね」

僕は心の隅で何か嫌な予感がした。

おそらくクミコは帰れなくなるだろう。今ここでは素直なそぶりをしているけど、飲み会で飲んだ後はきつと自分の家に帰る事を放棄して（それは僕への好意からというより、ただ単に面倒くさいという理由で）、無理やり押しかけてくるのではないか。

しかしながら、クミコが泊まりに来る事は、やっぱり僕にとって嬉しい事だった。嫌な予感がする一方で泊まりに来る事を期待している自分がいるのだ。

だから、強く断れなかった。「終電がない」という大義名分がある限り、それを拒否してクミコを困らせるのは悪い気がした。

「分かった。終電がなくなったら泊めるよ。でも、努力しろよ」

熟考の末、僕はそう答えた。他の選択肢を選べるほど、当時の僕は強くはなかった。自分に厳しくはなかった。

## 第071話：簡潔

男友達が来たのは夜10時を過ぎた頃だったかのよう思う。何の事はない。そいつらは麻雀をしていたのだ。通常ならば僕もそれらの面子に名を連ねているはずだったが、数週間前にこつぴどく負けて当時の僕としてはちょっと看過かんかできない金額を失ってから少し身を引いており、その日は参加していなかったのだ。

友人を部屋に招きいれ、とりあえず軽く酒を飲んだりお菓子を食べたりした。今日の麻雀はどうだったとか、レポートの締め切りがやばいとかいった世間話をして時間は過ぎていった。

僕の数少ない大学友達の中でも仲の良い2人（正直、Nよりも仲がいい）だったので、僕はしばしの歓談に熱中し、ある事を忘れていた。

それを思い出させたのは1本の電話だった。唐突に僕の電話機が鳴った。

「あ、電話だ」

「誰？ 親？」

「ん？ 親じゃないっばいな。多分友達だ」

そう答えながらも、僕は着信音と時間帯によって誰からの電話かあたりがついていた。そしてディスプレイを見て確信した。

電話は、クミコからだった。

僕は一瞬躊躇ちゅうちゆした。出ようか出るまいか迷った。しかし、出なければ友達がいぶかしむ。出ればおそらく僕はクミコの申し出、それはつまり「泊めてくれ」という願いだが、それを拒む事はできないだろう。とにかくどちらにしても、僕が困る状況になるのだけは確かだ。

どうすべきか？

僕は意を決して電話に出た。クミコの言葉は簡潔だった。

「終電なくなっちゃったから泊めて」  
僕はそれに対して簡潔に答える事ができなかった。

## 第072話：許可

大抵、二言三言で終わる僕の電話が、すぐには終わらなかつた。

その異常さから横にいた2人の友人GとTは僕の電話内容に関心を持ったようだが、話は僕個人の私的なものだから、その興味を表に出せなかつた。でも、「こいつら」という言葉を聞いて、2人は自分達が話に加わる権利を得たと確信した。

「何々？ オレらに関係する事」

「オレらの知り合いかな？」

小さな声でそう言っているのが聞こえた。

「とりあえず、ちょっと友達に訊いてみるよ」

そう言つて僕は一旦電話機から耳を離し、GとTの方を向いた。

「あのさー、友達が『泊めてくれ』つってんのね」

「ふんふん、それで」

「オレらの知らない人？」

「うん。知らないと思う。で、どう？」

「どつって言われても」

「男？ 女？」

「女」

少しの間、気まずい雰囲気 flowed。男なら一緒に泊まる事にやぶさかではないが、なにせ異性に免疫のない理系の大学生だ。女と男複数人が1つ屋根の下、というのは結構なレア・ケースであり、日常まず経験しない事だつた。

「それはオレらがどうこう言う事じゃないよ」

「家主が決める事ですよ」

そう言われてはどうしようもない。僕はここで選択権を他人に委ねようとしたのだが、その権利はすぐに自分に戻つてきてしまった。そうなるに僕の性格上、夕方の電話でした約束を反故にする事は出来なかつた。

「じゃあ、泊めるよ。終電なくなって困ってるみたいだしさ」

決断の言葉の後に言い訳のように理由を付けたし、僕は再び電話機を持ってクミコに宿泊の許可を出した。

## 第073話・予測

すぐにでも来るかと思つたが、クミコはなかなか来なかつた。終電がなくなつてきているのは事実だが、それはクミコの家に戻るまでの終電がないだけで、学校からあまり離れていない僕の家方面に対しては終電はまだあつた。おそらくそれを使って来るのだろうが、それにしても遅かつた。

電話後すぐに駅に向かい、電車に乗つたのなら30分も経たずして来るだろうに、実際に30分経つてみても来る気配がなかつた。

僕は、到着を待つ間、さっきの世間話の続きに戻ろうとしたが、うまく戻れなかつた。友人たちはやはりどういふ子が来るのか氣になつているようだつた。氣になつてはいるが、うまく訊けない、そんな雰囲氣だつた。

時間の流れをやけに遅く感じたのは、僕もある種緊張していたのかも知れない。それはそうだ。だって異性を同性に紹介した事などほとんどないし、僕には一応彼女がいるが、そういった類たぐいの恋愛感情を抱いた女性を誰かに紹介した事は皆無なのだから。

いや、ともすれば、それが正規の手順を踏んでお付き合いしている女性なら、ちゃんとした彼女だったら、あるいは自分自身に何らやましい事がなければ、そんなにも動揺していなかつたのかもしれない。クミコと僕との奇妙な関係が、クミコを友人に紹介する事を困難にしていたのかもしれない。

また、それと同時にちよつとした不安もあつた。クミコが僕の家泊りに来た際は、交わりはしなくても、何らかのスキンシップはあつた。それは軽いものから深いものまで様々であり、深いものから派生して肉体的交歓に至る事もある。そして、おかしな話だが、リズムというかバランスというかそういう周期のようなものがあり、ここ最近そのスキンシップが軽かつた事を考えると、その日泊りに来たクミコと深いスキンシップがある可能性はそこそこ高かつた

のだ。

## 第074話：興味

「そう言えば、来ないね」

世間話が途切れ、居心地の悪い沈黙が訪れた時、その沈黙に耐えかねてかGが言った。

「来るの止めたんじゃない」

その発言にTが応じた。2人とも、あくまで主語を言わなかった。自分らの全く知らない異性に関する内容だけに、主体を明言することを避けていた。やはり僕が思った通り、言葉には出さねどやがて来る来訪者の事が気にかかっていたのだ。

確かに遅い。既に日付が変わっていた。もうすぐ僕の家に来る電車がなくなる。

一応僕の家は、学校からは歩ける距離にある。しかしそこそこ歩く事になるし、深夜に女の1人歩きは危険だ。もともと、クミコはそんな危険を物ともしないタイプではある。

そこから会話はクミコに関する内容に移った。GとTは、友人としての遠慮を見せながらも謎に包まれた女性に対する興味が抑えきれない様子で、僕に質問をし始めた。「どういう知り合いか？」とか、「年はいくつだ？」とか、「どんな子だ」とか。

しかし僕は、「来れば分かるよ」とだけ言っつて、ほとんどの質問をはぐらかした。そんな煮え切らない僕に対して、彼等は好奇心の赴くままにクミコ像おもむについての自らの想像を述べ、僕はその問いかけすらはぐらかした。

実際、どこまで話してよいものやら自分でもよく分からなかった。分からなかったし、一方でそういう秘密めいたものを持っている自分は、何も知らない友人に何らかのアドバンテージを持っているよな気がしていた。質問に真面目に答えなかった理由には、その優位性を放棄したくなかったから、というのもあったと思う。



## 第075話：到着

「ピンポーン」

そんな時、唐突に玄関のチャイムがなった。僕達は思わず話をやめ、玄関のほうを見た。

「あ、来たね」

平静を装って僕は玄関に向かった。鍵を外して扉を開けると、そこにはクミコがいた。もはや終電がなくなっている時間だった。

「遅かったじゃん。歩いてきたの？」

「ううん。終電ギリギリで来た」

「え？ あれからまた飲んだの？」

「飲んではないけど、話してた」

クミコが靴を脱ぐ間、そういつた話をした。その時も不思議に思ったし、今もなお不思議に思うのだが、なぜ女性は靴を履いたり脱いだりするのにあんなに時間がかかるのだろうか？そもそも、そんな時間のかかる靴をなぜ履くのだろう？

「あ、そうそう。これお土産」

そう言ってクミコはコンビニの袋を差し出した。中にはお菓子とビールが入っていた。

「これ買ってたから遅くなったの？」

「んー。それもあるかも」

ともかく部屋に入れて、軽く自己紹介をさせた。

「あ、これお土産です。皆さんで食べてください」

クミコがコンビニの袋を指してそう言った。友人達は半分ふざけながらその袋に群がった。

なるほど、と僕は思った。クミコの社交的さ、人見知りな僕たちになくてクミコにあるものはこういうものかと思った。お菓子を買ってくるという心遣いなら、僕にだってできる。しかし、それをきっかけに初対面の人との距離を縮める、という事はあまり想定でき

ない。そういう計算のようなものは、僕はうまくできない。

事実、そのお菓子を食べたり、ビールを飲んだりすることによって、友人達とクミコは次第に打ち解けてきたようだ。もっとも、それは明るく人懐っこいクミコの性格も多分に影響しているとは思わが。

初めは緊張、というよりクミコに対してある種のよそよそしさ（初対面なんだから当たり前だ）があった友人達も、慣れるに従っておずおずと質問を شدした。

僕は答えるのが面倒くさかったので回答のほとんどをクミコに任せたが、一応僕にとって不利な質問の答えを上手くはぐらせるようにフオローはした。

しかし、友人達は気づいていたと思う。僕とクミコの関係について、確信は持っていないとしても、疑いは持っていたと思う。誰も口には出さなかったけれども。

## 第076話：消灯

そうこうしている内にいい時間になり、そろそろ寝るかという話になった。開校記念日だか何かの祝日かは忘れたが（週末でなかった事だけは確かだ）、次の日大学は休みだった。だからこそ麻雀なり、飲み会なりがあつたのだ。そういう理由なので、起きる時間は気にしなくて良かった。適当に起きようという話で僕達は床に就いた。

僕の家には敷布団が2枚あるので、その1枚を友人2人が使い、残り1枚を僕とクミコが使う事になった。掛け布団も2枚あつたが寝相が悪いヤツが多いので（僕含む）、毛布やら厚手のタオルケットやらを出してそれでなんとか寒さを凌ぐつもりだった。

「じゃあ、お休み」

「お休み」

「お休みなさい」

そんな言葉を交わしてから電気を消す。僕はあまり明るいと思えないので、電気はいつも全部消す。友人の意向は気にしない。だって僕の家なのだから。

しかしここは東京。窓の外からは街灯の明かりがぼんやりと差し込んで完全な暗闇にはならない。郷里でそれをやると、ほとんど完全と言つていいほどの暗闇になる。自分の手すら見えないほどだ。あまりにも暗すぎて逆に落ち着かない気分になる。だから郷里では豆電球だけは点けておく。

暗いが、真つ暗ではない。少なくとも、隣に寝ている人の顔は分かる。そんな状況で僕は目を瞑った。

だが、僕は寝付けなかった。眠くないわけではない。一人だったらすんなりと眠りに落ちていた事だろう。しかし横にはクミコがいた。手を伸ばせば、いや、わざわざ伸ばさなくても少し身をよじるだけで、クミコの体に触れる事が出来る。そんな状況下では眠れな

いのも無理はない。

## 第077話：悪戯

眠れないまま、僕はふと目を開けた。目を開けてしばらく天井を眺めた後、寝返りを打ってクミコを見た。クミコは、眠ってはいなかった。まるで僕がクミコの方を向くのを待っていたかのように、僕がクミコの顔を見るのを待っていたかのように、クミコは目を開けて僕を見た。僕達は少しの間見つめ合った。そして、クミコは、静かに僕の方に手を伸ばしてきた。

僕は直感的に、（ああ、ヤバイな）と思った。伸ばしてきた手を受け入れる事は容易い。僕がそれに応じてクミコに手を伸ばす事は容易い。いつもなら、そうしていただろう。

だが、今日はいつもとは事情が違う。なにせ、ほんの1メートル先には友人達が寝ているのだ。少し大きな音を立てれば起きるかもしれない。衣擦れの音で目を覚ますかもしれない。そして彼等に気まずい思いをさせるかもしれない。

何より、彼等に僕の事をそういう目で見て貰いたくなかった。友人のすぐ隣で女を抱ける男だと思われ、軽蔑されなくなかった。クミコだって、そういう事は分かっているはずだ。考えればすぐに分かることだ。しかし同様に僕もよく分かっていた。クミコの性格をよく分かっていた。分かっているから、「ヤバイな」と思ったのだ。クミコにとつて、「すぐ隣で友人が寝ているから」というのは、抑止力にはなり得ない。もちろん、そういう事をすれば僕が困った立場になるのは分かりきっている。だが、それを承知の上で、クミコは手を伸ばしてきたのだ。「横で人が寝ている」という状況下で、情事に及ばせようとする悪戯めいた心がクミコの中には確実にあった。むしろ、そういうスリルを逆に楽しむのがクミコの性格なのだ。

事実、クミコの目の奥には好奇に満ちた光が輝いていた。その目は語っていた。「どうするの?」と。



## 第078話：接触

ここで予想外だったのは、僕の中にもそういったスリルに対する興味が芽生えてきたという事だ。僕は、クミコと同様にそつとクミコの方に手を伸ばした。そしてお互いに抱き合う形となった。

初めはちよつとした事から始まって、徐々にエスカレートしていくのはなぜなのだろう？ ダメだと分かっている事ほど、ついっししたくなってしまうのはなぜなのだろう？

周りの友人達にバレないように、ゆつくりと体を近づけ、少しずつ抱き合う腕に力が入り、僕とクミコの体は密着した。腕を絡め、足を絡めた。そして、誘うようなクミコの目に魅せられて、僕とクミコは口づけを交わした。

口づけも、同様の経過を辿った。バードキスからフレンチキスへ。なるべく音をたてないように留意しながら、お互いの舌を絡めた。最早<sup>もはや</sup>2人とも、何かのスイッチが入っていた。深いスキンシップが始まるスイッチが。

クミコは僕の下腹部に手を伸ばしてきた。当然、僕の性器は硬くなっていった。クミコはそれを手のひらで包み込み、優しく動かし始めた。僕は一応抵抗しようとしたが、それが無駄な事は分かり切っていた。だから、僕は抵抗する代わりに、負けじとクミコの下腹部に手を伸ばした。

胸を触る、という事も可能ではあったが、その為には腕を上手く折り畳まねばならず、それは少し難しい事だった。よしんば上手く折り畳めたとしても、そんな窮屈な状態で思い通りに手が動かせるとは思わなかった。だから僕は、クミコの下腹部、正確に言えば股間の辺りに手を伸ばした。そこは、いつの間にか少し湿り気を帯びていた。

第079話・愛撫（前書き）

## 第079話：愛撫

そんな僕の手の動きに呼応するかのように、クミコの僕に対する愛撫も激しさを増した。僕の下着の中にするりと手を潜り込ませ、直接僕の性器を握った。僕は快感の渦に巻き込まれた。しかし、快感の渦に巻き込まれたのはクミコも同様だった。下着の上からの愛撫では物足りなかったのか、クミコはしきりに僕の手を下着の内部に誘導した。そして僕はそれに応えた。そこは温かく濡れており、何かを求めていた。明らかにクミコはこのシチュエーションに興奮していた。そして僕の中にも嗜虐心さうじやくしんのようなものが芽生えた。僕はゆっくりと、クミコの体内に指を差し入れた。

その愛撫は何分続いたのだろうか？僕達2人は、時折声を上げそうになるも、お互いにそれを敏感に察知し、口づけで音が漏れるのを防いだ。また、あまりに激しくすると、口を塞いだぐらいでは声が漏れる事は双方とも了承しており、さらには卑猥ひわいな音が響く恐れもあったので、非常にゆっくりとした、それでいてねっとりとした愛撫が続いた。

だが、いつまでもそうしているわけにはいかなかった。そこで決定的な一線を越えるほど、僕は大胆ではなかった。それにそうするにはコンドームが必要であったが、それは部屋の隅に隠していたので、とてもじゃないが手の届く位置にはなかった。仕方がないので僕は音を立てないように注意しつつも、指の動きを早くした。何度か交わった経験から、クミコの敏感な部分はよく分かっていた。

緩急をつけながらしばらく指を動かすと、声にならない声を上げてクミコは達した。もちろんその声が漏れないように僕はクミコの口をしつかりと封じていた。僕は達していなかったが、仮にそのまま続けて達してしまうと後処理が面倒なので、別に達さなくても構わなかった。



## 第080話：無言

奇妙な疲労感が2人の間に発生し、僕達はしばらく抱き合っただけで動けなくなっていた。しかし、あまりゆっくりしているヒマはなかった。なるべく早くこの状態を処理し、何事もなかったような顔をしなければならぬ。友人に気づかれてはならない。

僕はティッシュを何枚か取り（幸いにもティッシュは枕元にあっただけで、音を立てずにそれを取り出すのは造作ぞうさくなかった）、クミコに渡した。そして僕自身はトイレに行き、自らの体液で汚れた部分を掃除した。しばらくしてからクミコもトイレに行った。

トイレから帰ってきたクミコは、情事が行われたそぶりさえ見せずに、さっさと布団に包まり、僕に背を向けてしまった。こうなると、僕には何もしようがなかった。今までの経験から、こういう時のクミコには何をしても無駄だと分かっていた。

クミコはいつだって僕の側にいるようで、僕の側にはいなかった。時にすごく甘えてきたかと思うと、時にすごく冷たい態度を露わにした。実際、この情事だって、別に相手が僕でなくても良かったのだ。僕に対して何らかの愛情のようなものを持って行われたのではないのだ。

ただ、周りに人がいて、そこでスリルを味わいたかっただけ。ただ、そういう状況下での、僕の戸惑いを見たかっただけ。それだけの事なのだ。

僕はその事実を分かっていた。そう思わないとやりきれない部分はあった。だが、同時にそれがとても辛く感じる時もあった。だけど、僕には何も言えなかった。僕はクミコの大事な人ではないのだから。

## 第081話：徒付

夜が明けた。もぞもぞとする感触で僕は目覚めた。（何だ？）と思つて見てみると、それはクミコだった。子供のようにいたずらっぽく、僕の体に触れていた。

友人2人はまだ起きてはいないようだった。時刻は昼前だった。僕はそんなクミコの手を握り、幼い子供をあやすように優しく抱いた。クミコはそれに応じ、僕の腕の中に収まった。そうして僕は抱き合っていた。友人たちの寝ている横で。

もしかしたら、友人達はすでに目が覚めていたのかもしれない。目が覚めていて、それで気づかないふりをしていたのかもしれない。だってそうする事は、僕達にとってある種のマナーであり美徳であつたのだから。

しかし僕達は、それから先には進もうとはしなかった。日光の中でそれから先の行為を行うほど僕は大胆ではなかったし、何より決定権を持つクミコもそこまでを望んではいなかった。

時が経ち、徐々に友人達も目覚め始めた。ともすればとつくに目覚めていたのかもしれないが、動き出した、という意味だ。しかし僕とクミコはまだじゃれていた。

がっしりと抱き合っていたわけではない。実際、とうの昔に抱き合うのはやめていた。しかしなんとなく離れがたく、また、どちらも濃厚な意味で触れ合っていたわけではなく単に仲の良い2人がじやれあっていた感じだったので、別に構わないだろうと思つたのだ。だって、昨夜の事だつて友人達にばれているかもしれないのだから。

しかしまあ、男友達2人の前でいつまでもそんな事をしていくわけにはいかなかったので、僕はじゃれあつのをやめ、そこで皆起き上がって、布団を片付けた。



## 第082話：住悪

起きても、特にする事はなかった。けだるい感じの休日の目覚めだ。僕達は漫然と飲み物を飲んだり、テレビを見たりした。

しかし、昨日と違っていたのは、やはり一緒に一晩を過ごした事が大きいのか、それとも僕が後ろめたさから積極的に明るく振舞ったからか、友達とクミコがずいぶん仲良くなっていた事だ。クミコもまんざらではないようだった（本質的にクミコは異性といちゃつくのが好きだ）。

そんな雰囲気だから、僕はふざけてクミコとじゃれあったりしたりし、クミコも男友達と積極的に接していた。

そうしてクミコは男友達のうちの一人、Gがいたく気に入った様子だった。

確かにGはもてる。Nとは違った意味でもてる。母性本能をくすぐるような所があり（甘えているとか、媚びているとかいう意味ではない）、年上の女性、あるいは大人びている女性に好意を持たれる事が多い男だった。

「私G君好き」

クミコはあっけらかんとそう言った。そうしてGとじゃれあい始めた。

僕はなんとなく嫉妬のようなものを感じた。感じたが、だからといってどうしようもなかった。そしてクミコとGのじゃれあいはい徐々に激しくなっていた。

正直、見ていられなかった。見ていたくもなかった。僕はそこが自分の部屋であるにもかかわらず、とても居心地が悪かった。普段帰って一息つく場所、僕の東京での安息所が、安息を与えてはくれなかった。

「ちよっとオレら飯食ってくるから、いちゃいちゃしてなよ」

少し棘とげのある言い方で僕はそう言った。そう言いながら、僕はクミコの良心に賭けていた。クミコが僕の微妙な気持ちを感じてくれる事を期待していた。

「わかった。行ってらっしゃい」

クミコは僕の気持ちに気づかない様子でそう言った。もしかしたら気づいていたのかもしれない。気づいていて、それであえてそう言ったのかもしれない。それとも、もはやGの事しか眼中になかったのかもしれない。クミコは、そういう女だ。

## 第083話：不明

賭けに負けた僕は、Tを連れて家を出た。「飯を食う」とは言ったものの、どこに行くのかも決めていなかった。決めようとも思わなかった。

「どこ行くよ？」

Tがそう問いかけても、僕は生返事をするだけだった。どこに行くでもなく、僕は歩いた。Tの手前、店を探すふりをしていたものの、僕の頭はまったく別の事を考えていた。

僕の頭の中で渦巻いていたのは、「果たしてクミコとGは性交をするのか？」という疑問だった。それは考えたくない事だったけど、考えずにはおれなかった。

一方ではGを信じていた。友人の部屋で、昨日会ったばかりの女性とセックスをするなんて、そんな節操のない男ではないと信じていた。僕の友人にそんな男はいないと思いたかった。

しかしもう一方ではクミコを恐れていた。いわば、百戦錬磨だ。Gが女性に免疫がないとは言わないが、クミコの手にかかればそこいらの男はたやすく誘惑に負けてしまっだろう。彼女がいながらクミコを抱いた自分自身の経験があるだけに、なおさらそう思った。

僕は商店街を歩いていた。

「とりあえず、あっちの方に店があるから」

Tにそう言い訳して、ひたすら歩いた。無論、そっちの方に店なんてない。飲食店街は別の通りなのだ。しかし僕は近場で飯を食いたくはなかった。近くで飯を食い、そして家に帰ると、ちょうどクミコとGが行為にふけている時間帯になるかもしれない。そんな光景を見たくはなかったし、そんな場面に出くわしたくはなかった。出くわしたとして、自分がどう振舞えばよいのか全然分からなかった。



## 第084話：紫煙

歩きに歩いて僕達は1つ向こうの駅まで来た。とは言っても、都会の一駅間だからたいした距離ではない。その駅前にマクドナルドがあった。

「久しぶりにマックでも食うか」

僕はそう言つてTを店内に促した。別にハンバーガーが食いたかつたのではない。僕もTも歩き疲れていて腹も減っていた。適度に家から遠くて、時間が潰せればどこでも良かったのだ。

店内で喫煙席に座り、僕はタバコをふかした。いつもは食事の前にタバコなど吸いはしない。けどその時は、無性に吸いたかつた。1本吸い終わつてからハンバーガーを食べ始めた。お腹は減つているはずだつた。けどなんだかあまり食いたくなかつた。一口噛んではゆっくりと咀嚼し、その後コーラで流し込んだ。そんな僕のペースに合わせて、Tもゆっくりとハンバーガーを食っていた。他愛もない話を交えながら。

Tだつて、残してきた2人の事が気にかかつているだろう。しかし僕の心中を慮つてかそんな事はおくびにも出さずに、ここに来る道中も、そして今も、他愛ない雑談をしてきている。そんなTの心遣いが、僕には嬉しかった。もっとも、僕はその話に対して簡潔なあいづちしか打てなかつたけれども。

どんなにゆっくり食つても、食事の時間というものはいつか終わる。結局僕はハンバーガー1個を食べきれず、少し残した。そしてタバコばかり吸っていた。なかなかのハイペースだつた。

「そろそろ戻るかい？」

Tがそう言つた。家を出てから1時間近く経過していた。確かにいい潮だつた。

「そうだな」

僕は言葉少なにそう答え、そして僕達は店を出た。

## 第085話・洞察

戻って来て玄関の前に立った時、僕は少し躊躇ちゅうちゆした。もしかしたら、まだ情事の最中かもしれない。そんな疑念が頭をよぎった。ノックしてみようかと思った。チャイムを鳴らしてみようかとも思った。

だが、ここは僕の家なのだ。（僕が僕の家に戻るのに、何の遠慮が必要なのだろう？）そう考え、普通にドアを開けた。ともすれば、Tの前で無様な格好を見せたくないだけなのかもしれない。

「おかえり。遅かったね」

そう言ったのはクミコだった。部屋は綺麗だった。仮に情事が行われたとして、その痕跡は残っていないように見えた。もっとも、ゴミ箱あらいだを調べれば別かもしれないが、当事者の前でそんな事はできなかったし、当事者が帰った後でもそんな惨めみじな行為はしたくはなかった。

僕はさりげなく2人の様子を探った。情事が、仮にこの部屋で行われたとすれば、何らかの変化、端的に言えば僕に対する遠慮のよくな気配が感じられるはずだと思ったからだ。

しかしクミコは、クミコに限って言えば、その様子は普通だった。こういう状況に場慣れしているのか、それとも背徳の行動に後ろめたさなどないのか、普段と変わらない様子だった。

Gについてはよく分からなかった。元々Gはあまり感情を表に出さないし、起きてしまった事は既にあつた事として受け入れるタイプだ。いつまでもウジウジと考え続ける僕とは違う。だから、Gの様子からは何も読み取れなかった。

無論、「ヤった？」と軽々しく聞けるほど僕は大胆ではない。だからこの状態では事の真偽は分からない。

しかしクミコのGに対する接し方を見て、僕はある確信に至った。家を出る前、僕がその空気に耐えられなくて逃げ出す前、クミコ

は見てそれと分かるほど、Gに好意らしきものを寄せていた。それは言葉にも、行動にも表れていた。だが今、クミコにその熱はなく普通の、昨日の夜に接した時と同じような態度でGに接していた。そこで僕は悟ったのだ。

「クミコは、僕が家を出ている間に、僕の部屋で、僕の友達であるGと交わった」

それは確信だった。まず間違いなかった。だってその態度は、今のクミコのGに対する態度は、僕とクミコが交わった後の、クミコのいつもの態度に酷似<sup>こくじ</sup>していたのだから。

## 第086話：権利【第14章・完】

僕はなんだかよく分からなかった。クミコを責めればよいのか、Gを責めればよいのか、どうすればよいのか。

当然、そこで怒り狂う事もできただろう。こういう状況になった時、そうする人もいるだろう。しかし僕にはできなかった。なぜなら、クミコとGを2人きりで置き去りにしたのは僕なのだ。行為が行われる可能性がある事を知っていて、引き金を引いたのは僕なのだ。たとえ弾が出ない事を祈っていたとしても、そして結果として弾は発射されたのだけれども、その契機となるトリガーを引いたのは僕なのだ。

そしてまた、ここでもあの考えが頭をよぎった。人前で、今いる友人達の前でクミコをなじろうと、誰もいないところで、クミコと2人きりの時にクミコを糾弾ききつたんしようと、クミコから帰ってくる言葉は決まっているだろう。

「あなたには彼女がいるじゃない」

それは、僕にとって決定的に絶望的な言葉だった。

その日の後の事は、あまり覚えていない。ただ普通に、普段通りの休日が過ぎていったと思う。僕は、少なくとも表面上は普段と変わらぬ僕だった。ただ、頭の中ではいろんな思考が出現と消滅を繰り返していた。そしてそれらの考えはどれもある一つの言葉を軸としていた。「権利」という言葉を。

そして数刻後、友人2人とクミコは帰った。クミコは残る、あるいは一旦帰るふりをして再び僕の元に来ようとしていたが、僕は拒絶した。早く一人になりたかったし、クミコが僕の側にいようとすれば、僕の事を心配して」というわけではないのだ。ただの興味本位で、「ある人が好意を寄せている女が、その人の友人と交わった時、その人はどうなるのか？」が見たいだけなのだ。

僕にはそういうクミコの考えが痛いほど分かった。だから、僕は誰も僕の側について欲しくなかったのだ。

第087話：尊厳【第15章】

15・冬の風

クミコはそれから何度か泊まりに来ようとした。僕はあまり会いたくなかった。うまい具合に僕のほうに何かしら用事がある時が多く、用事がなくてもクミコが特に僕の家泊まる理由がない時は断わった。断わるに足る正当な理由があった。だから断われた。

しかし、いつまでも断わりきれるものでもなかったし、難癖なんくせをつけて断わる事で、クミコに料簡りょうかんの狭い男と思われたくはなかった。だから、ちようど僕に何の用事もなく、クミコが僕の家泊まらざるを得ない状況になったある冬の日の夜、僕はクミコが泊まりに来る事を了承した。

クミコが来ても、僕は平然としていようと思った。先日のおくびにも出さず、平然と、普段と同じような振る舞いで接しようと思った。

たとえ胸の内では様々な思いが騒いでいても、とにかく平静よそおを装おう。そう心に決めていた。

そしてクミコが来た。クミコは、クミコも普段どおりのクミコだった。いつもと同じように甘え、じゃれつこうとした。

しかし僕はどうしてもそういう気分にはなれなかった。有り体あつていに言えば、クミコを抱く気にはなれなかった。

「汚らわしい」という想いもあった。僕の友人と寝ておいて、いけしゃあしゃあと僕とも寝ようとすると、そんな女を、そんな放蕩ほうとうな女を抱く気にはなれなかった。嫌悪、とまではいかないが、それに似た感情はあった。

僕は、もはや幾分汚れてはいるものの、それでもまだ僕自身が高潔であるために、僕が自分自身を唾棄たきしないために、強い意志を持

つ必要があつたのだ。

## 第088話：克己

そんな僕を見て、いつもより厳しい僕を見て、クミコは言った。

「G君との事、気にしてんの？」

「気にしてないわけないだろう」

「変なの。だってあなた……」

「分かってるよ！」

クミコの言葉を遮って僕は言った。

分かっている。分かっている。クミコに対して僕は何の権限も持っていない事を。

たとえその事実を受けいれる事が困難で、その葛藤が僕の心を苛んでいるとしても、その事実を、僕がその事を受け入れられないという確固とした事実を、他人にどうこう言われるのは耐えられなかった。

僕は僕なりにそれを克服しようとしていたし、それを誰かに邪魔されるのは嫌だったのだ。

そしてそこまで自分の心が弱い原因も知っていた。これがどこかのどうでもいい女で、僕がその女に対して何の感情も持っていないのなら、ここまで思い悩む事はなかっただろう。

それが、こんなにまでも苦しむという事は、つまりはクミコは僕にとって「どうでもいい女」ではないのだ。

つまりは、僕はクミコの事が好きなのだ。たといそれが単なる情欲から始まったとしても、いくらかの日々を経た今、僕はクミコという女性を好きになっていたのだ。

ぎこちない雰囲気のまま、僕達は床に就いた。クミコはもはやじやれようともしなかった。

僕の事を器の小さい男だと思っていたのかもしれない。友人の友

人と寝るなんて、クミコにとっては日常茶飯事であり、それに対して落胆やら、失望やらしている僕を幼稚だと思っていたのかもしれない。

だから、普段より遙かにそっけなくクミコは布団に入り、そのまますんなりと眠りについた。一方で僕は、なかなか寝付けなかった。

## 第089話：芥目

眠れるはずだった。今日は普通に授業もあつたし、夕方まで実験だつてした。疲れていないはずはないのだ。

部屋が寒いわけでもなく、何か耳についてうるさいわけでもない。眠るには十分すぎる条件が整っていた。

だが眠れなかった。傍らではそんな僕を嘲あざわらうかのようにクミコが規則正しい寢息を立てていた。かつてはその上で僕と抱き合い、そして僕の友人とも抱き合つたその布団で、心地よさそうに眠っていた。

肉体的にも、環境的にも睡眠を妨さまたげる要素はなかった。眠れない要素はただ、僕の混濁した思いだけだった。

僕は半身を起こしてそんなクミコを眺めた。眺めながら考え始めた。目を背けようとしていた事に対して、考えないようにしようとしていた事に対して向き合い始めた。

（僕はクミコの事が好きなのか？）

（僕はノゾミが好きなんじゃないのか？）

（ノゾミを捨てられるほど、クミコに惹かれているのか？）

（僕にそんな事ができるのか？）

（僕がクミコを選んだとして、クミコは僕を愛してくれるのか？）

自問自答は続いた。気づいてはいるけれども認めたくない事、それを認める勇氣は、認める事によって自らを傷つける覚悟は、僕にはやはりなかった。

気づいてはいるのだ。もはや、ノゾミとクミコのどちらも僕にとって大切なのだ。タイプこそ違えども、惹かれる部分は違えども、僕はどちらも好きなのだ。

どちらが上という事は分からない。厳密に言えば、厳正に考えれ

ば、現時点でどちらかが勝り、どちらかが劣っているだろう。

だが、現実にはその厳正に考えるところすら難しく、さらに未知の可能性、将来の可能性も含めて考えれば、優劣なんてものは曖昧いまいもこ模糊で、ふとした拍子に入れ替わるだろう。

だから僕は、僕自身の思いとしては、「どちらの女性も好き」としか言えなかった。

## 第090話：無愛

ただ、相手の思いには決定的な違いが存在している。ノゾミは、確かに僕の事をどう思っているのか、よく分からない節はあるものの、その根底では、根底とまではいかなくてもおおよその部分で、僕の事を好いてくれている。

それは多分にして僕の独りよがりかもしれないけれど、しかし心と心が通じ合う部分があるのは間違いない。でなければ、あの夏の日の思い出は幻になってしまう。僕はその部分ではノゾミを信頼しており、そしてノゾミはその信頼に十二分に足る相手だった。僕もはやノゾミの信頼に足る相手ではないけれども。

しかしクミコは、クミコには、僕を好きな人として、恋愛感情を持つ相手として、恋人になり得る相手として、そういう相手として接している様子が垣間見られない。

かろうじて見られるのは友人としての好意、しかしそれも一般的な好意と呼ばれるのかどうか微妙なものだ。純粹な友人に抱く類の好意ではない。

僕はクミコの気分次第で扱われる相手、そしてその気の赴くままに性欲を満たせる相手ではないのだ。しかもそれは僕でなくてもいいのだ。僕以外の誰かでもいいのだ。

「あなたの代わりなんていくらでもいるのよ」

そんな言葉をクミコに浴びせられた経験が蘇った。それは冗談で言える言葉ではないはずだ。そしてその言葉は確かに発せられたのだ。

そう、クミコにとって僕の変わりなぞいくらでもいる。話し相手も、泊まりに行く所も、そして性欲を満たす相手も。

そしてたといその相手が僕の友人であり、僕がそれによって精神的に痛手を蒙ろうと、クミコは何ら呵責を覚えないのだ。

つまりは、クミコは僕の事を愛していないのだ。

仮に僕が全てを投げうってクミコを求めようとも、それにクミコが応<sup>こた</sup>える事はないのだ。

僕がクミコの事を好きだという事実、その事実に対して、クミコはそうではない。クミコは、少なくとも僕がクミコの事を好きなほど、僕の事を好きではない。

## 第091話：湧意

僕はクミコを起こさぬように静かに起き上がってキッチンに移動した。その動きはとても自然で、とても滑らかだった。特に意識したのではなく、自然にそうなった。余分な力が抜けて、そうなった。移動したのは、寝ているクミコの近くでクミコの事を考えると、純粹に考えられないような気がしたからだ。きつと誰か他の人が側にいたとしても同様だろう。

僕は狭いキッチンの薄汚れた壁にもたれた。灰皿がなかった。近くにあったコーラの空き缶を灰皿代わりにし、タバコに火を点けた。

マイルドセブン・スーパーライト。その煙は狭いキッチンの中空を漂い、少しだけ開けられた窓から外に流れていった。

しかし、移動したものの、もはや考えるべき事はなかった。答えは出ているのだ。真実はそこに存在していて、後はそれを僕が認めればいいだけの話なのだ。

僕は臆病だった。そして孤独だった。思えばいつも孤独はそこにあったのだ。クミコと抱き合っている時でさえ、肉体的にこれ以上なく接触している時でさえ、どこかしらに孤独があった。

今思えばそれは、もしかしたら人が個性を持つ限り、人が他人と独立した存在である限り、拭えない根源的なものなかもしれないなかつた。

しかし当時の僕はそれほどまでには達観していなかった。そこまでの諦観を持っていなかった。ただ孤独に怯え、それを認める事を恐れた。

その時僕の心の中に、突風のようにある感情が走った。通常では考え付かない思い、特殊な状況だからこそ感じる思い。

それは、「殺意」だった。

第092話：初冬【第15章・完】

（この苦しみは誰のせい？）

（きつとクミコのせいだ）

（僕は悪くない。クミコが全部悪いんだ）

（そもそもクミコが僕に近づかなければこんな事には……………）

（そして今の苦しみもクミコさえいなくなれば……………）

（クミコさえいなくなればいいんだ……………）

（クミコを……………いなくしよう……………）

本当に瞬間的に、本当に刹那に、僕の中はそう考えた。そして同等の速さで、その感情は消え去った。

僕は戦慄した。そんな事を一瞬でも考えた自分に戦慄した。

責任を誰かに押し付けて、自らの責任を放棄して、そんな事までして苦しみから逃れるのは、僕にはできない。するべきではないし、僕にはとてもできない。

さっきの風が本能だとしたら、人よりも動物に近いエゴイズムの権化だとしたら、僕にはそれを受け入れ、そのエゴのままに行動するなんて事はできなかった。

僕は人間でありたかった。理性を持ち倫理感を持った人間でありたかった。

しかし、そんなモラル以上に僕を押し留めたのは、実質的に僕の行動を制限したのは、単なる僕の臆病さなのだ。僕の脆弱さなのだ。それは、強い人間になるには、悩み苦しまない人生を送るには、不要なものであるに違いなかった。それを捨て去れば、今より楽になる事は目に見えていた。

しかし、僕にはそれを捨て去る事はできなかった。どんなに懂れようとも、僕にはその道を選ぶ事はできない。

僕の目からはなぜか涙がこぼれた。特に泣きたいと願ったわけではないのに。

理由が明確には分からなかった。何の為にでも、誰の為にでもなかった。ただ自然と、涙が流れた。嗚咽おえつもなく、頬を静かに涙がたつた。

もしかするとその涙は、憐れみだったのかもしれない。

もう一方の人生を、エゴイズムに溢あふれてはいるが懊惱おつのうする事のない人生を、選ぶ事のできない自分への憐れみの涙だったのかもしれない。

涙が流れ止むのを待って、僕は部屋に戻った。

(クミコを忘れる、少なくともクミコに対する恋心をなくす、それがこの苦しみをなくす最良の手段だ)

僕は決意けつぎした。長い間結論を出すのを拒こぼんでいたが、僕はようやく覚悟した。

初冬の夜だった。何かが終わりそうな季節が始まっていた。

第093話：横浜【第16章】

16・宴

「ねえ、12月ヒマ？」

Nからそう誘われたのは11月の下旬だった。

「お前、12月つつつても長いぜ？12月のいつだよ？」

「えっと、最初の土曜かな」

「何があんの？」

「クリスマス会。パーティーみたいなもん」

Nの話はこうだった。彼は国際関係のサークルに属しており（半分遊びみたいなサークルだ）、そのサークルは他大学とも交流がある。そして、その他大学の人が主催しているクリスマスイベントがあるらしい。

「てっか、そのイベントに来るオレの知り合いって、お前しかいないんじゃない？」

「確かに知り合いはいないけど、オレの知ってるヤツは何人か来るよ。多分そいつらとはすぐ仲良くなれると思う。みんないいヤツだから」

「うーん。どうしようかなあ……」

「女の子もいっぱい来るよ」

その言葉が決め手になったわけではないが、それによって僕は多少心を動かされ、また、そういったイベントとは普段縁遠いこともあって興味を覚え、そのクリスマスパーティーに参加する事にした。

そして月日は流れて12月。パーティー当日がやって来た。僕はまたおめかしをして（とは言っても、服のレパートリーが少ないから、学園祭の時の服装とたいして変わりはない）、おめかしをしているのかいないのかよく分からない服装のNと一緒に会場に向か

った。

場所は横浜だった。横浜と一口に言っても広い。その横浜の、数<sup>あ</sup>多<sup>また</sup>ある駅のうちの一つで僕達は降りた。あまり栄えていない駅のよ  
うで、特に駅近辺が賑わっている、という感じではなかった。

その駅からさらに栄えていない方面へ向かい、大きな道路を横断  
してさらに歩いた。辺りはどんどんと寂<sup>さび</sup>れていき、僕が（大丈夫か  
な……）と思い始めた頃、やっとの事でパーティー会場に着いた。  
そこはもう海の近くで、吹いてくる風からは潮の匂いがした。

## 第094話：宴場

「やあ、いらつしやい。よく来てくれたね」

そう言つて僕達を出迎えてくれたのは、スーツに身を包んだコート姿の男だった。

「どうも。お久しぶりです」

Nがそう言つて頭を下げる。傍若無人なNにしては結構珍しい光景だ。

「誰？」小声で僕が聞く。

「主催者だよ」小声でNが答える。

「どうも。君がN君の友達？ 話は聞いているよ。楽しんで行つてね」

そう言つて快活な笑顔を向ける。感じのよさそうな人だった。

「さあ、とりあえず中に入ってよ。まだ始まつてないけど、この寒い中で戸外で待つてるのも馬鹿らしいだろ？」

そう促されて僕達は店内に入った。主催者は、「まだ人を待つてるから」という理由で、もう少し戸外で待つらしい。それで、僕とNは先に中に入る事にした。

重い扉を開けて中に入ると、そこにはパーティーの雰囲気か漂っていた。もちろん、まだ始まつてはいなかったので、パーティーにつきものの熱気（今だからこういう事だったのだろうと想像できるが、その頃の僕はパーティーの雰囲気を感じたことなぞない）はまだぼんやりとした感じだったが、会場内の人々はこれから始まる何かを期待しているようだった。

何か？

つまりはある種の欲望と、快樂だ。

会場は、その時は一体普段は何に使われているのか皆目見当がつかなかった。倉庫にしては洒落しやれているし、飲み屋にしては広々とし

ている。しかし、今思い起こせば、そこはつまりライブハウスの一種だったのではないかと思う。

ライブハウスと言っても、それなりの広さがあった。そこらの繁華街の地下にあるものよりはよっぽど広いし、ちゃんとしたステージもあつた。ここが横浜の、しかも少し外れた場所にあつたからなのかもしれないが、結構大きなライブハウスだった。

それはなんだか小学校の時の体育館を思い起こさせる場所だった。もちろん、官製の格式ばつた体育館とは漂っている雰囲気が違う。体育館がスポーツや、各種の式を行う健全な場所なのに対し、そこは単純に遊ぶための場所だった。

## 第095話：着席

僕達は適当なテーブルに座った。円卓で、6人がけのテーブルだ。中央にはアロマキャンドルが置かれ、下にはテーブルクロスが敷かれた典型的なパーティー用の円卓だった。

結構知らない人ばかりだと僕が緊張してパーティー自体を楽しめないのではないかと思ったNが気を利かせてくれたのか、僕が座ったテーブルはNと主催者、主催者の大学での友人（これはNとも顔見知りでもある）、そしてこれが今回の目的でもあるのだが、他の大学の女の子が2人ばかり来るようだった。

しばらくNと他愛ない話をしてしていると、主催者とその友人がやってきた。そしてその陰に隠れて、女の子が2人ばかりいた。

主催者とはある名門私立大の学生だった。名前を聞けば誰もが知っている大学だ。学年は僕達の1つ上、つまり3年生だった。その私立大は偏差値も高いが、僕は、「遊んでそんな大学」というイメージを抱いていた。もちろん、そこに通っている学生全てが遊び人だと言う気は毛頭ない。だけど一般的な大学と比べて遊んでいる、ひいては遊び方を知っている人の割合が高いようなイメージがあったのだ。

そしてその人は全くそのイメージに沿った人だった。派手に遊んでいるわけではないだろう。馬鹿騒ぎや乱痴気騒ぎらんちきをするわけではないだろう。しかし、遊び方は知っている、もしくは過去にそういった遊びをした事がある、そういう感じだった。「遊ぶ」という事に対して、普通の学生以上に何かを知っている感じだった。

## 第096話：凡庸

それに対して、主催者の大学での友人に対する僕の目から見た第一印象は、（あまりパツとしなさそうな人だなあ）であった。彼はNと対面の挨拶をし、すぐに席に座った。僕は、失礼に当たらないように留意しながら、少し彼を観察した。

顔は十人並みかそれより劣るぐらい。服装はブランド物だろう。モード系と言えばモード系だ。バッグはポール・スミス。そこかしこに金がかかっているのは、見ればなんとなく分かった。しかし、明らかに服装に対してその人の顔だとか、内面だとかが負けている感じがした。無理やりカッコつけているような、そんな感じだった。「遊んでいる人が多い」大学の中で、確かに「遊んでいる」のかもしれない。しかしその行動に対して、話術だとか見識だとか、そういう内面的な魅力がついていないような気がした。外見（主に服装だが）と内面がかみ合っていないような気がした。

おそらくここに来たのは、ただパーティーを楽しむと言うよりは、僕やNと同じように女の子をどうにかしようという気持ちのほうが大きかったのではないだろうか？ あくまで推測でしかないが、少なくとも僕はそう感じた。

なぜなら彼がかもし出している雰囲気は、遊び人の多い有名私立大学のそれというより、どちらかと言えば男社会でくすぶっている僕達の大学の学生によく見られるものだったから。

男ばかりの大学に入り、しかしながら周りには女の子と仲良くやっっている人もいて、それをうらやみ、手っ取り早くそういう存在になれる事を願って、とりあえず外見から綺麗にしている、そしてそれが功を奏さない事に気づかず、肝心の中身を磨く事もなく、流行や雑誌に流されている男。

言い方は悪いし、その人の全てが分かったわけではないので断言は出来ないが、そういうタイプだ。大学に入学した頃の僕と同じタ

イブだ。

## 第097話：主賓

そして、主賓とでも言うべき（僕とNはほぼその為に来たようなものなのだから）女の子2人は、どこかの女子大生だった。年齢は確か20歳だったと思う。

可愛いかわからないかと言うと、普通かそれ以下ぐらいだった。あまねく全ての女子大生が可愛いわけではないのは当たり前だ。女子大に入るのに容姿の試験なぞないのだから。

内面も、まあ普通だろう。あまねく全ての大学生が頭が良くはないのも当たり前だ。世間でもてはやされるほど、女子大生は優れてはいない。過度に期待するほうが間違っているのだ。

ただ、遊んでいるという感じではなかった。もちろん、パーティー会場には他にも女子大生はいっぱいいただろうし、いかにも遊んでいそうな女の子もたくさんいた。それらに比べて、またはパーティーに限らず普通に出会う人々と比べて、遊んでない部類に入るのであろうなと思った。少なくとも外見上は遊んでいそうには見えなかった。

これは少し意外だった。遊び人のNが来たがるパーティーだからして、同じような匂いをする人がたくさん来るだろうと思っていたからだ。確かにパーティー全体の比率を考えると、遊んでいそうな人のほうが多いのは事実だ。しかし実際にNや主催者と同じテーブルについているのは普通の女の子なのだ。

だが、僕だって人の事は言えない。Nの友人だからと言って、僕が遊び人というわけではない。女の子だって、僕みたいな男と出会うのを期待していたわけではないのかもしれない。どっちもどっちだ。

## 第098話：相応

結局、分相応という言葉が一番しっくりくる感じだった。だって、Nや主催者、あるいは他の多数の参加者と違って僕は遊びなれておらず、仮に今会場に溢あふれている、所謂遊いびなれてる女の子と同じテーブルに座ったとしても、共通の話題を見つけるのが一苦労だ。それに、そんな労力を費やして話題を探している自分が、なんだか滑稽こっけいに感じて嫌気がさすかもしれない。

それよりも、特に可愛くなくてもいいから、気軽に背伸びせずの話が出来る女の子と同じテーブルのほうが楽だろう。そのほうがこのパーティーを楽しめるだろうし、同席の人々と仲良くなれる確率も上がるだろう。

もしかしたら、主催者はそこまで考えてこのテーブルに僕達を案内したのかもしれない。僕や、主催者の友人の為に。

そしてそれは翻ひるがえって、女の子達の為だったのかもしれない。僕達と同じように女の子達も、どちらかと言えば地味な男達とのほうが楽に話せるのかもしれない。そう考えると、やっぱりあのテーブルはなるべくしてそうなったという気がする。

実際、他のテーブルに座っている人達と僕達とは、どこか違う気がした。彼等や彼女等が場違いなのではない。少なくともこの会場においては、むしろ僕達のほうが場違いなのだ。

僕達をこのテーブルに招いた肝心の主催者は、一旦席いったんについた後もなんやかやでまた立ち上がってどこかに行く事が多かった。おそらくは細々とした事務的な用事をこなしていたのだろう。テーブルに残された面々は、初対面同士の気まずさはあるものの、とりあえず儀礼的に自己紹介をし、差し障りさわのない話を始めた。

## 第099話：開宴

そしてパーティーが始まって意味のない（少なくとも僕にとつてはそう思える）余興や何やらが行われた。僕はあまり興味がなかった。乱痴気騒ぎ（おかしな騒ぎ）がしたければいい。ただ、僕はしない。そういうスタンスだった。このスタンスは今も昔も変わらない。言うなれば僕の偏屈（へんくつ）な性格のなせる業（わざ）だろう。

だから、僕はそのパーティーのいわば熱狂から一步退（しりぞ）いて冷やかな視線で会場を眺めていた。有り体に言えば、既にパーティーが楽しくなかった。それは前述した「場違いな思い」という理由もあるが、他の理由は、まずそのテーブルにいる女の子が大して魅力的でないという事だった。

女の子の内一人は大柄で一人は小柄だった。大柄と言っても太っているというのではなく（少しぽっちゃりはしていたが）、背が高いという意味だ。小柄なほうはあまり記憶にない。

2人とも外見が特に良いわけでもなく、内面も僕の好みではなかった。嫌悪する、とまではいかないが、話していても特に楽しくなかった。食指（しじく）を動かされるタイプではなかった。

だがそれは彼女たちのせいではない。それは単純な好みの問題であり十人十色なのだ。ただ、僕がそういうタイプに興味がないと言っただけの話だ。彼女達の話す事柄、彼女達の好きな物事に興味を持つ人はきつとどこかにいるだろう。ただ、僕はそういう人物ではなかった。

おそらくはNも僕と同様の感想を持っていただろう。いつものNの持ち味である積極性が、何らかの違和感によって上手く機能していなかった。いつもの快活なNではなかった。

## 第100話：醒興

そして何より嫌だったのは、このイベントから興味を失った一番の理由はそういう女の子の興味を惹こうと必死になっている男の姿を見たからだ。

それは、はつきり言ってしまうえば主催者の連れなのだが、見るからに頑張っていた。そしてそれが時折行き過ぎのようにも見えた。分かっていないのだ。自分の姿を客観的に見られていないのだ。

もちろん僕だって自分の姿を100%客観的に見られてはいない。極論を言えば誰にもそんな事はできない。しかし、時に自分の立ち位置を確認するぐらいの分別はあった。そして軌道修正しようとする自浄作用も。

しかし、そういう能力が欠如している人間だっている。欠如しているのか意識的に忘却しているのかは分からない。だが、外から見ればそれらに大差はない。現れる結果は一緒だ。

そんな光景を見てみると、何だか急に胸糞が悪くなった。一刻も早く帰りたくなった。だけど、帰れなかった。僕は基本的に波風を立てたたくない人間なのだ。悪い言い方をすれば臆病なのだ。自分から何かをして、その結果が他人に不快な思いをさせ、その事実が自分を苦しめるのが嫌なのだ。

だから、表面上はにこやかに、人の話を聞いていた。正確には聞いているフリではあるけど、そのフリにはある程度努力していた。だって、他にすべき事がなかったのだ。目の前の酒を飲むか、煙草を吸うか。それぐらいだ。ステージ上で催し物が行われていたが、それを見ても何も面白くなかった。僕の快樂や欲望に対する期待が、急速に萎んでいくのが分かった。

## 第101話：行列

そのパーティーは確か飲み放題だったと思う。カウンターに行って酒を頼み、貰って来てテーブルで飲む。そういうシステムだ。ちなみに食べ物も同様だった。ビュッフェ形式とでも言うべきか。

僕とNの酒がほぼ同時になくなり、僕達は連れ立って酒を取りに行った。カウンターは混んでいたの、僕達は列に並んでしばらく待った。黙って待つのも芸がないので、そこでNと少し話をした。

「なんか、こういうパーティーって、つままないね」

僕が言った。これは僕の率直な感想だった。

「そう？ オレはそこそこ楽しんでるよ」

「なんか、こういう雰囲気オレは駄目だわ。性に合わない」

「じゃあ酒だけでも飲んでれば？ 飲み放題だしさ」

「うん。まあ酒があるだけでもマシだよな」

そう答えて僕は自嘲気味に少し笑った。カクテルを注文する人々の列は依然として長く、まだしばらく時間がかかりそうだった。

「どうなの？ あの女の子達？」 そう口を開いたのはまたしても僕だった。

「あの女の子達って？」

「ほら、同じテーブルの女の子達。相模原だか小田原の女子大生だっけ？」

「うーん……。まあいいんじゃない？」

「仲良くなんの？ オレはあんまり興味が湧かないんだけど」

ちなみにNの「仲良くなる」は「手を出す」と同義である。

「オレは、とりあえず向こうが興味持ってくれたら応えるよ」

「好みなの？」

「まさかね。でも、友達ぐらいだったら構わないと思う」

Nらしかった。とりあえず可能性は広く持つておくのがNの女性に対するスタンスであり、実際に女の子をモノにする秘訣だった。

## 第102話：観察

酒を受け取り、そのままテーブルに戻るのもどうかと思ったので僕とNはその辺でしばらく立ち話をした。僕もNも、特にあのテーブルに未練はなかった。

主催者はいろいろと忙しいらしくあまりテーブルに戻って来なかったので、あのテーブルにいるのは実質、主催者の友人と女性2人という事になる。しかし僕はそのシチュエーションを特に羨ましいとは思わなかった。

むしろ、邪魔者とも言える僕等2人がいない状況で、あの男がどう頑張っているのか、どんな話題で奮闘しているのか、そちらのほうに気がなった。

そうして近くにあった柵のようなもの（普段ライブハウスとして使われている名残だろう）にもたれて、酒をおりながら会場を見渡してみると、綺麗な女の子もたくさんいた。清楚とは真逆に位置しそうな系統ではあったが、可愛い子はそれらと関係なく可愛い。それは事実だ。

そして宴も半ばを過ぎて、テーブルに固執こじつしていない人たちもいた。元々そんなお堅い雰囲気のパティーではないのだ。僕とNが現にそうしているように、柵にもたれてぼんやりと会場を眺めている人々もいた。その中には可愛い女の子もいた。

「あの娘可愛いじゃん」

僕はそう言ってグラスを持った手で指差した。もちろんそれとなく、女の子には気づかれないように。

「どれ？ …… あ、ほんとだ」

「暇そうにしてるよ。N、声かけてみれば？」

「うーん。どうかなあ ……」

そのまま見ていると、そういう可愛い女の子は割りあい頻繁ひんぱんに男

から声をかけられていた。男と女の駆け引きの一端が垣間見られる  
ような気がした。もっとも、女のほうが明らかに売り手市場のよう  
ではあったが。

### 第103話：粹人

Nやその他の男達が、女の子に声をかけるといふ行為に対する嫌悪感は、不思議となかった。テーブルでの光景は、ともすれば自分もそこに陥るおちいかもしれないという恐怖、つまりは同属嫌悪なのだが、そこらで女の子に声をかけている男達は、おしなべてお洒落しゃれだった。話も上手く、遊び慣れている雰囲気が出た。明らかに、僕とは違う世界の住人だった。

それでこそ、女の子に声をかける権利があると僕は思うし、だからこそ、僕にはその権利はないと思った。

「このままこうしていてもしょうがないんじゃない？」

しばらくしてNが言った。

「じゃあテーブルに戻る？」

「でも、ここにいっても楽しいのは楽しいよね」

「ああ、そうねえ……」

僕は（むしろこっちにいるほうがテーブルにいるより楽しいさ）という言葉（あるいは本音）を言いそうになったが、ここに誘ってくれたNを気遣い、言わないよう努めた。

僕はNが女の子に声をかけるだろうと思っていた。お洒落しゃれで話も上手いNには、僕とは違って女の子に声をかける権利やら自信やらもあると思っただし、Nの性格からして躊躇ちゅうちゆなんかしないと思っていた。しかしそのパーティー会場で感じる違和感は、僕だけでなくNの心にもあったようだった。

Nは確かに遊び人だ。僕よりは遥かに遊んでいる。しかし、その遊びの質とこのパーティーの質は少し趣おもむきが違っていた。Nが遊んでいると言ってもそれは僕や同じ大学の面々と比べての事で、それよりも遊んでいる人はたくさんいる。そしてこのパーティーに来て、

臆面もなく女の子に声をかけることができるのはそういう人々なのだ。

Nも少々面食らっている様子だった。この雰囲気<sup>けいふ</sup>に気圧<sup>けいあつ</sup>されている、という表現が最も適切かもしれない。

## 第104話：差異

しかしやはりNは黙って指をくわえている程大人しくはなかった。「オレ、ちよつと行つて来るよ」

そう言つて女の子の方に向かつて行つた。その子に対する男の声かけが途切れて少し経つた時だった。

僕はそんなNをぼんやりと眺めていた。ぼんやりと女の子のやりとりを見ていた。その前だか前の前だかにその子に声をかけた男は、二言三言で追い払われていたようだが、Nはすぐに拒絶されるといふ事もなく、上手い具合に話を盛り上げていた。

しばらく、と言つても2、3分だが、僕はそういう光景を眺めていた。そして不意にNと僕の間にある致命的な隔<sup>へだ</sup>たりを感じた。

それは、僕にはNのような事は絶対にできないだろうという確信だった。Nのように見<sup>み</sup>ず知らずの女の子に気軽に声をかけるといふ事は、僕には未来永劫<sup>えいじゅう</sup>不可能だという確信だった。一種の悟りのようなものだった。

ふと、あのテーブルで、未だに女の子の気を惹<sup>ひ</sup>こうとしているだろう男の事を考えた。

客観的に見て、僕はその男より外見も優れているだろうし、面白い話もできるだろう。だが、僕は何もしようとしていない。対して、少なくとも彼は、仮に僕より様々な事が劣っているとしても、動いている。可能性が低<sup>ひ</sup>かるうが高<sup>たか</sup>かるうが、「女の子と仲良くなる」という目的に向かつて、行動を起こしている。それを、お高くとま<sup>ま</sup>つて何もしいくせに、彼の言動を上から目線<sup>めくせん</sup>で見<sup>み</sup>て嘲笑<sup>ちやくしやう</sup>している僕は、一体何様だというのだろうか？

## 第105話：賤夫【第16章・完】

結局、僕はあの男以下なのだ。僕は、口だけ達者で、逃げ道だけ多く、成功を最初から諦めて、人を見下している。

いつもの自己嫌悪が始まっていた。会場は人で溢れていたが、僕はまた1人の世界に入っていた。

一旦それが始まるともう駄目だった。一度そういう想いが僕の中に芽生えると、僕はもう何も楽しめなかった。自分の思考が、様々な角度から僕を糾弾するのだ。自己を嫌悪させるありとあらゆるフアクターが次々と思い出され、僕の心を蝕んでいくのだ。

僕は煙草を啜って火を点けた。カウンターが空くのを見計らって、なるべく強い酒を頼んだ。強い酒ならなんでも良かった。渡されたウオツカベースの強いカクテルをあおった。

自己嫌悪はさもなくして孤独感を呼んできた。僕は抗う事なくその孤独感に、僕の中に確かにある孤独感に浸った。

（ねえノゾミ。周りはこんなに楽しそうなのに、僕はなんだかともつまらないよ）

（ねえクミコ。君ならこういうパーティーを楽しめるのかもしれないね。でも僕には無理だ）

（ねえユキ。こんな所でつまらない事をしている僕を見たら、君はどう思うかな？）

頭の中でそう語りかけた。酔いが回り、後頭部が火照ってくるのが分かった。でも、もっと酔いたかった。無駄な考えがこれ以上頭に浮かばないように。もうこれ以上、惨めな寂しさを味わわないように。

## 第106話：不意【第17章】

### 17．好意

12月に行ったパーティーは、僕の自己嫌悪と孤独感を徒に増す結果に終わった。僕は同じテーブルにいた女の子の事をどうでもいと思っていたし、態度にも表れていたと思う。だからと言って、他の女の子に声をかける勇氣もなく、僕はひたすら見当違いな所で自分の居場所を探していた。

その帰り道で、僕達、つまりは同席した6人は一緒に駅に向かっていたのだが、その道のお決まりの電話番号交換が行われた。僕は女の子の電話番号を、わざわざ自分から聞く気はなかったのだが、向こうから聞かれたので自分の番号を教えた。そしてお返しのように電話番号を教えられたので礼儀として聞いてはおいた。だが、それはあくまで儀礼的なものだろうと思っていた。かける気もないし、向こうからもかかってこないだろうと思っていた。

だから、パーティーの次の日の夜いきなり電話がかかってきた時には驚いた。かけてきたのは2人の女の子の内、大柄なほうの女の子だった。名前はコンノ。元々僕は人の名前を覚えるのが苦手だし、覚えるにしても女の子に関しては下の名前ぐらいしか覚えられないのだが、この時はフルネームで覚えざるを得なかった。なぜならコンノのフルネームはコンノノゾミというのだから。

パーティーの場で名前を聞いた時、僕は少し慌てながら漢字を確認し、そして安堵した。コンノのノゾミという漢字は、僕の彼女の漢字とは違っていた。ほんの一字しか違わないのだが、それは僕にとって大事だった。別に珍しい名前じゃないし、名前が同じだからといってどうという事はない。それに、コンノと僕の彼女では苗字が決定的に違うのだ。

しかし、僕は彼女とコンノの間にはつきりとした一線を引いておきたかった。両者の間に、できるだけ多くの違いを求めたかった。

## 第107話：不屈

コンノがなぜ僕に電話してきたのか、僕にはよく分からなかった。だって僕はあの会場で、仏頂面ぶつちやうめんをして座まっており、特に面白い事を言ったのでもなければ人の話に興味しんしん津々でもなかった。つまらなそうに煙草を吸い、酒をあおっていただけなのだ。

そもそも後半はほとんどテーブルに戻かえっちゃいない。一緒の席に着いていた時間なんて、1時間もなかっただろう。

「あの時あまり話せなかったから、もつと話したいと思ったの」  
電話口でそうコンノは言った。僕はあまり気がすすまなかった。

コンノと話したからといって、特に僕が楽しいかといえそうではない。もし楽しければパーティーのあの場でもつといろんな事を積極的に話していただろう。今さらという気がした。

僕はやんわりと拒絶した。興味が無い、ただそれだけの事だった。しかしコンノはめげなかった。メールもそれから毎日来るようになった。

ある時の会話の中で、僕はコンノにある程度酷ひどい事も言った。しかし、冷たくされればされるほど、逆にしつこく食たい下がられた。僕の事を憎むでもなく恨むでもなく（もつとも、僕だってそこまで酷ひどい事はしていない）、怒おこられたり傷いたつけられたりしても、また連絡は来た。

男として、女の子に興味を持たれると悪い気はしない。しかしコンノの場合はそれ以上に鬱陶うつとうしかった。気を遣うのも疲れるので、僕はある程度以上にズバズバと本音を言ってみたが、それでも電話はかかってきた。変な子だった。この子には、何か欠落けつらくしているんじゃないかとまで思った。



## 第108話：強誘

「来週の土曜日、映画を観に行こうよ」

何度目かの電話でコンノはそう誘ってきた。「何度目か」と書いたが、初めて会った時からそう何日も経っていたわけではない。ひとえにコンノの電話の頻度が多いのだ。

僕はその誘いを、難癖なんくせつけて断りたかった。

「いや、いいよ。興味ない」

「どうして？ 何かあるの？」

「うーん。まあ、あるって言えばある」

これは嘘だった。まずい事に土曜日は何の用事も入っていないなかった。

「何かあるの？ バイト？」

「うん。まあそんなようなもんかな……」

「……何も無いんでしょ？」

僕は元来、嘘をつくのが苦手だ。ともすればコンノが鋭いのかも知れないが、それ以上に僕の嘘はよくバレる。とにかく結果としてすんなり嘘はバレた。そして僕はなし崩し的に映画を観に行く事になった。場所は新宿で、映画はアルマゲドンだった。

僕はその当時映画をよく観ていたけれど、大半はビデオか深夜のテレビ放送だった。お金がないという理由もあるし、映画館に行く労力を費つやしてまで観たい映画がないという理由もあった。それに映画館じゃ煙草も吸えやしない。

しかしアルマゲドンという映画の噂は聞いていた。前評判はまずまずだったが、CM等を見る限り、映画館で観る価値はないように思っていた。後でビデオが出た時に観ればいいやと思っていた。

休みの日にわざわざ新宿まで出て行って、高い金を払って好きで

もない女の子とどうでもいい映画を観る。なんと酔狂すいきやうな事ことだろう。  
しかし約束した以上は行かなければならない。それは人としての問  
題だ。嫌なら初めから約束などしなればいいのだ。

## 第109話：合流

2時半頃に新宿駅で待ち合わせて、すぐに映画館に向かった。「せつかくだから昼ご飯を一緒に」とか、「ついでにウィンドー・シヨッピングを」とか、そういう気はさらさらなかった。なかったからこそ昼過ぎの中途半端な時刻ちゆうぶはんぱんに待ち合わせたのだ。僕は映画を観る約束はしたが、それ以上の約束はしていない。それだけの事だ。

1週間ぶりに会ったコンノはおめかしをしていたが、僕は普通だった。新宿という事で、普段着よりはましな格好をしていたが、特に気合を入れてはいなかった。ただ、眼鏡ではなくコンタクトをつけていた。おめかしではなく、単純にコンタクトのほうが眼鏡よりよく見えるからだ。

コンノの外見について少し説明しておく、なんとというか、「おつかさん」とでも形容すべき顔立ちだった。若くないというのではない。若さはあるし、肌張りだってある。ただ、おそらく年をとっていてもあまり変わらないだろう、このまま皺しわが増えるなりなんなりするだろうが、あまり大差ないだろう、そういう顔だった。

それは体型も作用していたかもしれない。がっしりと言うかぼちやりと言うか、その中間ぐらいの体型だった。程よく肉付きの良よい、とでも言うべきか。とりあえずスリムじゃなかった事だけは確かだ。

服装はとりあえず普通の女子大生風だった。白いロングコートに黒いタートルネックセーター、茶色のロングスカートにブーツ。特に流行に乗っているでもなく、化粧が濃いでもない。でもかろうじてそれがあるから、女子大生と言って通じるようなものだった。

## 第110話：映画

僕としてはあまり気乗りがしないまま映画館に行ったのだけれども、アルマゲドンはそう悪い映画ではなかった。少々オーバーな表現はあるものの、全体として面白い映画だと思う。僕は映画を観ながら、ふと隣にいるのがコンノでなければと思った。これがノゾミか、またはユキだったら。そう思った。コンノに悪い気もしたが、そう思ってしまったのだから仕方がない。

周りはカップルが多かった。そして周りから見れば、僕達もカップルと思われているのだろう。それは何だか嫌だった。でもそれはコンノが悪いのではなく、他にちゃんとした彼女がいるのにそうではない女性と映画を観に来ている自分が悪いのだ。

映画が終盤にさしかかり、いわゆる感動のシーンになった。僕はコンタクトがずれたので目が痛く、そのずれを直そうとしきりに目の辺りに手をやっていた。コンノはハンカチを取り出して涙をぬぐっているようだった。

映画が終わり、僕達は外に出た。

「どこかでお茶でもしない？」

コンノがそう誘ったが、僕は乗り気ではなかった。

「コンタクトがずれて痛いんだ。早く帰って直したい」

僕はそう言っただけで断った。嘘ではなかったが、そんなに急を要する事でもなかった。ずれはほぼ直っており、あまり痛みはなかった。

「映画を観てる時もずれて痛かったんだ。目の辺り触ってた？」

「あ、そうだったんだ。泣いてるのかと思った」

「泣くわけじゃないじゃん」

実際は泣いてもよかった。泣けるファクターはあったし、家で一人で観ていたら泣いたかもしれない。だけど、映画館のような多数の人前で泣くのは嫌だったし、コンノの前でそういう弱みのような

ものを見せるのはもつと嫌だった。だから泣かなかった。

「私、てっきり泣いてると思って、それで安心して私も泣いちゃったよ」

「オレが泣くのとお前が泣くのは関係ないじゃん」

「でも、なんかそう思ったの」

「まあ、ちよつと涙出そうにはなったけどね」

「ホント？」

そう言っつてコンノは嬉しそうな顔をした。何が嬉しいのか僕にはよく分からなかった。

## 第111話：癩癩

映画に行った後も、コンノからは何度か電話がかかってきた。メールも何通も来た。僕はヒマな時は電話の相手をしたりしたが、どうでもいい時にはとらなかつた。

ある夜、固定電話でノゾミと話している時にPHSにかかってくる時があつた。僕はそれにとてモ苛いら立つた。僕とノゾミとの大事な時間を邪魔されたような気がした事もあるし、他の女の子から電話がかかってくるという事態をノゾミに悟わられたくなかつたという事もある。

とりあえずその場はすぐに電源を切り、何事もなかつたかのようにノゾミとの電話を続けた。

「かけてきたのは大学の友人で、多分麻雀の面子めんづが足りないんだよ」  
そう取り繕つくろつた。実際、そういう電話がかかってくる事もあつたから、まんざら嘘というわけでもなかつた。ノゾミもそれで納得なっとくしたようだった。元々、ノゾミは僕の人間関係にあまり興味はないのだ。

「鬱陶うつたうしいからもう電話してくるな」

ノゾミとの電話を切つたすぐ後で、僕は怒りに駆られてそういう内容のメールを送つた。電話で怒つてもよかつたが、それだとコンノを怒鳴りつけるのはまず確実だった。それによつてメソメソ泣かれたり、しつこく謝られたりしても面倒だったのでメールにしたのだ。

「鬱陶うつたうしがらせてごめんなさい。また気が向いたら連絡ください」  
コンノからはすぐにメールが帰ってきた。僕はまだ幾分いくぶん怒りが冷めやらぬまま、PHSを放り出して眠つた。

## 第112話：邪念

人恋しさというのはとても変な感情だと思う。コンノに決別のメールを送ってから、僕は普通に生活していた。学校に行き、バイトに行き、友人と飲み、ノゾミと電話した。それぞれ楽しかったし、いつもと変わらぬ学生生活だった。だが、何かしらの違和感があった。

コンノからの電話やメール攻勢の波が去った事で、主な感想としてはホツとしながらも、なぜか一抹の寂しさを感じていた。あんなに邪魔に感じたのに、それがピタッと止むとどこか物足りなさを感じる。人間とは本当におかしなものだ。

しかし僕はそういった経験はそれまでにした事があったから（クミコの事もあるだろうし、他の女の子についての事もあるだろう）、はっきりと断言はできないし、それらの集大成なのかもしれない）、ここでまた変に連絡を取ったら、また面倒な事に巻き込まれるという確信はあった。僕の中ではコンノはそこまでする相手ではない、そうやって追い求める程の相手ではないと重々承知していた。

だから、僕がまたコンノに連絡を取ったのは一時の気の迷いとか思えない。多分、どうかしていたんじゃないかと思う。おそらくはノゾミと電話が繋がらず、ユキとも連絡が取れず、そして一人寂しい夜を過ごしていたのではないかと思う。

ともすれば、深夜に目が覚めて突然寂しくなったのかもしれない。酒を飲みすぎて誰でもいいから話したくなったのかもしれない。性欲に駆られて女性の声だけでも聞きたくなったのかもしれない。

### 第113話：利用

再び連絡をしたのは、決別のメールを送ってからそう遠くはない日だったと思う。2週間も経っていなかったのではないか？そうではないとそれからの時間経過が合わない。そして、たった2週間で元もくあみの木阿弥になったという事からも、僕の普段の辛抱強さしんぼうとコンノに対する嫌悪感から考えると、連絡したのはやはり気の迷いであったという気がするのだ。

とりあえず、そうしてまた僕とコンノは連絡を取り合うようになった。もちろん、以前よりその頻度は減った。コンノもある程度は遠慮しているようだった。メールの回数も減ったし、電話してくる時にはその前に確認のメールが来るようになった。

僕からは、メール（主に返信である）はすれども電話は滅多めったにしなかった。珍しく僕から電話した時も「電話代ヤバいからかけ直してよ」と言っていたような気がする。どう考えても酷い台詞せりふだ。

コンノはしかし、素直にかけ直してくれた。時には文句や不満のような事も言ったが、僕が「じゃあいいよ」というような強気な態度に出るとすぐ折れた。軽く怒ってくる時もあったが、壊滅かいめつてき的な状況になる程にはけっして怒らなかった。

多分僕は気づいていたのだ。コンノが僕に好意を寄せている事に。そして僕はその好意を利用したのだ。

僕にとって、コンノは失ってもいい相手だった。そしてコンノにとって、おそらく僕は失いたくない相手だった。僕はその弱みに付け込んだのだ。付け込み、利用したのだ。

## 第114話：問答

大学が冬休みに入る頃、コンノは電話で言った。「あなたの家に遊びに行きたい」と。

「来るな」と僕は即座に拒絶した。部屋が汚いからとかコンノの家から遠いからとかそういう物理的な理由ではなかった。部屋は、友達がたまに泊まりに来ていたから、ある程度は綺麗だしすぐに片付けられるレベルだった。

それにノゾミでもユキでもなく、たかがコンノが来るという理由ごときで、わざわざ部屋を片付ける気にはならない。他の2人はともかく、コンノに嫌われようと別に構わなかった。

距離が遠いからというのも一見コンノの事を考えているようで、僕にとってはどうでもいい事だった。「電話代がかかるからかけ直してよ」などと言う男が、女の移動時間や運賃を気にするわけがない。

来て欲しくないもつと大きな理由は、精神的なものだった。僕の部屋、僕の領域に、僕があまり好きではない人を踏み込ませるのは嫌だった。それは、言わば僕の聖域であり、最後の砦なのだ。無造作に踏み躪<sup>にじ</sup>っていいものではないし、簡単に奪われては困る。

「その日は集中講義があるんだよ」

僕はそう言った。本当の事だった。

「何時に終わるの?」

「知らない。多分夕方ぐらい」

「じゃあそれぐらいに行く」

「来んなよ。マジで」

「なんで?」

「散らかってるし、来ても別に面白くない」

「私は面白い」

「オレは面白くないの」

押し問答が続いた。面倒くさかった。物理的な理由を話しても、「別にいいよ」と言われるだけで、コンノの気持ちを変わらせる事はできなかつた。

精神的な理由を話しても良かったのだが、それを理解させるのに骨が折れる事は火を見るより明らかだった。第一、その頃の僕はそういう心の機微きびを、自分でもよく分かっていたいなかっただから、言葉にできるわけがなかつたのだ。

## 第115話：決着【第17章・完】

最終的に、僕が投げやりに「じゃあ来れば？」と言った。いつまで経っても埒が明かないやとり疲れたのだ。

「でも集中講義が長引くかも知れないし、もし友達から飲みとか麻雀とか、何か遊びの誘いが入ったら、そっち優先するから」

僕はそう付け足した。なるべく逃げ道を多くしておきたかった。「それって、ちょっと酷くない？」

コンノが少し怒ったように言った。

「え？だって、オレは別に……」

「私が行っても、もし何かあったら意味なくなるって事でしょ？それって、酷いと思う」

「……」

僕は何も言い返せなかった。少なくとも僕のこの発言に対しては、コンノの言い分のほうが筋が通っていた。僕はある意味では酷い人間かもしれないが、できる事ならまっとうになりたいとは思っているし、人間としての善悪の判断ぐらいはできる。だから、筋が通っている理屈を捻じ曲げられはしなかった。

コンノの反論を端緒に僕は旗色が悪くなっていった。最終的に会話は、コンノが来る方向に収束していった。

「でも、集中講義が長引いたらそれはしょうがないぜ？オレのせいじゃないんだから」

僕は最後にそう返すのが関の山だった。そうしてコンノは僕の部屋に来る事になった。

12月も半ばを過ぎ、テレビや雑誌では盛んにクリスマスの過ごし方を特集していた。ともすれば、コンノはそういう雰囲気の影響されて、僕の部屋に来たがっているのかもしれない。僕の気持ちを知っているのか、それともそれを変えられる気にいるのか、僕

には分からなかった。

## 第116話：補講【第18章】

### 18・投影

集中講義というのは、学生にとっては大体において楽な授業だ。

短ければ1日、長くても4日ぐらい大人しく席に座って、最後にレポートなり何なりを出せば単位が来る。朝から夕方までずっと同じ講義室にいるというのはある程度疲れるものだが、半年間同じ授業に出続けるのに比べれば雲泥つんでいの差だ。それに講義室は暖房が効いているし、なにしろ講義を受ける人数が通常よりも多いので、隠れて他の本を読んでいようが寝ていようがあまり目立たない。

12月も終盤しかんに差し掛かり、通常授業が終わった事もあって、学生の間では弛緩しかんした雰囲気しんきが漂ただよっていた。集中講義はあるものの、心は冬休みといった感じた。ご多分に漏れず、僕もそういう気分だった。

コンノが来るからといって、僕は特別な事は何もしなかった。友達ともが来る時には、せめて少しは部屋を片付けるのが僕の常つねだったが、それさえもしなかった。しようとも思わなかった。

おまけに前日は夜遅くまでテレビで深夜映画を観ていた。集中講義の最中も眠ねくてしようがなかったが、残念な事にその集中講義を取っている友人はいなかった。レポート課題を聞き逃さないように起きていなければいけなかった。もちろん、集中講義で寝ようと思うほうが間違っているのだけれども。

午後になって、コンノからは何度かメールが来た。「今家を出ました」とか「電車に乗りました」とかそういう類たぐいのメールだ。基本的に寝不足の時の僕は不機嫌だ。多分大抵の人は寝不足の時は不機嫌だと思おもうが、僕は普通の人以上に不機嫌になるのだ。

(そんな事でいちいちメールしてくんなよ)

そう思った。そしてPHSの電源を切った。

## 第117話：解放

午後3時過ぎに集中講義から解放され、僕は暖房が少し効きすぎている講義室から冷たい風の吹く屋外に出た。火照った体はすぐ冷え、過剰な暖房によって流れた汗が冷たくなって少し気持ちが悪かったけれど、新鮮な空気は心地よかった。

煙草を一服してから電話の事を思い出した。あまり気は進まなかったが電源を入れてみると、着信が何件かと留守番電話が入っていた。

「もう駅に着いたけど。まだ授業中つばいので駅で待ってます」  
録音されたのは10分ほど前の時刻だった。僕は自転車に跨またがってゆっくりとペダルをこぎ、不承不承ふじょうふじょうながらも電話してみた。

「もしもし？」

「遅いよー。もう駅だよ」

「んー。つか、講義が終わる時間は前後するかもって言ったじゃん」

「電話しても通じないし、メールの返事もくれないし……」

「だから、講義だつっの。電源切ってたの」

もちろん講義だからといってPHSの電源を切るほど、僕は殊勝しゅしょうな学生ではない。ただの言い訳だ。

「駅のどっち口でいればいいの？」

「あんまりどっち口とか覚えてないんだ。そっから何が見える？」

「んーと、線路」

「アホか。当たり前だろ」

「あ、あと幼稚園が見える。線路の向こうだけど」

「あー、分かった。坂の途中か？」

「うん。そう」

初めは要領を得ない答えだったが、その後のやり取りでなんとか

当たりはついた。少し遠い方の出口だった。僕は（）よりによって……（）と思いつつも、「あと15分ぐらいかかる」と言い残して電話を切った。

## 第118話：寒風

コンノは寒い中屋外で待っている。それは確かだ。しかし僕は、（別に急ぐ必要もないか）と思った。自転車に乗りながら器用に煙草を取り出し、手袋を脱いでそれに火を点けた。この期ごとに及んでも、あまり気が進まないのには変わりなかった。

だが、12月の風は冷たく、ゆっくりと自転車をこいでいると、どんどん体温が奪われていくように感じた。風が吹く度に体たびが震えた。煙草を持つている手は痛いほどに冷たくなってきた。僕は一刻も早く暖かい屋内に入りたくなった。煙草をもみ消して手袋を履き、さらにはポケットにまで手を突っ込んだ。そうして少しでも風が当たらないように背中を丸めて、少し力を込めて自転車をこいだ。

それから約20分後、僕は自宅の最寄り駅に着いた。一旦家いったんに帰って自転車を置いてきたので時間がかかったのだ。コンノは小さな駅の出口を出て、階段のようなコンクリートの段差に腰掛けていた。冬の寒い時期なのに、コンノはチェックのミニスカートを履いていた。上はピンクのタートルネックセーターに、白いダウンジャケットを羽織はっていた。その当時それが流行っていたかどうかは知らない。しかし、お洒落しやれと言えそうだし、似合ってはいた。スカートから伸びた足は、少し太くはあったが致命的なほどではなかった。「寒いよー」そうコンノは言った。

「そんなスカートなんて履いてっからだ。馬鹿じゃねーのか？」  
「だって、可愛くない？」

「無理だな。足太いもん」

そこでコンノは少し悲しそうな顔をした。女性の足を見る、という事で性欲のようなものを全く覚えなかったと言えは嘘になるが、大してセクシーとは言えない姿だったので特に意識はしなかった。



## 第119話・渋谷

だがしかし、これからこの女が僕の部屋に来るかと思うとうんざりした。僕はまだ眠気が取れてはいない（よって不機嫌である）し、僕の部屋に来たからと言って、何もする事はないのだ。

「てっか、もういいだろ。帰れば？」

僕は残酷にもそう言った。それは僕の本心だった。

「え？　だってせつかくここまで来たんだよ？」

確かにそうだ。1時間だか2時間だかかけてこんな遠い所まで来たのだ。断るなら初めから断るべきなのだ。

ここまで来て、さらには戸外で、また押し問答をしたくはなかった。渋谷、本当に渋谷と僕は家に向かった。

（ひとりあえず家まで連れて行けば、約束は果たした事になる。それさえ終わればさっさと帰らせよう）

心の中ではそう思っていた。とにかく眠く、誰かと話したりするヒマがあれば眠りたかった。

僕の家に着いた直後、僕は「眠いから寝る」と言って布団に潜り込んだ。もっともその当時、僕は寒い夜の対策として、ホットカーペットの上で直に寝る、という方法をとっていたから、正確にはホットカーペットと掛け布団の間に潜り込んだのだ。

コンノは僕の部屋について褒め言葉だか感想だかを言っていたが、僕は生返事をして放っておいた。相手にされないのでコンノは所在なさげに座るしかなかった。

「ねえ、起きてよ」

「眠いんだよ。あんまり寝てないんだ」

「だって、せつかく来たのに……」

「だから、来てもする事ないって言っただろ」

「でも……」

「嫌なら帰ればいいだろ？ とにかく寝させてくれ」

そう冷たく言い放った。自分の言い分が間違っているとは全く思わなかった。こうなるであろう事は事前に告げているのだ。それでも来たのはコンノの意志であって、僕の意志ではなかった。

## 第120話：料理

「あ、そうだ。お腹空いてない？」

空いてない、と言えば嘘になる。僕は一人暮らしの大学生であり、さらには貧乏だったから、忙しかったり、金がなかったり、面倒くさかったりするとともに食事をしなかった。

朝飯はもちろん食べない。食べる時間があれば5分でも長く寝ていたいからだ。そしてその日は朝飯はおろか、昼飯もろくに食べていなかった。

「買ってくるの面倒くさいからいいよ」

「冷蔵庫に何かないの？」

「卵と納豆ぐらいしかない。米、炊いてないんだ」

「じゃあ納豆オムレツ作ってあげる」

（次から次へと……）と僕は思った。まあしかし、腹が減っているのは事実だし、料理の間は僕を放っておいてくれるだろうと思い、料理してもらおう事にした。コンノを台所に案内してフライパンやら油の場所を教え、僕は再び寝っ転がった。

しばらくして、コンノが台所から戻ってきた。手には皿を持ち、その皿には納豆オムレツが乗っかっていた。

「できたよー。食べよう」

「これって、ちよつとしかないじゃん。お前の分は？」

「私はあんまりお腹空いてないから。いいから食べなよ」

あまり食べるところを見つめられるのも食べにくいものだが、とにかく僕は起き上がって納豆オムレツを食べた。味は、予想していたよりずっと美味しかった。

「どう？ 美味しい？」

「ん。まあまあ」

本当は素直に美味しいと言っても言うべきなのだろうが、ここで調子

に乗らせるとまた作りに来そうで、何となく素直になる事ができな  
かった。

## 第121話：抱擁

食事が終わると、腹が膨れた僕は本格的に眠くなってきた。コンノは台所で洗い物をしていた。もっとも、他にやる事がなかったのだ。

クミコが来た時もそうだが、僕の部屋には少なくとも年頃の女性が喜ぶものは存在しない。マンガと本とゲームとCDに埋もれた部屋。それもおよそ女の子が好むものはかけ離れたジャンルのものばかりだ。流行りのCDもないし、お洒落な雑誌もない。そんな部屋だ。

とにかく、そんなコンノをほったらかして、僕は眠った。

目が覚めた時、窓からは街灯の明かりが差し込んでいた。すっかり夜になっていた。

(コンノはどこに行ったんだろう？ 帰ったのかな)

そう思いながら半身を起こして見回すと、僕の背後で寝ていた。

掛け布団も掛けずに、ただごろんと寝転がっていた。

その光景を眺めながら僕は煙草を一服した。少しでも寝たせいか、コンノに対する不快感は弱まっていた。少なくとも午後にはコンノを出迎えた時よりは。

僕は再び寝転がった。そして眠っているコンノの体を、そつと触つてみた。少しだけ反応があつたが、それでもまだコンノは眠っていた。僕は静かに腕を伸ばしてコンノの体をそつと抱いてみた。性欲から、と言うよりは、ちょっとした悪戯心から起こした行動だった。

大柄なコンノの体に腕を回してみると、それはやはりいつもとは勝手が違っていた。もちろん、「いつも」と言うのはクミコの事だ。だって僕がその時抱いた事がある女性はクミコしかいなかったのだから。コンノの肌はクミコのそれと比べて柔らかく、抱き心地はそ

う悪くはなかった。

## 第122話：幼児

そうしてしばらく抱いていると、コンノが目を覚ました。嫌がられるかと思ひ僕は少し警戒したが、予想とは逆にコンノは僕の体に腕を回してきた。寝ぼけているのかと思ったが、そうではないようだった。

「どうしたの？」

コンノが僕にそう尋ねた。まるで小さい子供をあやす母親のような言い方だった。

「いや、なんとなく……」

「そう……」

そしてコンノは僕の胸に顔を埋めた。今度は逆に、僕が子供をあやしているような形になった。そうしてあたかも僕の匂いを確かめるかのように、大きく息を吸い込んで安らかな顔をしていた。それが、一体何を求めている行動だったのかは、あれから数年の歳月が経った今となっても分からない。

しばらく抱き合つて、そして鼻で肌先をなぞったりしているうちに、僕は何となくそれ以上の事がしたくなってきた。もしコンノに対して性欲が芽生えたのだとしたら、それはまさにこの瞬間だったのだろう。

初めは鼻先での愛撫だった。それが、首筋へのキスに変わった。もっとも、あからさまに唇を押し付けたのではなく、あくまで優しいタッチだ。

「くすぐりたいよ……」

コンノが困つたような声を発した。これから起こる性行為への許可とも禁止ともとれる曖昧な口調だった。

僕はそれを許可とみなした。絶対的な禁止ではないとみなし、鼻先での愛撫を続けた。僕は首筋を、触れるか触れないかの調節を持

って、じっくりと愛撫し始めた。コンノはそれを拒む事なく、僕に体を預けていた。しかし僕は、大きな一步を踏み出すのを躊躇していた。コンノがどういう気持ちなのか分からなかったし、そこまで激しく欲情していたわけではないのだ。

## 第123話：主導

しばらくして、僕は意を決してコンノの胸に触った。初めは偶然を装よそおつような感じで、軽くそつと触れた。コンノは体を少し震わせたが、僕の手を強引に振り払うような事はなかった。僕は次第に大胆に、コンノの胸に手を這はわせていった。

愛撫を続けるうちにコンノの唇から吐息のようなものが漏れてきた。コンノが感じているのが女性経験の少ない僕でも分かった。コンノは、僕の愛撫に応えるかのように僕の体を愛撫し始めた。もはや、コンノが快感を求めている事は明白だった。しかし僕はその愛撫を拒絶した。あくまで主導権は僕が握っていたかった。

僕の性体験といえばクミコとのそれしかないのだが、その時はクミコに主導権を握られっぱなしだった。だから、クミコでない相手に対して、その時の鬱憤うつげんを晴らしたのかもしれない。もしくは、僕の中で性欲よりも意地悪な心のほうが強く、触らせないという事でコンノを苛いじめたかったのかもしれない。

「一通り、だが執拗しつように胸への愛撫をした後、下半身への愛撫に移った。そこでコンノは初めて拒絶らしいものを見せた。

「そこはダメ」

か細い声でそう言った。

「どうして？したくないの？」

僕は意地悪くそう尋ねた。分かってはいたのだ。コンノがしたくないのではない事を。分かっていて、そう尋ねたのだ。僕は嗜虐しぎゃく的な思いでコンノに尋ねたのだ。

だが、僕の中にある感情はそれだけではなかった。性欲も感じていた。僕の中で一旦芽生えた欲望は、多少はノゾミへの罪悪感があったとはいえどもどんどん増大していった。まるでクミコとの時のように。

僕はしつこく下半身を触ろうとした。性器かなに触れることは叶かなわなかった。足やその周辺を撫なでた。そして、隙なあらばコンノが触らせまいとしている部分に触れようと考えていた。

## 第124話：処世

「つきあってくれるんなら、いいよ」

僕のしつこさに根負けしたのか、コンノは恥ずかしそうにそう言った。もつとも、その言葉を聞くまでにそれほど時間を要してはいなかった。

「それは無理」

僕は即座にそう答えた。性欲は確かにあったが、同時に冷静な部分もまだ残っていた。

「なんで？ 私じゃダメ？」

「それもあるし、第一オレ、彼女いるもん」

コンノは少し驚いた顔をした。

「あれ？ 言つてなかったっけ？」

「……聞いてない」

確かに僕はその事実を隠していた。と、言うよりも、コンノに特に恋愛感情を抱いていなかったの、そういう話をした事がなかったのだ。「聞かれない事は言わない」それは僕なりの処世術だった。

「けど、薄々気づいてた」

「なんで？」

「なんか、そんな感じがした。女の子の扱いとか、慣れてるような気がした」

全く意外な言葉だった。僕はそんなに女の子を扱った経験もないし、特に慣れていている気もしない。それに、もっと扱いが上手い人もたくさんいるだろう。一体、どこら辺の人たちと比べているのか、コンノが知っているのはどんな人たちなのかとても不思議だった。

「彼女、どこの人？東京？」

「いや、地元」

僕がそう答えると、コンノは少し安心したような顔をした。おそ

らく、遠距離恋愛という事実が、彼女持ちの男の家に1人で泊まりにきて、その男に体をまさぐられている事への罪悪感を和らげているのだと僕は解釈した。

しかし、その後にもコンノから発せられた言葉はそんな罪の意識なぞ感じていないかのような台詞せりふだった。

## 第125話：提案

「じゃあ、私を東京の彼女にしてください」

突然にコンノはそう言った。僕は予想外の言葉に面食らった。コンノが何を言っているのかすぐには分からなかった。

「ごめん。意味が分かんない。なんだそれ？」

僕は手を休めて聞き返した。狐につままれたような気分だった。

「地元には彼女がいるのは分かったから、じゃあこっちでの彼女にしてくださいって事」

コンノの提案は全く理解できなかった。「彼女というのは一人だけ」それが世間での定説であると思っていたし、今でもそう思う。

そんな現地妻みたいな事を実際に言い出す女性が、本やマンガならともかく、現実にいるとは思わなかった。

「無理。そんな事はできない」

「だってこっちでいる時ってヒマでしょ？デートとか、そういうのに彼女って必要じゃない？　そういう存在にしてって言うてるの」

「それは……確かにヒマだけど……」

「それに、こういう事がしたくなつた時にも……」

確かにそれは、僕にとつて随分魅力的な提案ではあった。デートうんぬんよりも、性欲の捌け口としてそういう相手がいれば、確かに便利には違いなかった。いわば、クミコにおける僕やその他の男性のような相手として。

「いや、確かにいい話だけど、やっぱりムリだわ」

少し考えた後にその好条件な提案を拒絶したのは、ノゾミへの操でもなければ、クミコのような事をしたくないという思いからでもなかった。ただ単に、そういう相手として、コンノがふさわしくな  
いと思えたのだ。



## 第126話：対価

ここで提案を受け入れれば、確かに性欲処理には困らないだろうし、人恋しさも紛れるだろう。しかしそのためには、今でもうんざりしている電話攻勢に再びさらされなければならぬし、おそらくそれは激しさを増すだろう。そして新たに休みの日にデートしたりしなければいけない必要性が生じてくる。そしてデートをすれば、先日の映画館で感じたような思いを、また感じる事になるだろう。

それが、コンノでなければどうにかなったかもしれない。おそらくクミコが同じような事を言ってきたとしたら（クミコの性格上、そんな事は絶対にならないし、それを口にするようなクミコは本来の魅力を失っているだろうとは思うが）、僕はその提案を二つ返事で受け入れただろう。でも、コンノでは足りない。

僕のそういった労力への対価がコンノの肉体だとしたら、どうもリスクとリターンが合っていないような気がしたのだ。

「どうして？私じゃダメ？」

「ダメっちゅーか、何と云うか……」

僕はお茶を濁した。コンノの問いに答えるのは簡単だった。コンノではダメなのだ。そうはつきり言えばそれで終わるのだ。

しかし、僕のはつきりとは言えなかった。その言葉を言ってしまうと、コンノは少なからず傷つくだろう。そうした女性をなだめたりすかしたり、とにかく上手く言いくるめるのは大変だろうし、そんな手間をかけたくなかった。

そして何より、僕の拒否の発言と共に、この場の性的な雰囲気は失われるだろう。それを黙って見過ごせるほど、当時の僕は達観していなかった。性欲は十分に高まり、ここでお預けを食わされるのは嫌だった。



第127話：嗜虐（前書き）

## 第127話：嗜虐

「大丈夫だよ。私、その地元の彼女には迷惑かけないし」

「いや、そういう問題じゃなくて……」

僕はなるたけ手間のかからない方法を選び、答えたと思ったのだが、コンノに関しては結局同じ結果になった。はっきり言おうと言うまいと、コンノはしつこく食い下がる。そして始まるのは押し問答。いつものパターンだった。

僕は苛々<sup>いらいら</sup>してきた。押し問答もそうだし、性欲がくすぶっている事もあった。僕の中で次第にサディズムが満ち、そして溢<sup>あふ</sup>れた。

僕は無言でコンノを押し倒し、そして激しく愛撫した。

「だ、ダメだよ……。そういう事するんなら私を彼女にしてからだよ」

「お前を彼女にはしない。でもそういう事はする」

コンノは初め抵抗していたが、次第にその力は弱くなっていった。そして僕の手は、下半身の今まで触れられなかった部分に達した。

指を入れた。動かした。コンノのあえぐ声が聞こえた。激しく動かしした。声が大きくなった。

「ダメ。それ以上しちゃダメ」

無視した。動かし続けた。

「好きになっちゃう。好きになっちゃうよ」

気持ちいいから好きになるという表現に、僕は少し違和感を覚えた。好きだから気持ちよくなるのだとばかり思っていたからだ。しかし、クミコに対する僕の感情の推移を思い出し、少し納得がいった。そして同時に、目の前のコンノの姿がそういう過去の自分を髣<sup>ぼう</sup>髴<sup>ぼう</sup>とさせ、その自己嫌悪をぶつけるかのように僕はコンノを責め続けた。

僕の眼前で痴態<sup>ちたい</sup>を見せるコンノを軽蔑<sup>けいべつ</sup>したし、クミコの眼前で痴態<sup>ちたい</sup>を晒<sup>さら</sup>した過去の自分を軽蔑<sup>けいべつ</sup>した。この時、自身の性欲よりもサデ

イズムが勝るのを感じた。性欲から生まれたサディズムは、その性欲を凌駕じょうがしていた。

そして、僕のその嗜虐しぎゃく的な愛撫によって、コンノは達した。

## 第128話：道具

凶暴さに駆られてコンノを責め、その責めによってコンノは達した。だが、僕の中に爽快感はなかった。それを求めていたのかどうか分からない。それが手に入ると確信していたのではない。ただ、何かしらの達成感が得られればという希望はあった。

結局、望んだ何かは得られなかった。満足感も快感もなかった。得られたのは、コンノを到達させたという事実だけだった。それは僕にとって、やらねばならぬ作業を終わらせたような感慨をもたらした。

荒い息を吐いていたコンノは、時間が経って少し落ち着いた後で僕に寄り添ってきた。僕は振り払うのも億劫おっくうだったのでそのままにしておいた。

「その指、ずるいよ」  
拗すねたようにそう言った。甘える声でそう言った。おそらくコンノに好意を持ってしている男性なら心に響いただろう。性欲を喚起かんきされたかもしれない。だが、僕は何とも思わなかった。何も感じなかった。

「爪、短くしてるでしょ？ それって、エッチな人の指だよ」  
そう言われて僕は自分の指を見た。確かに深爪だったが、そういう理由で爪を切っていたのではなかった。そんな作用を考えた事もなかった。だが、コンノは僕の指をそういう視点から捉とらえていた。

しかし、本当はそうなのかもしれないと思った。僕の指の正しい使い方は、そうなのかもしれないと思った。僕の指は、所詮しよせん道具なのだ。そういう事のためにカスタマイズされた道具なのだ。そういう技術を持った道具なのだ。そして、その道具や技術は、本当に大事な人に対して用いられた事はないのだ。



## 第129話：機械【第18章・完】

「ねえ……」

僕が自分の指を見つめてそんな事を考えていると、コンノが声をかけてきた。

「あなた、気持ちよくなってるじゃないでしょ？不公平だよな」

「いいよ。オレは別に」

「してもいいよ」

僕は即座に気づいた。不公平という言葉の裏に隠された何かを。

コンノは、僕がしたいだろうから気遣っているんじゃない。ただ単にコンノがしたいから誘っているのだ。

僕はそれに気づきながらも口には出さずにその誘いに乗った。与える事ができるものを、求められたから与える。それだけの事だった。そこに感情はなかった。性欲もなかった。

ただ、僕は機械的に動いた。義務のように動いた。感情はいらなかった。単に快感を与えただけだった。

コンノを抱いている時の僕のような感情を、クミコが僕と交わる時、もしくは不特定の異性と交わる時に抱いていたのだとしたら、それはとても強い事のように思えた。感情もなくただ交わる。その時の快感に殉ずる。それができずにコンノを抱いた僕は、とても中途半端な存在だった。

結局コンノは一晩泊まり、そして帰って行った。その日、東京の彼女云々という話がまた出たが、僕は頑なに拒否した。恋愛は、双方が好いているから成るものだと思っていた。コンノは僕に好意を持っているかもしれないが、僕は持っていない。それだけで、拒否するのには十分な理由になった。

僕は、何かを求めていた。異性に何かを求めていた。僕の中に何かを求めていた。受け取り、与えられる何かを。

誰が与えてくれるんだろうと思った。誰に与えられるんだろうと思った。

そもそも今までにそんな人に出会っているのだろうか？  
今からそんな人に出会えるのだろうか？

寒い日だった。冬の空気は鋭く澄んでいたが、僕の心の中は鈍く濁っていた。

## 第130話：保留【第19章】

### 19・降誕祭

コンノの一件と前後する12月のいつか、僕はユキにクリスマス会に誘われた。Nのクリスマスパーティーの件もそうだが、僕の予定は能動的というより受動的に埋まっていくらしかった。

そのイベントは、ユキとヒロミの大学の、友達同士が遊ぶというものだった。そんな内輪のイベントに、全くの部外者である僕が参加する事に躊躇ちゅうちゆしたが、ユキやヒロミはそんな事お構いなしだった。だが、日時を聞いて僕はホッとしたようながっかりしたような気分になった。その日、僕はバイトが入っていたのだ。終わるのは午後9時過ぎ。そこからイベントのある場所まで行くと、10時頃にはなってしまう。時間的に無理だった。

その事を電話で告げると、ユキは不満そうな声を漏らした。

「だって、内輪のイベントじゃん。オレ、居場所ないだろ」

僕は時間的なそれとは別の、そして本質的な理由を述べた。

「内輪と言えば内輪だけど、あんまり知らない人もいるし、混じっちゃえば大丈夫だよ」

「知らない人って言っても、同じ大学の人ばかりだろ？ 一応そ

こで共通項はあるじゃん」

「ううん。なんか、他の子たちも別の大学の友達呼ぶとか言ってたから、同じ大学じゃない子も来るよ」

確かにそれであれば僕の居場所もあるだろう。だが、微妙なところだった。ユキに会いたいのは事実だし、遊びたいという心もあったが、人見知りする自分への恐怖があった。Nと行ったパーティーでの経験が影を落としていたのかもしれない。

「でも、やっぱ無理だって。バイトあるし、飯に行くとしてもかな

り遅くなるよ」「

「じゃあ、バイト終わったら連絡してよ。様子教えるから。それから決めればいいよ」「

ユキのその言葉によって、僕はその場で強<sup>し</sup>いて結論を出す事はなく、保留のような形でその話は終わった。

## 第131話：労働

そして当日。その日が何曜日だったか定かではないが、バイトがあった事と、そういうクリスマス会が行われた事を考えると、金曜日だったのではないかと思う。

僕はその日もいつもと変わらず、やる気なく遅れて学校に行き、半分は他の事を考えながら授業を受け、それが終わるとバイトに行った。

塾でのバイトでは普段、結構遅い時間まで働いていた。塾での本来の仕事、つまり教える事そのものも夜までかかるのだが、それが終わった後に報告書を提出せねばならず、それを書く為に20分ぐらいは残業（手当てはつかない）する必要があったのだ。

その日、バイトの後にそういう会合があるからといって、特に僕が仕事を急いだかというのと、そうではない。なにせ、そこに行く確固とした約束をしてはいないのだ。まだ僕の心は行こうか行くまいか迷っていた。

行く理由としては、ユキに誘われたのだからその好意に応えたいというものだったし、行かない理由としては、そこにいるのは知らない人ばかりというものだった。

そんなどっちつかずの状態で急いで仕事をする気にもならず、僕は普段どおりに20分ほどかけて報告書を書き終えた。

仕事を終えて塾の入っているビルを出ると、もうすっかり暗くなっていた。暗くなっているところではない。時計を見るとその針は午後9時前を指していた。

（どうするか）

そう僕は思った。

ここに来て、行かない理由が一つ増えていた。やる気がないとはいえ、学校に行って授業を受け、それが終わってアルバイトもこな

した。その分だけ疲労があった。

駅に向かって歩きながら、僕はユキにメールを打った。「行く」とも「行かない」とも言わず、ただ一言「バイト終わったよ」と。

## 第132話：電信

駅に着いて切符を買う時、僕は少し躊躇ちゅうちゆした。もしこれからユキのいる所に直行しようと思つたら、そこまでの切符を買わなければいけない。まっすぐ家に帰るとしたら、それより手前で降りる切符だ。ユキからのメールの返事はまだ来ていなかった。

僕は、結局自分の家までの切符を買った。連絡が来ないという事は、もしかしたらもうクリスマス会は終わっているのかもしれない。だとしたら、今さら行つてもしょうがない。そう言い訳して、自分の家までの切符を買った。

寒いプラットホームから暖かい電車に乗り込み、疲れた体を座席にもたれかけて一息ついていた時、メールが入った。ユキからだつた。

「お疲れさまー。こっちはまだやってるよ」

来いとも来るなとも書いていなかった。僕はすぐに返信した。

「まだやってるんだ。楽しそうだね」

もしユキが楽しんでるなら、それはそれでいいと思った。楽しんでるなら、僕の出る幕はないだろう。このまま帰ろう。そう思った。そういう探りを入れるメールだった。

ユキからの返信はすぐに来た。

「あんまり楽しくないよ。なんか、周りは変に盛り上がってるけど、私とヒロミちゃんヒロミちゃんは冷めてる」

ユキらしいメールだった。ユキは、僕と同じように馬鹿騒ぎが好きではないのだ。僕はユキとメールを交換したり、電話で話したりする事によつてそれに気づいていた。

酔つ払つて騒ぐ人たちを尻目に、端っこでつまらなそうな顔をしているユキの顔が目につかんだ。少しユキがかわいそうになった。それは哀れみではなく、僕がいればユキは楽しめるかもしれないと

いう、好意のようなものからきた感情だった。  
それに、僕もユキに会いたかった。会うと楽しいだろうなという  
のは容易に想像できた。

「今どこにいるの？」

僕はそう返事をした。はっきりと行くとは書かなかった。突然に  
行って驚かせてやろうと思ったのだ。

「水道橋。東京ドームのところ」

返信が来た時、電車は既に僕の家を通り過ぎていた。僕はなるべく  
早く目的地に着くように電車を乗り換えた。

### 第133話：天蓋

水道橋の駅で降りて外に出ると、寒さが一気に襲ってきた。僕はいつもの茶色いコートのボタンを合わせ、風の中を歩き始めた。

コートの下にはスーツを着ていた。普段はスーツなんて堅苦しいものは着たくないのだが、バイト先ではスーツ着用を義務づけられていたので仕方がない。帰って着替えている暇はなかったし、そうする気もなかった。

それに、この滅多めったに着ないスーツ姿を誰かに見せたいとも思っていた。見せて、賞賛の言葉を得られるのならば、窮屈きうくつな思いをする価値はあるような気がしていた。

水道橋に着いてはみたものの、僕はどこに行けばよいのかよく分かっていなかった。確かに東京ドームは眼前にそびえていたが、まさかこの時間にドーム内部で何かがあるはずもない。おそらくユキ達はドーム近辺のどこかにいるのだろうが、どこにいるのかは不明だった。

僕は途方にくれて煙草に火を点けた。とにかく、東京ドームの下まで行こうと思い、再び歩き始めた。そしてドーム前の階段を上っていた時、電話がかかってきた。ユキからだった。

「お疲れー」

「疲れたよ。結構」

「今、どこにいるの？」

「んー。どこだろう？」

僕はなんとなく意地悪をしなくなって質問をはぐらかした。

「もう家に帰っちゃった？」

「さて？ てつかお前らはどこにいるのさ？」

「東京ドームのゲームセンターの前」

それを聞いて僕は歩き始めた。大体の位置の予想はついた。

「そんな所で何してんの？」

「んーと、さっきまで飲んでて、これからカラオケに行くかボウリングに行くか話し合ってるの」

「ボウリング？ あるの？」

「ゲームセンターの下にあるらしいよ」

質問をしたけれども、ボウリング場の位置などどうでもよかった。ただ話を引き伸ばして、その間にユキの所まで行きたかっただけなのだ。

## 第134話：視線

ユキからの質問をはぐらかして無駄な話をしているうちに、僕はゲームセンターの前までやって来た。なるほど、大学生らしい一団が騒いでいた。そしてそこから一步離れて、腰掛けて電話をしている女性がいた。ユキだった。

「ねえ、本当にどこにいるの？」

ユキが怒ったようにそう行つた。そろそろいいだろうと僕は思った。

「んーと、アレだね。なんで君はそんなつまんなそうな顔をしているの？」

「え？　なんで？」

「こちらから、きよるきよるしないの」

ユキの驚く様さまを見ていると面白かつた。そう言いながらも僕はユキの座っている所に近づいていった。

「あー！」

そう言つて僕を指差したのは、ユキの横で座っていたヒロミだった。それにつられてユキも僕の方を見た。

ユキは僕を見つけて一瞬目を見開き、そして笑つた。その笑いが僕に会えた嬉しさからなのか、からかわていた自分が滑稽こっけいだと思つたからなのか、僕には判別がつかかねた。

ユキとヒロミの様子を見て、周りの大学生達は何事かと僕を見つめた。そこにはまだ敵意はなく、何が起こつたのかを理解しようとする観察の視線だった。僕はその視線の中を、少し緊張しながら歩いてユキの傍まで行つた。

しかし僕に走り寄つて話しかけてきたのはユキではなかつた。それはヒロミだった。

「来たんだー」

「うん。どうしようかと思つたけどね」

「ユキに誘われたから？」

「まあ、そうだね。でも、どうなんだろう。オレ、来てもよかったのかな？」

まだ自己紹介も何もしていなかった。だから、僕が一体何者なのか、訝いぶかしむ視線は注がれたままだった。

その視線を察知してか、ヒロミは大声で皆に言った。

「この人はユキの友達。私たちが誘ったんだー」

その言葉で、やっと僕は好奇の眼差まなこしから解放された。まだいくらか不審な眼はあったものの、ヒロミがそう発言する前よりはかなくなりましになった。

## 第135話：別働

「久しぶり。元気してた？」

僕はユキにそう話しかけた。

「元気だったよ。バイトだったんでしょ？」

「うん。疲れた」

「だからスーツなんだ」

「そう。どうかな？」

「かつこいいよ。見違えた」

そう言ってくれた事で、窮屈きゆうくつな思いは軽減された。他のよく知らない女の子や、ヒロミに同じ台詞セリフを言われるより、ユキに言われたほうが何倍も嬉しかった。

「で、なんでこんな所で溜まってるの？」

「まだどこ行くか決まってるじゃないの」

「ボウリングかカラオケじゃないの？」

「それが、話がまとまらなくて……」

まとまらない、と言うより、まとめる気がないように見えた。その集団は程よく酔っ払っていて、この場でわいわいやっているのが楽しいのだろう。特に場所を移さなくてもそれはそれで楽しいのだろう。僕は寒かったが、酔っている人達はその寒さを感じないようだった。

しかし、ユキはそれにうんざりしているようだった。勝手に馬鹿騒ぎしていればいい、そんな雰囲気だった。

確かにそうだ。騒ぎたければどこかに行ってやればいいのだし、何もこんな所でたむろしている必要はない。無関係な人には迷惑な集団にしか映らないだろうし、寒さに凍えている人もいるのだ。

「オレ、腹減ってるんだけど、どこかに飯食える所ないかな？」

「あっちのビルの中に、いくつかお店があるよ」

「ここら辺、よく分かんないんだ。連れてってくれない？」

「うん、いいよ」

ユキとヒロミは集団のリーダー格の男に声をかけて、ご飯を食べ  
てくる、といった旨を伝えた。

実際、僕は昼から何も食べていないので腹が減っていた。そして、  
それはつまらなそうなユキとヒロミを連れ出す絶好の口実でもあっ  
た。

僕としても、よく知らない人々と一緒にこの寒空の中に突っ立っ  
ているのは嫌だった。アホらしかった。そしてユキもヒロミも、お  
そらく同じ事を思っていたのだろう。すんなりと僕と行動を共にす  
る事に同意した。

## 第136話：庶民

ドームを回りこむようにして少し歩くと、そこには何軒かレストランがあった。ビルの中にテナントがあるのだ。しかしそれらは庶民的とはいいがたい店だった。普段の僕だったら、まず行かない。僕に限らず、東京ドームという行楽地に遊びに来ただけの人はまず使わなそうな店構えだった。

普通、例えばドームに野球観戦に来た親子連れなんかはそこらでホットドックやらサンドイッチやらを買うのだろう。もちろんそれらは行楽地価格で多少高くはあるが。

しかし、もちろんそうだった庶民的な店は開いていない。時間が時間なのだ。開いている店は、ドームに付帯したホテルの宿泊客向けのものしかなかった。僕はそれらの中から、一軒の中華料理屋を選んで入った。中華料理なら、よっぽど変なものを注文しない限り、何とかなるだろうと思ったのだ。

それに、僕はバイト帰りだった。労働の疲れは、しかし言ってみればいくばくかの金銭を稼いだ証<sup>あかし</sup>だった。これくらいの贅沢は許されるだろうと思った。

店内に入り、スーツを着込んだ男性にテーブルに案内された。この時僕は、やはりスーツを着てきてよかったと思っただけでなくいつもの小汚いジーパンだったら、臆<sup>おく</sup>してこんな店に入れなかっただろう。

そんな僕と対照的に、ユキとヒロミは少し緊張していた。無理もない。彼女等は全く普通の服装なのだ。そして店内にいる客のほとんどは、スーツなりなんなり、最上とはいかないまでも、それなりにフォーマルな服装をしていたのだから。

4人がけのテーブルに着いて、出てきたジャスミンティーを飲みながらメニューを眺めた。もちろん最も注意したのは値段だ。それ

は、そこまで異常というほどの価格ではなかった。もちろん、かなりの値が張るものもあったが、もとよりそんなものを注文する気はなかった。

## 第137話：優雅

僕は少し考えた後にラーメンを注文した。ラーメンという表記ではなく、中国語の品名が記されてはいたが、つまりはラーメンだ。それが一番しつくり来るような気がしたのだ。庶民の僕にしつくり来るような気が。

「何か食べる？」

僕は2人にそう尋ねた。2人はメニューを見て困ったような顔をしてお互いの顔を見ていた。値段が怖かったのか、雰囲気けふに気圧けふされていたのかは分からない。しかし困っていた事だけは分かった。

「あんまりお腹空いてないんだ」

「さつき食べたしね」

2人は遠慮がちにそう言った。しかし、レストランに入って何も頼まないという法はない。

「何か甘いものでも食べれば？ デザートは別腹でしょ？」

そう言っ僕はメニューのデザートの欄を開いて見せた。そこには大衆中華料理店で一食食べられるぐらいの値段でデザートが載っていた。2人はそれをしばらく眺めてからアイスクリームを選んだ。アイスクリームは、最も安いデザートだった。

2人の緊張は、しかしながら次第にほぐれてきたようだった。ホテルの客が利用するからといって、そこまで高級な店ではないという事が分かってきたようだった。

なるほど、酔っているのか大声（もちろん、居酒屋のように法外な大声というわけではない）で笑っている親父もいたし、よく見ればそんなにフォーマルではない服装の客もいた。

それらを目にして、やっと自分達がいってもいいんだという安心感を得たようだった。そしてその安心感の要因の一つには、それなりにフォーマルな格好をしている僕がいたという事もあるのだろう。

僕は、と言うか誰でもそうだとは思うが、自分の服装に合った振る舞いをしたし、それはさして不自然には見えない。人は優雅にあらうと思えば優雅に出来るのだ。

## 第138話：感覚

大声で笑ったり騒いだりする店ではないので、会話はあまり弾まなかったが、それでも少しは話をした。僕のバイトの事や、今日の集まりの事など。

そうこうしている内に注文の品が来た。具が多少豪華なものの、見た目は普通のラーメンだった。それを見た2人も、「美味しそう」とも「不味そう」とも言わなかった。

僕は2人に見られながらラーメンを啜<sup>すす</sup>った。味は、確かに高級な味がした。そこらのラーメン屋の調味料の味に慣れた僕には、詳しい事はよく分からなかったが、それでも手間がかかっている事は分かった。

「どう?」

ユキがそう尋ねた。

「うん。よく分かんないや。だってオレ庶民だし」

僕がそう言うと2人は笑った。「味見する?」と訊くと、おっかなびつくりと順番にスープを啜<sup>すす</sup>った。僕は、(客観的に見ると変な光景だろうな)と思い、心の中で苦笑した。

「うーん。美味しいけど、よく分かんないね」

「いつも食べてるラーメンと違う事は分かるんだけどね」

口々にそう言った。僕は2人が、特にユキが、僕と同じような感覚を持っている事が分かって、なんだか嬉しかった。

僕がラーメンをほとんど平らげた頃、アイスが運ばれてきた。デザートとしてアイスを出すタイミングを見計らっていたのだとしたら、大した店だ。2人は喜んでそのアイスを食べ始めた。

「どう? 美味しい?」

今度は僕がそう尋ねた。

「美味しいよ。上品な味がする」

ユキは笑って答え、ヒロミはうんうんと頷いた。僕はラーメンを  
食べ終えて、煙草に火を点けた。そして一服しながら2人がアイス  
を食べる様を見ていた。まるで父親が我が子を見るように。

## 第139話：葉書

「そうだ。これ」

食事が終わって一息ついた時、僕はそう言っただけからある物を取り出した。それはクリスマスカードだった。

「どっちでも好きなほう選んで」

2枚のクリスマスカードは、その裏にペンでメッセージが書かれていた。そして2人は、それらのカードの裏表を眺めてどっちがいか相談し始めた。

2枚のカードの内、ヒロミに渡したほうは、いわばオマケだった。元々ユキに渡すだけの予定だったのだが、購入する時に迷ったカードがあつたので、選択肢の一つとして買っておいただ。

そして、今日バイトに行く際にその2枚をバッグに入れた。メッセージは電車の中で書いておいた。その時点ではどちらのカードを渡すか明確には決めていなかったたので、とりあえず2枚それぞれに異なるメッセージを書いておいた。  
それがこつこつという形で役に立つとは思わなかった。

どちらにどのカードを渡すか確定していなかったとはいえ、絵柄やメッセージから、その片方をユキに渡したいと漠然と思っただけだ。そしてユキが選択したカードは、僕がユキに選んで欲しいと思っただけだった。

もっとも、ヒロミが遠慮してユキに選択権を譲渡したのだけれども、それでもユキがそつちのカードを選んだ事は、僕とユキの感性が似ている事を示唆しているように思えた。

ヒロミが取ったほうのカードに書いたメッセージは、その場しのぎ的なものだったので覚えていないが、ユキのほうのカードに書いたメッセージはよく覚えている。

“ I hope you're happy Christmas  
and new year.”

良きクリスマスを。そして楽しい新年を」

クリスマスの歌の歌詞を少しいじっただけの変哲もない言葉だが、  
あえて「wish」ではなく「hope」を、「merry」でな  
く「happy」を用いた所が僕の変なこだわりだった。そうする  
事で、少しでも自分のオリジナリティを加える事で、その言葉は既  
成の馴染み深い物ではなくなり、僕の独自の言葉として贈れるよう  
な気がしたのだ。

## 第140話：奢汰

「ありがとう。大事にするね」

「カード貰ったのなんて初めてだよ。ありがとう」

ユキとヒロミが口々に感謝の言葉を述べ、大事そうにバッグに仕舞うのを見届けてから、僕達はレストランを出る事にした。むしろ、僕が出るように促した。

急いで店を出ようとしたのは、ユキの嬉しそうな顔を見て、思わず自分の顔も綻びそうになるし、そんな顔をして、ヒロミという第三者もいる前で、ユキとどんな話をすればいいのか分からなかったからだ。

ユキとヒロミを引き連れて、会計を済ませた。注文した物の料金他にサービス料もかかり、僕は少し驚いたがそれをおくびにも出さず全額を支払った。

ユキとヒロミは少し申し訳なさそうにしていたが、もとより僕が払うつもりだった。このレストランを選んだのは僕だし、デザートを注文するように勧めたのも僕だ。では、支払いも僕がして当然だろう。そう思った。

しかし僕は、普段ならあまり人におごったりはしない。仮にコンノのご飯を食べたとしたら、絶対におごらなかつただろうし、ノゾミやクミコの時でもまずおごらないだろう。

それが今回に限って自分からお金を出そうという気分になったのは、やはりバイト帰りで金を稼いだ気分になっていた事が大きいだろう。僕は、少しの事で太っ腹な気分になる小市民なのだ。

店を出たところでヒロミが電話をかけた。別行動している彼女等と同じ大学の面々が、今どこで何をしているのかを確認したのだ。

彼等は、当初の予定通り、ボウリングをしているという事だった。

そして僕達は彼等と合流すべく、ボウリング場に向かった。

## 第141話：闖入

「あ、いたいた。おーい」

ボウリング場で一団を見つけ、ヒロミが声をかけた。しかしその一団はさつき見た時より人数が減っており、5、6人になっていた。女の子は1人もいなかった。さすがに夜遅くまで遊んでいるわけにはいかないのだろう。

「何食べたの？」

「アイス。美味しかったよ」

親しげに報告するのを眺めながら、僕は突っ立っていた。ヒロミやユキだけならいいが、この場にいる人々の事を僕は知らなかったし、そこで親しげに話しかけるのはためられた。

「こつち座れば？」

ユキにそう言われて、僕は隅のほうの席に座った。近くの席にユキも座った。

僕は、彼等に話しかけようかどうか少し考えたが、今さら自己紹介をするのもどうかと思い、やめた。男連中はこんな突然の闖入者ちんにゆうしゃの事など別に知りたくないだろうと思った。なぜなら、僕が同じ立場に立たされた場合、そんなヤツの事などどうでもいいからだ。

そこはやはり居心地のいい場所ではなかった。男が数人に女の子が2人。どう考えても釣り合わない。男の人数が過剰だ。そんな中、見ず知らずの男がやって来て、2人の女の子の内可愛いほうと親しげに話をしているのだ。

僕の思い違いかもしれないが、何しに来たんだという空気を感じた。関係ない人物が、この内輪の会に来て何をするつもりだ。どうせ女の子目当てなんだろう。俺達の知り合いを横からかつさらうつもりか。口には出さねどもそういつた声が聞こえてきそうな、そんな感じだった。



第142話：余裕（前書き）

\*明日から三日ほど休みます。

## 第142話：余裕

そしてその集団の中には、ユキを狙っているらしい男もいた。ユキの気を惹ひこうとしてしているのか、何かとユキに話しかけていた。ユキは微妙な表情をしていた。嫌がっているのか楽しんでいるのかよく分からなかった。しかし、どちらかと言えば迷惑に思っているような、そういう印象を受けた。

その光景を見て、僕に変な余裕が生まれた。なるほど理系の大学生だけの事はある。彼等はいかにも女慣れしていなかった。それは、12月上旬に僕とNが出かけたパーティーの面々とは雲泥の差だった。僕は、一応彼女がいるし、女の子と遊びに出かける事も結構ある。彼等よりはましだ。そういう思いが、僕にある種の余裕を持たせたのだ。

「別にオレの傍にいらなくてもいいから、皆と話してきなよ」

僕はユキに言った。ユキは、もしかしたら僕に気を遣っているのかもしれないと思ったからだ。全然知らない面々の中で僕が1人居場所がないのを心配しているのかもしれないと思ったからだ。

「でも……」

「オレは大丈夫だよ。ここでボウリングしてるのを眺めながら、煙草でも吸ってるよ」

先ほどまでの僕ならば、僕を警戒するようなその場の雰囲気にはされて、1人でいる事に心細さを感じただろう。しかし僕の心には余裕が生まれていた。どんな鋭い視線でも、どんな居心地の悪い雰囲気でも、馬耳東風とばかりに受け流すことが出来た。そしてそんな自分の事より、彼等を放っておいて僕の相手をして、後々で変に噂を立てられるとユキが困るだろうと思ったのだ。

### 第143話：排他

僕のその言葉で解放されたのか、ユキは席を立ってヒロミの所に行った。しかしそれは、嬉々としてという感じではなかった。誰かに声をかけられればそちらに行つて相手をするものの、自分から進んで誰かの所に行く、という事はなかった。唯一の例外はヒロミの所だった。その様子からは、2人が仲が良いというだけではなく、ユキを狙っている男連中に対して、距離をおきたいような雰囲気を感じられた。

僕は1人になったが、構わずくつろいでいた。喉が渴いたので自販機でコーラを買つてきて、またもとの席に座つて飲んでいた。自分から誰かに声をかけようとはしなかった。

僕はこのグループの集まりに来るのは初めてだし、今後、長期的に関わる気はなかった。だから、自分から進んで輪に加わり、仲良く談笑する気などさらさらなかった。僕はただ隅に座つて彼等を眺めつつ、コーラを飲んで煙草たばこを吸つていれば満足だった。

しかし、それでは客人（招かれざる客だが）に対して悪いと思つたのか、1人の男が声をかけてきた。

「良かったら、次、僕の代わりに投げませんか」と。

食事をしていた関係上、僕とユキ、ヒロミの3人は、途中からボウリングに参加するわけにもいかず、他の連中が投げるのをずっと眺めていた。だからと言って、僕は特にボウリングがしたいというわけではなかった。目立ちたくはなかった。排他的な雰囲気漂うこの中で、そう言ってくれたのはありがたかったが、僕は礼を言うてから断つた。

「気を遣つてくれてありがとう。でも、別にいいよ。オレはここで見るから。」

「そう言わずに。ボウリング場に来て、ボウリングしないのは変で

すよ」

「でも、オレはボウリング下手だから……」

「大丈夫。僕も下手なんで。もうぶつちぎりの最下位なんですよ。だから、ガーターとかしても全然構わないんで、是非<sup>せひ</sup>投げてください」

そこまで気を遣ってもらつと、今度は断るほつが悪い気になる。

僕は「じゃあ」と言つて席を立ち、皆が見つめる中、一投だけ投げた。

結果は、ガーターだった。それはそうだ。僕はボウリングが得意じゃないし、スーツ姿で上にコートをはおり、ブーツを履いた格好で満足の投球フォームが出来るはずもない。

しかしそこには暖かい拍手が起こつた。僕は少し照れながら席に戻つた。その拍手にはもちろん嘲笑<sup>あざわらひ</sup>の意味が込められたものもあつた。たさるうが、しかし先ほど声をかけてきた人のように、素直にもてなしてくれているのもあるさるう。そう考えると、案外悪い気はしなかつた。

## 第144話：辞去

席に戻るとユキがやって来た。

「大丈夫？ あんまり投げたくなかったんじゃない？」

「いや、まあそれはそうだけど……」

「ゴメンね。無理やり投げさせて」

「なんでお前が謝るんだよ。別にいいよ。そんなに悪くなかったし。結果はガーターだけだね」

最後のほうをおどけて言うと、心配そうなユキの顔に笑顔が戻った。

「でも、そろそろ帰るよ。もう遅いしね」

「帰るの？ やっぱり、イヤだった？」

「そうじゃないよ。本当にそろそろ帰らないと。電車なくなるしさ」

「そう……」

ユキはそこで少し考え込むような仕草をした。

「じゃあ、私も帰る」

「いいって。気を遣うなよ。楽しんでいけばいいじゃん」

「ううん。私も帰んなきゃ、帰れなくなっちゃう」

実を言うと、時間的にはまだいくばくかの余裕があった。終電ギリギリの時間にはなっていなかった。ただ、僕が帰ろうとしたのは、なんだかもういいやという気持ちがあったからだった。

ユキはヒロミの所に行って何か話していたが、ほどなくしてヒロミを連れて戻ってきた。

「帰るの？」

「そう。なんか、ユキも帰るって言ってるけど……」

「うん。それ聞いて、私も帰る事にした」

「いいって。なんだよそれ？」

「だって、ユキも帰るんでしょ？ このまま朝までいようかとも思っただけど、ユキも帰るんだったら私も帰るよ」

話は急に進み、ヒロミがまたもやリーダー格の男に話をしに行った。女の子2人が帰るといっ話を聞き、男達からは「帰るの?」「なんで?」といった声が漏れたが、ヒロミは意に介さず、さっさと帰り支度をすませた。

## 第145話：散歩

型どおりの別れの挨拶をして、僕達はボウリング場の外に出た。そこから水道橋の駅までは大して遠くなく、5分も歩けば着いてしまふ距離だった。

「ねえ、どこから乗るの？」

そう声をかけてきたのはまたしてもヒロミだった。

「水道橋からだけど？」

「私達、地下鉄だから、御茶ノ水まで歩こうと思うんだ」

「そりゃまた元気だな」

「だって、一駅分乗るのも馬鹿らしいじゃない。それに、あんまり遠くないよ」

「じゃあオレもそこまで歩くよ」

僕は何の気なしにそう言った。

「え、いいよ。悪いよ」

「どうせJRでしょ？ 私達の事はいいから水道橋駅から乗りなよ」

「だって、夜遅いし。あんまり遠くないんなら歩くさ。送ってくよ」

驚いて遠慮する2人に対して、僕は強くそう言った。

「それとも、一緒に歩くのイヤ？」

「イヤじゃないよ」

「じゃあ決まり。こっちでいいの？」

そうして僕たち3人は、夜道を御茶ノ水方面に歩き始めた。

車の騒音がうるさいかと思っただが、道をよく知る2人の先導によって、大通りから一本裏の道を歩いたので、それほど騒がしくはなかった。深夜なので人通りも少なく、ちょっとした夜道の散歩のよくな感じだった。

夜空が綺麗で、星がよく見えた。なんとなくロマンチックなムードが漂う中、僕達は歩いた。いろんな話をしながら。

「あの人達とは、仲いいの？」

「うーん。学校ではよく集まってるよね」

「うん。皆で行動してる。仲いいと言えはいいね」

「ほうほう。じゃあそっから恋愛とか芽生えたりするわけですか」

おどけた調子で僕が尋ねた。探りを入れる、といった感じだ。

「いやー。それはないな」

ヒロミがあっさりと否定した。

「なんで？ だって、例えばユキとかもてそうだし」

「うーん。そうなのかな」

「ああ、多分あの人、ユキの事好きだよ」

ヒロミの言葉が指しているのは、おそらくユキに執拗じつようにからんでいた男の事だろう。

「そう言えばそれっぽい人いたね」

「んー。でも、私は別に好きじゃないんだ。どっちかって言うと苦手かな」

「ユキは……ねえ？」

「ねえって何よ」

「ねえ？」

そう言ってヒロミは僕とユキを見比べた。僕はそれが何を言わんとしているか予測できたが、あえて気づかないフリをした。

第146話：電車【第19章・完】

「2人で遊びに行ったりしてんの？」

「いや。行った事ないな。そう言えば」

「仲良さそうなのになえ」

「だってオレなんか誘っても遊んでくれなさそうだからねえ」

「そんな事ないよ。そっちが誘ってくれないんじゃないんじゃん」

「じゃあ今度誘っよ」

そう言いつつも、僕の心の中では何かがちクリと痛んでいた。ユキは、僕に彼女がいる事を知らない。ノゾミは、僕がユキと遊んでいる事を知らない……。

この場でユキに、僕には彼女がいるという事を明かさそうかと思っただ。ユキと2人きりだったらそうしていたかもしれない。しかし傍らにはヒロミがいた。それが、何だかその告白をためらわせた。

「うん。誘ってよ」

「はいはい」

表面でそんな軽口を叩きながら、深層では僕は二重の騙しを行っている自分を見つめなおしていた。ノゾミも、ユキも、僕とは違って純真だ。こんな2人をいつまでも騙していいのだろうか、そう思っていた。

そうこうしている内に御茶ノ水駅に着き、夜道の散歩は終わった。

「約束、忘れないでね」

「約束？ 何の？」

「もう。遊びに連れてってくれるって行ったじゃん」

「ああ、うん。今度ね」

最後にそんな会話をして、僕はJRの改札に向かい、ユキとヒロミは地下鉄の構内に向かった。

約束……。そんな約束をしていいものだろうか。ユキに真実を言

わないのは、知っていて僕を誘惑したクミコや、どうでもいい相手のコンノに対して真実を隠したそれとは、何か決定的に意味合いが違うような気がしていた。

ユキは、騙してはいけない相手だ。辛い思いをさせてはいけない相手だ。僕にそう思わせるのは、逆に言えば、それだけ僕がユキの事を大事に思っている証だった。

「はつきりしなくちゃな……」

電車のドアにもたれて、僕は1人そう呟いた。座席は終電近くまで飲んでいただろう人々に占領され、それにあぶれた数人の人々が立っていた。

だらしなく寝ていた酔っ払いが寝言をあげ、OLらしき女の人達が顔を見合わせてクスクスと笑った。いろんな人々といろんな思い、そして僕の懊惱おっのうを乗せて、電車は静かに夜の街を走っていった。

**第146話・電車【第19章・完】（後書き）**

\*ちよつと1週間ぐらい休みます。

## 第147話：都落【第20章】

### 20・贈り物

押し迫った年末の12月のある日。僕はコンノと電話をしていた。そしてその会話の中で、コンノが帰省するという話を聞いた。

「ふうん。家、どこだったけ？」

「青森。本州の一番上」

「で、どやって帰るの？ 新幹線？」

「新幹線はそこまで来てないんだ。深夜バスで帰るの」

「ほう。ま、気をつけてな」

「見送りに来てよ。バスは池袋から出るから」

「はあ？ なんでもたまたオレが行かなきゃなんないの？」

「いいじゃん。ヒマでしょ？」

「ヒマつつつてもわざわざそんなとこまで行く気になんないっつーの」

「だって、一人でバス乗り場で待っていると、なんだかすごく寂しいんだ。何て言うか、都落ちって言うか……」

切なそうにコンノはそう言った。僕にはその気持ちがなんとなく分かった。地方から上京してきた者の気持ちを、共通認識として感じる事が出来た。僕だって帰省するときには、東京から逃げていくような、東京に拒絶されたような、そんな気持ちになる時がごくたまにだけあったから。

そんな同情の想いからか、僕はその頼みを無碍むげに断るのも忍びなくなり、「行けたら行く」というまともや曖昧あいまいな返事をした。

それはしかし、一夜交わったからといって、あまり調子に乗られなくても困るという考えからの曖昧あいまいさでもあった。

## 第148話：自尊

しかし、結局のところ、僕は見送りに行くことを自分の中で確定させていた。

僕は、クミコとの一件もあり、ユキとも遊んでいる。そしてコンノすら、特別な感情もないままに抱いた。ノゾミという彼女がいながら。

だから、僕自身が清廉潔白かという点、そうではない事はもちろん自覚している。しかしながら、そんな僕でも、もはや汚れて墮落した僕であっても、少なくともなるべき紳士的で、なるべくフェアでありたいと思っている。

だから、コンノの帰省を見送りに行ったのは、そんな僕の良心でも言うべき部分の作用だ。

もちろん、僕がそうやってコンノに何かしらの誠意とか、思いやりとかと呼ばれるものを示す事で、コンノにとって、コンノの中で僕に対する評価、もっと即して言えば僕に対する感情、その恋心がどう変化するかもいくばくかは想像がついた。そしてそれが僕にとってプラスになるかどうかも。

だからそういう計算高い考えがまるでなかったとは言わない。でも、少なくともそれよりはずっと大きな部分で、僕は友人に対する優しさを与えたかったのだ。

僕が僕の事を本当の意味で軽蔑しないように。

## 第149話：西口

約束の日、夕刻に池袋に着いた。コンノの話によれば、そこから青森行きのバスが出るそうだ。

僕はその頃深夜バスというものを使ったことがなかったから、そういうものが池袋から出ていることを初めて知った。そもそも、深夜バスの路線が全国各地に向けてあるものだとは知らなかった。せいぜい東京と名古屋や大阪、京都、それに仙台ぐらいを結ぶのみだと思っていた。

しかし池袋西口には、多種多様な行き先に向けた発着所があった。北陸地方に向かうもの、近畿地方に向かうもの、そして東北地方に青森に向かうもの。

「着いたよ」とメールすると、すぐさまコンノから電話がかかってきた。

「ホントに来てくれたんだ」

「だって来いって言ったのお前だぜ？ いいから場所教えるよ。初めて来たから全然分からん」

コンノから発着所を聞き、僕は案内板を頼りにそこに向かった。実際、バス乗り場はおろか、池袋西口に来るのさえ初めてだった。その不安さが作用したのかどうか分からないが、コンノの姿が見えた時に、僕は以前よりコンノに親しみを感じていた。以前はおばさんくさいと感じた容姿や服装も、今回はあまり気にならなかった。コンノは普通の服装のほうが、凝った服装よりも似合う、そう感じた。もしかしたら、その時僕はコンノに対して、ある種の好意さえ生じていたかもしれない。

## 第150話：荷物

「荷物、そんだけ？」

僕はそんな自分の感情を打ち消すかのように、そしてコンノから発せられるであろう熱っぽい感謝の言葉を予防するかのように、ぶっきらぼうに尋ねた。

「うん。そんなに持ち歩くものもないしね」

そう答えるコンノが手にしているのは、小さなポストンバッグ一つだけだった。

「着替えとかどうするんだよ。服ないじゃん」

「そんなの実家にあるよ」

実家にある、というのは、僕にとって考えられない事柄だった。なぜなら僕の場合、実家にはほとんど着る服が残っていないなかったからだ。僕の生活の拠点は確実に（それはおそらく意識的に）東京に移っており、それと対照的にコンノの生活の拠点は地元と東京に跨っているようだった。

「あ、もしかして、バスの中で何泊かすると思った？」

「んなこと考えるワケないだろ。……もしかして、何泊もかかるの？」

僕が半ば冗談のようにそう訊くと、コンノは楽しそうに笑った。

「かかんないよ。そんなに遠くないって」

コンノは、僕が見送りに来たことで、何かしら気分が高揚しているようだった。もしくは、その高揚はこれから実家に帰る寂しさの裏返しだったのかもしれない。

「どっか座ろっか？」

そうコンノに促されて、僕たちは公園のベンチに座った。バスの出発時刻までまだ少し時間があった。

## 第151話：認識

立ち話ではなく椅子に座ることで、コンノの心の高ぶりが落ち着いてたのか、口数が少なくなつた。先ほどの高揚の反動がきているようだった。いくつかの発着所にバスが来て、大きい荷物を抱えた客がそれをバスのどてつ腹のトランクにしまい、切符を見せて車内に消え、そうしたすべての客を乗せたバスそのものもまた眼前から消えていった。

さつきまでそこにあつたものが、いた人が、ほんの数分でなくなつてしまう。眼前の存在が消えてしまう。それは傍観者である僕からしても、侘しい有様だった。ましてや、実際にこれからバスに乗るコンノはどんな気持ちだったのだろう。独り長い時間バスに揺られて何を考えるのだろう。

「ねえ」

数分の後コンノが口を開いた。

「こつち戻ってきたら、また遊んでくれる？」

「つつか、いつ戻ってくるんだよ？」

「あ、気になるんだ？」

「バカ。それが分かんないや遊ぶもクソもねえだろ」

おそらくコンノは寂しいのだろう。そしてそれを隠そうとおどけているのだろう。そんな印象を僕は持った。僕はそんな相手に優しく接することもできた。しかし優しさが僕の望まない結果を生むだろうことも予想できた。だから僕はずっとぶつきらぼうだった。

「んつとね、1月7日ぐらい」

「ずいぶん遅いんだな。そんなに長く向こうで何すんの？ 暇じゃない？」

「いろいろ友達と遊んだり、家族と出かけたり、かな。それより、質問に答えてないよ」

「え、何が？」

「遊んでよね。戻ってきたら」

「ああ、はいはい。ヒマだったらね」

「いっつもそう言うんだから……」

コンノは、それが僕の違和感に繋がるのだが、まるで彼女のように振舞う時があった。「彼女のように」とまではいかなくとも、友達以上の関係のように、だ。そしてそれが僕がコンノを拒む一つの理由になっているのは確かだった。お互いの距離感に対する認識の違い、それがある限り、僕とコンノは付き合うことはないだろうと感じた。

## 第152話：義理

「あ、バス来た」

発着所に青森行きバスが到着し、人々が動き始めた。

「じゃあ、行くね」

「あ、ちよつと待って」

バスに向かおうとするコンノを呼び止め、僕は鞆を漁った。

「ほい。やるよ」

中から取り出したのはクリスマスカードだった。以前、ユキに渡したカードがあるが、そのカードを購入する際、候補として買っておいた物の一つだった。

ユキの場合のように何か特別なメッセージを書いたりせず、ただ単に「メリークリスマス」とだけ書いた。

「わあ、ありがとう」

本当に嬉しそうにコンノは言い、しばし眺めた後大事そうにバッグにしまった。

「じゃ。よいお年を」

「ああ、よいお年を」

コンノは手を振ってバスに乗った。僕はそのままぼつとバスを見ていた。バスが走り去るまで見ていた。いつだったか、実家に帰る僕をクミコが見送ったように、今、実家に帰るコンノを僕は見送ろうとしていた。

（ああ、あの時クミコはこんな感じだったのだろうか）とふと考えた。

絶対に彼氏彼女の関係になることはない相手、その相手に義理でつきあう時というのはこういうものか、と。

バスが去った後、少しだけ寂しくなった。その反面、少しだけほっとした。一仕事終えたような、そんな感触だ。

僕は寒さで丸まった背筋を伸ばし、煙草を一服した。池袋の街は

クリスマスの装飾で彩られていたが、僕にはあまり関係のないような気がした。僕はそんな街で、クリスマスに関する用事を一つだけ済ませてから家に帰った。

### 第153話：予感

クリスマスが近かった。普通の、ごく普通のカップルなら、クリスマスといえ、恋人と過ごすのが通例だ。デートし、食事し、プレゼントを交換し、セックスするのだろう。

しかし僕とノゾミは遠距離恋愛だ。その日に会う事は不可能とまでは言わないがやりづらいことだった。確かに大学は冬休みだし、ノゾミの学校だって休みだ。僕は早めに実家に帰る予定だったが、それでもクリスマス前というのはなかなか難しかった。バイトもあつたし、集中講義もあつた。

それでもなお、僕はどうかしてその日にノゾミに会えないかと思つた。バイトは調整してもらえばいいし、集中講義はその近辺だが当日ではない。僕は、クリスマス前に帰れるよう少しずつ動き出した。

だが、ノゾミにそれとなくその日の予定を聞いたところ、生憎とその日はバイトが入っているとわれ、僕の計画はあえなく頓挫した。考えてもみれば、クリスマスは飲食業界にとっては稼ぎ時でもあるのだ。その日にバイトを休むのはなかなか難しいだろう。

代わりといえ、変に聞こえるが、クリスマス前のある日に、クミコが泊まりに来ることになった。最近僕の家に来ることはほとんどなかったのだが、どういふ風の吹き回しか来ることになった。しかし僕にもなんだかそんな予感があつた。クミコとの間にこのまま何もなく、年が明けるとはならないだろうという予感だ。

## 第154話：警戒

その日、クミコは普段と変わらない様子で僕の部屋にやって来た。普段というのは友達としての普段という意味であり、例えば僕とクミコが大学内で接している時のような距離感だった。

それは単なる異性の友達であり、それ以上は考えてはいけないことを指していた。元より、僕もそのつもりだった。クミコとは、けじめをつけなければいけないのだ。

「飯は？」

「食べてきた。ケンタッキー」

「いかにもだな」

「でしょ？」

クミコは僕の部屋に上がりこみ、マンガを読んだりテレビを見たり僕と他愛ない話をしたりした。最近の学校のこととか、彼氏とうまくいってないとか、そういう話だ。

僕は僕である決意を持ってクミコに接していた。ある種警戒していた。以前あったクミコとの肉体的な関係、それを再開させることを避けていた。話の流れでそういう風にならないようにと。

だがそれは杞憂のようだった。クミコ本人にもそういう気はないようだった。あるのは友達としてのそれだった。一方僕の中で、その時クミコに対する愛情が全くないかといえはそうではなかった。以前のような熱烈な感情はないものの、その残滓ざんじのようなものはあった。そういう意味では、僕が本当に警戒していたのはクミコではなく、自分の中のその感情が表に出ることだった。

## 第155話：首飾

「そういえば、クリスマスどうすんの？」

突如、クミコがそう訊いてきた。

「何もないよ。その日に会おうかと思ったけど、あっちはバイトだつてさ」

「うわー、辛いね」

「まあ、しょうがないよ。そっちは？」

「私も、会えるかどうか分かんないな。あいつ、はつきりしないから」

「プレゼントとか交換すんの？」

「するよ。まだ買ってないけどさ」

「ああ、ちよつと待って」

話を途中で制して、僕はごそごそと押入れを探った。そして押入れから小ぶりな紙袋を取り出した。

「ほい、これ。クリスマスプレゼント」

手渡した紙袋の中には、ニコルのネックレスが入っていた。先日コンノを見送りに行った際、池袋で購入したのだ。

「え？ 何で？」

「いーから。やるよ」

僕は無理やりにクミコにそれを押し付けた。

「つけてみて、いい？」

「どうぞ」

クミコはタートルネックのセーターの上から、銀色に光るネックレスをつけた。小ぶりなしずく型のネックレストップは、日ごろクミコが身につけるアクセサリーよりいくらかおとなしいデザインではあったが、その日の服装によく似合っていた。

今思えば、その時の僕は手切れ金を支払う時のような気持ちではなかっただろうか。ネックレスを渡した時、僕の中で何かが変わった

気がしたのだ。クミコに対する感情に、何か吹っ切れたものを感じた。

## 第156話：区切【第20章・完】

「ありがとう、でも……」

「でも？」

「でも、私はあげるもの用意してないよ」

（本当に貰っているの？）そう問いかけるようにクミコは言った。その時僕の頭の端で（じゃあセックスさせてくれよ）という言葉がちらりと浮かんだ。性交渉だけでなく、それを契機にそれ以上の愛情を求める気持ちだが、少しだけあった。

だが僕が実際にその言葉を発することはなかった。そういうことを終わりにするために、はじめをつけるために、僕はネックレスを用意したのだ。

「いいんだよ。別に見返りとか期待してない。ただ単純に『今年1年ありがとう』って気持ちの表れだから」

僕がそう答えると、クミコはうつむいた。うつむいて、泣き始めた。僕は泣き出したクミコの気持ちが分からなかった。嬉しいのか、悲しいのか、どちらとも判別できなかった。

だから何も行動できなかった。頭をなでるとか、肩に手を置くとか、抱きしめるとか、どの行動が正しいのか分からなかった。僕の行動が何を起こすのか、想像できなかった。部屋には時折しゃくりあげるクミコの嗚咽だけが聞こえた。そんな、クリスマス前の夜だった。

その後、僕とクミコは別々の布団で寝た。二人の間に何の肉体的交渉もなかった。お互いにそうするのが正しく、そうしないといけない気がした。

そして次の日の朝、クミコは僕の部屋を後にし、同じ日の午後の飛行機で僕は実家に帰った。部屋を出て行くクミコの後姿を僕が見ることも、実家に帰る僕をクミコが見送ることも、もう二度となか

つ  
た。

## 第157話：発案【第21章】

21・知己

クリスマス前に帰省してはみたものの、僕には特にやることなかった。高校時代の友人は、ほとんどが県外の大学から帰ってなかったし、県内に残っているのは知り合いであって特に会いたい友人ではなかった。

クリスマス当日は結局ノゾミに会うことは出来ないし、バイトが忙しいそうでも少なくとも年内に会うのはできなさそうだった。

それでもなんとかお互いの予定を合わせ、大晦日から元旦にかけてノゾミの地元の神社（なかなか由緒正しい）に行き、初詣をすることになった。

それにより大晦日の予定は決まったものの、現状として僕はヒマだった。

生活の拠点を東京に移しているの、実家には僕を楽しませるものはほとんどなかった。CDも持ち帰った数枚しかない（もちろんその時代にiPodなんてない）し、本も、マンガも、散々読み尽くしたものが残ってなかった。下手をすれば着る服すらなかった。やることがないという状況から、自然、僕は考えごとにふける時間が多くなった。頭に浮かぶのはもちろんノゾミのこと、そしてユキのことだった。二人の長所を比べ、短所を比べた。しかし総合的にどちらが優れているかは判断できなかった。当たり前だ。長所や短所は他の長所や短所と比べられるものではない。

そうした非生産的な時間を過ごす中で、そこから脱却するアイデアを僕は突然思い立った。環境を変えよう、隣の県庁所在地にある大学に通っている高校時代の友人、Sの下宿に行こう、と。

思い立ったが吉日で、僕はすぐさまSに電話した。突然の提案だ

つたが彼は快く了解してくれた。僕は家にいた親に「2、3日Sの所に行つてくる」と言い残して、数枚の服と数枚のCD、そして一冊の文庫本を持って駅に向かった。

## 第158話：鈍行

駅に到着し備え付けの時刻表を見てみたが、僕が行動を開始したのはもう夕方近くだったため、Sの所まで行くのはなかなか困難だった。僕は苦心しながらも乗り換えルートを探した。それは、初め数駅間を鈍行で、残りを特急列車で行くルートだった。

田舎なので時間によっては1時間ほど電車が来ないのだが、運のいいことにほどなく来る鈍行があった。到着した電車に乗り、ドアの近くのシートに身を埋めた時、僕はいつになく心が弾んでいるのに気がついた。

それもそのはず、Sは僕の高校時代の一番の親友だった。高校時代、一緒に過ごした時間は他の誰よりも多く、語り合った事柄は他の何よりも深かった。そんな彼に会えるのだ。ただ会えるというだけでも僕の心が浮き立つのは自然なことだ。

しかし鈍行がのろのろと進んだり停まったりを繰り返すにつれて、その興奮も少しずつ鎮<sup>しず</sup>まってきた。

暖房の熱気に押されて睡魔が襲ってきたが、ここで寝るわけにはいかなかった。特急との乗換駅が近く、それに乗りそびれるとこの小旅行自体が中止になってしまう。逆向きの鈍行に乗って惨<sup>みじ</sup>めな思いを携えて家に帰るのだけは避けたかった。

睡魔と闘い、なんとか寝ないままに乗換駅に着き、僕はホームに降り立った。と、同様に電車を降り、出口に向かう人に見覚えがあった。それは高校の時のクラスメイト、僕がかつて告白し、あえなく玉砕した相手だった。

夏に教習所で出会っているから、実に半年ぶりになるのだが、ずいぶん大人びた風貌になっていた。おそらく大学生活や一人暮らしに慣れたということだろう。向こうは僕の存在に気がついていないようだったが、僕は声をかけようとはしなかった。半年前とは違い、

ドキドキもしなかった。ただ、とある古い知り合いを見かけた、と  
りたてて珍しいことでもない、そういう心境だった。

## 第159話：特急

ホームを横断して特急列車に乗り込んだもの、生憎あいにくと席は全て埋まっていた。仕方なく、僕は喫煙車両のデッキにすることにした。

電車が動き出して数駅に停車しても、一向に席が空く気配はなかった。さらには乗る人がいるために余計に混雑してきた。後から乗った人はデッキにもいられず、車両内の通路で荷物を抱えて立っていた。しかしそれはそれで利点があるようで、たまに一つか二つポコツと席が空いた時、速やかにその席を占拠していた。

僕は相変わらずデッキにいた。たまに煙草を吸いながらCDプレイヤーに耳を傾けていた。立っていると足が痛くなってくるのでしばらく座ってみたり、座っていると足がしびれてくるのでまた立ってみたりを繰り返した。デッキは暖房が入ってないのか肌寒く、僕は上着の前をきっちり合わせ、外界と自分を遮断するかのよう丸まっていた。

「すみません、降ります」

その声に僕はあわてて起き上がった。立ち上がり、駅で降りる人に道を譲った。

どうやら丸まって座っているうちに、いつのまにか眠ってしまったようだ。車内を覗いてみると空席がいくつもあった。終点であるSの最寄り駅に着くまであと1時間。僕は1時間半ぶりに座席につくことが出来た。

暖房の効いている車内はさぞ眠くなるだろうと思ったが、逆に効きすぎの暖房は心地悪く、僕の眠気は途端に冷めてしまった。

コートを脱いで網棚にしまい、ぼうつと車窓を眺めた。外は月のない夜空だった。たまに民家の明かりが通り過ぎた。そんな窓外を眺めて自然と考え出した。ノゾミとユキのことを。

## 第160話：車窓

実家に帰っても、ユキとはメールしていた。毎日でないにせよ、適度な頻度で。ユキとメールするのは楽しかった。一方、ノゾミとも同じくらいの頻度でメールしていた。年末に会う約束をしていたし、それが東京ではなく実家で年を越す理由の一つでもあった。

そしてなにより、ノゾミは僕の彼女だった。彼女として、特別に不満な点はなかった。むしろ、責められるべきは僕だった。僕の方が、彼氏として不適切な行いをしていた。

クミコと最後に会った日に一つのけじめはつけた。あとはコンノとユキのことだったが、コンノのほうはもとより僕に恋愛感情がないのだ。これ以上進展しようがないし、逆に連絡を絶ちたいくらいだった。

しかしユキとは……。

最近の僕は、もしユキが彼女だったらと考えることがあった。もちろんノゾミのことは大事だ。しかし、ユキのことも大いに気になっていた。

かつてコンノが提案したように、ユキを「東京の彼女」にできれば問題は解決しそうではあった。しかしそれは僕にはとてもできないことだった。人としてはいけなしいと思っただし、ユキをそういう風に扱うのも、ユキを不公平な立場に置かせるのも嫌だった。

僕はまた混乱し始めた。どうしていいやら分からない、いや、分かっているのだがそこに踏み出せないといった気持ちだった。

混乱のうちに列車は終点に、Sの住む街に近づいてきた。外の風景も街の明かりが増えてきた。僕は到着時刻をメールし、夢から現<sup>うつろ</sup>に戻る作業に入った。

## 第161話：型番

「久しぶり。よう来たな」

駅を出て見渡すと、高校時代と変わらぬSの笑顔があった。その顔を見るだけで、僕の顔も自然とほころんできた。

「なかなか疲れたやろ？ とりあえず、荷物置きに一旦下宿に行こか」

そう言うと、Sは僕の荷物を持った。元より一個しかないのだが、それでも持ってくれる。彼はそういう男だった。

Sの家に着くまで、お互いの近況を報告しあった。もちろん僕の女性関係のことは口に出さなかった。物事を話すのにはしかるべき時間と場所がある。いくら大親友といえども、久々に会って数分で、しかも路上で話す話ではないからだ。

「そのジーンズ、ブーツカッター？」

何の脈絡もなく、Sが僕にそう問うた。

「ああ」

「517？」

「そうや」

「なんや。東京行って色気づいたんか？」

「別にそういうわけやない」

517というのは、リーバイスのジーンズの型番だ。別段、僕もSもジーンズに詳しいわけではない。高校時代も特別にそんな話をしたことはない。だから僕が517という型番を知ったのは大学に入ってからだし、Sもおそらくそうだろう。

だからこの会話で、二人がお互い大学生になって離ればなれになつて別々の時を過ごしても、同じ方向に興味を持って同じ方向に向かっていることを認識させられた。

そして「色気づいたか」という言葉は、僕の現状を見透かされたような気がした。恋愛に心奪われ、俗な欲望のままに女性と仲良くなりたがり、その結果自滅しそうになっている現状を。

## 第162話：制止

話しながら歩いているうちにSの下宿に着いた。体感にしてみればあつという間だが、十数分は歩いたと思う。下宿は大学近くの繁華街から少し奥に入った通りにあった。低層マンションの、他の部屋と独立した部分にある角部屋で、繁華街に近い割に静かだった。

部屋の中は潔癖な彼の性格を表すようにきちんと整頓され、本は本棚に、CDはCDラックにちゃんと収納されていた。僕の乱雑な部屋（それは僕の飽きっぽい性格を表している）とは対照的だった。棚の上にはバイクのヘルメットとツーリングの写真があった。壁際に彼の大切になっているギターが置いてあり、壁には彼の好きなギタリストとNBAプレイヤーのポスターがさりげなく貼ってあった。

「飯は？」

部屋に荷物を置いてすぐ、Sはそう問いかけた。一服する暇もなかった。もつとも、彼は喫煙者ではないので一服するには外に行くかベランダに出るしかないのだが。

「まだ食ってない」

「そうか。ラーメンでも食いに行くか？」

「ええな」

大学の側のラーメン屋でラーメンと餃子を食べた。雑誌に載るような店ではなく、味で勝負しているこだわりの店でもない。よくある昔からの街の中華そば屋といった感じで、付近の住民と大学生に支えられて細々とやっている様子だった。

僕は食事と共にビールを注文しようとしたが、「後で飲もうや」とSに制止された。彼は酒が苦手ではなく、日頃は餃子にビールという組み合わせを好んでいたはずだ。僕は（せっかくなのになぜ飲まないんだろう？）と少し不思議に思った。

## 第163話：暖気

部屋を出て駐車場に行くと、そこにはSのバイクがあった。アメリカン・タイプの中型バイク、青色のステイード400だった。

キーを回してエンジンをかけ、しばらく暖気している友人の姿を、僕はぼけっと見ていた。それに気づいたSがヘルメットを放ってよこした。

「着け方、分かるやる？」

「ああ」

バイク自体は他の友人宅で何度か乗ったことがあったので、ヘルメットの着け方は知っていた。

Sは僕がヘルメットを被り、あご紐を締めるのをじっと見ていた。そして着け終わった僕と目が合うと、首を横に振って近寄ってきた。「ちよつとあご上げてみる」

「こうか？」

あごを上げるとSは僕がやったのよりきつくあご紐を締めた。

「きついけど我慢せえよ。……よっしゃ。これで大丈夫や。寒ないか？」

「大丈夫やと思う」

「バイクなめんな」

怒ったようにそう言つとSは一旦部屋に戻り、自分の分厚いトレーナーを持ってきた。

「悪いこと言わんから、中にこれ着とけ」

言われるままに中にトレーナーを着込んだ。僕の上着は小さめだったので、トレーナーを着て上着の前を締めようとするするとジッパーがきつかった。苦労して上までジッパーを上げSの方を見ると、彼はすでにバイクに跨っていた。

手袋を履いてSの後ろに乗った。手をおずおずとSの腰に回すと、彼はその手をつかみ、荒々しく彼の上着のポケットに入れた。

「しっかりと掴まっつけよ。腰の辺りを掴むんや」  
言われたとおりにすると、Sは後ろを向いてにかっとなんて笑った。  
そして僕たちは走り出した。冬の夜に向かって。

## 第164話：疾走

僕たちは、繁華街とは逆の方向に向かった。街を抜けるまでは信号で停まつたりちよつとした渋滞のようなものに捉まつたりしたが、郊外に出るにつれその頻度は低くなってきた。

僕は、どこに行くのか知らされてなかった。不安が全くないと言えは嘘になるが、相手はSだ。おかしな所には連れて行くまいという信頼があつた。

だから、黙つてSに身を預けていた。

郊外を抜けるとその走りを阻害されることはほとんどなかった。暗い夜の帳とぼろの中を僕たちは突つ走つた。Sは徐々にスピードを上げ、僕はしがみつくのに必死だつた。

寒さも相当なものだつた。Sの忠告で中に1枚着込んでおいてすら、冷たい風が体を刺した。さらには僕の被っているヘルメットにはフェイスガードがついていなかった（Sのにはついていて）ため、冷気を直じかに顔で受け止めることとなつた。

Sの背中に顔を埋めればいくらかマシになるのだが、僕はあまりそうしたくなかつた。男の背中に顔を埋めるのもなんだか気恥ずかしかつたし、なにより自分の、自分たちのこれから行く道を、前方の景色を見たかつた。ライトに照らされた田舎道は、無駄に綺麗に舗装され、そして曲がりくねつてはいたが一本道だつた。分岐のない、一本道だつた。

「寒いかな？」

何度目かの信号でSは後ろを向いてそう尋ねた。エンジン音が邪魔をするので大きめの声で。

「寒い。クソ寒いぞ！」

そう僕は怒鳴つた。大口を開けないと寒さで強張つた口がうまく

動かなかった。怒鳴った後で笑った。ひとしきり笑った。

「こんなクソ寒い中に連れ出しやがって！ 酷いヤツやなお前は！」

「まだまだ行くで。覚悟しとけよ」

Sの言葉と共に信号が青に変わり、アクセルが豪快に回された。

僕はその加速に耐えるために、再びSにしがみついた。

## 第165話・厚情

変わる風景、抜けていく風。どれくらい走ったのだろう。街を、丘を、ストレートを、ワインディングを……。

走りに走って僕たちは辿り着いた。そこは、海だった。湿り気を帯びた冷たい空気は潮の匂いがした。

「あはははは。あー、クソ寒かったー。死ぬかと思ったわ」

「軟弱やな。これやから東京モンは」

「関係あるかい。ほな、お前は寒なかったんかい」

「ん？ もちろん寒かったよ」

そこで僕たちは声をあげて笑った。道路脇にバイクを止め、防波堤に向かつて歩いていった。

冬の海岸は寒かったが、さっきまで突っ切る風に晒されていた僕たちには、海風はむしろ暖かくすら感じた。Sが自動販売機で熱いコーヒーを2本買い、1本を僕に放ってよこした。

「すぐ飲むなよ。しばらくカイロみたいにして暖まってから飲むや」

「ずいぶん慣れとるな。よく来るんか？」

「たまにな。どうや、バイク、気持ちよかったか？」

「おお、最高に気持ち良かったぞ。寒かったけどな」

僕は笑顔でそう答えた。冷気で突っ張った顔を壊すように、僕は表情豊かに笑った。

「そんならよかった。やっといつものお前に戻ったな」

「え？」

「なんや、『急に来る』言うから何かあったんやろな思ってた、それで来たお前の顔見て確信したよ」

「……おかしかったか？」

「酷い顔しとつたな。……おいおい、また暗くなんなよ？」

やはり、やはりSは親友だ。一瞬で僕の変調を見抜き、それに対処してくれたのだ。そのためにラーメン屋で酒を飲まなかったのだ。おそらくSは気分が沈んだ時、ここに走りに来るのだろう。そんな自分の経験から、僕を励ますにはここだと思ったのだろう。僕はSの篤い友情に涙が出そうになった。それを我慢しながら歩いていくうちに、防波堤の突端に着いた。

## 第166話：慈愛

コーヒを飲みながら、そこで僕たちはしばらく黙って海を見ていた。波が打ち寄せては引く様を眺めていた。月のない夜は暗く、水平線の向こうでは海と空との境が曖昧だった。そんな曖昧な境目を、僕たちは見ていた。飽きもせず、見ていた。

「いろいろ、あるねん」

口を開いたのは僕だった。すぐ隣に親友の気配を感じながら、水平線を眺めながら僕は言った。

「でも、上手いこと言えそうにない。やから……」

再び沈黙が続いた。波の音だけが聞こえていた。

「何も上手いこと言う必要はないし、いつでもお前が言いたい時に言うたらええねや。いつでもな」

Sの言葉には慈愛が満ち溢れていた。僕は目頭が熱くなるのを感じた。

「それに、ここで話されても困るしな。だって……」

「だって？」

「だって、寒いやん？」

僕たちはまた顔を見合わせて笑った。ひとしきり笑った後、Sが「帰るか」と提案し、僕は喜んでその提案に乗った。

夜の更けた帰り道は行きよりもさらに寒かったが、僕は顔をSの背中に埋めていたので顔に関しては寒くなかった。

その日、Sの下宿に戻った僕たちは、すっかり冷え切った体を温めるべく、近くの温泉地に行った。

「風呂場でタオルで股間を隠すんやないぞ。地元の人に馬鹿にされるぞ」

そんなSの忠告に、僕はすんなり従った。今までは気恥ずかしさから股間を隠していたが、実際、その布つ切れを取り去って風呂場

を悠々と歩くのはなかなか爽快だった。Sと一緒に風呂に入るのも初めてだった。以前の僕なら恥ずかしがっただろうが、今や何の恥ずかしさもなかった。

## 第167話：不変

温泉でしつかり温まった後で、お預けになっていた酒を飲もうと蒸留酒をいくつかとコーラの6本セットを買って帰った。しかし、結局飲んだのはそれぞれコーラ1缶だけだった。ダイエーかどこかのプライベート・ブランドの、炭酸が強いだけが売りのコーラだったが、僕にはとても美味しく感じられた。

冬の夜に散々バイクで走り回った僕たちは予想以上に疲れており、夜も更けたこともあって眠くなっていた。

Sの部屋には布団が一組しかなく、僕は仕方なく服をありったけ着込んで、こたつに入って寝た。風邪をひくかとおもったが、こたつは温度調整さえしつかりしておけば案外快適で、防寒という点では、ともすれば布団よりも優れていたかも知れない。

人の家なのだが、自分の部屋にいるかのような、とてもくつろいだ気分僕は眠った。

次の日はSにとって忙しい日で、午前中にバイトが、夜にサークルの飲み会があった。Sはちゃんと8時に起きてバイトに行き、僕はだらだらと昼近くまでコタツでまどろんだ。昼ごろ、僕がしつかりと覚醒して、寒いベランダに出て煙草を吸おうかどうしようか迷っているときSが帰ってきた。僕たちは昼食を摂るために（そして僕は煙草を吸うために）外に出かけた。

昨日とは別のラーメン屋（味自慢らしい）で昼食を摂り、そのまま繁華街を散歩した。

CD屋で視聴したり、電気屋を冷やかしたり、本屋で音楽雑誌を立ち読んだり、ビリヤードをしたり……。それは高校時代の放課後とほとんど変わらぬ行動だった。時間と場所こそ違えど、僕たちの嗜好（思考？ 指向？）は、変わっていなかった。

そしてそれゆえに、僕たちは高校卒業後も仲良くやっていけるの

だ。

## 第168話：陽気

夕方になり、Sはサークルの飲み会に出かけていった。

「一緒に晩飯食えんですまん。一人で食えるか？」

「オレはガキちゃうわい。一人でどつかそこらで食うわ」

減らず口をたたくSに僕はそう返したが、結局夕食はコンビニで買った。どこかに出かけて食べて、その後街をうろついてもよかったのだが、不慣れな土地で知らない店に入るのも不安だったし、昼間にある程度ぶらぶらしたので特に見るべき場所も残っていなかった。だから、Sと分かれた後はコンビニに寄っただけで、寄り道せずSの部屋に戻った。

そして僕はまた一人になった。

ずっと一緒にいたSがいなくなることで、その反動で急激に寂しくなるかと思っただが、陽気な気分は案外長持ちした。一種の興奮状態が続いていたのかもしれない。事実、夜まで酒は一滴たりとも飲んでいないのに、僕はSの前ではまるで酔っぱらったかのようにご機嫌だった。

しかし時間の経過と共に、さすがにその陽気なエネルギーも途切れてきた。僕はSの部屋にあるマンガを読んだりCDを聞いたりしていたが、次第に独りであることの寂しさが募ってきた。それまでは昨日の余りのコーラを飲んでしたが、酒が欲しくなってきた。酒で気分を紛らわしたかった。

昨日飲む予定で買っておいいたウイスキーに手を伸ばした。グラスにダブルで注いで、さっきのコーラで割った。

それをチビチビとやりながら、昨日今日のことをしみじみ思い出した。Sの篤い友情を思い出し、そこから高校時代に思いを馳せた。

## 第169話：敬意

僕は、時々Sが、なんでこんなに人間として大きくて同性として尊敬できるSが、僕なんぞと親友になったのか不思議に思う。Sは、客観的に見ていい男だと思う。硬派で、筋が通せて、責任感があり、人を思いやれる。それが、なぜ僕と……？

高校の時もそんなことを考えたことがあった。そして、それをふと母親に漏らしたことがあった。すると母親はしみじみとこう言った。

「貴方の友人が素晴らしい人で、自分にはもつたいないと思っててもそんな人が友人でいてくれるのは、きっとその人も貴方の中に尊敬できる部分を見ているのよ」

僕は今、その言葉を思い出していた。そして、心を決めた。

昨日、夜の海で言えなかったこと、僕の恥ずかしい恋愛事情と右往左往している現状、それを今夜、Sに話そうと。むしろSに話せないのなら、きっと僕はこのことを誰にも言えない。言えないまま自分の中で苦しみ続けるだろう。

僕がSを尊敬しているようにSもまた僕を尊敬してくれているなら、きつと僕を軽蔑することはないだろう。そして、それを打ち明けることで、おそらく僕らはもっと打ち解けることができるだろう。昨日の銭湯で感じたように。

ガチャガチャと鍵を開ける音がして、きしむ音をたてて重い扉が開いた。

「ただいま」

帰ってきたSの顔は少し赤くなっていたが、それは酒のためというより戸外の寒さのためのもようだった。

「お疲れ」

「おう。あれ？ ずっと家におったん？」

「特に行きたいとこないしな。昼間さんざん歩いたし」

「飯は？」

「コンビニで買って食った」

「何食ったん？」

「ジャージャー麺」

「お前、麺ばかりやないけ」

「美味いぞ」

苦笑しながらSは上着を脱ぎ、ちゃんとハンガーにかけてから、僕の向かいに座った。

## 第170話：濃密

「あー、寒かった。コタツはええなあ」

コタツに入ったSは心底嬉しそうな顔でそう言った。

「飲み会、どうやった？」

「まあ、いつもどおりやな。二次会とかなんとか言うてたけど、行きたくなかったから帰ってきた」

「オレが待つてるからか？」

「半分ぐらいはそうやな。お前と飲みたかったしな。……何飲んでん？」

「ジャツクダニエルズのコーラ割り」

「あーあー。お前と飲もう思って急いで帰ってきたのに、先に始められたわ」

「すまん……って、お前やって飲み会で飲んでるやろ！」

「あ、バレた？」

そこでまた2人して笑った。まったく、僕たちは昨日今日で何度一緒に笑ったのだろう？ 2人で他愛ない会話をするだけで、僕たちは楽しかった。久しぶりに会ったというのもあるだろうが、ずいぶんと濃密な時間を過ごしている感じがした。そしておそらくその濃厚さに似た何かを、僕は自分の彼女に求めているのだった。

友人と恋人を同列に語ることはできないと思うし、両者の間に明確な違いはある。しかし相似点もまたあり、それは人間関係という土台に乗った、必要かつ重大なものだ。それを、僕は彼女という人間に求めているのだろう。

二人で飲みながら四方山話よちやまばなしをした。お互いに軽口をたたき合う時間、共通の知人の動向を語る時間、そして、自分自身を語る時間……。

「あのな……」

しばし話が途切れてお互いに沈黙する時間に、その沈黙を破って、僕は話を切りだした。Sは、そんな僕を静かに見ていた。見守っていた。

## 第171話：衝突

僕は、話した。ノゾミやユキやクミコやコンノのことを。固有名詞こそ出さないし、例えば性交の精密な描写などはしなかったが、大まかなことの成り立ちと窮している現状を語った。

Sは時折相づちを打ったり、分かりにくい部分の説明を促したりしながら、僕の冗長な話を聞いていた。そして、一通り話を聞き終えた後で簡潔に尋ねた。

「それで、お前自身はどうしたいんや」と。

「それは……分からへん」

「分からへんって、どういうことや？ お前の中で、答えは出てないんか？」

「そういうことになるな」

「ホンマにか？」

僕を見るSの目は透徹で、心の奥底を見通すかのようにだった。

「お前、綺麗になろうとしてないか？」

「何がや？」

「お前とその周り、全部綺麗にうまくいかなかったかと思ってないかってことや。そんな、上手いこといくわけないぞ」

「……」

「自分が傷つかずに相手も傷つかずに、そんな上手い話、めったにないぞ。オレから見ると、今のお前は傷つくのも傷つけるのも怖がつてるように見えるわ」

凶星だった。僕は何も言い返せなかった。

「昔のお前は、もつとギラギラしてたし、もつともつと不器用やった。傷つくのも恐れんかったし、お構いなしに傷つけてたわ。でもそれがお前の魅力つちゅーか、ええとこやわ。それで、そうやってオレら仲良くなったと思うぞ」

僕は昔を思い出していた。高校時代、まだ僕たちが知り合っていない頃、確かに僕の言動がSをムツとさせたり、逆にSの態度に僕がイラついたりした。でもそんな時、僕たちはそれを躊躇せず<sup>ちゅうちゅうせず</sup>に言葉に出した。本音でぶつかり合った。そして、僕たちは次第に互いを理解し、次第に互いを好むようになったのだ。

## 第172話：原点

「もつと汚くいったらええよ。かっこつけんと泥臭くやれや。オレら、田舎モンやぞ?」

そこで僕は少し笑った。

「今すぐには言わんよ。心の準備があるし、いきなり昔のお前に戻るの無理やろ。けどな、心が決まったら、それをやったらええと思うぞ。傷つけたり傷つけられたりするのにビビらずにな」

僕は、自分自身のことを考えた。自分の性格を考えた。自分が高校を出て大学に入り上京して……。

誰も知った人のいない都会で、僕は人に嫌われないように、人に好かれようと、無理していたのかもしれない。年をとって大人になって、人を傷つけないように人を不快にさせないように、小賢しくなっていたのかもしれない。

そんな僕を、今の僕の姿を、高校生の時の僕が見たらどう思うだろうか。不器用で、知らないうちに人を傷つけて、逆に人に傷つけられて。でも、その頃の僕は今よりも輝いていた。今よりも人付き合いが下手くそで、今よりも人当たりが悪くて。けど、本音で話していた。本音でぶつかっていた。

僕はSの言葉に、Sの見方に昔の僕の姿を重ねていた。ああ、きっと高校生の僕は今の僕を見たらSと同じ事を言うだろう。

「なんやそれ。誰にでもええかつこしとんちやうぞ」と。

「ありがとな」

しばらく思いにふけた後、僕はSに礼を言った。

「確かに今すぐには決めれんわ。今すぐには動けんわ。でも、動く方向だけは分かった。やから、なんとかなるわ。なんとかなる自信がある」

「お前なら、できるよ」

そういうSの目には、優しさがあった。知り合ってもう5年以上経つ。その年月に裏打ちされた、親しみと信頼をこめた目で、Sは僕を見ていた。

僕は心が楽になるのを感じた。やっぱり、Sに会ってよかったと思った。

## 第173話：年末【第21章・完】

今現在、僕はノゾミとユキのどちらのほうが好きなのか、それは決めかねる。

でも、僕は必要以上に相手に気を遣っている気がする。それは嫌われたくないという気持ちの裏返しなのだが、それによって僕の中にストレスが溜まっていることも、また事実だ。

もっとわがままに、もっと自分の気持ちを出していこう。そう思った。その結果、どちらが自分に合っているのか、どちらのほうが好きなのか、判断することができらるだろう。

その時が来たら……。

こうして、僕の迷いは吹っ切れた。

冬の空のような澄み切った心を持って、次の日僕は実家に帰った。Sも一緒に帰省した。同じ電車で、隣り合わせの座席に座って。

電車の中で特に会話はなかった。と、言うより、Sはほとんど寝ていた。僕はその横で文庫本を読んでいた。

途中の駅でSは降りた。Sの実家の最寄り駅は、僕が降りる駅より幾分手前にあるのだ。

「また正月みんなが集まるうや。お前の東京話を聞かせてくれや。恋愛話だけやのうてな」

「せっかく会ったのに暗い話ばかりしてすまんな」

「何言うてんねん。それがオレの仕事や。友達やんけ」

「ああ、サンキューな」

「ほなまた」

「おう」

そんな会話を残して、Sは、僕の親友は電車を降りた。

僕は心が温かくなっただままで実家に帰った。胸のつかえが取れた今、僕が考えるのは大晦日のノゾミとのデートのことだった。

一年が、終わろうとしていた。僕にとって、僕のそれまでの人生において、最もいろいろな恋愛があった年が、終わろうとしていた。

**第173話・年末【第21章・完】（後書き）**

12/6の文学フリマの準備のため、週末はお休みさせていただきます。

週明けから再開します。

第174話：幻想【第22章】（前書き）

昨日は飲んでてアップできませんでした。  
ごめんなさい。

## 第174話：幻想【第22章】

22・初詣（郷里）

年の瀬だった。Sの下宿から家に帰り、僕は実家での日々を過ごしていた。

両親は年末ゆえに忙しそうに走りまわっていた。僕はそんな両親の仕事の時に手伝ったり（もっとも、それは気まぐれ程度にすぎないが）、続々と帰郷してくる友人と連絡をとったりしながら、大晦日を待った。ノゾミと久しぶりにデートする日を待った。

そして大晦日、僕は電車に乗って、神社の最寄り駅（そしてそれはノゾミの家の最寄り駅でもある）に向かった。

今までのデートなら、ノゾミに迎えに来て貰うのが通例だったが、僕はもうそういうことで気後れを感じたくなかったのだ。

僕は、対等な条件で自分の彼女に会いたかったのだ。

駅に着いてホームを出ると結構人がいた。東京と比べると平日の夜の繁華街ぐらいの人だが、郷里ではなかなか見られない人の数だった。

参道に灯されたやわらかな灯りは、夜の黒さと相まって辺りを幻想的な光景にしていた。それを見ながら僕はノゾミに「着いたよ」とメールしようと携帯を取り出した。

しかし、メールはできなかった。肩を叩かれて振り返ると、そこにノゾミはいた。僕はノゾミを一目見て、しばらく固まっていた。白いコートに赤いタートルネック、青いジーパンにレンガ色のスニーカー。僕は、そんなノゾミの姿を可愛いと思った。よく似合っていると思った。

ノゾミは、もしかしたら僕に会うためにおめかししたのかもしれない

ない。僕の中で、久しぶりにノゾミに会ったという補正が入っていたのかもしれない。幻想的な光景に魅せられていたせいかもしれない。

でもただその時は、僕の彼女を見て、可愛いと思った。こんな子とつき合えている自分が幸せだと思った。他の何もかもが吹き飛んでしまうほどに。

## 第175話：人流

「どしたん？」

そう言われて僕は我に返った。

「いや、びつくりした」

「驚かせた？」

「ん。可愛いなあと思って」

僕は本気で言ったのだが、ノゾミはお世辞だと思ってはにかなだ。僕の好きな、僕が好きになるきっかけとなった笑顔で。

「人、多いな」

辺りを見渡しながら僕は言った。

「んー、有名やからね」

「いつもはおらんやろ？ この駅使うの、高校生ぐらい？」

「全然。高校生も自転車登校やし」

「ノゾミは？」

「私は自転車登校やったな。近いし」

そんな話をしながら、僕は人の流れを見ていた。これが渋谷のスクランブル交差点あたりなら、信号が変わると共に、人々は思い思いの方向に歩いていく。しかしここでは、大晦日の今日のこの場所では、人々の思いは一つ、参詣することであり、皆まっすぐに神社を指していた。

その人の流れに僕たちも従った。遠くを見れば幻想的な光景、そして近くを見ればゴミゴミした街並み、そんな二つの景色を交互に見ながら、僕たちは歩いた。喋りながら、歩いた。

参道を歩く人々の列は、次第に太くなった。支流の小さな川が集まって本流の大河になるように、人の、その独特な色は、参道を進むにつれて濃くなっていった。

それが本当に参道を埋め尽くしてしまう少し前、人混みで身動き

がとれなくなってしまう少し前の地点で、僕らは休憩した。

そこは、お守りなどを売る社務所の前で、ちよつとした広場になっていた。売場には客がほとんどおらず、おそらくはアルバイトだろつ巫女さんが、寒そうな姿で座っていた。

## 第176話：距離

そこで、僕たちは同じくお参りに来ていた知り合いに会った。僕とノゾミが出会うきっかけの合コン（らしきもの）、その時に会ったTさんともう一人の女の子だ。

「え？　なんで？」

僕は驚いて聞いた。同時に少し不快に思った。思わず険しい目になつてノゾミを見た。

「あー、そう言えば行くつて言つとつたかも」

ノゾミは思い出したかのようにそう言った。

「なんでそんなに嫌そうな顔になるん？」

Tさんは僕の表情の変化を目にして笑いながら、からかうように言った。

「私らはただ参拜に來ただけやつて。気にせんでええよ。邪魔する気ないし」

当たり前だ。僕は邪魔されるために帰省したのではない。憮然とする僕を尻目に、ノゾミはクラスメートと仲良く談笑した。僕はますます不快になつて、一人離れて煙草を吸った。煙草を持つ手は、夜の冷気に当たつて痛いくらい冷たくなつた。

ここでのTさん（と、もう一人の女の子）の出現はまつたくの予想外だったが、利点もあった。僕とノゾミを写真に撮つてくれたのだ。もちろん、その時代にケータイにカメラなんてついてないから、確かTさんの持っていた使い捨てカメラだったと思う。

微妙にピントのずれたその写真は、僕とノゾミが写っている貴重一枚になつた。その写真の中で、ベンチに腰掛けた僕は寒そうにコートに丸まり、人一人ぐらいの距離をおいた横にノゾミが座っている。

その距離はなんだつたんだろうと、ふと考える時がある。僕とノ

ゾミの間の心の距離なのか、それともただ単に、友人にデートを見られたことに対するゾミの気恥ずかしさなのか。

## 第177話：迎春

Ｔさん達と別れて（一緒に参詣する気などさらさらなく）、僕たちは参道を埋め尽くし始めた人の波に戻った。そこからしばらくはなんとか前に進めたが、次第に人にぶつかり始め、とうとう前にも後ろにも進めない状態になった。そうやってしまっ少し前に、僕たちははぐれないようにと（実に久しぶりに）手を繋いだのだが、動けなくなっってから手を離していた。それは、気恥ずかしさからと言っより、単に手を外に出しておくで冷たいからだっ。もっとも、ノゾミは周到に手袋を持ってきていたので冷たいのは僕だけだっが。

僕は寒さに震えながら順番を待った。歩みをやめた足に参道から冷気が伝わり、つま先が痛くなっってきた。僕は足踏みをして足を温めながら、辛抱強く待った。苦手な人混みの中で、努めてその不快感を顔に出さないようにしながら。

できれば年越しの瞬間に参詣したかっただが、時間は無情だっ。僕が生産性のない運動をしている間に容赦なく時は流れ、再び人混みが少しずつ動き出してからすぐ、時計の針は12時を回った。

僕の、生まれて初めて彼女と一緒に迎える新年は、凍えるほど寒い戸外の、満員電車に似た人混みの中で始まった。

「明けましておめでとう。今年もよろしくおねがいます」

僕がそう言っるとノゾミは、はにかんだ表情で「よろしくお願います」とだけ答えた。僕は、それに物足りなさを感じている自分に気づいた。その、感情をあまり表に出さないところ。それはノゾミの良さでもあるのだが、時々僕を苦しめた。そうして、どうやら全ての問題はそこにあるようだっ。

## 第178話：茫漠

日付が変わる前後の数分、周りの群衆は浮き立ち騒がしかったが、寒さと苛立ちからか10分も経った頃には普通の集団に戻った。

僕はと言えば、少し焦っていた。携帯が気になっていた。新年を迎え、友人からおめでとうメールや電話が来るかもしれない。それは怖くなかった。むしろ、友人に人気のある自分をアピールできる機会だとさえ思っていた。怖いのは、コンノやユキからのおめでとうメール、さらには電話だった。

少しずつ動き出した人混みの中で、僕たちは再び手を繋いでいた。また、人波に押されて密着してもいた。そんな距離で、電話をとったら全てノゾミに聞かれてしまう。女の子から電話がかかってきているという現実を見せてしまう。僕はそれが怖かった。

電話に出ないとしても、バイブによって着信がバレるかもしれない。着信があるのに出ないのは、変に思われるだろう。それもまた危険だった。

僕は時間を確認するフリをして携帯を取り出した。幸いにも、山の中にある神社は圏外だった。しかしいつまた電波の入る場所に行か分からない。僕はそつと電源を切った。

年が明けて1時間ほど経った頃、僕たちはやっと本殿に到着した。順番に賽銭を投げて（人々が賽銭箱に群がる様はまるでバーゲン開場のようなだった）願い事をした。

僕の願いは、一応「ノゾミとうまくいきますように」だったが、あまりその願いは強くなかった。なんだかぼんやりとした願いで、本当に自分がそうしたいのかどうかはつきりとは分からなかった。しかし、自分の中でそういう思いは確かにあった。少なからずあった。



## 第179話：寒々

押し寄せる人々のほとんどは、流れ作業のように願い事をし、参道を引き返していった。帰る人と入れ替わりに来る人が押し寄せてくる。あまりここでゆっくりはしていられない。僕は境内に置かれた案内板を見ながら「どうする？」とノゾミに尋ねた。

「なんか、奥にもまだ神社があるみたいなんやけど、どうする？」

「うーん。私はどっちでもいいけど……」

「せっかくやし、行こか」

「ん。ええよ」

寒さをこらえてまで奥に行こうとしたのは、このままだと駅に行つてそれで終わりそうな予感がしたからだ。せっかく寒い中來ているのだから、出来るだけ長く、そしてできるだけいるんなことをしたかった。

奥の社やしほに行く道は、人影まばらだった。それまでの人混みが嘘のように閑散としており、ただのハイキングコースのようにも見えた。参道も本殿までとはうってかわつて粗末なものとなり、街灯がなく足下がよく見えない場所もあった。

「人気ないなー。なんか肝試しみたいやな」

寂しげな行程を少しでも明るくしようと、僕はおどけて言った。

「うん。あんまり皆こつちまで来んなあ」

「そりゃこんなに寂れとつたらな」

「うーん。昔事件もあったしな」

「え？ なにそれ？」

「私もよく知らんやけど、なんかあつたっばい」

「ど、どんな事件？」

僕はおっかなびっくり聞いた。

「なんか気の狂った男の人が女の人を襲ったとか」

「うわ、なんかマジで怖くなってきた」

「んーと、ちょうどこの辺」

そう言っただけでノゾミは道ばたの地藏尊の方を見つめた。

辺りはちょうど街灯の光の届かない場所で、冬の夜の暗さや辺りの寂れた光景と相まってえも言われぬ不気味さを醸し出していた。

## 第180話：変質

「……ウソやる？」

僕は背筋が寒くなりながらそう聞いた。

「やったらええんやけどな。そういうことにしようか？」

ノゾミはそう言って、試すように僕を見た。普段滅多に出すことのない余裕ある態度だった。僕はノゾミとの力関係が逆転したように感じた。

「え、怖くないん？」

「いや、小さい時に聞いて、その時はすごく怖かったよ。でも、なんか時間が経って薄れてる感じ。この辺りの景色は怖いけど」

いつしか周りには人がいなくなっていた。ちょうど曲がり角で、視界の前方にも後方にも人がおらず、そう考えるとここが事件のあった場所というのも納得がいった。

「……ちよつと急がん？」

「なんで？」

「なんか、怖くなってきた」

なんだか、その場にいると何かが僕たちを変えてしまいそうな気がして、ノゾミとの関係が変化しそうな気がして、そんな外からの変化を恐れた僕はノゾミをせきたてた。

「や、別にゆっくりでいいよ。疲れるし」

ノゾミが本当にそう思っているのか、僕をからかっているのかよく分からなかった。ノゾミはさっきまでのような引つ込み思案な僕の彼女ではなかった。今まで僕にあった主導権がノゾミに移り、僕たちの関係が変わろうとしていた。それは、僕にとって喜ぶべきだったのかもしれない。ノゾミに抱いていた不満、その消極性が解消されようとしているのだから。

しかし僕はそれに怯えた。関係が今までと異質なものになり、それに僕が合わせる必要性が生じるのを恐れた。僕は、少し強引にノ

ソミの手を取って、早足で歩きだした。急ぎ足で、その場所を去る  
うとした。

第181話：奥社（前書き）

帰るのが遅くなってアップが遅れました。

## 第181話：奥社

地蔵尊のある場所を後にして10分ぐらい経った。細くて古びた石段を登ると、そこには小さな社があった。社は小さかったが、歴史を感じさせる古び方をしていた。

僕はその建物を目にして少しほっとした。霊験あらたかな場所、そこにたどり着けば、悪いものから僕たちを守ってくれるような気がした。僕たちが今までと同じような関係を続けていけるように。

社の前には小さな、本当に小さな広場があり、幾人かの人がベンチに腰掛けていた。本道に較べると参拝客はずっと少なく、その少数派の連帯感からだろうか、彼らは石段を登ってやってきた僕たちを暖かい笑顔で迎えてくれた。

疲労からか素直になつていた僕は、笑顔に笑顔で応えながら社に向かい、参拝を済ませた。今度は、すんなりとノゾミとの将来を願うことができた。

参拝後、僕たちはお守りを購入した。ここまで来た人の特典のよう、ここでしか買えないお守りがあり、それは恋愛成就に御利益があるというふれこみだった。

二人でお守りを開け、内容を報告しあった。僕は末吉でノゾミは中吉だった。頼寄せあつておみくじの結果を教えあう、僕はその時間を素直に「いいなあ」と思った。あの夏の日の夜のように、またノゾミと親密になれた気がした。ノゾミも、馴れてきたのか疲れていたので、駅で久々に会った時よりはにかむ様子が少なくなり、素の自分を出せているようだった。先程とは違った気安さが、僕を頼ってくれているような心の許し方がそこにあつた。そんなノゾミと小さなことで一喜一憂する、それが僕には楽しかった。

## 第182話：帰途

奥の社で参拝を済ませ、僕たちはやる事がなくなった。時刻は1時半をとうに過ぎており、寒さは体の芯にまで届いてきた。

「もうここでやることないなあ。どっか、行く？」

震える声で僕は言った。通常ならば、こんな片田舎の歓楽街は早々に店を閉めるのだが、さすがに年末年始だけあって、いくつかのボーリング場やカラオケが（割増料金ではあるが）夜通し営業していた。

「んー。でも、どうやって行くん？」

ノゾミの疑問ももっともだった。この神社のある街まで、ノゾミは車で、僕は電車であっていた。二人が同時に移動する方法は、僕がノゾミの車に乗せてもらうか、ノゾミが車を駐車場に置いて僕と一緒に電車に乗るかの二つが考えられた。

「どうしようねえ……」

僕は参道の長い階段を降りながら考えた。考えたが、結局どちらの案も今一つという気がしていた。せつかく電車を使ってここまで自力で来たのに、ここでノゾミの車に乗せてもらうのもなんだか悔しいし、かといってノゾミに車を置き去りにさせるのも悪い。夜が明けて寝不足で車を運転させたくないという思いもあった。

その時ノゾミがあくびをした。拳手投足に疲れている様子が見られた。

「やつぱ、帰ろうか？」

僕は遊びに行くことを断念した。僕だって疲れていないわけではないし、眠くもあった。遊びに行ってフロントで順番待ちをする（遊び場所の少ない田舎では、何かイベントがあると人々はそこに殺到する）のもアホくさく思えた。

眠い目をこすっていたノゾミが僕の言葉に頷き、僕たちはお互いの家に帰るために駅に向かった。

## 第183話：特便

田舎では、終電は早い。仮に僕が家から県庁所在地に遊びに行つたとして、そこを午後10時までに出なければ電車で帰ることは出来ない。だから夜遅くまで遊びたい人は、朝まで遊ぶか、代行運転を頼むか、タクシーを使う。それが田舎だ。

しかしさすがに年末年始、そして著名な神社である。特別ダイヤが設定され、参拝した人が深夜に電車で帰れるようになっていた。確かに帰れるようになってはいたし、僕はそれで帰るつもりでした。だが、いかんせん本数が少なすぎた。帰る時間も遅すぎた。時刻は2時を少し回つたところ。一応電車はあるものの、次の電車が来るまで30分以上待たなければならなかった。

「困つたなあ」

駅でダイヤを見て、僕はつぶやいた。実際、困っていた。寒い中、30分以上待つのも辛いし、駅舎の中は暖かいが、そこで待っていると寝てしまいそうだった。

そして何より、この路線一本では僕は帰ることが出来ないのだ。僕の家之最寄り駅は他の路線なので途中で乗り換えなければならぬ。そして、その乗り換えがうまくいく保証はまったくないのだ。

「参つたなあ」

再び僕は言った。しかし、半ば覚悟もしていた。ノゾミを先に帰して駅で電車を待つ、乗り換えはもう時の運と考える、そういう覚悟だ。

しかしそんな僕を見て、ノゾミは言った。

「送っていいこうか？」と。

「いや、ええよ。なんとかするし」

僕は慌てて断つた。今日は、僕は自力で来て、自力で帰るつもりでいたのだ。そういうスタイルを今後作っていききたいと思い、その

第一歩だったのだ。ここでノゾミに送ってもらったら、いつもと変わらなくなってしまう。

「だって、どうするん？ 30分も待つん？」

「しゃーないからな。待つしかないよ」

「寒いよ？」

「我慢するよ」

「ええから、送っていくよ」

ノゾミにしてはしつこかった。いつもとは、いつもの受け身な彼女とは違う感じがした。

## 第184話：送達

「いやいや、ええよ。眠いやろ？ 送ってたら遅くなるし」

「たいして変わらんよ。それにいつも送ってるしな」

ノゾミの言葉と寒さに押されて、僕はなし崩し的に送ってもらうこととなった。家を出る前に決意した「対等な立場」は、どこかに行ってしまった。主導権はノゾミにあり、それに強引に押し切られた感じだった。

もしかしたら、いつもデートで僕が主導権を握っている、というのは、僕一人の思いこみだったのかもしれない。どこに行くかだとか、何をするだとかを提案するのは、確かに僕だ。しかし移動手段、決定的なそれをノゾミが有しているという点で、主導権は実はノゾミにあったのかもしれない。そして、ノゾミは僕を送ることを自分の義務かつ権利だと思っていたのかもしれない。

いつものようにノゾミに送ってもらう、その車内で、いつもと違い僕は無口だった。初めは僕とノゾミが眠ってしまわぬように意識的に言葉を発するようにしていたのだが、ノゾミの、

「無理せんで寝ててええよ」

という言葉に甘えるように、僕はいつしかうつらうつらしていた。なんだか、ノゾミがとても頼もしく思え、それは今までのノゾミのイメージ、引っ込み思案で弱い彼女、とは異なるものだった。

「着いたよ」

その言葉で僕は目を覚ました。いつもの場所、いつもノゾミが送ってくれる場所だった。

「ああ、ありがと。すまん、寝とつたな」

「疲れてたんやろ。気にせんでええよ」

そう答えるノゾミの顔には、疲労の色が浮かんでいた。

「ん。送ってくれてありがとう。ああ、そうそう」  
さりげなさを装って僕は鞆を漁った。

## 第185話・羽根

「はい、これ。年明けてもうたけど、クリスマスプレゼント」  
そう言つて、ノゾミに小箱を渡した。

「あ、え？」

予想外だったのか、疲れと眠気でもうろうとしていたのか、ノゾミはまごついた。

「だって、私、何も用意してないし、そんなん……」

「いや、別にオレが渡したいと思つたしな」

その言葉は、クミコにネックレスを渡した時に発したものと酷似していた。僕は、ある意味ではわがままだった。相手の気持ちなどいざ知らず、自分があげたいからあげる、そういうスタンスだった。もちろん、相手の好みというものはある。似合わない、欲しくないものを送つても、相手は困惑するだけだろう。

しかし、今回のプレゼントは、喜んでもらえる自信があつた。

「開けてもええ？」

「もちろん」

むしろ、ぜひ開けて欲しかった。中身を見て、どんな表情をするのか見たかつたのだ。

中を見たノゾミは、片手で口を覆つた。

「可愛い。どしたんこれ、なんで？」

ノゾミに送つたのは、羽をモチーフにしたピアスだった。僕は事前のリサーチ（Ｔさんに聞いたただだが）によって、ノゾミが羽をモチーフにしたアクセサリを欲しがっていることを知り、いろんな店を巡つてそのピアスを選んだのだ。

「そりゃノゾミの欲しがつてるものぐらい分かるよ」

「……Ｔさんに聞いた？」

お見通しだった。ノゾミは普段はぼんやりしているのに、大事な時にはしっかり勘を働かせる。

「まあ、そうやけどな。気に入ってくれた？」

「うん。ありがとう。……でも私、何も用意してないよ？」

再びどこかで聞いた台詞が発せられた。「じゃあ、キスしてくれよ」と言いかけた。以前クミコに対してそうだったように、性欲からの言葉を思いついた。しかしその言葉を押し留め、僕は言った。

「ええよ。日頃送ってもらってるし、今日も送ってもらったし、そのお礼やと思ってくれ」

「ん、ありがとう」

その言葉を後に、僕は車を降りた。

## 第186話：門出【第22章・完】

元旦の夜空は澄み切っており、静かだった。僕はいつかの夏の日と同じような高揚を持って、家路を歩んだ。歩みながら、ほんやりと考えた。

僕とノゾミの間に足りないのは、おそらくは親密さだった。Sとのような親近感、気安さ、そういうものが足りなかった。その不足から、僕は物足りなさを感じていた。

しかしそれが足りないままで、僕たちは9ヶ月もの間つきあってきた。その微妙な関係に、距離に、僕たちは馴れてしまった。今日撮った写真のように、二人の間にぽっかりと開いた空間、それがあふることには馴染んでしまった。

既にできあがってしまった関係、しかしそれはそれで、ある種の心地よさがあった。これを壊すことに戸惑いも感じていた。わざわざ壊さなくても、変にいじろうとしなくてもいいんじゃないか、そういう思いもあった。今の関係が壊れることへの不安や恐怖もあった。

けれど、僕はそれをやらなければいけなかった。壊れる可能性を承知しつつ、僕とノゾミとの心の距離を近づけるために勇気を出さなければいけない。それは、二人の関係をより強固にするために避けて通れぬことであり、また、かつてSに言われたように僕が昔の僕のようにあるために、必要なことだった。

僕は決意を新たにした。新しい年の幕開けにふさわしく、新鮮な思いで心に決めた。物怖じせずに行動に移すことを。

真夜中の空気は次第に白い霧で覆われ始めた。前方があまりよく見えなくなってきた。その中を一筋の街灯の光が照らし、僕はその

光線の中を歩いた。自分の足元を、行く先をしっかりと見つめながら、一歩一歩確かめるように踏み出していった。

## 第187話：不会【第23章】

### 23．初詣（東京）

新年になり、冬休みも終わりに近づいてきた。高校時代の友人たちはみんな、僕の知らないうちに郷里を後にしていた。彼等には大学生としての生活があり、それは僕も同様だった。

僕も、帰らなければならなかった。大学で授業を受けるために、バイトでお金を稼ぐために、そして、ユキに会うために。

電話やメールはしていたものの、実際に会うことは久しくなかった。僕はユキに会いたいと思っていたし、ユキのメールの文面や会話の節々にも同様の気持ちがあくまでさりげなくだが現れていた。年が明けて5日ほど経った頃、僕は程ほどに混んだ新幹線に乗って東京に戻った。戻ってすぐ、ユキに電話をした。もちろん、会う約束を取り付けるために、だ。何をするかは僕の中でとうに決まっていた。新年最大のイベント、初詣に行くのだ。

だが、電話の結果は芳しくなかった。残り少ない冬休みのうちはユキの予定が埋まっており、それが終わった週の末もユキは忙しそうだった。

「テストが近いの」

電話口でそうユキは言った。大学の後期試験が近づいていた。テストが始まるまでまだ半月ほどあったが、優等生のユキは早めに勉強しようとしているらしかった。

「そうか。それじゃ勉強しなきゃね」

僕は紳士的に答えた。しかしもちろん、心の中ではユキに会うことを強く望んでいた。テストが終わるまで会えないとすると、次回は1ヶ月以上先になってしまふ。僕だって後期の試験があるし、その日程を考えると、当分の間会えないことになる。それは僕

にとって耐え難く寂しいことだった。

## 第188話：代数

僕は考えた。なんとかしてユキに会う方法はないかと。ユキの迷惑になることなく、試験勉強を邪魔することなく、会える手段はないかと。しかし悲しいかな、何も思いつかなかった。何も言えなかった。

寡黙かもくになった僕を思ってたか、ユキが突如聞いてきた。

「ねえ、線形代数学、分かる？」

「ん。難しいよね。簡単なのなら分かる」

「分かんない問題があるんだけど……」

「どんな問題？」

ユキは電話の向こうで問題文を読み上げた。どこかで聞いたことのあるような問題だった。昔の教科書をよく読めば解けるかもしれない。なかった。

「んー、今すぐ解法を電話口で説明はできないけど、なんとか解けそうな気がする」

「ホント？　じゃあ今度教えてよ」

そこで僕は突然閃いた。試験勉強中のユキと会う妙案を。

「じゃあ、一緒に勉強しようよ。それで、ついでに初詣も行こう」

「初詣にしては、かなり遅いんじゃない」

「まあいいでしょ。図書館かどっかで勉強しようよ」

「ん。他にも分からない科目あるんだけど、教えてくれる？」

「いいよ。オレに分かるところなら」

そうは言ったものの、あまり自信がなかった。ユキは僕より1学年下だが、去年の僕よりもはるかに勉強しているようだった。しかし、とりあえず僕はユキと会う約束を取り付けた。場所は、僕たちの中間地点の街にある、そこそ有名な図書館に決まった。

ユキとの電話を切つてすぐ、僕は数学科の友人に電話をした。線形代数学を教えてもらうために。

## 第189話：書庫

週末の空は薄い雲がその大半を覆い、風は身震いするほど冷たかった。僕はその中を図書館に向けて走っていた。またもや待ち合わせに遅れそうだった。待ち合わせ時刻は昼過ぎだというのに。

目指す図書館は大きな公園の横にあった。僕はショートカットのために公園を走り抜けた。都心の公園では外国人が日光浴をしており、その光景はなんだか冬に似つかわしくなかった。北欧の人かなと考えているうちに図書館に着いた。

着いたことをメールすると、ユキが玄関まで出てきた。

「ごめんね、遅くなって」

息を切らせながら僕は言った。

「ううん。大丈夫だよ。席、とつといたから」

「あれ？ いつ来たの？」

「ちよつと早めに来たんだ。本、探してみようと思って」

僕はユキの真面目さに感嘆の息を漏らした。

「で、分かった？」

「んー、分かんない。だから教えて」

「ん、行こっか」

ようやく息の整ってきた僕は、そう言ってユキを図書館の中に促した。

その図書館はなかなか大きいものだった。住宅街にある地域住民のためのそれとは明確に一線を画しており、専門書や貴重な文献も数多く保管されている学術のためのものだった。

僕は、ここで試験勉強なんかしているものだろうかと少し不安になったが、ユキに案内された学習室では、高校生や浪人生、大学生など、僕たちの他にも数多くの学生が勉強していた。

その混み合った部屋の片隅に、ユキの勉強道具があった。乱雑に

広げられたノートと一カ所にまとめられた消しゴムのカスは、ユキが随分前からここで勉強していたことを如実に表していた。

## 第190話：静謐

「ん。じゃあ、見せて。どれ？」

上着を脱いで椅子に座った僕は、身を乗り出してユキのノートを見ながらそう尋ねた。

「この問題なんだけど……」

数値などの細かな設定は変わっていたが、その問題の根幹はよくあるタイプであった。僕は去年テストでやった（と思う）し、先日友人にも聞いた。解ける問題だった。

「これはね……」

そう言いかけて、僕は不穏な空気を感じた。周りが、静か過ぎるのだ。皆めいめい個人個人で自分の勉強をしており、僕たちのように話し合う者など一人もいないのだ。ここで声を出して説明するのは憚はばられた。

ユキもそういう雰囲気を感じ取ったのか、困った顔をした。それまでユキは一人で勉強していたので、この場の独特な空気に気がつかなかったのだ。僕はしかたなくユキのノートに解答を書き込んだ。先日覚えた解き方で、その問題を解いた。しかし、それはユキが求めているものではなかった。ユキはそんな解答の丸暗記など、求めている。ユキは、僕と違ってしっかりと「学習」しようとしているのだ。解法を理解し、自分のものにしようとしているのだ。

（分かったけど、分からない）

ユキはノートの余白にそう書いた。この問題の解答は分かっただけで、同種の問題の解き方は分からない、そういう意味だった。しかし僕には解き方を上手く説明する文章力も、それを書く時間もなかった。

（先に他の教科やろうか？）

僕はそう問うたが、ユキは首を横に振った。

（他のも説明してくれなきゃ分かんないのばかり）

それはそうだ。単なる暗記科目なら、ユキは自分でやるだろう。そういつ、しっかりした子だ。一人でできる暗記ではなく、誰かの説明を要する科目だからこそ、ユキは僕の助けを必要としているのだ。

## 第191話：移動

（移動しよう）

僕はノートにそう書いて、ユキのノートを閉じた。ここでは、教えることができない。もちろん会話もできない。二人は二人ではなく、一人と一人になってしまふ。それでは会った意味がなかった。ユキが手早く勉強道具を片付け（それはなかなか手際が良かった）、僕たちは学習室から脱出した。

静寂を強いられる屋内から、自由な喧騒の屋外に出て、僕たちはどちらからともなく笑った。押し黙っていた分を、陰気に過ごした時間を取り戻すかのように、僕たちは陽気だった。

「あー、もう、困っちゃうよね」

「なんか、怖かった」

「肩凝っちゃったよ」

僕がオーバーに肩を回すとユキは笑った。本当に楽しそうな笑顔だった。

「さて、どうしようかね」

顔がにやけそうになるのを押し止めて僕は言った。勉強が中途半端になったので、どこかで続きをやらなければいけない。僕個人としてはどっちでもいいが、ユキはきちんと最後までやりたがるだろう。

「私、お腹すいた」

張り詰めていた気が緩んだからか、意外に呑気な声でユキが言った。そういえば、ユキは僕の来る前から勉強していたのだ。おそらくはお昼も摂らずに。もちろん僕も食べていなかった。待ち合わせに遅れるような輩が、きちんと食事を摂れるはずもない。

「食堂でも行こっか」

確か図書館の地下に食堂があったはずだ。微妙にランチタイムは

過ぎて<sup>せ</sup>いるが、何かあるだろう。僕たちは、再び建物の中に入った。  
静謐<sup>せいひつ</sup>な階上<sup>かいじょう</sup>ではなく騒擾<sup>そうじょう</sup>な階下<sup>かいげ</sup>を目指して。

## 第192話・影響

食堂で昼食（僕はカツカレー、ユキはサンドイッチ）を摂り、一息ついて、勉強する場所を探さなきゃと思った時、僕はいいことを思い付いた。

「ねえ、ここで勉強しようか？」

昼食時を外した食堂は閑散としており、ドリンクを飲みながら勉強している人もちらほらいた。そして何より、ここでなら自由に声が出せる。刑務所じゃあるまいし、食堂での会話を咎める者など、誰もいない。

「あ、いいかも」

「うん。じゃあここでやろう」

そうして僕たちは皿を脇に追いやり、勉強を始めた。

食堂での勉強は、思いのほか快適だった。堅苦しい雰囲気は適度に緩和され、ユキは屈託なく質問をしてきたし、僕はそれにすんなりと教えることができた。

そうして僕たちはそこで2時間ほど勉強した。この時間でユキは僕に対して信頼と尊敬の念を抱いたようだったし、僕はユキの役に立てて満足だった。ユキの勉強に対する真摯な姿勢は僕に好感を抱かせたし、逆に不真面目な僕はいろいと反省しないといけないなと強く感じた。そういう、ただ心地よいただけでなくお互いにいい影響を与えられる間柄、それが僕とユキの関係だった。

僕はここでもノゾミとの違いを感じずにはいられなかった。しかしそれがいいことなのか悪いことなのかはまだ分からなかった。

勉強のあと、僕たちは初詣に行くことにした。

「湯島天神に行きたいの」

そうユキは行った。バイト先の塾の教え子のために、合格祈願を

したいとの事だった。僕に異論はなかった。バイト先の生徒のことを思いやれるユキが素敵に思えた。

初詣のピークの過ぎた湯島天神は人影もまばらで、寒々しさすら覚えた。その長い階段は先日ノゾミと行った奥社を彷彿ほっふっとさせた。僕はそんな対比をしてみよう自分に少し後ろめたさを覚えながら、その長い階段を登った。ノゾミではなくユキと一緒に。

### 第193話：天啓

「梅、まだ咲いてないね」

階段を登りきって境内に入った時、ユキが言った。あたりは一面に梅の木があつたが、どれもが蕾つぼみの段階だつた。

「まだ早いんじゃない？ 1月だし」

「そうだね。でも咲いたら綺麗だろうなあ……」

うつとりとその情景を思い浮かべるユキを見て、僕は「咲いたらまた来ようか」という言葉が出そうになつたが押しとどめた。天神やら神社やらというものは、そんなに何度も来るもんじゃない気がしたし、そういう、特に用事がなくても一緒に出かけるというのは、なんだか付き合っている者でないとできない気がして、その言葉は言つてはいけない気がしたのだ。

「さて、じゃあお参りしようか」

代わりにそんな紳士的な言葉を吐いて、僕は先に歩き出した。

僕は何度目かのお参りを、ユキはおそらく初めてのお参りを済ませ、僕たちは次におみくじを買つた。恋愛みくじというものもあつたが、お互いに気恥しさからそれは避けた。普通の、ごく普通のおみくじを買つた。僕は吉でユキは小吉だつた。

「ずるい。そつちのほうがいいじゃん」

ユキはそう言つてふくれた。おみくじにズルもへつたくれもないのだが、ユキは結果にこだわつた。僕はすねるユキが可愛いと思つたし、一方で人のおみくじの結果に無頓着なノゾミとの違いを感じずにはいられなかつた。

普通のおみくじではあつたものの、そのおみくじにはもちろん恋愛に関する良し悪しも記されていた。当然、ノゾミと買つたものよりも良く、それが果たしてユキとノゾミの違いを表しているのか、そついう天啓しんきを示唆しているのかどうか、少し気になつた。

## 第194話：阻害

お参りを済ませて天神を出た。それから僕たちは新年の初売りでも冷やかしに行こうということになり、再び移動して、とある繁華街に来た。

二人は、親密だった。図書館での緊張とそこからの解放、それにより、ひどく濃密な時間を過ごした気がしていて、それが二人を親密にさせていた。僕は、まるでユキとつきあっているかのような、ユキが僕の彼女であるような、そんな錯覚すら感じていた。それはとても楽しく、とても心安らく時間だったのだ。

その春の日の午後のような安らかな時間、二人でおしゃべりしながら街を歩いている時、それを邪魔するかのように、不意に僕の電話が鳴った。僕は初めそれはメールだと判断し、放っておこうと思っただが、電話はまるで僕たちの親密さを阻害するかのように執拗しつように鳴り続けた。僕は内ポケットで震え続ける電話機が気になって話に集中できなくなってきた。

「ん？ どうかした」

言葉少なになった僕に気づき、ユキが不思議そうに言った。

「ん、なんか電話鳴ってる」

「メール？」

「いや、電話っぽい」

「出なよ」

「あ、うん、そうだね」

僕はひどく心地よく仲睦まじい時間を妨げられたことに少し気を悪くしながらも、ユキの言葉に従って電話機を取り出した。どのみち出ないことにはまともにおしゃべりなんて出来ないのだ。

僕はどうせ大学の友達だろうと思いい、油断していた。しかし取り出した直後、電話を無視しなかったことを後悔した。警戒しなかつ

たことを後悔した。

電話機はその着信を示すパネルには、コンノの名が表示されていた。

## 第195話：存在

僕は電話に出るか出まいかためらった。しかしここで出ないとユキに不審がられるだろうと思った。事実、ユキは不思議そうな表情で僕を見ていたのだ。僕は意を決して望まぬ電話に出た。

「もしもし」

「あけましておめでとう！」

僕の沈んだ声とは裏腹に、コンノの声は突き抜けるほどに明るく、それは僕を苛立たせるのに十分だった。

「ああ、おめでとう。どした？ 何か用か？」

「やけに冷たいじゃん。いや、私帰ってきたからさ。遊ばないっていうお誘い」

「あ、うん。また今度な。今忙しい」

「あれ？ 取り込み中？」

「まあな」

「もしかして、女の子と一緒に？」

「いや、友達と初詣に来てる」

女は、鋭い。僕はこの時なぜ「そうだ」と言ってしまうなかったのだろう。それはノゾミという彼女がいながらユキとデートしていることへの後ろめたさだったのだろうか。それとも、コンノに他の女の存在を知られたくないという保身だったのだろうか。

「取り込み中ならいいよ。また連絡して」

「ああ、また連絡する。じゃ」

口早にそう言って、僕は電話を切った。話したくなかった。また連絡するとは言ったものの、もう連絡などするもんかという思いが少なからずあった。

とはいえ、コンノの物分りの良さや、早々に電話を切れたことに安堵を感じながら、僕はユキのほうを見やった。ユキは少し離れたところで自分の携帯電話をいじっていた。僕はその無垢な姿を見て、

さらに安心した。ユキに、他の女の存在を知らしめたくなかった。悲しい思いをさせたくなかった。

## 第196話：失言

「お待たせ」

僕は冷静さを装おった。

「ううん。大丈夫？」

「大丈夫だよ。ごめんね」

「いいの」

僕は、取り戻そうとした。さっきまでの親密な空間を再び作るうとした。だがそれは二度と戻ってこなかった。さっきまでとは明らかに何かが違った。楽しい時間に水をさされたことで、二人のなかで何か白けていた。しかし、僕は必死だった。仲睦まじい時間、それはノゾミとの時間とはまた趣が違い、そして僕が求めていたのはまさにそんな時間だったのだ。それを失うのは悔しかった。

焦りからか、僕は冗舌じゆうぜつになった。ユキに相手してもらおうと、ユキに構ってもらおうと、ユキをからかう発言が増えていった。

しかし僕はまったく気づいていなかったのだ。そのエスカレートした行為が、既に失った二度と戻ってこないものを求める諦めの悪さが、誰かを傷つける結果になるとは。

「やだあ」

ユキの反応は僕の中からかいをやりわりと拒絶するものが増えていった。それは徐々にユキの発言を塗りつぶしていった。気づいた時には、ユキの相槌はほとんど全てが僕を否定するものとなっていた。僕は、それに気づかなければよかったのかもしれない。僕は、見えて見ぬふりをすればよかったのかもしれない。しかし僕の鋭敏な劣等感、ユキの発言を悪いように受け止めた。僕は、次第に自分に自信が持てなくなってきた。自分がユキと一緒にいることで、ひどくユキに不快な思いをさせているように錯覚した。

「そんなに嫌なら会わなきゃいいじゃん」  
いじけた心が僕にそれを言わせた。瞬間、ユキの顔が歪んだ。

## 第197話：近親

「え……」

「オレ、君に迷惑かけてるよな」

僕は自らを省みていた。ユキの否定的な相槌が僕の自己嫌悪のスイッチを入れた。そして一旦スイッチが入るとその波が広がるのは速かった。ユキは、僕と一緒にいても楽しくない、嫌な思いばかりしている、そういう思いが僕の思考を塗りつぶしていった。

ユキから視線を外し、無機質なビル群を眺めた。灰色の空を眺めた。その薄ら寒い光景は今の冷たい自分にふさわしく思えた。そうしながら、しばらく自分の世界に没頭した。

「ぐすつ……」

背後で発せられた嗚咽の声で、僕は我に返った。ハツとしながら振り向いてユキの方を見た。嗚咽の主はユキだった。ユキは、目を真っ赤にして泣いていた。

「ご、ごめん。オレ、酷いこと言ったね」

僕は自分だけの世界から、他人の存在する世界に戻った。僕は、自分を傷つけることに酔っていて、ユキの気持ちを考えていなかった。

「違うの……」

「え？」

「私の方が、貴方に迷惑かけてる。嫌な思いをさせて……」

「そ、そんなことない！」

うつん、とユキはかぶりを振った。ユキの頬を涙が伝った。僕の劣等感ユキの劣等感を刺激し、僕の自己嫌悪はユキの自己嫌悪を誘発した。

「今日だって、わざわざ来てもらって、無理言って勉強教えてもらって……」

「違う！ オレが来たいから来たんだよ。オレが勉強を教えたいから教えたんだよ」

僕の懸命な弁解（しかしそれは本心でもある）にも関わらず、ユキはぐずり続けた。一旦火のついた自己嫌悪の炎は、ユキの心を苛さいなみ続けていた。僕はその姿にさつきまでの自分を重ね合わせていた。そして気づいたのだ。僕とユキがとても近い存在であるということ。

第197話：近親（後書き）

今年はこれで終わりです。

ご愛読、ありがとうございます。

よいお年を。

第198話・懺悔（前書き）

明けましておめでとうござります。

## 第198話：懺悔

僕は、ユキがとても愛しく感じた。僕の手はユキの肩にかかったためらいからその手は震えた。その震えを止めるように、僕はユキを抱きしめた。

それはほんの数瞬だった。ほんの数瞬の触れ合いだった。しかしその行為は、言い尽くせない僕の思いを、表わしきれない僕の感情を、一瞬にしてユキに伝えた。

ユキは、泣き止んだ。

体を離れた時、僕に芽生えたのは罪悪感だった。ノゾミという彼女に対する罪悪感、彼女がいることをユキに隠している罪悪感。そんな自分が許せなかった。しばらくためらった後、懺悔するかのように、口を開いた。罪悪感の原因の一つを解消するために。

「……彼女が、いるんだ」

ユキは静かに聞いていた。そこには驚きも狼狽もなかった。

「うん。なんとなく、分かった」

「うん。……ごめん」

「なんで謝るの？」

「あのさ……。彼女、いるくせにさ……。君のことが好きなんだ」

ユキは押し黙った。そこには当惑があった。

「実家の方にさ、彼女、いるくせにさ。君と遊んで、君のことが気になって。君といると楽しくて、ああ、これは君のことが好きなんだなって、そう思う」

「でも、それって……」

「そうなんだ。彼女に、とても悪いと思う。こうして、君と会って遊んでることだって、裏切りに映るかもしれない。でも、やめられなかったんだ。弱いから」

「……私が、悪いんだよ」

「悪くない」

僕はそこで少し語気を強めた。

「オレが勝手に気になって、オレが勝手に好きになってるだけだ。君は悪くない」

僕は、ユキに悲しい思いをさせたくなかった。自分が全て悪い、心からそう思った。たとえそれが偽善であろうとも。

## 第199話：清算

しばらく沈黙が続いた後、ユキが意を決したように口を開いた。

「私も貴方のことが……」

僕は片手を少し上げてユキを制した。その後どんな言葉が来るか僕には分かった。ユキと近い存在である僕には分かった。そして、その言葉は、汚れた僕にはもつたいない言葉だった。今の状態で聞きたくない言葉だった。

「今は、言わないで欲しい」

そう伝えるとユキは悲しそうな顔をした。

「……自分でも、分かっているんだ。『このままじゃいけない』ってそれは痛烈な思いだった。クミコにもコンノにも、こんな罪悪感を感じたことはなかった。ユキだからこそ、純真で無垢なユキだからこそ、自分もそうあらなければ公平ではない気がした。

「だから、なんとかする。ちゃんとする。できるかどうか分かんないけど、それがちゃんと終わったら、改めて君の気持ちを聞くよ」

「……うん。分かった」

ユキは大人しく僕の言葉に従った。透明な素直さ、それがユキの美德だった。

「でも、不公平だよ。貴方は気持ちを伝えたのに私は言えないなんて」

すねたようにユキは言った。しかし言葉ほどすねていないのが分かった。そこにはからかいの色があった。図書館を出た後の親密さ、それとは趣を異にする仲の良さが生まれていた。

「うーん、まあ、しゃーないな。年下だもん」

「あ、そーゆーこと言うんだ？」

「ちうか、勉強を教えてもらってる時点で公平じゃないしな」

そう言うとユキはふくれっ面をした。それはとても愛くるしかった。その顔を見るためなら、辛いことにも立ち向かえる気がした。



第200話：円環【第23章・完】

その後言葉少なになった僕たちは、ほとんど無言のまま駅まで行った。そして別れる時に、僕はようやく口を開いた。言いくいが言わねばならぬことがあった。

「しばらく会わないようにしよう」

妥協という僕の弱さは、その言葉を僕に言わせまいとしていた。しかしその誘惑を振り切って僕はそれを言った。ノゾミのために、ユキのために、そして、僕のために。

ユキの顔に悲しみが浮かんだ。しかしそれはすぐに消えた。

「うん。分かった」

僕がユキの心の変化をすんなりと感じ取れるように、ユキもまた僕の心をすぐに理解することができた。

「ん。試験期間だしね。どうせ会えないしちょうどいいじゃん」

そういうもってもらしい理由をつけないと、僕は誘惑に負けそうだった。そう思い込むことで自分を納得させ、妥協を心から追い出した。

「ねえ……」

「ん？」

「電話やメールは……？」

僕の心は揺れ動いた。会わないし、電話もメールもしない、そんな禁欲的な生活に僕は耐えられるのかと自問自答した。

「んー。それはアリにしない？」

「もう、調子いいんだから」

ユキは笑ってそう言った。でも、ユキだって全く連絡がないのは耐えられないだろう、そういう確信が僕にはあった。そして同時に僕は怖かった。全く連絡をとらないことで、ユキが僕のことを忘れてしまわないか、どうでもよくなってしまうかないか、それが怖かつ

た。

しかしそれは口には出さなかった。ユキを疑うかのような発言はしたくなかった。僕は、この娘の悲しむ顔は見たくないのだ。

改札を抜け、僕たちは別々のホームへ向かった。別れは、意外にあっさりとしていた。電話やメールができるという一種のガス抜きのような妥協が、僕たちの別れをあまり深刻なものにしなかった。

僕たちは環状線のそれぞれ逆向きの電車に乗った。電車は進行とともに僕たちの距離を広げていった。しかしずっと乗っていればその距離はある地点からは狭まり、再び出会っただろう。どちらかが電車から降りない限りは。

## 第201話：猶予【第24章】

### 24・変動

ユキにもコンノにもそしてもちろんノゾミにも会わぬまま数週間が過ぎた。ユキとノゾミとは相変わらずメールも電話もしていた。僕は二人との連絡の頻度が等分になるように気を遣っていたが、連絡する頻度は以前より減っていた。ユキは後期試験の勉強で忙しかったし、ノゾミもまた、ある国家資格をとるための試験があった。

コンノとは、以前突然に連絡が来て僕を焦らせて以来、連絡していなかった。おそらく向こうも僕のことにかまけている暇はないのだろう。コンノも女子大生であるから後期試験があるだろうし、あるいはもう僕のことあまり気にならなくなったのかもしれない。

僕としては、コンノにはっきりと意志、僕はコンノと友人以上の関係を持つ気はないという旨を伝えなければならぬと思っていたので、全く連絡がないのは何だか拍子抜けしたような気分だった。同時に、このまま自然消滅すれば楽だなとも思っていた。だって僕には他に考えるべきもつと大事な人間関係があるのだ。

そんな気の緩んでいた僕だが、ある日突然にその執行猶予は終わった。2月の初めのある日曜日の午後、何の前触れもなくコンノから電話がかかってきたのだ。僕は驚いたが、しかし来る日が来たかという気分だった。連絡のないままフェードアウトという安易な結末ではなかったが、その日が来るのは分かっていたことだし後腐れなくけじめもつかたかった。僕は腹を括って電話に出た。もうこれで、コンノとのどっちつかずな関係を終わらせよう。

## 第202話：瀬踏

「久しぶり。元気？」

「ああ、まあまあ。そっちは？」

「元気だよ。寒いけど」

「うん。そうか」

「今、家？」

「そうだよ」

「何してたの」

「特には。ぐーたらしてた。試験勉強しなきゃいけないんだけどね」

「あ、私も試験だ。でもほとんどがレポートなんだ」

「そいつは楽でいいなあ」

「まあね。試験もそんなに難しくないしね」

「これだから文系は。卑怯者め」

「理系を選ばなきゃいいんだよ」

「まあ、そうだけどね。仕方ないや」

他愛ないよもやま話をしながら、僕は自分の心が思いのほか落ちて着いていることに気がついた。過度の緊張もなく気負いもなくリラックスしていた。

「ねえ。連絡くれるって言ったのに、なんでくれないの」

「ああ、忙しかったんだよ。試験勉強とかレポートとかな」

「嘘ばかり。試験勉強してないって言ったじゃん」

「今はしてないだけで、その時はしてたんだよ」

「ふーん」

嘘は言っていなかった。僕はユキとの図書館で一緒に勉強したことを思い出していた。確かに、僕も勉強をしていたのだ。

「この前電話した時、どこにいたの」

「初詣に行った」

「友達と？」

「友達と」

「Nさんと?」

「違うよ。アイツとはあんまり出かけないんだ。学校では会うけどね」

「んじゃ誰と? 私の知ってる人?」

「知らない人だね」

「女の子?」

言葉が止まった。

「あ、凶星だ。女の子と一緒にだったんでしょ?」

「ああ、そうだよ。女の子と一緒にだったよ」

開き直ったようにそう言った。どのみち、今日はそついでととも明らかにする予定だったのだ。

第202話：瀬踏（後書き）

2、3日、更新休みます。

第203話：彼岸（前書き）

2  
3  
日休むつもりがずいぶん間が開いてしまいました。

### 第203話：彼岸

「二人で初詣に行ったの？」

「ああ、そうだよ」

「いけないんだ！。彼女いるくせに」

「だって君と遊んだこともあるじゃん。それと一緒にだよ」

「その子とは、何かした？」

「何って？」

「キスとか……」

「してねえよ！」

「あら珍しい。私の時にはしたくせに」

コンノはからかうように言った。コンノは、僕とユキとの関係を知りたがり、そして同時に僕とユキの間に肉体的な交渉がまだないことを歓迎しているようだった。それは、自分は僕とそういう関係を持ったという優越感だったのだろうか。

「そっちのほうこそどうなんだよ。誰かいい人できた？」

「んー。いい人ってわけじゃないけど」

「お、なんだ。彼氏でもできたのか」

「彼氏じゃないけど、ね」

「聞かせるよ。どういう人」

僕は反撃に転じた。コンノの新しい男を知りたい反面、そんな男のことなどどうでもいいという気もあった。しかし、その根底にあったのは、コンノに新しく男ができれば僕のことなんてどうでもよくなるだろうという計算だ。そうすれば、難儀な別れ話なんてしなくてよくなる。

「この前、飲み会で知りあったんだー」

「ふーん。で、どこまでやったの？」

さっきのお返しとばかりに、僕は核心に切り込んだ。

「1回だけしたよ。お試してみたいな感じで」

平然と、まるで昨日食べた夕食のメニューでも伝えるように、コンノは答えた。そして僕はそんなコンノになぜか失望のようなものを感じていた。僕の中で、急速に何か冷えていくのを感じた。それはある種の悟りだった。『コンノは、あちら側の人間なのだ』という実感だった。

## 第204話・乖離

ノゾミやユキは、絶対にコンノのような振る舞いはしないだろう。コンノの性に関する振る舞い、異性に関する振る舞いは、細部こそ違えどクミコのそれとそっくりだった。確かに僕もあまり人のことは言えない。性に関して慎重深いかと問われれば、そうではないと答えざるをえないだろう。クミコやコンノとこのことがあるのだからしかし、僕と彼女達との決定的な違いは、その行為を恥じているか否か、そこに罪悪感を感じているかどうかだった。

そして、僕が求めているのは、そういうあけすけなタイプの女性ではないのだ。一時的に惹かれたとして、最終的には相容れない関係、僕はクミコとの一件から、それを思い知っていた。

「そっか。よかったな」

僕はコンノの言葉に素っ気ない相槌を打った。とどのつまり、僕はコンノのことなどどうでもいいのだ。何時、何処で誰と何をしようが、僕には関係ないことなのだ。それが、僕の導き出した結論、コンノの発言を聞いて改めて思ったことだった。

しかし、その結論をコンノに伝えること、関係を絶とうともちかけること、それはなかなかの難題だった。口にするきっかけがないのだ。僕たちの関係は薄く、そんな薄い繋がりを解消することをわざわざ口にするのは、なんだか随分と間抜けな気がした。そんな希薄な人間関係は、自然に消滅するのがふさわしいように感じたのだ。ただ僕が連絡をとらない、相手からの知らせを受け取らない、何も言わずともそれだけでいい気がした。

第205話：福音（前書き）

毎日更新が難しいかもしれません。

## 第205話：福音

しかしそれでも不安は残った。なにせ、コンノは僕の家に来たことがある。僕の意向を無視して、再び押しかけることは可能だ。僕を困らせようとか喜ばせようとか、そういうつもりは全くなく、ただ自分が来たいために。潜在的にあるその可能性は排除しておきたかった。そして、それならば関係を絶つことを明言する必要があるのだ。

逡巡のまま時は過ぎた。僕はコンノのどうでもいい話に、もっとどうでもいい相槌を打ちながら、取るべき道を考えていた。迷っていた。

と、コンノが突然に状況を劇的に一変させる発言をした。

「私、留学するんだ」と。

「留学？」

「うん。オーストラリアに」

「いつからいつまで？」

「来年の4月から1年間」

驚いて投げかけたいくつかの質問に、コンノは淀みなく答えた。

「じゃあ、会えないんだ」

「そうなるね」

物理的に会えなくなると、なぜか少し惜しいような気がした。しかしよくよく考えてみるとそれは、コンノへの親しみからではなく、性行為の相手がいなくなることを惜んでいるということに気づいた。

僕はその下衆な考えを頭から追い払った。コンノは日本からいなくなる。それはつまり、僕が関係を絶つことを敢えて明言しなくても、そして、関係を絶つ行動を取らなくても自然とそれが消滅することを示していた。

降って湧いた幸運、とまではいかないまでも、優柔不断な僕にと  
ってコンノの決定は、自ら手を下すことなくもたらされた変化であ  
り、渡りに舟とでも言っべきものだった。

## 第206話：明言

「そっか。いつてらっしやい」

僕は素っ気なくそう答えた。

「随分あっさりしてるんだね」

「だって、別にオレに出来ることないだろ？」

「一つ、お願いがあるんだけど……」

そこでコンノは少し口ごもった。

「お願い？ 何？」

「……会って、くれないかな。あっちに行っちゃう前に」

「会っ……？」

「そっ」

思いがけないコンノのいじらしさだった。僕はその言葉と態度に情のようなものを感じたが、しかし同時にきな臭さも感じていた。会うことが双方にとっていい作用をもたらすとは考えにくく、むしろ逆に関係がこじれるのではないか、という危惧<sup>きぐ</sup>だ。

「悪いけど、それはできない」

僕は少し考えた後、断固とした口調で言い放った。

「どうして？ 彼女いるから？」

「それもある」

「他の女の子とは遊んでるんでしょ？ だったらいいじゃん」

コンノはそうまくし立て、それを聞いた僕は少しうんざりした。

やはり、すつきりとした関係の解消なぞできないのだ。コンノに分からせるためには、諦めさせるためには、僕の気持ちが必要以上の言葉で明らかにしなければいけないのだ。

「その子と君は、違うんだ」

「？」

「君に対しては、僕は恋愛感情を持っていない。ただの友達、もっとはつきり言うと、セックスの相手としか考えていない」

「……」

「その子のことは、すごく大事に思ってる。大事だから、遊びでそういうことはできないし、向こうもそういうことはしない。君とは違うんだ」

コンノは無言だった。僕はもしかして泣いているのではないかと思ひ、注意深く電話の向こうの様子を探った。しかし泣き声らしきものは聞こえて来なかった。ただ、無言だった。

## 第207話：離別

「その子と、付き合うの？」

しばらくの沈黙の後、コンノが口を開いた。静かな声だった。

「まだ、分からない。けど、はつきりしなきゃいけないと思ってる。でないと、その子にも、彼女にも悪い」

「二股でもするの？」

「それはしない。絶対に」

「そう言うと思った」

声のトーンに明るさが戻った。そこには微笑みすらあった。

「そういうとこ、好きだったんだけどなー。やっぱり私じゃ無理か」

「」

「……ごめん」

「ううん。いいんだ。わかってたことだしね」

コンノは気丈だった。落胆もあろうが、それを見せようとはしなかった。それが僕を安心させるための振る舞いなのかどうかは、よく分からなかった。

「あつちでいい人見つけるよ。君が羨むぐらいの」

「ああ、是非そうしてくれ」

コンノは強かった。確かに僕に拒絶の言葉を浴びせられて、失恋の悲しみのようなものを感じてはいるだろう。もしかしたら、電話を切った後で孤独に泣くかもしれない。しかしそこで躓いて立ち上がれないのではなく、すぐに立ち上がって歩いて行ける、コンノはそういう女だ。僕はこれまでコンノと接してきた短い期間で、なんとなくそれに気づいていた。それは、コンノにクミコの姿を重ねていたのかもしれない。二人は同じタイプであり、僕やユキとは違うタイプだった。

「元気で」

そういった意味の言葉をお互いに交わし、僕たちは会話を終えた。それが僕とコンノの、最後の言葉だった。この時から今に至るまで、僕もおそらくはコンノもお互いの消息を知らない。そしてきつとこれからも、僕たちは他人のままだろう。

## 第208話：散花【第24章・完】

コンノとの訣別は、多分にコンノの都合が作用したものであったが、僕が自らの気持ちや相手を気兼ねなく伝え、それによって関係をそこそこ円満に終わらせることができたという経験になった。僕はその経験によっていわば自信のようなものを身につけた。女子との人間関係を自らの望みにそって終わらせられる、という自信だ。

その自信を持って、今後同様の行動を起こさねばならなくなるのは明らかだった。ノゾミ、ユキ、僕、その三者の関係を、現在のよくな絶妙なバランスをとって続けていくことは不可能だ。三者三様に、相手に対しての思いは変化していた。僕とユキは後期試験、ノゾミは資格試験があり、それぞれがそれぞれに連絡を取りにくい状況になっており、自ずと電話やメールの回数が減り、その数少なさが、かえって両者の違いを浮き彫りにし始めた。少ない言葉で相手に何を伝えたいのか、相手のことをどう思っているのか、それが少しずつ、少しずつはつきりとし始めたのだ。

そして、そんななかで後期試験が終わり、大学は春休みに入った。僕は田舎に帰らなければならなかった。教習所はまだ続いていたし、家族も僕の顔を見たがっている。そして何より、僕はノゾミに会わなければいけない。

この一月の間、あまり連絡がとれない間、僕の中で何か芽生えた。最初はほんの気まぐれだと思ったその思いは、消えずにどんどん肥大化していった。それは、「このままでは、ノゾミとつきあっていけない」という思いだった。

僕は決意を持って田舎に帰った。ノゾミに、自分が思っていることを打ち明けよう、自分の気持ちを、相手に気兼ねなく伝えよう、と。

梅の花が散る季節だった。人々は、小さく美しい花が失われていくのを惜しんでいた。しかし同時に人々は待ち望んでいた。来たる季節に、別の新たな花が咲くことを。そして人々は、もちろん散りゆく花も好きではあるが、その別の花の方がもっと好きだった。

第208話・散花【第24章・完】（後書き）

1週間弱休みます。

第209話：蟄居【第25章】（前書き）

随分休んでしまいました。

## 第209話：蟄居【第25章】

25 . 末期

あんなに寒く感じ、日々凍えさせられていた東京の風より、田舎の、2月後半の風は冷たかった。此処こゝには風を遮る大きな建築物がないからなのか、東京でヒートアイランド現象が起こっていたからなのか、あるいは僕の心がそう感じるように仕向けていたのか。

今年度四度目の帰郷、ある決意を持って帰ってきた郷里、しかし、僕は何もできずにいた。何もできず、誰とも会わず、独りで実家にいた。友人は相変わらず帰郷の時期がバラバラだったし、僕も何と少しでも会いたいとまでは思っていなかった。しかしノゾミは、地元という近い距離にいるのだから、是非会いたいと僕は切に願っていた。だが、実家に帰ってしばらく経つても、僕たちは会えていなかった。会えていないどころか、メールや電話すらほとんどできていなかった。

僕の中で、ノゾミに自分の感情の変化を忌憚きたんなく伝えようという意志はしっかりとあり、そしてそれは、とてもメールや電話で言うことではなく、実際に会って、相手の顔を見ながら話すべきことだった。しかし、それをするには時期が悪かった。ノゾミは3月に資格試験があり、とても僕に会うような心境ではなかったし、僕も、そんな状況の中で無理矢理会う約束をさせるほどエゴイストではなかった。同じ理由で、メールや電話も憚はばかられた。

こうして、僕は独りだった。大学入学まで長年住んでいたこの地でより、たった2年しか住んでいない東京でのほうが、僕の知人、友人が多いように感じられた。友人、親友、そして僕のことを想ってくれている人、それらの僕への想いの総計は、ここより東京のほうが多いように感じていた。

## 第210話：独断

僕は、自らが生まれ育った土地に、いつでも暖かく迎えてくれる母性に似たものを、かつて感じていた。僕の居場所、僕が必要とされる場所、そんな処だと思っていた。しかし誰とも連絡が取れず、教習所に通う以外は家から出ず、数少ない会話は家族との事務的なもののみである今の僕にとって、この土地はどこかよそらしく、なにかしっくりこず、僕に「自分はもはやこの住人ではないのか？」という不安を持たせるに十分だった。

まるで僕の心にも冷たい風が吹くようだった。風は強く吹いていたが、心の中心にある僕の根幹はその風に乱される事なく、ひどく冷静で、堅固だった。僕の心の真ん中にある僕は、冷やりとした氷のように透き通っており、それは冷たい風を受けてさらに冷たく、強張<sup>こわば</sup>っていった。

僕は次第に、その風の中で答えを出し始めた。ノゾミに言うべき台詞、聞くべき意思、だがそれらは言えないし聞けない。そんな環境下で、僕の心は僕の中だけでそれらをシミュレートし、僕の中だけで結論を導き出した。

「別れよう」と。

ノゾミに会わないまま、ろくにメールも電話もしないまま、僕は自分とノゾミとのこれからの関係を、僕たちがなるべき関係を、独断で決定した。ノゾミと会えない、連絡が取れない、だからこそ、そういう孤独な発想になった。そして、僕はもう、このまま消え去っていくかと思うていた。ノゾミの生活に僕がほとんど介在していないこの状態、それよりも僕の存在が薄れていく方向にもっていきやがては霧のようにいつのまにか消え去ろうと思った。それが、ふさわしく感じたのだ。この関係の薄い日々で生じた思いは、その強

まりによってそれ以上の薄さを求めており、僕はその流れに沿うことが、とても自然であるように感じたのだ。

## 第211話：粗野

それはしかし逃げでもあった。ノゾミと向き合い、しっかりとした別れの言葉を発する、それは僕にとってエネルギーを使うことだったし、ノゾミは少なからずダメージを受けるだろう。僕はノゾミを傷つけたくなかったし、自分も傷つけたくなかった。コンノの一件でそれを実行する自信を得たといえども、やはり、できることからそれを避けたかった。僕は再び何もしない男、人との内面的な衝突を避ける消極的な男になろうとしていた。Sの忠告や進言、それを忘れ去るほど、その価値を見失うほど、一人の色のない日々は寂しく冷たかった。

僕の中で、その卑怯な手段を取ることがあらかじめ決定されたある日、それは確か3月の初めだったと思うが、ある友人から電話がかかってきた。Tさんの彼氏であり、僕の高校時代の友人でもある男、Fからだった。

「こつち帰ってきとんのか？」

開口一番、乱暴な口調でFは言った。それはつまり、「帰ってきているなら遊びに行こう」と暗に誘っているのだった。僕は、ここにして初めて、今回の帰省で誰かに誘われたのだ。

「帰つとるなあ」

「毎日何しとんねん？」

「何も。教習所と家の往復や」

「彼女は？」

Tさんの彼氏かつ僕の友人という立場上、Fは僕とノゾミのことを知っていた。夏休みに四人で遊びに行ったこともある。そういう意味では、Fは僕の同性の友人の誰よりも詳しく、僕とノゾミのことを知っており、僕が唯一、ノゾミのことをばかさずに話せる相手であった。



## 第212話：奔流

「試験前やる？ 連絡なんぞ取れるかい」

「全然連絡とってないんか？」

「そやな」

「そら寂しいやろ」

「まあな」

「でも、それやったら試験終わったら存分に遊べや」

「さあ、どうやるな」

僕は、ここで素知らぬ顔をすることもできた。何食わぬ顔で、僕とノゾミとの仲が万事うまくいっているように振る舞うこともできた。しかし、僕はそうしなかった。だが、僕はそうしなかった。隠し通せなかった。それは寂しく孤独な感情を誰かに吐露とろしたかったのもあるだろうし、誰か第三者に僕の考え、僕の決定を吟味ぎんみしてもらいたかったのもあるだろう。そして、Fは僕の微妙な言葉に敏感に反応した。

「お前、それ、どういうことや？ うまくいってないんか？」

「ん。まあな。でも、もうええんや」

「待て待て。落ち着け」

「落ち着いとるよ。大丈夫」

「『もうええ』ってどういうことや？」

「もうええってことよ。もう、どうでもええってこと」

「……お前、やけになってないか？」

「なっていないよ。よく考えた結果や」

「今からちよつとお前んとこ行くわ。出てこい」

「今から？ 夜遅いしええわ」

「ええから出てこい。15分で行く」

それきり、乱暴に電話は切れた。僕は少しの間、呆然としていた。僕は、Fに会うべきなのだろうか？ それとも、今から連絡して無

理にでも帰ってもらわなければならないだろうか？ その時僕は気づいたのだ。自分が、とても孤独であることに。ここ数週間、ノゾミのこととを思い悩んでいる間、誰かに話を聞いてほしく、誰かに一緒に考えてほしい、そういう思いが常にあったことに。

## 第213話：移行

僕は、Fの強引な来訪を告げる言葉によって、魔法から解けたように動き出した。独り引きこもって思索にふける隠者のような世界から、自分だけでなく他者のいる世界、他者と関わる世界に移行しなければいけなかった。そうさせたFの態度は無理矢理で乱暴だったが、それぐらい強引でなければモノクロームの思考にどっぷりと浸かっていた僕を、カラフルな現実には引き戻すことはできなかっただろう。僕は、動き出した。胸の中ではまだいろいろな思いが燻くすぶっていたが、それに構ってられない。だって、Fは来るのだ。少なくとも、それに対する準備はしておかねばならない。

顔を洗い、服を着替え、台所にいる母親に出かけることを告げた。「こんな時間にどこ行くん？」

訝いぶかしげな表情で母親は聞いた。こんな時間から突然に僕がどこかに行くことなど、滅多にないのだ。

「どこか分かん。Fに会う」

「F君に？ 何も夜に会わなくてもええんちゃう？」

「いや、今会わないかんねん。大事な話をするんや」

僕はきっぱりと言った。母親の理解のために言葉を尽くす気はさらさらなかった。押し問答はしたくなかったし、あまり人に気を遣える状態でもなかった。母親は呆れたような顔でそんな僕を見、諦めたように「気をつけて」とだけ言った。僕は、もうそれ以上家にいたくなかったので外に出た。まだ時間はあつたが、外でFを待つことにした。

## 第214話：光鱗

外に出ると、2月の夜の冷気が僕を刺した。捨て鉢な気持ちの僕を存分に刺した。それが快感でもあった。僕は、こんな僕は寒さに震えて当然なのだ。痛いくらい冷気に曝されるべきなのだ。そんな自傷行為にも似た思いが僕を司っていた。

だが、いつまでもそんな自己憐憫に浸ってはいなかった。そこで浸れないのが僕の悲しみの限界だった。体はガタガタと震え、体温は徐々に下がっていった。僕は震える唇に煙草をくわえたまま、少し歩いて近くを流れる川まで行った。なかなか大きなその川のほとりの道路には自販機があり、僕はたまに夜中にそこまで飲み物を買に行っていた。

自販機で缶コーヒーを買い、しばらくその温もりを堪能した。眼前には川が横たわっていた。巨大な爬虫類の背を思わせるそれは、鱗が光に煌めくように、月光を受けて妖しく微かに光っていた。僕はそんな光景を眺めながら、Sと海を見たことを思い出していた。あの年末の、僕が最も心を許す相手との素晴らしい時間を思い出していた。

僕は、幾分その温かさを失った缶コーヒーを飲みながら、あの時Sに言われたことが実践できているだろうかと自問した。それは全く実行されていないように感じた。高校生の時の僕が今の僕を見たら、間違いなく見下すだろう。そんな自信があった。

## 第215話：投擲

僕は、次第に腹が立ってきた。ふがない自分に腹が立ってきた。僕は煙草を吐き捨てて荒々しくそれを踏み消し、一気にコーヒーの残りを飲み干して、飲み終えたその缶を、川に向かって思い切り投げた。言葉にならない声をあげながら、缶を力まかせにブン投げた。缶は大きな円弧を描いて飛び、音もなく川のどこかに落ちた。普段の僕ならけっしてそんなことはしない。ポイ捨てもそうだし、何かに当たることもない。しかしその時は、何かを攻撃したくて、自分の中の何かを外に吐き出たくて堪らなかったのだ。

思い切り体を動かすことで、何か吹っ切れた気がした。自分の嫌な何かを、いくら外に出せた気がした。しかしそれは、その嫌な何かは、時間が経てばすぐにまた心の中に積もるだろう。まるで雪のように音もなく静かに積もるだろう。気づいた頃には身動きが取れなくなるほどに。そうしないためにも、そうならないためにも、僕はさっさとこの問題を処理してしまわなければいけないかった。根本から完全に決着をつけなければいけないかった。

（別れなければいけない）

それは処理でも決着でもなく単なる逃げだったのかもしれない。しかし僕にはそれしか方法がなかった。最後の逃げ道がそれであり、僕は全力でそこに逃げ込む決意を新たにした。

その時、Fの車がやってきた。

## 第216話・同類

「乗れや」

ぼんやりとした街灯の光の下に佇む僕の姿を見つけたFは、車の窓を開けてそう短く言った。助手席のドアを開けて乗り込むと、車内はそれまで冬の冷気に曝ひびされていた僕には異常と思えるほど暖かった。

「とりあえず、どっか行くぞ。飯は食ったんか？」

「食った」

「ほな飲みに行くぞ」

そう言ったきり、二人の間に会話はなくなった。僕は何から話せばいいのか分からなかったし、Fはどこから話を聞けばいいのか分からないようだった。Fの携帯電話が鳴り、彼は運転しながら電話に出た。その会話を遠くに聞きながら、僕はふとFのことを考えた。考えてみると、実はFは僕と似たような境遇にあるのだった。僕とFとTさんは高校の時の友人で、卒業後僕は東京の大学へ、Fは大阪の大学へと進学した。そして僕にはノゾミという彼女ができ、FはTさんと付き合い始めた。僕とFのどちらもが遠距離恋愛の最中であり、相手は郷里の同じ専門学校に通っている。

つまりFはそういう意味では僕の苦悩、遠距離恋愛であることだとか相手の通う専門学校のスケジュールによってデートの予定を狂わされることだとかを、僕と同時期に感じているはずなのだった。

Fから電話がかかってくるまで、僕はFに相談するという案を全く考えていなかったのだが、こうしてFの關係に思いを馳せてみると、彼は相談相手としてうってつけの人物であった。

## 第217話：眼光

おそらくFの親のものであろう白いセダンは、ネオンのまばらに光る国道を走り抜け、とある店の駐車場に停まった。その店は、それまでに見かけたきらびやかな看板を誇示する店とは違い、ひっそりと暗がりであった。ともすれば飲食店ではないような佇まいを感じる、小さな建物だった。ドア付近まで近づくとやっとか弱い光に照らされた店名が見え、そこで初めて僕はそれがバーであることを知った。

店内は、しかしながら暖かみのある装飾だった。静かで、清潔で、こじんまりとしたバーだった。僕は郷里のような田舎にこんな小洒落たバーがあるなんて思いもよらなかったし、そういう店を僕と同年齢のFが知っていることにも驚いた。

Fはカウンターの中にいたマスターと二言三言交わし、奥のテーブル席に僕を促した。どうやらFは何度かこの店に来たことがあるようだった。

「えらい渋い店を知っとるな」

普段乱暴なFの意外な一面に驚きつつ僕は言った。

「やかましい居酒屋で恋の話もないやろ」

テーブル席の奥に腰を下ろしながらFが答えた。

「で、どうということや？」

僕の目をしっかりと見つめながら、Fは短く尋ねた。そのまっすぐな眼光に耐えられず、僕は思わず目をそらした。

「どうということもこうということもないよ。言葉のままや」

僕はそっぽを向いて拗ねたように答えた。Fに押し切られる形でここまで来てみたものの、Fに全てを打ち明ける気はなかった。

## 第218話：暴露

僕とFは、そこまで仲がいいというわけではない。もちろん、連絡は取り合っているし、一緒に遊ぶこともある。しかし、それは僕にとって半ば表面的なもので、悩み事を相談したり、心情を吐露することはお互いに今までなかった。一番の親友で刎頸ふんけいの交わりとも言えるSにすら、僕は自分からは悩み事を相談できないのだ。Sよりも親密度の劣るFに、自分から苦しさを打ち明けることなぞ、できはしなかった。

しかし、そんな弱みを見せたくないという思いの反面、誰かに聞いてもらいたいという願望もあった。誰かに聞いてほしい、判断してほしい、そしてなにより、共感してほしいという思いが。そして、だからこそFなのだった。僕と同じような恋愛をしているFならば、この思いを、懊惱おつのうを、最も良く理解するだろう。

酒の力も手伝って、僕がカクテルを3杯ほど空ける頃に僕は少しずつFに今の苦しみ、悩みを語り出し、酔いが増すにつれて舌も滑らかになり、結局、最後には自身の心情をあらかた曝あかけ出していた。

「それで、どうするつもりや」

静かにノンアルコールのカクテルを飲んだり、携帯電話のメールを見ながら僕の話聞いていたFは、僕の話が終わった頃合を見てそう尋ねてきた。

「もう、ええねん。別れる」

「待て待て。何を自棄やけになっとんねん」

「だって、もう無理やわ」

そう言いながら、僕は泣きそうだった。

「向こうはどう思っとんねん？」

「知らん」

「知らんって。聞いてないんか？」

「だって、連絡できへんもん」

「お前、それ聞いてからでもええんちゃうか？」

Fは諭すような静かな声で言った。

## 第219話：喚問

「お前はどうかやら不安になってるみたいや。自分がホンマに好かれるのかどうか。お前は寂しがり屋やからな」

「やかましいわ」

「まあ聞け。それで、相手がお前のことをどう思ってるのかオレには分からん。なんせ、オレも普段は大阪やしな。接点がない。それやから、ちよつと待つとけ。もうすぐTさんが来る」

「Tさんが？ なんで？」

「さつきオレが呼んだ」

僕はうろたえた。Fに事の次第を包み隠さず言えたのは、Fが同性の友人だからでもあるのだ。Tさんという異性の友人に、こんな僕の状態を知られることは、プライドだけは高い僕にとってかなり恥ずかしいことだった。それにTさんはノゾミと同じく試験を控えた身だ。僕のためにわざわざ時間を割いてもらうのはとても申し訳なかった。

「じたばたしてもしやあないやろ。お前、相手がお前のことどう思ってるのか何も知らんまま勝手に別れて、綺麗な思い出みたいにするのやめろや」

僕はぎくりとした。同じようなことを言われたのを思い出したのだ。綺麗事ばかり言っている今の僕を叱咤しったしてくれた、あの冬の日のSの事を。

「とりあえず、Tさんから話を聞け。それからいろいろ決める」  
僕はうなだれてTさんが来るのをまつた。おそらくは、Fが車内でかけた電話やこの店で打っていたメールの相手はTさんだったのだ。Fは僕から詳細を聞く前に、こうなることを予見していたのだ。僕はその巧妙さを痛感しながらただ待つしかなかった。それから程なくして、Tさんは店に現れた。



## 第220話：岡目

「……と、かれこれそういうわけや」

あまりTさんに話したくなく、また、話したとして要領を得ない僕に代わって、事の成り行きをFがTさんに簡潔に説明した。僕はたまに訂正を入れながら、しかし大人しく酒を飲んでた。酔いはいつもと違って、じわりじわりと外側に染み込むようにしか僕の内に入ってこなかった。

全てを聞き終えたTさんは、そこで一つ大きなため息をついた。

「なんでそんなことになってるかなあ……」

「お前の目から見て、あの子はいいつのことどう思ってる？」

Fが僕の彼女の友人であるTさんにそう聞いた。

「あの子、あんたの事、好きに思ってるみたいやで」

「え？　なんか聞いたことあるん？」

僕はきよんとして尋ねた。遠くにほのかな光が見えた気がした。「んー。あの子はいあいう性格やから、自分からそういう事言わんけど、でもあんたとおる時楽しそうやったよ。ほら、初詣の時とか、微かに見えた光は、しかし微かなままだった。

「オレやってそれくらい知ってるよ。一緒にいる時、楽しんでるよ。うな気もするし、少なくとも一緒にいるのが嫌ってわけではないと思っわ」

「そしたらそれでええんちゃうんか？」

Fがホッとしたように言った。

「でも、ちやうねん」

僕はそう言っただけ、考えをまとめようと口をつぐんだ。FもTさんも、固唾を飲んで僕の次の言葉を待っていた。そう、違うのだ。僕が求めているのは、それ以上の何かなのだ。

## 第221話：紛糾

「うん、ちゃうと思う」

「なにがや？」

Fがいらついたように言った。

「多分、その楽しいは友達としての楽しいと同じやねん。好きっていうのは、仲のいい友達に対しての好きと同じ感じやねん。やから違う。そういうのは恋愛やないと思う」

僕はポストカードで彩られたバーの壁、その手前の空間を見つめながら言った。言葉に出したことで、その思いは一段と強く、真実味を増した。今まで感じていた違和感、その全てはそこに集約されているのだと確信した。そして、だからこそ別れなければいけないのだと。

「それは違うわ」

Tさんが少し大きな声で言った。

「あの子は感情をあんまり出さへんし、それやから分かりづらいついけど、私らと一緒にの時とあんたと一緒にの時はやっぱり違うよ。ちゃんと彼氏彼女の関係やと思うわ」

「そうかもしれん。でも、そうでないかもしれんやろ？」

僕はいつまでも臆病だった。いつまでも自信が持てなかった。

「そうでなくないかもしれんやないか。お前、それは確認してみろよ。自分だけで思ってもしょうがないやろ？ さっきも言ったけど、綺麗になるなって。聞きづらい事かもしれんけど、それはやれでないと、お互いしこりが残るわ」

Fの言葉は有無を言わさぬ強さがあつた。僕は再び考え出した。Fの意見は客観的には正しい。だが、僕の主観が入るとどうしてもその意見に従えない部分が出来てきた。僕は自分の納得できる妥協点を見出ださねばならなかった。僕は氷がすっかり溶けて薄まったカクテルを、飲むともなしにちびりちびりと啜りながら考え続けた。



## 第222話：変革【第25章・完】

僕として譲れないライン、それは、このままの関係を続けてはいけないという意志だった。関係が、僕とノゾミの間の距離感がこのまま変わらないのなら、僕はその空気に耐えられない。どこかに違和感を感じ、どこかにしこりが残る。そしてそこから生まれた灰色の疑心暗鬼は、僕の心を苛むさいなだろう。何度でもしつこく。僕はそんなストレスの溜まる思いはしたくない。それでは結局同じ事の繰り返しだ。二人の関係をドラステックとは言わないまでも、かなり意識的に変えていかねばならない。僕も、ノゾミも。

僕は、ある程度までは我慢しようと思った。ノゾミとの、微妙なよそよそしさの存在する空気、それをある程度は我慢しようと思った。それが、僕の努力だ。それに対するノゾミの努力、それは僕に對してもつと感情を出す、ということだろう。ノゾミの感情、意志、楽しんでいるのかつまらないのか、僕を友人と知っているのか恋人と知っているのか、それをもつと僕に伝えて欲しかった。

僕はその要求をノゾミに伝えようと思った。それはいわば僕とノゾミが今後もつきあっていくための条件のようなものだった。それが通らないなら……。

Fに家の近くまで送ってもらい、僕はまた独りになった。誰かと会い、そして別れた後の常として、そこにはいくばくかの寂寥感せきじょうかんがあった。寂しさは人恋しさに繋がり、僕に誰かとの思い出を呼び起こさせた。僕はノゾミと出会った頃を思い出した。あの頃は、ノゾミとの清らかな恋愛が楽しかった。会って、一緒にデートするだけで幸せだった。それが今では……。

おそらくは、東京での出会いが僕を変えたのだ。クミコとの、コンノとの、そしてユキとの出会いが、刺激的な日々が、僕をしてノゾミに対する物足りなさを感じさせるようになったのだ。それは成

長と呼ばれるものなのか、墮落と言われるものなのか、僕には分らない。ただ、僕の心は変性してしまい、もうあの頃の僕には戻れない。そして今の僕の心の穴を埋められるのは、今のノゾミではない。それだけは確かだった。

**第222話：変革【第25章・完】（後書き）**

あと少しで終わります。

終わりを始める前に、少し休みます。

## 第223話：取得【第26章】

### 26．待ち人

春が、来た。3月も末になり、気候や空気や木々の装いは初春と  
いった様相を呈<sup>てい</sup>してきた。

2月末のあの日、僕がFと会った日、それから僕も僕の生活自体は  
大して代わり映えがなかった。3月上旬にあった僕の誕生日も一人  
で過ごした。多忙なノゾミにはもちろん会えなかったし、電話すら  
なかった。しかしそのことは特に僕の心を傷つけなかった。もう、  
そういうものだと諦めていた部分もあったし、だからこそ、その状  
態を打開すべきだと思っていた。そしてその日は、全てが終わった  
時、ノゾミの試験が終わりお互いに何の憂いもなく話し合える日だ  
ろうと考えていた。

3月中旬に、僕はやっとのことで免許を取った。思えば、ときれ  
とぎれではあるが夏からずっと教習所に通っていたのだ。そんな時  
間と労力を費やした免許取得だけに、実際に免許が交付され、自分  
一人で車に乗って運転してみると、なかなか感慨深いものがあつた。  
同時に、安心してよかった。

(これで、もうノゾミに運転してもらわなくていい。それどころか、  
僕が助手席にノゾミを乗せてデートすることだってできるんだ)

デートの度に、彼女に移動手段を提供して貰っているという申し  
訳なさ、負い目、そういったものが解消されれば僕の劣等感も幾分  
減り、大きな心で彼女と接することができそうだった。

しかし、果たして二人の関係が今からも続いていくのか。それは  
今はまだ誰にも分からないことだった。それをはつきりさせるため  
に、僕は動かなければならなかった。

## 第224話：峻険

免許が交付されてから、僕は何度か一人で車に乗って、運転の練習をした。一人で走る公道は不安で緊張の連続だったが、回数を重ねる事に運転にも慣れ、そんなに肩も凝らなくなってきた。

音楽に耳を傾けながら運転ができるくらいになったある日、僕はいつになく険しい顔をしながら車に乗っていた。運転して向かう先は、Tさんが、そしてノゾミが通っていた専門学校駐車場だ。今日僕は、そこで3ヶ月弱ぶりにノゾミに会うのだ。楽しくデートをするためではなく、僕にとって言い出しづらく、おそらくノゾミにとっては聞きたくない話をしに行くのだ。悲壮な思いでハンドルを握る僕の顔は、まるで処刑場に引っ立てられて行く罪人のように青ざめていた。

3月下旬、ノゾミの試験が終わって程なくして、僕はノゾミと連絡を取った。二人で会って大事な話をする約束を取り付けるために

「大事な話があるんだ」

そう僕は電話で言った。

「電話じゃできない、できなくはないけどしたくない話なんだ。会って話さなきゃならない」

ノゾミは、静かに聞いていた。あまりの静寂に何を考えているのかと不安になるほどに。その焦燥感から僕が何かしら言おうとした時、やっとノゾミは返事をした。

「分かった」と。

そして僕たちは時間と場所とを決めた。来年度から社会人となり、その準備に追われているノゾミにあまり余裕はなかった。かろうじて三月末のある日、書類上の手続きで学校に行くノゾミに会うことができそうだった。それに合わせて僕たちの、ともすれば最後になるかもしれない邂逅は、お洒落なカフェでも夜景の見える公園でも

なく、ロマンティズムのかけらもない駐車で  
行われることにな  
った。

## 第225話・耳目

ノゾミに会う約束を取り付け、そしていよいよ会うという日の前日、僕はユキに電話をした。随分久しぶりだった。

「やあ」

「どうしたの？」

意外そうなユキの返事は電話するのが久しぶりだったからか、それとも僕の声に元気がなかったからか。

「うん。まあ、いろいろあってね」

普段の僕なら、ここから世間話になだれ込むだろう。しばらくぶりの電話だけに、お互いに近況報告などし合うのだろう。しかし僕には余裕がなかった。何気ない話ができるほど、心にゆとりがなかった。僕は今、ノゾミのみならずユキにも大事な話をしなければいけないのだ。

「あの、さ」

「何？」

ユキの声は心配そうだった。その口から発せられたのは簡潔な返事だったが、根底にある気遣いを僕は痛いほどに感じた。ユキが僕の言葉や息遣い、受話器越しに感じる僕の状態に関する情報を一切捉え逃すまいと集中しているのが分かった。

「オレ、彼女と別れるかもしない」

僕はこの言葉を半ば絶望を持って発したが、しかし同時に、その中にユキに気に入られようという自身のエゴを少し感じた。ユキはおそらく僕とつきあいたいと思っている。そんなユキにとって、僕が彼女と別れることは、その願望の成就じゆじゆに向けて一歩前進したと言えるはずだ。そんなおべっかのような思いが、一瞬頭をよぎった。僕は次のユキの言葉に集中した。ユキがどんな反応を示すのか知るために。

## 第226話：一因

「え？　なんで？」

ユキの言葉には驚きがあった。そこには喜びはなかった。ユキは、自分の恋愛の進展より、僕の幸福のほうが大事なのだ。ユキはそういう子なのだ。そういう素敵な子だからこそ、僕はこの子に惹ひかれているのだ。

「いろいろ、あつてさ……」

あまり詳しい状況を説明したくはなかった。僕自身、ノゾミとの事をどこからどこまで話していいか分からなかったし、ユキがどこまで聞きたいのかも分からない。ともすればそれは僕の愚痴になるし、下手な情報はユキを傷つける。咄嗟とつさに僕はそう考え、お茶を濁した。

「……もしかして、私のせい？」

「そうじゃない。それはないよ。彼女とは前からちよつといろいろあつて、それで、かな」

僕はユキの関与を即座に否定した。厳密に、おそろしく厳密に考えれば、ユキの影響はあるだろう。ユキと出会わなければ、僕がノゾミに物足りなさを感じることはなかったのかもしれない。ユキが僕に好意を持たなければ、僕がユキを好ましく思わなければ、また違った結末になっていたのかもしれない。しかしそれはあくまで可能性であつて、風が吹けば桶屋が儲かると同程度のこじつけではない。僕はそんな不確定なものでユキを責めたり、傷つけたりする気は微塵みじんもなかった。僕は僕の意志で、この宙あぶらりんな状態に決着をつけようとしているのだ。

## 第227話：放逸

「それで、さ。多分、しばらく電話できなくなる」

僕は振り絞るように言葉を継いだ。

「今度、彼女と会って話をするんだ。それで、これからのことが決まる。これから二人がどういう関係になるのか決まるんだ。オレは真剣にそれを考えなきゃいけない。その日に向けて、ちゃんと考えなきゃいけない。他の誰からの影響もなしでね。だから、電話とかメールとか、ちょっと辞めにする」

しばらく沈黙が続いた。僕は電話の向こうに全神経を傾けた。そうして先程のユキのように、相手が何を考えているか、どう思っているかを感じようとした。しかしそこからは何も読み取れなかった。受話器からはいつもと同じユキの息遣いが聞こえるだけだった。

「あと、さ」

少し焦りながら僕は続けた。続けたが、それは先程の発言をフォローするためのものではなかった。僕の戸惑いと不安は、最も言い出しにくく、最も自分勝手な要求をするための言葉を僕に言わせた。

「それでもし、もしだよ？ もし別れたら、その後もしばらく連絡はしない。いろいろ、自分でも反省したり考えたり思い出に浸ったりする時間が欲しいんだ。一人で、いろいろ整理したいんだよ」

「それって、どれくらい？」

「分からない。すまないとは思うけど、全く見当がつかないんだ」

「……自分勝手だね」

ユキは少し怒っているようだった。当然だろう。僕は自分の都合でユキを振り回そうとしているのだから。

## 第228話：占拠

「ごめん。自分でもそう思う。でも、他に方法が思い付かないんだ。そうしないと、自分の中でいろいろ納得がいかない。彼女と別れてすぐに他の女の子と仲良くする、そんな人間にはなりたくないんだ」

ユキは黙っていた。また長い沈黙が続くかと僕は身構えたが、今度のそれは短かった。受話器の向こうでため息が聞こえ、ユキが諦めたように言った。

「しょうがないか。そういう人だもんね」

僕はその言葉に胸を撫なで下ろした。僕のこのこだわり、考え方を許容してくれなければ、おそらくユキとの関係も絶たれてしまっただろう。そういう最悪の状況だけは免まぬれたことに、僕は安堵あんどを覚えたのだ。

「でも、本当に特別だからね。他の人なら待たないから」

その言葉には許容があった。他でもない僕だから、普通ならにべもなく断るところを、特例として認めてくれている。僕は言葉の根本に僕に対する好意と愛情を感じた。

「うん。ありがとう。ごめんな」

「あんまり遅いと忘れちゃうからね。どっか行っちゃうかも」

「うーん。それは困るな。なるべく早くできるよう、努力するよ」  
「ウソだよ。無理しなくていいよ」

おどけたようなユキの口調、その明るさはおそらく強がりだが、僕はそこに救われた気がした。電話を切った後、僕はユキの心遣いと優しさを改めて感じ、目頭が熱くなった。心の中にはその感謝の他にわがままな自分を責める思いがあったが、依然として僕の思考の中心に存在しているのは、ノゾミと会うことへの不安だった。今度会った時、最後になるかもしれない逢瀬あいつせ、そこで僕の、今ユキに對して行ったような自分勝手な要求が相手にどうとられ、どういう結果になるのか。その先行きの見えない不安が、いついかなる時も

僕の心の中のある一定の場所を占拠していた。

## 第229話：門扉

「ピーッ。駐車券をお取りください」

駐車券を必要とする駐車場に来たのは、免許取り立ての僕にとって初めてだった。ゲート脇にある機械の指示に従って、僕は窓から身を乗り出さんばかりにして駐車券を取った。ゲートが開き、僕はそのまま駐車場の中に車を進めた。

ノゾミと約束した待ち合わせの時刻まで、まだ20分もあった。絶対に遅れてはならないという思いが僕をそうさせたのだが、いささか早過ぎた。忙しいノゾミが遅れてくる可能性もあるのだ。下手をすれば30分以上待つかもしれない。

僕は空いた駐車スペースを探した。年度末の午後の専門学校の駐車場は、それでも幾分車いくぶんが停まっていた。僕は、中央部にあるスペースに一旦車を停めたが、思い直して入口近くの場所に変更した。その位置はちょうど木陰こかげになっており、そこからは入口が、ゲートを通して入ってくる車がよく見えた。

僕は窓を開けてシートを倒し寝転がった。カーステレオのボリュームを上げようかと思っただが、むしろ電源を切った。携帯電話をドライブモードから通常に戻し、着信音量を最大まで上げた。そうして車内で一番電波が入る位置を探し（それは、ダッシュボードの上だった）、運転席から携帯の画面が見えるようにしてそこに置いた。これで、準備は万端ばんたんだった。ノゾミの車が入ってくれば視認することができるし、仮に見逃してもかかってくるであろう電話の着信に気づかないことはない。そういう状態にして、僕は待った。

## 第230話：悠久

幾度となくシミュレーションした今日の段取り、それをまた頭の中で反芻した。考えないようにしようと思ってもやめられなかった。春の陽光は柔らかく、優しい風が吹いていたが、僕はその心地良さに身を委ねることができないでいた。ひっきりなしに腕時計を見た。その時計は僕が高校入学から使っているもので、正確さを信頼してはいたが、電池切れなどの不測の事態が頭をかすめた。携帯の時刻表示も活用し、僕は時の過ぎるのを確認し続けた。

時は、しかしひどくゆっくりと進んだ。僕は待ち合わせまでの時間を秒に換算して、それを数え始めた。しかし僕の一分と時計の秒針が一周するまでの時間には随分と開きがあった。僕は馬鹿らしくなって数えるのを辞めた。

ノゾミの車がゲートをくぐることもなかった。駐車場に新たに入ってくる車もなく、駐車場から出て行く車もなかった。それは、とても静かな春の午後であり、この待つ時間が悠久であるかのような錯覚すら覚えた。このまま時が止まれば、僕はずっとノゾミの彼氏でいられるだろう。それはある意味で幸せだったが、それよりも悶々とする心苦しきのほうが勝る気がした。

とりとめのない思考にふけっていると、突如携帯電話が鳴った。それはびっくりするほど大きい音で、僕を現実世界に連れ戻す役目を存分に果たした。

それは電話ではなくメールだった。震える手でメールボックスを開くとノゾミからであり、そこにはただ簡潔に、「10分ほど遅れます」とだけあった。

20分も早く来た自分が間抜けに思えながら、また、大事な日に遅れるノゾミに多少の怒りを覚えながら、しかし僕はそれをおくびにも出さず、「了解。入口の側にいます」と返信した。

## 第231話：到来【第26章・完】

図らずして、駐車場に着いた時に抱いた悪い予想は見事に的中し、30分の待機となった。それは僕にいくつかの効果をもたらした。

ノゾミの遅れに対する苛立ちが、とりとめのない夢想を辞めさせた。しかしその苛立ちと同時に怒りとなって、ノゾミに対する失望や諦観をも惹起した。小さな亀裂から決壊するダムのように、僕の感情はそこに解放を求めた。しっかりと自制しなければその奔流はノゾミをこっぴどく痛め付け、ノゾミと僕の関係を跡形もなく押し流してしまっただろう。僕がその弱さを押さえ付けようと苦心している時、電話が鳴った。今度は通話着信だった。

「もしもし？ 着いたけど、どこにいるの？」

ノゾミの声は幾分事務的で、どこかしら他人行儀に聞こえた。どうやら僕が悪戦苦闘している間に、ノゾミはゲートを通り抜け駐車場内に入ったらしい。僕は自分の車の車種と大体の位置を告げ、電話を切って俯いた。あれほど望んでいたのに、ノゾミがやって来るのを見るのが辛かった。ノゾミと話をする時が近づくのが怖かった。僕の車の横の駐車スペースに、影が入ってきた。僕は相変わらず俯いていた。誰が来たのか確認したくなかった。確認すると確定してしまうから。確定すると始まってしまうから。

横の車のエンジンが止まり、ドアが開く音がした。人の足音。回り込んで僕の座っている運転席側にやって来る。少しの間。そしてノック。僕はそこで初めて顔を挙げて相手の顔を見た。僕の彼女の顔を見た。はにかんだ笑顔が素敵な彼女の彼女。その微笑みを見るだけで、僕は幸せな気分になれた。しかし、彼女の顔にはかつてのような笑みはなく、それを迎える僕の表情は歪んでいた。

**第231話：到来【第26章・完】（後書き）**

長くなってきたので章を分けました。

## 第232話：端緒【第27章】

### 27・春の波

「遅くなってごめんな。いろいろあつて……」

「いや、大丈夫やで」

「それで、どうするん？」

「どうするって？」

「話があるって言つてたやろ。どこでするん？」

「どっか喫茶店みたいな、ない？ 学食とか」

「あるけど、多分春休みやからやってない」

「外で話す……のも変やな」

「車の中がええと思うよ」

「そやな。ほな、乗つて」

「私の車は？」

「いや、もう乗つたらええがな。オレが降りて移動すんのもめんどくさいし」

渋々といった体でノゾミは僕の車の助手席に乗った。僕はずっと前方の虚空を眺めていた。話している時も、ノゾミが助手席の方に回り込んで、車に乗り込む時も。

大事な話を、するつもりだった。僕から切り出さなければいけないことだった。しかし僕はできないでいた。肝心の話どころか、何気ない世間話すらできなかった。気まずい静寂が長く続くかと思われたが、少しの沈黙の後、その膠着状態はノゾミによって破られた。「悪いんやけど、あんまり時間がないよ。私、いろいろせなあかんことがある」

その言葉をノゾミは、僕と一緒にいるのが嫌で言っているのではない。それは態度や声の調子から分かった。ただ、本当に忙しいの

だ。忙しくて、いろいろ余裕がなくなっている、それだけだ。そしてだからこそ、僕は速やかに会話の端緒たんちよを開かなければならない。結局、引き延ばしたって何も変わらないのだ。

### 第233話・根源

「あの、な」

「ん」

「今日話し合おうと思うのは、な」

「うん」

「これからの事。オレと、ノゾミの、これからの事」

「……そうやなるなとは思ってた」

意外な台詞だった。ノゾミは僕の心を分かっていたのだろうか？

この日を予見していたのだろうか？

「私も就職で地元を出るしな」

「ん」

「就職したら今より忙しくなるやろっし」

「うん」

「それで、どうするかって事やる？」

僕はそこで少しまごついた。話は僕の意図と違った方向に進んで行きそうだった。

「いや、それとはまた別の事なんやけどな」

「え？ そうなん？」

「うーん、その話は考えてなかった。言われてみれば確かにそれもあるな。でも、確かにいろいろ環境変わるやろっけど、でも、今までも遠距離やる？」

「うん」

「それやったら、距離の問題ではあんまり変わらないのちゃうかと思  
う」

「うん。そうやな。……違う話なん？」

「うん、違う話。もっと根っこっていうか、大元の話」

「……うん」

気温が、数度下がったような気がした。不穏で不安な感情は、ど

こちらから発せられてどちらに伝播はつぱしたのか。空気が凍こてついたように固かたまっていた。その固かたまった空気を割やくように、僕は言葉を発はした。

「あのな……あの、オレな、このままではノゾミと付き合あっていいんと思う」

ノゾミは、静かに聞いていた。こんな言葉を以前から予期していたのだろうか。少なくとも表面上は特に動揺どうごしていないように見えた。それはノゾミが普段通りに感情を表に出だしていないだけなのか、それとも僕を気遣きざって表に出ださないように努こめていたのか。

## 第234話：飢餓

「告白して、OKしてもらって、付き合い初めて。それで、今まで1年弱経ったけどなんか変やなって」

「変？」

「うん。なんか。変っていうか、不安みたいなもの。初めはそんなもんかかって思ってたけど、最近それが大きくなってきた」

「うーん。はっきり言うてくれんと分からんよ」

「あ、うん。ごめん。……ノゾミは、オレのこと、好き？」

感情をあまり表に出さないノゾミが、珍しく表情を浮かべた。それは困惑と照れの入り混じったものだった。

「いきなり聞くんやもん……」

「ごめん。でも、オレ、あんまりそういうの聞いたことないから。」

ノゾミはあんまりそういうこと言うような性格でもないしな」

「うん。……好きやよ」

こちらから言わせた形だったが、ノゾミから久々にその言葉を聞いて、僕は単純に嬉しかった。嬉しかったが、悲しかった。

「ありがとう。オレも好きや。ちゃんと恋人として好き。ノゾミは？」

「どういうこと？」

「ちゃんと恋人として好きかってこと。仲のいい男友達としてでなく」

そこでノゾミは少し考えた。即答してくれないのが全てを表しているような気がした。

「あんまり、な。男の人と付き合うつてというのが初めてやし、それやからよく分からんけど、でも、恋人として好きやと思う」

「うん。ありがとう」

そこで僕は静かに息を吐き出した。それはため息のできそこない。ノゾミにため息をつくことを悟られたくなくて、口をすぼめて息を

吐き出したのだ。そこには失望があつた。おそらくノゾミの精一杯の表現、その表現で示された僕への好意。これが最大限だしたら、それは僕にとって、今の僕にとって辛すぎる不足だ。

## 第235話：確言

「ちゃんとやってくれてありがと。日頃あんまり、そういうこと言わんから心配なんや。ノゾミがオレのこと好きなんかどうか。一緒にいて楽しんでくれてるのかどうか。それが不安。ノゾミは、一緒にいて楽しい？」

「うん。いつでもすごく楽しいってわけやないけど、でも大体は楽しいよ」

「うん。でも、分からのや。ほら、ノゾミはあんまりそういうの表に出さんから。そういう時に、不安になってすごく辛くなる。『ホンマにオレのこと、好きなんやるか』って『無理してるんちゃうかな』って。」

それが辛くて、なんか物足りなくて、このままではオレはノゾミのことを嫌になってしまう。一緒にいるのが、辛くなってしまふ。遂に僕は口にした。いつからか抱えていたぎこちなさ、いつからか僕を苦しめてきた物足りなさ、その思いを僕は吐き出した。

「でもな、オレは今もノゾミのことが好きや。やから、別れるのも辛い。付き合っついていきたいとも思う。そんなこんなで、最近ずっと苦しんでた。結構、辛かったんやで？」

僕はそこで少しおどけてみたが、ノゾミは笑わなかった。

「勝手なお願いやとは思ふ。けどな、もう少し自分の感情を表に出してくれんかな？ そうすればオレもいろいろ大丈夫な気がする。そうでないか……」

そこで僕は言葉を切ってノゾミの顔を見た。次の言葉だけは、しっかりと顔を見ながらでないとやってはいけない気がしたのだ。

「そうでないか、それができんなら、今日、別れよう」

## 第236話：強弱

その決定的な通告を口にした後で、僕は急速に混乱しはじめた。果たしてこの台詞を今言うのが正しいのかどうか、随分自分勝手な言い草ではないのか、そんな弱気な考えが頭に浮かんだ。だが、一方では強気だった。遂に言ってやった、これで彼女を失うことになっても構わない、向こうだって悪いのだ。そんな風な強弱の気持ちがコロコロと入れ代わった。

「……んつと、ね」

意外に短い沈黙の後でノゾミが口を開いた。

「私は、昔っから感情とか表情とか、表に出すのがあんまり得意ではないのね。それでも、貴方はそんな私の感情をいろいろ読み取ってくれて、それはすごく有り難くて感謝してるんね」

ノゾミが自発的に、自分の中の礼や感謝の気持ちを表す、これは極めて珍しいことだった。僕は嬉しく思いながらも、しかしだからこそ今が異様な状態であることを感じていた。ただならぬ雰囲気を感じていた。

「私はそのことでもいろいろ誤解されたこともあるし、人から注意されたこともあるよ。今回みたいに『直せ』って言われたこともある。そういうの何度も言われて、自分でも直そうとして、でもそれでもやっぱり無理なんや。私は、私のこの性格は、もう直らんのよ」泣いているのだろうかと思ったが、その表情に変化はなかった。ノゾミの言葉通り、泣きたい時でもそれは表面に出ないのだろう。むしろ、僕の方が泣きたくなっていた。ノゾミのそんな過去の経験を知らずに責めてしまったという後悔と、このままでは僕とノゾミの関係が終わってしまうという危機から。

「やから、そういうのが耐えられん、辛いって思うんやったら、別

ねるしかないと思ふ」

## 第237話：狼狽

僕が始めた別れ話は、遂にノゾミの口から別れるという言葉を出させてしまった。僕の感じた違和感は、とうとうノゾミから別れるという意志を引き出してしまった。その瞬間、僕の心の中で揺れ動いていた強気と弱気の天秤は、一気に弱気に傾いた。

「いや、オレは別に今すぐって言うてるんじゃないよ。そんなん、すぐに直らんし。それは分かってる。ただ、そういう、直していいこうっていう意志っていつか思いつていうか、そういうのを持ってくれたら構わんのよ」

僕は狼狽し、狼狽はゆらぎを呼んだ。一方的に条件を提示し、それができなければ別れようという通告は、結局僕のほうがこの関係を支配している、少なくとも関係の行く末を決める力を持っている、そういう自信があることを示していた。つきあっていきたいと思っているのは、弱い立場にあるのはノゾミだと。その計算でいくとノゾミは否応なしに条件を飲むか、僕の寛大さに望みを託しながら出された条件の変更を乞うはずだ。

しかし、ノゾミは弱者ではなかった。僕の考えていた程弱くなかったし、僕との関係が弱みになってもいなかった。ノゾミは、自分のできることでできないことをよく分かっていたし、それについて無理をしてもどうしようもないこともよく知っていた。ともすれば、僕との関係は、無理をしてまで続けるほどの価値はないと思っていたのかもしれない。

だからこそ、僕は焦った。流れは僕の予想の外に向かい、慌てた僕は、強者であるはずの僕は譲歩を持ち出した。まるで塵気楼を追いかけるように。

「いや、そういう気持ちを持つのも無理やと思う。私は私としてできあがってるから、根本としての所は変えようがないもん」

## 第238話：陽炎

決裂、だった。そこには猶予も、譲歩もなかった。ノゾミはもしかしたら以前から、僕との関係にそれほど価値を見出だしていなかったのかもしれない。それが、僕の感じた違和感の正体なのかもしれない。そんな考えがちらりと頭をかすめた。

僕には、これ以上の譲歩をするという選択肢も一応はあった。要求を全て引っ込めて今までと変わらぬ関係を続ける。もちろん、違和感は残り、僕はそれに長く苦しめられるだろう。しかし、そういう道もあることはあった。

だが、それはプライドの高い僕にとって不可能なことだった。僕には僕の譲れない線があり、それを超えてまで付き合い続けるほどのプライドは安くなかった。

それに、仮に僕がプライドをかなぐり捨てて今更要求を引っ込めたとして、それがほとんど意味がないこともよく理解していた。ぎこちないながらも二人がこれまでと同じような関係を続けること、それは不可能であると分かっていた。

だって、ノゾミにはもう、僕との関係を続ける気が、ないのだ。

波が引いていくような感覚、それを僕はノゾミから感じていた。表情の乏しいノゾミと付き合って、未確認ながらも僕はノゾミの好意を信じていた。表情を、意志をストレートに表に出さない分、それを僕にとっていいように解釈し、ノゾミは僕に好意を持ってくれていると、そう思っていた。無理やりにもそう信じていた。

しかし今やそれが幻想であると、もうそれは僕の淡い期待に過ぎないと、そう感じさせるに足る雰囲気を、ノゾミは醸し出していた。もう、全てが遅いのだ。僕が条件を出したという事実はもう取り消せないし、それによって変化した二人の関係はもう元には戻れない。

かつての僕らはもはや陽炎かげろうとなり、追いかけても永久にたどり着けなくなってしまったのだ。

## 第239話：嗚咽

「分かった。じゃあそうしよう」

僕はそれだけを口にした。「別れよう」という直接的な表現をすることを避けた。明言するのが怖かった。現実を今すぐに受け入れ、気持ちを切り替えるなんてできなかった。

「一年間ありがとな。楽しかったよ」

「こつちこそありがとう。楽しかった」

顔を無理矢理にでも笑顔にすると、泣きたい気持ちが少し薄れた。泣きたくはなかった。笑顔で別れたかった。

つきあうのを辞めたからといって、僕がノゾミを嫌いということにはならない。ノゾミにおいても然りだ。だから、きっと僕たちは友達になれる。そんな根拠はかけらもなかったし、できる気がしない。でも、そう思わないと僕は突然に孤独になってしまふ。悲しみの海の中に独り、放り出されてしまふ。だから、僕はそんな儂い望みを抱いた。

僕にはもう、特に話すことはなかった。ノゾミもそうだろう。僕の元・彼女は、僕の車を降り、自らの車に乗り、自分がやらねばならぬことをこなすだろう。そう思っていたのだが、ノゾミは車を降りなかった。代わりに、自分の鞆かばんの中から小さな箱を取り出した。

「これ……」

「何？」

「誕生日プレゼント。今まで渡せへんかったから」

僕はこらえきれずに短く嗚咽おえつを漏らした。必死に留めていた感情、それが一気に流れ出そうとし、その突然の奔流ほんじゅうは油断していた僕の心の堰せきを一瞬だけ飛び越えた。

## 第240話：丹精

「なんで？ 貰えへんよ。もう」

僕たちが付き合っていた時なら、半月前なら、昨日なら、それは喜びを持って正當に迎えられるだろう。しかし今やもう、貰えない。僕たちはもう恋人同士ではなく、もしかしたら友達同士ですらないのだ。そんな相手から個人的な祝いの品を貰うことなど、できない。「そんな言われても……」

「付き合ってる時なら貰えたけど、もう、な」

去年の12月、僕がクミコにネックレスを渡した時、クミコはこんな気分だったのかもしれない。送り手の気持ちに、送り手の思いに、ただ素直に応えることができない。僕はもはやそう思われるような、好意を寄せられるような男ではないのだ。そんな価値はさつき消え去ってしまったのだ。

「これ、買った時はまだ付き合ってたよ。それで、お祝いしようと思っただけだよ。クリスマスのお礼もしてへんかったし、バレンタインも何もしてへんし。やから、受けとって。私からの最初で最後のプレゼント」

目が潤んだ。ノゾミからのプレゼント、最初で、そして最後の。僕はその小さな箱を受け取り、中を検めた。入っていたのはある若者向けブランドの腕時計。銀色のメタルベルトに黒い液晶の文字盤の、僕によく似合いそうな品だった。

「分かった。貰うわ。ありがとう。大事にするわ」

押し問答をしたくなかった。贈る側の困惑がよく分かり、それを解消するには僕が受け取るしかない。きつとこの時計には、ノゾミの思いがいっぱい詰まっている。僕に対する思いが、口で言えなかったことも含めて、溢れるほどに詰まっている。僕はそのことを、時計を見る度に思い出すだろう。

大事に、しよう。僕は自分の中でそう誓った。

## 第241話：慧眼

「気に入ってもらえてよかった。ほな私、もう行くな」

「……うん。元気で」

あっけなく、まるでいつものデートが終わって別れる時のように、ノゾミは僕から去ろうとしていた。その素っ気なさはある意味では僕を救い、またある意味では僕を切なくさせた。

一人になるということは感情を解放できるということだ。ノゾミの前では表面上はあくまで平静を装っていたものの、僕の心の中はぐちゃぐちゃだった。大地震の後の屋内のように、いろいろな物がいりいな所に散乱していた。整理を、しなければならぬ。しかしその前に、この惨憺たる光景を眺めてなぜこうなったのかを考えたかった。憤りを吐き出し、こんな事態を招いたものを呪いたかった。

外に出て車のドアを閉めたノゾミは、そこで一旦立ち止まり車内を覗いた。そして、言った。

「あんまり自分のこと、責めたらあかんよ」

雷に打たれたような気がした。言葉を発することもできず、僕はただ小さく頷いた。それを見たノゾミは、それでもまだ心配そうだったが、ほどなくして自分の車に乗り、その場を後にした。

残された僕はシートを倒して寝そべり、組んだ両腕で目を覆った。自分の愚かしさによろやく気づいた。僕は、何も解っていないかったのだ。ノゾミがどれほど僕のことを理解してくれているのかを。

ノゾミには、お見通しだったのだ。僕が自分を責めることを。こうなったことの責任を一手に引き受け、自分を傷つけ、自己を嫌悪することを。それはただの内面的自傷行為であり、僕のエゴに過ぎない。でも、僕はきつとそうするだろうと、ノゾミは気づいていたのだ。

## 第242話：波紋【第27章・完】

僕は激しい後悔に襲われていた。僕が感じていた違和感。それは取るに足らないことだったのかもしれない。それを殊更ことごとに取り立てて問題視したために、僕は失わなくていいものを失ってしまったのかも知れない。変化を望むがゆえに、自分にとってより好ましい状況を欲するがあまりに、二度と得られぬものを失ってしまったのかもしれない。

ノゾミの忠告にもかかわらず、僕は自分を責めた。ノゾミとの関係、それは僕の望みどおりのものではなかった。しかし、人間関係で一方の願望が全て叶うことなど、そもそもありえない話なのだ。なぜ僕はそれを求めたのだろうか？　なぜ僕は無理にそれを欲し、そして全てを失ってしまったのだろうか？

いくら考えても考え足りなかった。いくら自分を責めても責め足りなかった。心の中は混迷しており、ノゾミとの楽しい思い出が次から次へと思い出された。そしてその全ては、今や眩まぶしい過去の思い出だった。もはや取り戻せない美しい思い出だった。

目を覆った腕の隙間から、明るい春の光が入ってきた。僕は腕を下ろし、寝転んだまま窓から空を眺めた。空は、僕の心と対照的に青く澄み切っていた。ちっぽけな僕と対照的に、自然は大きくそして美しくかった。

自みづと目から涙が溢あふれ出た。涙は僕の目を満たし、視界をにじませた。溢あふれる水分を通して見る青空は、まるで波の打ち寄せる海原のようだった。僕はその波にたゆたっていた。いつかはそこから抜け出し、歩き始めなければいけない。そうする自信はないものの、そうしなければならぬことは十分すぎるほどに分かっていた。しかししばらくは、せめてこの波が去るまでは、そこに浸っていたかった。

独りで。  
もはや独りで。

**第242話・波紋【第27章・完】（後書き）**

明日、最終章とエピローグをアップして、完結します。

第243話・再来【第28章】

28・萌芽

プルルル……プルルル……プルルル……。ガチャ。

「あ、もしもし？ 久しぶり。突然電話してごめん」

「……うん」

「いや、そんな警戒せんとしてや。すぐ切るよ。今大丈夫？」

「うん」

「あ、それとも、もう話すのも嫌？」

「ううん。そんなことないよ」

「ん。良かった。あのさ、今日君、誕生日やる？」

「うん」

「誕生日おめでとう。それだけ言いたかった」

「ん。ありがとう」

「ほら、つきあっとった時って、君の誕生日と被らんかったやん？

そのくせ、自分の誕生日にはプレゼントとか貰ったから。なんか悪くて」

「別にええのに」

「あの時計、使ってるよ。なかなか評判がええよ。友達で同じの使ってるヤツがおってびっくりした。でも文字盤の色が違うかったからよかった」

「そこ、ポイントなんや」

「うん。ポイント」

受話器の向こうから軽い笑い声が聞こえた。

「どう？ 元気にやってる？」

「うーん。まだ働き始めて2週間ぐらいやから、慣れてなくてしんどい」

「ああ、まあそのうち慣れるんちゃうかな。なんだかんだ言って君

は芯が強いから」

「そんなことないよ」

「そんなことある。元・彼氏が保障する」

「あんまりあてにならないような気もするけど」

「ははは、手厳しいな。そういう子やったっけ？ まだまだ知らん

ことがいっぱいあつたみたいや」

「そら、社会人やからね。強くもなるよ」

「さすが社会人。オレが心配するまでもなかったか」

「ううん。心配してくれてありがと」

## 第244話：遊離

「さてと。じゃあ、もう切るわな」

「早いね」

「いやー、もう彼氏彼女の間柄ちゃうしね。長電話するもんやないやろ」

「ん。そうかも……」

「それとも、何か言っておきたいこととか、ある？」

「ん。貴方は大丈夫？」

「何が？」

「あれから。いろいろ……」

僕の心が少しちくりとした。

「んー、そりやまあ、分かれた直後はいろいろ考え込んだよ。自分責めたりな。せつかく君が忠告してくれたのに、その通りになっ  
しもたり」

「……」

「ん。でも、もう大丈夫。元気！」

「そう……。無理、してない？」

「さあ、どうやる？ 電話するのに勇気が要ったから、ちょっとは無理してるかもしれないな。でも、お祝いの言葉を言いたかったから  
言わんとなんかすつきりせんから」

「うん。ありがとう」

「さあ、じゃあ切るわ。また何かあったら連絡してきたら相談には  
乗るよ」

「んー。相談せんかも」

「冗談めかした口調だった。」

「ははは、まあそうかもな。他に相談する相手もあるやろっしな。  
Tさんとか」

「あんまり連絡とってないけどね」

「初めのうちはお互い忙しいんやないかな？ おっと、君も忙しいやろくに長電話になってしまつところやった。もう切るわ」

「うん」

「また、電話するかも」

「……」

「冗談や。そんな分かれたのに頻繁に電話してたらわけが分からん。多分、もう電話せんよ」

「んー、たまにならしてきてもええよ」

「ん。……考えとく。ほな、元気でな」

「うん。元気で」

ガチャリ。

## 第245話：煩悶

5分に満たない、久々の邂逅。およそ半月ぶりに聞いたノゾミの声。その声は、様子は、付き合っていた時となんら遜色なく、その事実は僕を安堵させ、同時に落胆させた。

果たしてノゾミは、僕を失ったことに一抹の寂しさを覚えているのだろうか？ しかし僕はそれを望んではいけない。ノゾミに、僕のことを想っていて欲しいと考えてはいけない。もう、二人は二人ではない。一人と、一人なのだ。

ノゾミと別れた後、ユキに「彼女と別れたので、しばらく連絡できません」との短いメールを送った。ユキからの「分かった」という返事を確認してから、僕は携帯端末の電源を切った。そこから数日間、僕は自分の殻に閉じこもってひたすら自分を責めた。今までの楽しかった思い出やノゾミの美点を思い出し、それを引き合いにして自分の汚い行い、言動、態度、それらを深く恥じ入り、どうしようもなく醜い自分を責め尽くした。

涙はとめどなく溢れ、後悔はいつまでも絶えなかった。堂々巡り続ける思考の迷路の中で、僕は探し続けた。どうするのが正解だったのか、僕はどうすれば誰も傷つけずに済んだのか、と、分からなかった。いくら考えても分からなかった。

自分独りで正解に至ることはできなそうだったので、僕は久々に携帯端末の電源を入れ、友人に電話をした。幾人かの親友と呼べる人物に、この難問に対する解を求めた。

ある友人は言った。「そこに答えはない」と。

## 第246話：再起

「人間関係に答えなんかない。誰も彼もが相手を傷つけて、誰も彼もが傷つけられる。そこに絶対の答えなんてないし、それを求めてもどこにもないよ。」

もう、自分を傷つけるなよ。これ以上反省したって、後悔したって、何も得られないし、そうすることは逆に今までの彼女との関係を侮辱はぶすることになる。楽しい思い出を、台無しにしてしまう。彼女だって、お前がそんな状態になることを求めてないだろ？

それにな、オレだってそんなお前を見ていたくない。自分自身を責め続けるのを見てて辛くなる。多分他のお前の友達もそうだと思う。だから、もういい。お前はよくやったよ。彼女と付き合っていた時から、お前から話を聞いて、どれだけ相手のことを思ってたか知ってる。その中で、そりゃいくつか駄目なことやってたけど、でも、それでもお前はちゃんと彼女のことを好きだった。もうそれでいいじゃないか」

それは、僕が求めていた答えとは違うものだった。違うものだったが、僕のどうしようもない状態を救い、僕に再び立ち上がらせる力を与えた。

僕には、友人がいる。僕を好いてくれている人もいる。僕はその思いに答えるために、そして僕とノゾミとの日々を汚さないために、新しい何かに向けて進んでいかなければならない。

ノゾミの誕生日にかけた電話、それは僕のけじめだった。ノゾミの声を聞くことで蘇る切なさ、それを消し去るために僕は努めて明るい声を出した。明るく、楽しい電話にしたかった。

電話を切った後、僕は声を殺して少しだけ泣いた。しかしそこに寂しさはなかった。後悔も自責もなかった。ただ、僕とノゾミの日

々、付き合って楽しかった様々な思い出、それに対する感謝の念で  
いっぱいだった。

## 第247話：創造【第28章・完】

泣いていたのはそう長い時間ではなかった。僕は涙を拭い、笑顔を作った。僕には、これからやらなければならないことがあるのだ。

僕は携帯電話を持ち、発信履歴を調べた。もうずいぶん前の履歴だが、そこにはまだ残っていた。ユキの電話番号を選び、発信ボタンを押した。

プルルル……プルルル……。ガチャ。

「ん。オレ」

「……久しぶり」

「うん、久しぶり。ごめんな、長いこと待たせて」

「ううん、大丈夫」

「あのさ、いろいろあったけど、もう大丈夫だから。わがまま言うてごめん。待っていてくれてありがとう」

「うん。……おかえり」

「ん。ただいま。……あのさ、大事な話があるんだ」

「ん。何？」

「いや、ちよつと電話じゃ言えない。会って話したい。今週末、空いてる？」

「んー、土曜日はちよつと学校に行かなきゃなんなくて、昼からなら空いてるよ。日曜日は友達と予定が入ってる」

「じゃあ土曜日に。場所は、そうだね、じゃあユキの学校の近くにしようか。桜並木があったでしょ？そこに行こう」

「うん、分かった」

「じゃあ土曜日に」

「うん。おやすみ」

「おやすみ」

桜の木の下で、僕はユキに告げるつもりだ。何の気兼ねもなく、どこにもやましいことはなく、胸を張って言うつもりだ。僕の、ユキに対する思いを。

おそらく桜はもう散ってしまったことだろう。葉桜も、もう終わりに近づいていることだろう。散ってしまった桜の花の陰で、ひっそりと青い芽が育っている。そしてそれはいつしか、新しい花となり再び咲き誇るだろう。

新しい日々が、始まる。

## エピソード

最近読んだある作品の中に、こういうことが書かれていた。

「物書きに限らず、創作者というものは知識を含めた自分の経験を肥やしにして、その肥やしで作った野菜を売る仕事である。売るのは野菜であって決して肥やしではない。もし肥やしを売り払ったならば、その後その畑からどんな野菜が採れるというのだ」

この作品は野菜ではない。肥やしだ。自らの経験を見栄え良くしただけで、本質的には何も変わっていない。そうなることを分かっている、それでもこの話を書いた。

書き上げた後、自分の中から何か新たなものが生まれるかと少し期待していたが、何も生まれなかった。考えてみれば当然だ。ただ肥やしをかき混ぜただけなのだから。

しかし自分では満足しているのだ。これを書くことで自分の過去のある時間を切り取り、文章の中に固定することができた。そしてこれからはそれをいつでも好きな時に不足なく眺めることができる。その記録の完成に、今は満ち足りた思いでいる。

「思い出を眺めるのは老人だけでいい。若者は未来を見つめよ」  
そう誰かが言った。そこに特に異論はない。思い出を今さらどうこうする気もないしどうにもできはしない。文中に登場した固有名詞を持った「彼女」たち。もはやその誰とも連絡はとれないが、どこかで幸せに暮らしてくれればと思う。

あの頃からもう何年も経ち、心も体も変わりきってしまった。生きていく限り、その年月は重なり、その変化も続くだろう。将来、老いて未来を見つめられなくなった時、自らがほとんど変化しなくなった時、またここに帰ってこよう。若さ溢れる青春時代を封じ込

めたことに、帰ってこよう。

来たる日を待ち焦がれながら、ここで筆を置く。

## エピソード（後書き）

足掛け4年（2年は休止）にわたって連載してきた「彼女」もこれで終わりです。

気ままに不定期の連載だったので、根気強く読んでくださった方、どうもありがとうございました。

またどこかで他の作品でお会いできればと思います。  
では。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8948a/>

---

彼女

2010年10月8日13時00分発行